

---

# 夜の刃、月の牙 -ZINGA-

深岡雅裕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜の刃、月の牙 - ZINGA -

### 【Nコード】

N0480P

### 【作者名】

深岡雅裕

### 【あらすじ】

古より、人の闇を産土に現れる異形の魔物。奴らを闇から闇へと葬るは、希望をその身に纏う騎士。永遠の闘争の渦に巻き込まれた四条灯麩は、漆黒の騎士に出会う。彼女は、この戦いの行く末に待ち受けるものを見届ける事ができるのか。

## 陰・忍び寄る

奴らはどこにでもやってくる。

奴らはどこへでもやってくる。

奴らは全てを連れて来る。

奴らは全てを奪い去る。

故に、奴らは。

01 - 01：陰・忍び寄る

四条灯駈しじょうあかりにとって、朝夜のジョギングは幼い頃からの日課であり、ライフサイクルに組み込まれた習慣でもある。

今日もいつもの通り、いつものコースをぐるりと回る。家を出て住宅街を通り抜け、丘の上の公園を一周して、別ルートを経て帰る。およそ二十分程度の道のりになる。

時刻はおよそ夜の九時。寝るには早いが出歩くには遅い時間。そんな半端な時刻だからか、そのとき、そこにいた人物にふと意識が向いた。

公園のベンチに腰掛ける、黒いコートの男。長い袋を抱えて、うつむいている。一見すると眠っているようだった。

季節は九月。まあ、外で一晩過ごしても凍死してしまうようなこともないだろうが、気になるといえば気になる。が、この時間になんたところで眠るといふのは怪しいといえは怪しい。

少し迷った拳句、結局彼女は無視をすることに決めた。

もしここで彼女が彼に声をかけていれば、あるいはその後の結末は別のものになったのかもしれない。

後に彼女は、そんな風にこの時のことを思い返すことになる。

翌朝。

目覚ましとともに灯駆は目を覚まし、ジャージに着替えてジョギングへ向かう。コースは夜のものと同じ。同じコースでも夜と朝では印象が変わる。彼女はその変化を好いていた。それだけに、普段との空気の変化にも敏感だった。

「……………？ なにかあったの？」

公園へ向かうにつれ、空気のざわめきを感じる。現実の音としてのざわめきではなく、雰囲気、違和感といった感じの何か。

家が武術を教えており、彼女もその道に生きているせいも、鋭敏な自分の感覚に対して灯駆は一定の信頼を置いている。

それが、告げている。

何か、得体の知れないものがあった。

そう。ある、ではなく、あった。

彼女が昨晚ジョギングで通ってから今までの時間に、何か、得体の知れないものが。あるいは、得体の知れない事が。

公園に入ると、その印象はより強くなった。思わず、足が止まる。

「……………キモチワルイなあ。何よ、この空気」

不機嫌に顔をしかめた

こういった空気は身に覚えがない。まったくの未知の雰囲気であった。と同時に、新鮮味などまるでない。あるのは肺臓に粘度の高い液体をなみなみと注がれるような、胸糞悪い違和感。

一瞬、迷う。

果たしてここで引き返すべきか、否か。

結論として、彼女は進むことにした。

ここで引き返しては、まるで自分がこの空気に負けてしまったよ

うではないか。そういうのは、なんというか、我慢ならない。

武術家たるもの負けず嫌いな程度で丁度よいというのが、彼女のポリシーである。まあ、友人にしてみれば『それ、自分の欠点をうまく言い逃れようとしてるだけじゃん』という事になるが。

ともあれ、彼女は公園のコースに沿ってジョギングを再開する。

芝生のコースを抜け、池沿いの並木道を抜け、コースの四分の三程度を消化したところで。

「……、誰か居るの？」

言い知れない感覚にまた足が止まる。彼女にしては異例のこと。

それでも、この感覚を放置することは出来ない。

公園全体を包む違和感。その原因が今自分を見ているそいつなら、放置するには、危険が過ぎる。

腹の奥で覚悟を決めながら、待つ。自分に注がれる視線に変化はない。まるで機械に見つめられているような気持ちになりながらも、待つ。

しかして。

ふ、と。視線は唐突に消え去った。

そのまましばらくその場で待ち、他に気配を感じないことを確かめながら、息を吐く。

「よかつたのか、悪かつたのか」

気配は消えた。が、公園の雰囲気は変わらない。相変わらず早朝の清涼な大気に似つかわしくない、怖気の走る空気が立ち込めている。

この空気がよくない、という直感はある。この空気のせいで感覚が鋭敏になり、同時に気配が埋もれてしまいうまく相手を捕らえ切れなかった。

しかし、相手が只者ではないこともまた確か。もし、今襲われていたらどうなっていたのか。そんな相手に声をかけたのは明らかに軽率ではあったが、かといってこんな空気を作り出すような相手が自分の生活圏に居るのならそれはさらに明らかに決定的に、ヤバイ。

「目を付けられなきゃいいんだけどね」

無理だろうな、と。若干醒めた意識で自分の言葉を否定する。  
彼女はかぶりを振ってジョギングを再開した。

規則正しく揺れるポニーテイルを、遠くから眺める視線があった。  
公園少し離れた、小高い山の古い給水塔の上。街を一望できるその場所に、一人の男の姿があった。

男、と言っても見た目は若い。少年と呼んで差し支えのない年齢だろう。少年はじつと、公園を出て行く少女　四条灯駈を視線で追っていた。

『いやはや、可愛らしい女の子じゃないか』

声は楽しげに灯駈を評した。実際、そのさばさばとした態度や凜とした言動に反して、小柄な体躯と背中まで伸ばした長い黒髪、そしてくりっとした目などは可愛らしいという表現が実に似合っている。

中身は、とても可愛らしいという言葉で済まされるようなものではないが。

「……何者だよ、あの女」

呟く声は小さく、しかし答える声が上がる。

『ハッハア！　なんだ龍夜<sup>たつや</sup>、急に色気づいたのか？』

「馬鹿かお前は」

軽い調子の声に、龍夜と呼ばれた少年は呆れた声で答える。しかし、先ほどの通りここにいるのは龍夜一人。

『ま、たまに居るだろ、ああいう感覚の鋭いヤツってのは。あの歳でってのは確かに珍しいが、なあに、異常というほどのことでもあるまいよ』

「それはそつだが、な」

そのとき、強い風が吹いた。

風に龍夜の黒いコートがはためく。龍夜は顔を覆ってそれを凌いだ。

やがて風がやむと。

「現れたな」

黒い異形が給水塔を丸く囲んでいた。

やせこけた人間から体毛の全てを取り払い、眼球をむき出しにして、手足を引き伸ばし、左右非対称のシルエットになるように骨格を歪め、その上から黒のペンキをぶっかけたら、きつところなる。

単純に、それだけとはいえない不気味さを持つてはいるが。

全部で八体の異形たち。

人は彼らを古よりこう読んできた　レギオン、と。

『ふふん。おいおい、なんだか今回は相手がやたらやる気じゃあないか。龍夜、油断するなよ？』

「誰に言ってる。当然　つつーかそんな余裕、俺にあるわけがないだろう」

『はっ！　違う。それじゃあ、始めよう、おちこぼれ』

「ああ。そうだな。それじゃあ、終わらせよう、欠陥製品」

龍夜は一瞬の苦笑の後、レギオンの一体を睨みつけ。

「　ふっ！！」

まるで高さを気にせずに一足、その懐に飛び込んだ。

「ぐり・らぐりらるご・びじゅが！！」

焦燥の声を上げるレギオンに、竹刀袋を叩きつける。ひき肉を握り締めたような水っぽい音を立てて頭部が吹き飛ぶ。その体を蹴り飛ばし足場として、次のレギオンに迫る。

奇襲の動揺は既に相手にはない。レギオンは枯れ木のような腕を掲げ。

「ぎぎゅ・ぜへるへばー！！」

雑音のような声を響かせる。腕がぼこりと泡立ち、膨れ上がり、無数の白いとげが　白骨が飛び出す。

振り下ろす。

その単純な動作は、大地を打ち据えコンクリートを砕いた。

急停止した自身の目の前に落ちたその兇器に、竹刀袋を突き刺し、  
決る。

「こゆめろぐべろぎゆぼが！」

悲鳴と同時に、腕の根元までが弾け飛ぶ。びちゃりびちゃりと異臭  
を放つ液体が、その肩口から零れていた。

震えるレギオンに、蹴りを見舞う。轟音を立てて吹き飛んだレギ  
オンは、給水塔にぶつかって消えた。

『はは、さすがに下級レギオン程度なら、問題ないみたいだな』

「馬鹿言え、これでも結構、必死だぜ？」

返す龍夜の声にはしかし、余裕が滲んでいる。

一対一ではまず敵わない。意思がなくとも本能でそれを理解した  
レギオンは、残り六体一斉に龍夜に飛び掛る。

『なんだ、さすがに相手も学習能力はあるみたいじゃないか』

「当然だろうさ。まあ、それにしあって」  
無駄だけど。

呟きは音になる事無く、疾風のようにかけだした龍夜は言葉を飲  
み込み。

朝陽の中に、闇を葬り去った。

騒々しいのは、公園だけではなかった。

「……なにかあったの？」

学園は、奇妙な喧騒　というには若干弱い、しかしざわめきと  
いうには浮き足立った雰囲気　に包まれていた。

その正体がなんなのか。今朝のこともあって嫌に気にかかった灯  
駆は、ひとまず級友に尋ねることにした。



湊智晴。みなと ちはる 入学以来の灯駈の友人である。丸っこいめがねと一つに束ねた黒髪を目立たないように右肩に下ろした姿から、一見すると大人しい印象を受ける少女だ。

しかしてその中身はといえば。

「おやおや、あつちゃんに興味を示すとは珍しいこと。あちしとしてはそつちの方がニュースになりそうな匂いがしてならないね」

こんな感じである。

おとなしいとはお世辞にもいえない、ゴシップ蒐集者。コレクター それが、湊智晴の評判であり彼女自身それを自任し自称している。

「あのね」

灯駈は頭痛を堪えるように親指をこめかみに当てる。

ちなみに、灯駈は智晴の席の前に立っている。そして智晴は、自分の席に腰掛けている。にもかかわらず、視線の高さは灯駈の方がやや上、といった程度。智晴の背丈が高めで灯駈が小柄ということ、このような事になってしまっている。

そんな灯駈をみながら、智晴はほんわかと優しい気持ちでいっぱいになる。

「ああ……持って帰って朝まで全身嘗め回したいなあ……」

邪な気持ち満載だった。

「智晴……冗談でも変な事いつのやめて」

「冗談でなければいいの?!」

「……ねえ智晴、人間の頭蓋骨って、実は手のひらで割れるのよ。知ってた?」

「うん、おーけーおーけー。ごめんってはもうやだなあ、ちょっとしたジョークですよジョーク。なのでそろそろ頭を開放していただただだ! 脳が、脳が!!」

大げさに暴れる智晴を開放する。頭蓋が、脳が、などとぶつぶつ呟く彼女をしばらく眺めて、灯駈は尋ねる。

「で?」

「うわ雑」

やー別にいいんだけどねー。と彼女は学園の騒ぎの原因をまとめ  
て語った。

腕が、見つかった。

正確には腕だけが見つかった。

三日ほど前から、ある学園の生徒が行方不明なのだという。そし  
て、見つかった腕は、この学園の制服を着ていた。この場合その  
表現が正しいのかはさておいて。という。

噂。

しかし調査してみたところ、確かに学園の生徒で行方が分からな  
くなっているものがあり、警察に捜索願も出ている。

その腕が、件の学園生のものであるかは、いまだ判明してはいな  
いが。

可能性は、十二分にあると睨んでいる。

「つて感じ、かねえ」

「随分と血生臭い噂話ね。これで盛り上がるのも、あまりいい趣味  
とはいえないわよ?」

「にはは。うんまあ、その辺は性分なのですよ。……けど実際、  
ちよつと変な感じではあるよ」

声から遊びを取り払う智晴。その様子に灯駈はただならぬものを  
覚えた。

「警察の動きが、あわただしい割に妙に揃ってる。こういうのって  
基本的に、多方面への聞き込み調査とかそういうのから入るはずな  
んだけど、今回はそれが無い。まるで、最初から原因が分かってい  
るみたい」

灯駈は首を傾げる。その仕草にほわつとなりそうな智晴は、先ほ  
どの頭蓋割りの恐怖を思い出して無理矢理自分をシリアスマードに

叩き込む。

「つまり、警察は最初から犯人、ないし、事件の全容を掴んでいるように感じるってこと。それでいて、なぜか犯人検挙の気配は感じられない」

「それは……確かに、変かもしれないけど」

それをいうならなんでそんなに情報を正確に掴んでいるんだ、と問い詰めたくなる智晴の調査能力の方がおかしい。

「あなたの情報、そもそもどのくらい信用できるのよ」

「あいたたたー。こりゃあ痛い言葉。まー確かに、あたしの情報ってば一次ソースはほとんどないからね」

肩をすくめて白状する智晴に、呆れた視線を向ける。

「とりあえず、不用意に不安を煽るような噂を広げるのは感心しないわよ」

「んー。それについてはもう手遅れ、としかいいようがないレベルで広がってる感じ。誰だろうね、一晩でこんなに噂を広げるやつって」

「……………」

智晴は不機嫌に呟く。確かに、徒に不安や恐怖を駆り立てる『だけ』の噂など、彼女の性分からしていちいち他人に広めたりはしないだろう。そもそも彼女はあくまで蒐集者であり、喧伝者ではない。

「智晴。一晩ってというのは？」

「ああそれはつまり、腕が見つかったのが昨日の　あー、時系列的には今日の、かな。深夜に見つかったから。ちよっと色々、事態が動くのが早すぎるよね」

なるほど、確かに噂になるにしても、ちよっと早すぎる。いや、噂の伝達速度はその中身のインパクトに比例するからどうとはいえないだろうが、しかしそれでも、学園全体に波及するには、早すぎるといえるだろう。

それも、腕。

普通に考えれば、惨殺。

今朝のニュースを見た限りでは、まだ事件として正式に発表もされていません。

それが、噂としてこれほどまでに広がっている。

違和感が全身を襲う。

「まったく、今日は朝からずっとこんなことばかりね」

「んん？ なあに、朝がいかがしたんかい？」

「いえ、こつちの話。……ともあれ、話してくれてありがとう」

「いやいやいやー……っと、忘れるところだった。あっちゃん、ひとつ忠告」

殊更声を潜める智晴に、嫌な予感が膨れ上がる。

「腕が見つかったのは、北泉公園。たしかあつちゃんの家、近くだったよね？ 気をつけたほうがいいかも」

嫌な予感は得てして当たる。

北泉公園。

彼女のジョギングコース。

ふと、思い出す。

昨夜のベンチの男。

彼が手にしていた袋。

細長い袋。

あれなら、例えば、刀や剣などが納まるのではないか。

と、そんな嫌な想像を追い払って、自分の席に着く。

だからなんだというのか。そもそも、人体を切断できるような武器者、そこらにぼんぼんいるわけがない。

憂鬱な気分を抱えて、一日が始まる。

## 陰・忍び寄る（後書き）

ええと、色々初めての投稿になります。とにかく、完結をめざして頑張ります。

## 風・ざわめく

01 - 02: 風・ざわめく

噂は噂。

などと切り捨てることも出来ない状況だった。

あの翌日、北泉公園で人体の一部が発見されたことはニュースになり、事件はいまだに解決したとの報は得られていない。

不用意に学園の行方不明の生徒と被害者を結びつける報道はさすがになかったものの、それでもここ数日、学園の周りにはちらほらと報道関係の車を目にするようになってきていた。

そして、行方不明の生徒の名前も、公にはされていないものの、噂に敏い生徒の間では既に周知のものとなっていた。

「……ちよつと、気味悪いわよね」

「だねー。さすがにこれは、あちしとしても予想外、予定外、ってトコ」

智晴はここ数日、不機嫌な様子だった。無理もない。蒐集者を名乗る彼女の把握できないところで、何か事態が動いているのだから。とはいえ、彼女がその先端に追いつくのも時間の問題だと灯駈は考えている。彼女のネットワークの巨大さ、強靭さはそれとなく感じてきたものだ。

「それにしても、腕だけしか見つからなくて、他の部位がまったく見つからないってのも変な話ね」

「んー、調査はしている、見たいなんだけどね。けど、大量の人員を動員して一斉搜索、見たいな事には、まだなつてないねえ」

「色々、変な話ね」

とはいうものの、警察の捜査がどのように進められていくのか、実際のところ彼女にはよくはわからない。単にイメージで語っているだけだ。

「あつちゃんは何か見てないの？ 不審人物とかさ」

「見てたらとつくに警察に言ってるわよ」

言いながらも脳裏に浮かぶのは、夜のベンチに座るあの男の姿。しかしなぜか、アレに触れるのは躊躇われた。

「とにかく、被害者の人が生きているにしろそうでないにしろ、早く解決してほしいことだけは確かだね。正直、夜のランニングを禁止されてストレスがたまっちゃってるのよ」

「部活には入らないんだ、やっぱり？」

「今更つていう感じがするのよねー。いくら1年とはいえ、もう大体のコミュニケーションは出来てるでしょうし。そこに割り込みかけるのも、ちょっと」

そう言いながら、教室の中を見回す。彼女のクラスは1年8組。

1クラスおよそ40人の1学年10クラスの『しんようがくえん神葉学園』は、それなりの進学率やそれなりの部活動成績を持つ、それなりの学校、というのが内外の認識である。

この場合の『それなり』は決して貶しているわけではなく、むしろ褒めているに近い。過酷な生徒間競争があるでもなく、また、目も当てられないレベルの成績不振者が揃っているわけでもないという事で、昨今の教育施設には珍しくいじめ等の問題は少ないないし、大問題にまでは発展しない。『それなり』に精神的に成熟した生徒がいるおかげであろうと、彼女は考えている。

そんな学園にあり、典型的な『それなり』を体現したクラスにも、すでにいくつかのグループは存在する。赤組、青組、白組、泥沼、と彼女は大別しているが、泥沼を除いた他のグループも、自分たちと同じように今回の事件の話題をしているらしい。昼休みなのだからもう少し明るい話題でも探したらどうだ、と思わなくもないが自

分たちにもそれは当てはまる。

泥沼はいつも通り泥沼なので放っておいて問題ないだろう。

ちなみに灯駈は気付いていないが、彼女と智晴その他数名を含んだグループは『海溝』と呼ばれていたりする。ちなみにちなみに、海溝は人類にとっては宇宙と同レベルの未探索地帯である。智晴は自分たちがそう評価されていることについてそれなりに好意的に解釈しているので、特に異論はない。

ともかく、教室だけでもこのようにグループができてしまっているのだ。あるいはみクラス以上に個人間の繋がりの強くなる部活動。それも運動系ともなると、そのグループ内の結束はより強固になっっていることだろう。特に、夏休みは部活漬けだったはずで、よりその絆も強まっているはず。そこにわざわざ強襲をかけようとは、さすがに思わない。

「家での鍛錬に加えてもらっても、結局手加減されて他の門下の人達の邪魔になっちゃうし。ひとりで型の訓練してても限度があるし」「……あっちゃんでも手加減されるん？」

智晴は眉をひそめる。彼女が以前見た灯駈の戦闘（灯駈に言わせれば、アニメか何かがあるまま出てきたかのように見えたのだ。それはさながら停滞する台風。進撃する城壁。鉄壁の迫撃砲。）

神淨四相流が。四条式。音に聞こえたその技術は、彼女の想像を遙かに超えたものだった。

「そうねえ……明彦さんとか鈴木原さんとかなら、なんとか勝負になる……かなあ？」

自身の兄弟子たちを想像して、どうにか対抗できそうな相手を探すが、それでも5本に1本取れたならば御の字、といったところだという自覚が灯駈にはあった。

そも、体格が違う。筋力が違う。

四条式においてそれは勝利の絶対のバロメーターではあり得ないが、勝敗を分ける要因であることに異論は出ない。



体格が違えば高さが違う。距離が違う。筋力が違えば強さが違う。弱さが違う。

「まあ、いつかは勝てればいいとは思っただけだね。それは今じゃないわね」

「おおおう、なんだか余裕が見えるね」

「そりゃあなんて言ったって、ほら、あたしは、その、ねえ……

……身長が」

ぼそりと。

彼女に取って最も許しがたい現実を口にする。

智晴も、ああ、うん、と微妙な返事しか返せない。

四条灯麩は、背が低い。150センチにも満たない。いや、それはごまかした。はつきりというならば140と少々しかない。はつきりと格闘技向きの体格ではない。

「それでも……き、きつと、伸びる……これから、伸びるに違いないんだから……!!」

それはどこか自分に言い聞かせるような声だった。あまりにも哀れ過ぎて智晴も何も言い返すことができない。

「まあそれに、筋力もこれからまだ多少はつくだろうし……対して、あの人は今後その辺は下り坂だろうしね」

後は技術よ、と肩をすくめる。

生来的な部分での差がなくなれば、残りは技術と経験がものを言う。歳は兄弟子、姉弟子たちが当然上であるが、四条式の経験年数で言えば、僅かに自分のほうが上。無論本格的な鍛錬に入ったのはここ数年ではあるが、あの父の強さを誰よりも間近で観てきたのは他ならぬ自分なのだ。その分のアドバンテージは、きつとある筈だと彼女は考えている。

「そっかー。そうなるにあっちゃんは四条式初の女性師範になっちゃうのかな?」

長い四条式において、これまで女性師範というものは登場していない。しかし灯麩は首を横に振る。

「初、は無理かなあ。葉鉄姉えが多分先を越すと思う」

「……………あの人かあ」

灯駈の家（というかあれはもう屋敷だ。敷地内に道場がある時点で屋敷だつてば、とは智晴の頑なな主張）に何度もお世話になっていれば、自然とその門下と顔を合わせる機会も増えてくる。

入学式で知り合つて以来、それなりの頻度で遊びに行つている智晴たちはすでに四条式門下とは顔見知りといえた。

「四条式は鍛錬を見せてくれないからよくわからないんだけど、あの人ってどのくらい強いのか？」

「……………」

なぜか。

ビデオの静止ボタンを押したように、灯駈が固まった。完全なフリーズである。

「……………あれ？ あつちゃん？」

唐突な変化に怪訝に思う智晴の前で、かたかた、ふるふる、と小さく震え出す。よくよくみると、額にはびっしりと脂汗が浮かんでいた。心なし顔色も悪い。目は虚ろで光を映してはいなかった。

「あ、あつちゃん？ どつたのあつちゃん？！」

「や、やめてやめてよもういいじゃない。それ以上やったらみんな死んじゃうつていうかむしろねえもう死なせてあげてお願いだから、そんな、酷い、見てられないよ葉鉄姉え」

「なんか変なスイッチ入ったー？！」

元に戻るのに数分を要した。

「う……………うつつうつつ」

「うんがんばったよ、君は頑張った。だから今は泣いていい、泣いていいんだよ」

よくわからないが、とにかく震える灯駈を優しく胸に抱く智晴。

そこそこいいシーンにみえるかもしれないが何しろ抱きとめている人物の表情がやや危険域に達しているため非常に残念な光景になっていた。

(うふふふふふふ、あつちゃんの柔らかい肩、身長の割にふくよかな胸、珠のような肌！ ああ、たまんねえ、たまんねっす！) 脳内を毒パルスに犯された智晴の表情はどう柔らかく表現しても18禁。それを見るクラスメイトは『またかあの女』の視線。

結局、昼休みの終わりを告げるチャイムがなるまでこの光景は続いたのだった。

龍夜は繁華街を歩いていた。

時刻は昼過ぎ。ハンバーガーのファストフードを口にしながら、あたりを注意深く見回している。

ふと、通りの向こうの男と視線が合う。ハンバーガーの残りを一気に口に押しこみ、残りをゴミ箱に突っ込んで一番近くの交差点で信号が切り替わるのを待つ。昼の繁華街とはいえ、この辺りの中心的都市でもある神明市しんめいしは人通りが多い。その中に埋没する。

やがて信号が切り替わる。いつせいに人々が動く中、あえてゆっくりと歩を進めてゆく。と、横断歩道の中央あたりで人と肩がぶつかった。互いに謝罪を繰り返しながら離れてゆく。渡りきったところで適当な方向に歩き出しながら、注意深くまた周囲を見回した。

足を人通りの少ない方へ　それでいて周囲に障害物のない場所へ向ける。

そんな龍夜に、どこからともなく声がかかる。

『ふうん、追っ手は掛かっていないらしいな』

「ああ。白昼はさすがに、奴らも手を出しにくいだろうからな。とはいえ、どこに使徒が紛れ込んでいるかもわからない。注意に越したことはないさ」

やはり姿の見えない声の主に、しかし龍夜は当然といった様子で応じる。

やがて、人の手の入っていない空き地を見つけると、そこへふらふらと入っていく。

『そりゃあそうだな。で、メモは受け取ったのか？』

「抜かりなく」

そう言つてポケットに突っ込んだ手を引き出すと、そこには一枚の小さな紙片。先ほど反対の通りを歩いていた男から、横断歩道でぶつかった際に受け取ったものだ。

さつとそれを一読して、すぐにポケットに仕舞う。

「どうにも、おかしい事になっているみたいだな」

『おかしい事？』

声は、怪訝な様子だ。それでもどこか、楽しげで。

「ああ。なんでも、噂が異常な速度でかつ正確に、ある学園に広がっているらしい」

『噂が？ それくらい、なんでもないんじゃないのか？ 人に口には戸は立てられないってのは、昔からお前ら人間が言ってきたことだろうに』

そりゃそうだがな、と溜息をつく。

連中相手に常識を考えても仕方がない、と龍夜も思いはする。しかしそれが、何か狙いがあったのか、それとも単に、そういう習性を持つてしまっただけなのか。

後者であれば、まだ「まし」だと言える。手間だが、今回限りの話と割り切ることができるからだ。

しかし前者であるのなら、今後の連中との戦い自体が大きく変わってしまうことにもなりかねない。なぜならば、行動のパターンに大きな変化が生まれてしまっている可能性を考慮する必要がある。事の判断は慎重かつ正確に、それも早急に出さなくてはならない。「もしもこれが俺の手に負えないようなら……早急に手を打つてもらわないといけないしな……」

『ひひひ、自分で全部解決してやる、位のこと、男なら言ってみてえよなあ』

「無茶を言つな。あんなの、まともに一対一で相手をしている騎士団の連中のほうがおかしいんだよ」

自分の同業の最大集団を思い出してため息をつく。

対レギオンの組織は世界に数あれど、そのなかでも最大最強の名を冠するものが<楽園騎士団>であることに異論を挟む者はいないだろう。記録によれば紀元前よりレギオンとの戦いを繰り返しており、世界を覆うネットワークを持つ強大な組織。エデンあるいは騎士団と単純に読んだ場合、彼らの間ではそれ即ち<楽園騎士団>の事を指す。

龍夜の姉も騎士団に属しており、部隊をひとつ任されている程の才媛だ。もつとも、外部の間人である龍夜には具体的な役職や職務内容までは伝えられてはいないが。

己自身も騎士団に入ること考えはしたものの、諸々の事情から入団をやめたのだ。

それでも、レギオンとの戦いにおいて騎士団と関わらずにいられることなど、まずない。今回も、とあるレギオンの討伐終了直後に追加の任務として依頼を受けたのが発端だった。

依頼の内容は、簡単かつ不可解なものだった。

『領主』が突然行方不明になった。彼に何かがあったのか、あるいは、なかったのか。なぜそのような事になったのかの調査。というものだった。

『領主』とは、騎士団がある一定地域を常時監視するために、その土地に配置している常備人員である。これになるには、騎士団でも小隊長以上の地位と実力を持つことが条件となっている。即ち、半径20キロを個人で守り切る力が。

無論、世界全体に領主を配置することは不可能である。そのため、人口密度にしたがつて領主は配置される。人口が多い都市にはそれだけレギオンが発生しやすいからだ。

ここ、神明市も、そんな都市のひとつである。

「……領主がいなくてことは、可能性としては領主がやられたっ

てことだ。とはいえ、日々の定期報告では何一つ異常が報告されていない。わけわかんねえな」

残暑の熱で滴る汗をぬぐいながら思考を重ねる。姿無き声と事態の解明を目指す。

『レギオンは自然現象みたいなもんだ。自然現象の変化には必ず変化がつきまとう。領主になるだけの実力者が、それを見落とすつてのは考えにくいな』

「そうだな……もしそんな事があるのだとすれば、それこそ今度の敵はよっぽど知恵が回るかあるいは中級以上の力を持っているか」

『あるいは、その両方か』

「……………」

沈黙。

強い日差しと熱気の中、ひやりと肌を冷たい空気が撫でたようにすら感じる。

「ぐくりと、音を立てて唾を飲んだ。

「とにかく……領主の足取りを追い続けるしかないだろうな」

『情報、手に入ったのか？』

「ああ……あまり、愉快的流れじゃないけどな」

『なに？ どういう事だタツヤ』

「…………腕の所有者」

『腕？』

「最近あった、謎の切断された腕と、ほぼ同時期に消えた少女。彼女が消えた当日に、領主は彼女にあっている」

『……………そいつあ』

最悪だな。

音にならない声は、龍夜の思いと同じものだった。

『どつする？』

「ひとまず彼女の周りを洗うしかない。幸いめばしい情報も入った。その線で探していくしかないだろうな」

『めばしい情報ってのは、どんな話だ？』

龍夜はメモを取り出す。

そこに書かれていたのは、あまり楽しい内容ではなかった。

彼女は、いじめられていたらしい。

下校中今回の事件について話している最中、そんな事を智晴が口にした。

「いじめ？ ん……まあ、うちの学校でもそうというのがないわけじゃ、ないよね」

「ああ、違う違う。いじめられてたのは学校の中じゃなくて、通ってた塾の話みたいだね」

なるほど。灯駈を理解を首を縦に振る事で示した。

かがはら みなほ加賀原南帆。現在行方不明になっている女子生徒。その消息は、北泉公園でわが校の制服のシャツを身につけた腕が見つかった時間帯と合わせるかのように、消えてしまっている。

「加賀原先輩は、去年の今頃から塾に通い始めたんだって。三年生は受験とかあるからね。で、最初は割といい成績を収めてただけど今年に入ってから伸び悩んで、クラスを落とされたんだって。それをよその学校のコに突かれたみたい」

「なんとまあ」

呆れた。成績の上下などよくある話だ。そんな事をいちいち責め立てている暇があるのなら、より自分が精進すべきだろうに。

と思うものの、しかし世の中の誰もがそんな風に自分を鍛えあげることには邁進できるわけではないことぐらい、彼女は理解している。それでもやはり、思ってしまうのは仕方のない事。

「……ていうかよく調べたわねそんなの」

「噂は噂、だよあっちゃん。噂には噂がついて回るの。噂をずっとたどっていけば、どんな話にだってたどり着くって寸法さ」

「んなもん実践できるわけないって、普通」

今度は別の意味で呆れる。

それにしても、なんだか嫌な雰囲気が増してきた。

「そもそも、腕にしたってその加賀原先輩のものだって確証はないわけよね」

「だねえ。単純に状況がそうだってだけで、別にうちの学校の制服をどこかで手に入れて、切断した腕に合わせてしまえばいいだけなんだし」

「……………」

なんでこう、口にするのをはばかられるようなことを平気で言うのか。

文句の一つでも言ってやろうかと思ったがしかし、自分のしているうわさを考えて結局何も言えなかった。そんな彼女を見てほわあ、と笑った智晴は先を続ける。

「でもそうなつてくると、やっぱり腕は誰のものなのか、誰が何のためにそんな事をしたのかがわからない。なんでそんな、偽装するようなマネが必要だったのか、なんてね」

「捜査を混乱させるとかじゃないの」

「けど制服を手に入れるって、割と難しいよ？ 誰にも知られないように、てなつちやうとねー。制服買うなんて、自分の痕跡を残すのとおんなじだもん。わざわざ偽装までするような人が、そんな当然の事に気づかないのかっていうと、ちよつとねえ」

「じゃあやつぱり、腕は加賀原先輩のものだった？」

たずねる灯駆の言葉にしかし、智晴は難しい顔をする。

「んーまあ、あちしはあくまで蒐集者<sup>コレクター</sup>。集めるだけで分析推理は本職にまかせるしかないってかんじで」

「……………まあそうよね。あたしたちが考えるようなこと、警察が考えてないわけないし」

それからいつもの雑談だった。

昨日見たテレビや最近あった面白いこと、どうでもいいこと。



夕日指す通学路で、そんな他愛のない話をしながら。

死んだら、こんなどうでもいいことも出来なくなるんだな、と。そんな当たり前のことを思った。

駅で智晴とわかれる。智晴は駅からしばらく歩いた所にある住宅街に住んでいる。

電車に乗って駅5つ。

西神明駅は神明市を走る私鉄の駅の一つで、名前の通り神明市の西の端にある駅だ。このあたりは中央ほどの開発が進んでおらず昔ながらの風景をのこしており、日本風の建築物も多い。駅から15分程もあるけば、彼女の家にも着く。

「ちよつと学校で話し込んでしまったわね」

今にも日は沈もうとしており、あたりは薄い闇が降りている。それでも暗闇と呼ぶには尚明るい。

即ち黄昏時。

不意に。

意識の端に、何かがちらついた。

自然とそちらに視線が流れる。

「こんなトコに道があったんだ」

感心する。

彼女とて伊達にこの待ちに16年住んでいるわけではない。子供の頃はそれはやんちゃに近所を走りまわってはがき大将共を

「いやそれはどうでもいいか」

思い出しそうになった忌まわしき過去を思考から葬り去る。重要なのは、この小道。家と家の隙間、人がどうにかひとり通ることができそうな、間隙の道。

そんなものを今さら発見してしまうとは。

「う、好奇心が刺激を」

それなりにいい生活をしている自覚はあるが、だからと言ってい

わゆるお嬢様というやつなのか、と問われれば彼女は即座にノーと答える。自覚はあるのだ、自分が俗っぽいという。

故に、こんなちよっとしたことにも興味がそそられる。ここしばらくの運動不足と相まって、好奇心がせっせと自分の背中を押しているのを自覚する。そして。

「それに従っちゃうことも、やっぱり分かってしまふのよね」

自分自身に呆れながら。

彼女は間隙に、身を進ませる。

時刻は黄昏時。

影に入れば、暗闇時。

「へえ……」

横歩きで家数軒分の距離を進み、抜けると、そこは奇妙な空間だった。細い道がまっすぐと続いている。両脇は林に囲まれ、外からはこんなところに道があるなどわからないだろう。

「区画整備のミス？」

自分のきた道を振り返る。何かの事情で、在るべき道を塞ぐように家を立ててしまったのだろうと結論づける。何しろ古い家が多い地域だ。そんな事もあるだろう。

事実彼女の前に現れた道も、舗装は剥がれ隙間から草が顔を出している始末。相当に長い間放って置かれたのだろう。進めば獣道になっっているのではないかと言っくらしいの荒れ具合だ。

「さて、せっかくだし、行ってみますか」

足を、一步。

踏み出した。

踏み入れた。

踏み入った。

踏み越えた。

ざわり。ざわり。

風に揺れた木々が音を立てる。

無音。

生活音があまりに遠い。

たった一步。

それはきつと、超えてはならない一步だったと、その瞬間に気づいた。

気づいてしまった。

肺が絞めつけられ、視界が一気に狭まる。

無意識に呼吸を止めているのだと気づいたのは、今にも窒息をするといふ段になってからだだった。

「はっ、はっ、はっ、はっ……んなのよ、これ」

深呼吸を繰り返しながら両腕で体を抱える。寒い。寒くて寒くて寒くて寒くて。

全身がまるで燃えるよう。

「落ち着きなさい いえ、無理ね。ならば自覚なさい四条灯駈。あなたは今、怖くて怖くてたまらない」

自分自身に言い聞かせる。

「だから……だから、周囲に注意。それでも、注意できているとは思わないこと。油断しないで、とにかく不意に備えること」

未経験の圧の中にありながら、彼女が選んだのは自分を取り戻すことではなく、現状の自分自身を現状のまま制御することだった。

進むにせよ戻るにせよ、自分に意識を向け外部に意識できなくなるる時間を恐れた。

その甲斐あって、10秒経たぬ内にどうにか動けるだけの落ち着きを取り戻す。

「さあ……どうしようかな」

あえて軽い口調を意識する。

戻るべきだ。理性はそう叫ぶ。本能がそう急かす。このまま進んでもろくな事にはならず、ろくな目にも合わない。今ここが無理のし時であるはずがない。

だから進むべきだ。

「灯駈は足を踏み出す。

そこにあるのはただの予感。

進めば『何か』があるというその予感にしたがつて、彼女は足を進めた。

道はいつの間にか完全に草に覆われ、彼女の予想に違わず獣道の様相を呈している。

闇はだんだんと深くなる。それは道を挟んでそびえ立つ木々のせいかそれとも沈んだ太陽のせいか。

彼女が一步を踏み出すごとに、闇は深くなっていく。

もつもとの場所に帰ることができないのではないか。

洒落にならない空想が脳裏をよぎったとき、それは姿を表した。

「……………こんなところに、社？」

彼女の言葉通り、そこには社があった。それは小さいもの、しつかりとした佇まいをしている。まるで。

「え？」

おかしい。それはおかしい。ありえない。

社とはつまり木造建築だ。この道は間違いなく長らく放置されたものだ。あれほど荒れ果てていたのだから間違いはない。

なのに。

なぜ。

目の前の社は、なぜこんなにも、しつかりと佇まいを残しているのか。

まるで、今もこまめにていれられているような。

ぴちやり

水の音。

ぴちゃり。ぴちゃり。ぴちゃん

やけにはつきりと聞こえた。

周囲を見回しても、水音を生むようなものは見当たらない。  
息を潜める。

嫌な予感が膨れ上がる。

ぴちゃり。ぴちゃり

なおも水音は響く。

「裏だ」

気づく。

水音は、社の向こうから響いてきている。

池でも、あるのだろうか。

そんな 自分でも笑えるくらいに、信じられない想像をしなが  
ら、

ゆっくりと、すすむ。

さく。

さく。

さく。

自分の刻む足音がやたらと大きく響くのを恨めしく思いながら、  
大きく弧を描いて社の裏へと回る。

果たして。

そこには人がいた。

姿は、社の影になっている上に時刻とも相まって、うまくつかむ  
ことができない。

わかるのは、しゃがんで、首を上下に動かして、ぴちゃり、ぴち

やりと音を立てているということ。

よほど必死なのか。

その人物がこちらに気づいた様子は、ない。

「……誰？」

そつと、問いかける。

人物の動きが、止まった。

ぴたりと。はたりと。

きれいに。

じつと、待つ。

じつと、じつと。そつと、そつと。

何か。

嫌な感じが膨れ上がる。

いつでも逃げ出せるように重心を後ろに向けながら。

もう一度、声をかけようとしたとき。

「

すつと、人物が立ち上がった。

そうして、ようやくシルエットがつかめる。

どうやら身長は160センチ前後といったところ。髪は肩口で切り揃えられており、スカートを履いているらしいことから、おそらく女性であることが判断できた。

それから。

それ、から。

「シャツの、袖が」

ない。

左腕は不規則に膨らんだシルエットから、長袖であることがわかる。

右腕は。

肩口から先の袖が存在せず。

腕が。

「腕が ある」

ある。そこには正真正銘、人間の腕があった。義手などではありえない、確かな人間の腕。

女性はこちらに後ろ姿を向けたまま、また、じっとその場に立ち尽くした。

もう、限界だった。

今すぐこの場を去りたかった駅から真っ直ぐ家に帰ればよかった悲鳴を上げてみともなく泣きわめいて一刻も早くこんな場所から

びちゃ

音が。

気づく。

音だけではない。

むしろ、音ではない。

この、慣れ親しんだ、しかし好きになることのできない、この、臭いは。

血、では。ないのか。

どこから。

どこからそんな臭いをするのだろうかだって気がつくとも血の匂いにする違う血の匂いしかないまるで自分が血の中にいるようで血になってしまったようでそんなありえないことがあるはずがないことがあるということつまり。

それだけの、血が。

溢れて。

「カアッ！！！！」

「きゃあああああ！！」

女性が、首を大きく上に振った。その口から細長い何か打ち上がる。何かはぶんぶん回転しながらぼとりと社の天井に落下し、

ごと、ごと、と不規則に転がっていく。その両端はいささか不揃いで、一方からは不揃いなひものようなものが飛び出しておりそこから何かがぴちゃぴちゃと漏れ出しているもう片端は少し丸くなっている細長い棒が5本突き出している。

そう、つまりは。

それは。

びちゃびちゃと音を立てていたのはだから。

口に啞えていたのは。

喰らっていたのは。

「い」

「カアアアツ!!!」

悲鳴をあげる前に、女性が飛んだ。

スイツチが、切り替わる。

「ガアアアアツ!!!」

「はあああああつ!!!」

どのような力を持っているのか、刹那のうちに眼前に迫っていた女性を、素早く身を屈め、襟をつかみ、掌底を胸に当て。

「勢っ!!!」

すれ違い様、打撃を加え螺旋に投げる。

一切の手加減もない一撃。

衝撃は空気を引き裂き巨大な風船が爆発するような音を立てて、女性が10メートルの距離を吹き飛ばす。

「よし、いけ」

日々の積み重ねの反射が、彼女に一瞬の正気を取り戻させるが、それも、一瞬。

びちゃりと、全身を濡らすのは赤黒。

「え？」

女性の突進とともにまき上げられた赤黒い泥が、彼女に降りかかったのだ。



酷い、匂いがする。

あまりにも酷い。冒瀆的な匂いが。

だってこれは、命の証であるこの匂いは。こんな風に、野ざらしに、気晴らしのように、ぶちまけていいものでは。

「あ

見てしまう。見てはいけないものを。

入れ替わっていた。

女性を吹き飛ばす代わりに、自分はずの女性がいた場所に近づいていた。近づきすぎていた。

もう、一歩足りとも近づいてはならなかったのに。

沈んでいる。

靴が、浅く。

赤黒い泥の中に、沈んでいる。

沈んでいる。赤黒いものの中に、白いものやピンク色のぷるぷるとしたものが。

あたりにぶちまけられたものは、それは、その正体は。

小さな丸いものに、糸がぶら下がっているような。それは。

目があつた。

ぷつん、と。

灯駈は己の精神が限界を超えたことに気付かずに、糸が切れるように意識を手放した。

心臓をたしかに撃ちぬいたはずの女性が立ち上がる姿を見たような気もしたが。

それさえもはや、どうでもよかった。

だから。

最後の最後に聞こえた雷鳴のような雄々しい叫びの正体も、結局

わからぬままとなった。

## 風・ざわめく(後書き)

妙ですね。もっとポップでライトな話を書きたかったのに。スプラッタとかホラーとか苦手なんです。

最初に腕を出したのが運の尽きか。

気分は30分特撮風アクションで。今回でAパート終了と行ったところでしょうか。もっとも、腕がどうだのなんだのなんて子供には見せられませんけれど。

設定説明をいかに挟むかって難しいですね。みなさんスゲエなど書いてわかるこの厳しさ。

次回もなるべく早い更新を心がけて。がんばります。

## 陰・這い出る

01 - 03：陰・這い出ル

感じた予感に従い、全力でここまで来た。

しかし、その先に目に見えるものは絶望である。筈だった。

だが、絶望的な状況であるにも関わらず、少女は どうあがいても間に合わない、手の届かなかったハズの少女は、黒い女性レギオンの一撃を、凌いだ。

その驚嘆すべき胆力、技量、実力。それに僅かに目を奪われ同時に感じたのは抑えきれないほどの歓喜。

間に合う、と。

己はまだ間に合うことができる、守ることができる。

それは龍夜にとって何よりも尊い希望となる。

だから。

故に。

少女が気を失い、その少女を手にかげんとレギオンが動き出すのを見て。

彼はただひたすらにただ一つ事、間に合うためだけに、己の限界を超え、翔ぶ。

雷鳴の如き咆哮とともに、地を蹴り、風より疾く疾く駆け抜ける。

「おおおおおおあああああつ！！！！！」

裂帛の気合を込めて敵に向かって 翔んだ。

「けひつ?!」

突進の勢いそのまま、今にも気を失った少女に襲いかからんとす

るレギオンに掴みかかる。

鈍い衝撃が体を突き抜け、重なりあつて地面に投げ出された。相手から手を離さずにくさま立ち上がる。

抑えこもつとするが、尋常ではない力で暴れ回る相手をうまく拘束できない。

「て、んめえ！」

力に任せて抑えつけようとする龍夜。激しく抵抗するレギオンは遮二無二暴れる。

出鱈目に振り回される右足が、思いがけない角度から側頭部に襲いかかる。片腕で受けることを本能が拒絶。両手で受けるために掴んでいた手を放してしまう。

衝撃と共に視界がぶれた。

「ぐっ！！！」

ただ力任せに振り回された、技術も何も無い一撃。力に逆らわずに飛んで威力を削いだというのに体の芯までしびれるような衝撃が走る。

「……化け物が」

気を失った少女のそばに着地する。

「その子の様子、わかるか」

レギオンからは視線をそらさず、小声で姿なき相棒に尋ねる。

『大丈夫だ、精神汚染の気配もない。気絶しているだけだな。というか、よくもまあここに踏み込んでその程度で済んでるもんだ』

「たしかに大した胆力だが……無謀が過ぎる」

龍夜が森の以上に気づいたのは、隠蔽の結界がなんの前触れもなく消失したせいだ。溢れ出した瘴気は5キロ近く離れた位置にいた龍夜をもって戦慄を覚える禍々しさを放っていた。

おそらく、この少女が結界を壊してしまったのだらう。どうやってかは分からないが。

『つておいおい、このお嬢ちゃん、この間の公園のじゃないか』

「？ ……ああ、あの時の」

レギオンとの戦闘禍の残る公園に踏入り、あるうことかこちらの気配まで感知した少女。なるほど、彼女なら、何かの偶然でこの結界を発見し、迂闊にも踏み入れてしまふ事もあるだろうと龍夜は納得した。

「俺たちとしては助かったが……それだけに、面目丸つぶれだな」  
『だな。ここはひとつ、汚名返上といくか？』

立ち上がった女性型レギオンは、先程からこちらを殺意のこもった視線でもって睨み続けている。

望むところ。

「そうだな……アークエンジェル<大天使級>、逃せば厄介の種になる」

ここで、決める。

身を屈め、左手の竹刀袋を腰のやや低い位置に合わせる。するりと、袋の口ひもが解け、中身が僅かに顔を出す。

黒い柄があった。刀の柄だ。

それだけで相手に動揺が走るのを感じる。

「わかるか、こいつが。それならば尚の事、ここでケリをつける」  
集中を高める。視界が極度に狭まると同時、聴覚触覚嗅覚が極大にまで広がる感覚。

無音。

互いに筋一つ動かさぬ膠着。

無言の中に高まる闘気が静かに大気を灼いてゆく。

そして。

「……ん」

少女が、小さく呻く。

それが引き金となり。

爆ぜた

ぼっ、と。

足の裏を破裂させたかのような錯覚さえ与えるほどの爆発的な右

の踏み出し。目算三步。それが、20メートル以上のこの距離を踏破するに必要な歩数だと龍夜は判断する。

対するレギオンは、ブチブチと筋を断裂させながら骨を砕きながら関節をひとつ増やし、重力の加護を受けて彗星のごとき勢いで両腕を振り下ろす。

後の先を狙った相手の攻撃が僅かに早い。

即座の判断は龍夜にさらなる加速を選択させる。

「サマエル!!」

呼びかけに応じるは年齢不詳のざらついた声。

「承知い!」

ざり、と空間にノイズが走る一刹那。龍夜の全身を青い光が覆う。そして踏み出した二歩目。

それは異常な光景だった。爆発するような初歩に対して、単に足を踏み出しただけにしか見えない二歩目。しかしその歩は音もなく、距離を無視して龍夜をレギオンの眼前へと運んでいた。

レギオンがその驚愕を顔に表すいとまを与えず。

「っ、穿!」

加速の勢いすべてを直線の動きに転換。

踏み込みの右足が大地に根ざし、左肩が鋭く腕を運び、勢い全てを喰らい尽くして、影さえ残さぬ柄頭の閃突が放たれる。

残る地響き。裂ける大気。弾ける黒影。

柄の先端がレギオンの顎に炸裂、突き刺さる。ごしゃり、と顎とその先までが碎ける感触が手のひらに一瞬返り、その音を引き連れて木々を巻き込みながら吹き飛ばした。

地面を跳ねるレギオンの後を追い、駆ける。

数本の木を砕きへし折り、岩に衝突しめり込んだその体に。

軽く跳躍 落下の勢いを右の踵に集約。

腰の回転が遠心力産み、ばちん、と弾けるような音を立てて切り裂くような踵落としが脳天から右胸、右ひざへと一息にぶち抜く。

碎かれ、削られ、黒い煙を撒き散らしながらレギオンが悲鳴をあ

げた。

「オオオオツ!!」

着地の勢いを膝で殺し深く腰を落とす。

全身のバネの力を一斉に開放し、右の拳が吠え猛る。

胸に突き立てた拳から響く轟音が木々を揺らし、岩諸共レギオンを砕き吹き飛ばす。

頭部は歪み、胸は半ばから千切れ、その姿はもはや人の面影から遠く離れ　しかし、その程度。それでもまだゆらりと、幽鬼のように黒い影が木々の向こうで立ち上がった。

「そうだな……その程度で終わるわけがないよな!」

次こそは、と刀の柄に手をかけ足を踏み出し

『龍夜、あの嬢ちゃんか!!』

「　　っ!!」

背後に複数の気配。龍夜が給水塔で戦ったあのタイプのレギオンが三体出現していた。

レギオンたちは龍夜には目もくれず、気を失い倒れた少女を目指していた。

「貴様!」

吹き飛ばした女性型レギオンを睨みつける。顔は髪に覆われ影になつて見えないというのに、壊れた頭部に炯々と光る瞳だけが不気味に浮かび上がっていた。

笑っている。

嘲笑っている。

怒りを覚えるが、構う暇が今は惜しい。

体を捻り、飛ぶ。意識のない少女に手を出さんとするレギオン達に、回転の勢いのままに竹刀袋を叩きつけまとめて葬った。

素早く振り返り　案の定、<大天使級>は姿を消していた。

『やれやれ、逃げられたか』

龍夜は返す言葉もなく、奥歯を噛み締める。表情にはここで討伐できなかつた悔しさがにじみ出していた。



『ふん、逃げ足の早いやつだ。もう探査範囲から逃げちまってやがる。これからどうする、タツヤ?』

『サマエルの問いに、ため息混じりに応じる。』

「……ひとまず、この娘をどうにかしないとな」

『そりゃそうか。にしてもこれまた、ずいぶんと酷い事になっちまってるな』

倒れ伏す少女は酷い有様だった。体に傷を追った様子はないが、血まみれの地面に倒れたせいで、服から肌から、血に汚れてしまっている。

「全身血まみれだな、匂いも酷い。まったく……これじゃあ誤魔化しようがないぞ。とりあえず軽く処置をして、人目に付くところまで運ぶしかないか」

『それが手っ取り早いだろうな。いくら結界を消したとはいえ、こんな瘴気満載の森に女の子をおいてくわけにもいかんだろうしな』

少女を抱き上げ社のおもてへ周り、階段へ腰掛けさせるように下る。少し離れたところに落ちていた鞆も持ってきて、中身を確認した。

住所や学校名前、何でもいいのでわかるものが欲しかったのだ。

しばらく探していると、小さな手帳が出てきた。

「お、生徒手帳だ。ええと……っ?!」

『なんだ。どうかしたのか』

衝撃に息を飲む龍夜。それを感じたサマエルが何事かと尋ねた。

「この娘、神葉学園の生徒って……高校生だと……俺のいつこ下っで嘘だろ!」

『なにいつ? おいちょっとまで龍夜、今の子供は発育がいいんじゃないかったのか?!』

「いや……しかしこれは……何事にも例外があると言っ事か……!」

「それはそうだが、しかし……例外にしても例外過ぎるだろう。俺はてつきり、小学生かせいぜい中学生かとばかり」

本人が起きていたら3回は殺されているであろう言葉を吐く龍夜「って、いやそうじゃなくて。いやそれも驚きっちゃ驚きなんだがさて置いてだ。神葉学園っていえば、確か行方不明の加賀原って生徒がいたはずだ。そして、噂がやたらと広まっている学園でもある」  
自分の言葉を咀嚼し、呻く。

「おいおい、一体何がどうなってるんだ」

「そういえば、今のく大天使級>レギオン、女の姿をしていたな」

「ああ。とはいえ、制服の柄までは確認できなかったけどな」

それは、暗闇のせいでもあったし、同時にレギオンとなった人間が起こす変容のせいでもあった。

レギオン。

人の心の闇に根付き、生まれ、増殖する、人類の天敵。

その発生の正確な時期は不明だが、少なくとも人類の歴史を紐解いてゆけば常にその影を見ることができた。

その正体も目的も長い歴史を経ても容としてしれないが、通説となっているのは『そういう存在だ』という身も蓋もない結論だった。  
鳥が空をとぶように。

魚が海を泳ぐように。

奴らは人の魂を食い散らす。

レギオンは強さによって位階が付けられており、さらに下級、中級、上級と分類されている。

位階は9つ。

下級レギオンに分類されるのが、

<エンジェル  
天使級>

<アイクエンジェル  
大天使級>

<プリンシパリティ  
権天使級>

中級が、  
＜能天使級＞  
パワー  
＜力天使級＞  
ヴァーチャー  
＜主天使級＞  
ドミニオン  
そして上級、  
ソロネ  
＜座天使級＞  
ケルブ  
＜智天使級＞  
セラフ  
＜熾天使級＞  
である。

このうち＜天使級＞は龍夜が給水塔で戦った人の成り損ないの影のような物を指す。これらは、人の心の闇から生まれ落ちたばかりのもので、大した力は持っていない。

そして今逃した敵が＜大天使級＞となる。人間に入り込み＜天使級＞とは比べ物にならない力を手に入れたレギオンを指す。

先程の女性型レギオンも、ここに分類される。人としての形を失う過渡期にあり、確とした人の形をしていても人の形に囚われない。そのため全身は黒く影をまとっているかのようになる。先ほどあれだけ破壊して（そう表現するのが相応しい）なお動きつづけていたのはこのためである。

『今のアイツ、進行具合はどうだった』

「＜大天使＞にしては手応えが薄すぎる。もうほとんど＜権天使＞の位階に達している感じだな」

己の攻撃に帰ってくる感触を思い出す。手応えは、あった。しかししかに効いているという感覚は結局得られなかった。それでも多少の手傷は負わせたはずだが。

『そこまでくると、そろそろ手に負えなくなるんじゃないのか』

「わかってるよ。騎士団には援軍を頼んで……いつ来るかもわからんがな」

『とにかく出来ることをしていくしかない、か』

レギオンは放っておけば階級を上げてゆく。

階級が上がれば、その存在はより大きく、より強くなる。

いずれ手の付けられない事態になることが確実である災害。それがレギオン。

レギオンは同化した人間を飢えさせる。欲望を刺激し、欲望を満たす行動を促し、いくら満たしても満たされない飢餓感を与え続ける。

そうして深い深い闇へと人を向かわせ、人を失わせる。

それこそがレギオンの階梯。人が墮ちるほどレギオンは上り詰め、  
＜権天使級＞となったときにその主従は入れ替わる。

人間の人格は悪魔の本能に喰われ、存在の位階が反転するとされている。

彼女は、手遅れに近い。

いや、手遅れだろう。

口惜しさを感じながら判断せざるを得なかった。

『しかし……どんなスピードだ、こいつは。いくらなんでも早過ぎる。この街に来てから、まるでおかしな事ばかりだぞ。一体どうなっているってんだ？』

レギオンの進化速度に決まりはないが、最初の犠牲者が腕が見つかった頃とほぼ同時期と仮定すると、まだ一週間も経っていない。

それで大天使化をするだけでなく＜権天使級＞に登り詰めているというのは、驚異的な速度であった。

「そんなの俺に聞かれても……」

言葉を飲み込む。

嫌な可能性が首をもたげるが、それを首を振って払いのける。

「まあとにかく今はこの娘だな。いつまでもこんな所に寝かせてるわけにもいかんぞ」

少女の寝顔は、うっかりすると見惚れる程のあどけなさがあったが、ふと思いつく。まず間違い無く手遅れのタイミングの中、彼女自身の技量が今この現状を導いたことを。

強い思った。

龍夜は思う。少女は果たしてこの森の異常にどれだけ気づいていたのだろうか。多少の違和感を感じる程度ならまだいい。しかし怖気立ち寒気の止まらないこの気配を鋭敏に感じ取りながらあれだけの動きを見せたというのなら、感服する思いだった。

龍夜とて恐怖がないわけではない。むしろレギオンとの戦いは恐怖の連続だ。

だからこそ、そんな場に明らかな部外者の彼女が居り、さらに自らの力で生存の道を切り開いたことは素直に感嘆するしかない。

それが、己の未熟さが招いた事態だと理解しているからこそ。

「……そっぴや、生徒手帳なんだから名前載ってるよな」

生徒手帳の表紙には、写真と学校名、学年位しか載っていないかった。衝撃の事実に関を取られて本来の目的を見失ってしまったのだ。

名前や住所は中だろうか、と表紙をめくり。

硬直した。

「……あん？ どうした龍夜」

この短時間で何度目かになる挙動不審に、さすがの相棒も声に呆れが混ざっている。

龍夜はあー、うー、としばらく頭を抱えて。やがて諦めたように顔を上げた。

「この娘、四条だ」

「は？ え、マジで？」

もう一度ページを確認する。

『四条 灯駈』

『2年8組』

そこにはしつかりと『四条』という苗字が記載されていた。

「い、いやいやいやいや落ち着け。まだこの娘が四条式だなんて決まってる」

先程の鮮やかな一撃を思い出す。

美しかった。

鮮やかだった。

人体の限界など置き去りにした動作をみせたレギオンの不意打ちに、完璧といえる形でのカウンター！。

「んなもん四条式に決まってるだろうが！」

拳を階段に叩きつける龍夜。

「ああくそ、最悪だ……いや確かに四条式でもなけりやく大天使級>相手にあんな動き出来ないだろうけどよ。そうか、四条式だから助かったんだよな。いやでもなあ」

途方に暮れる龍夜。

『はははっ。相変わらず四条は苦手か』

「嫌というほどに苦手意識を刷り込まれているからな」  
顔をしかめて過去の惨劇を思い返す。

「……まあ文句を言っても仕方ない。住所は　　ここか」

生徒手帳の住所を携帯端末に打ち込み、検索。歩いて五分程度の距離だった。

歩いて五分。近い。その距離で巻き込まれた彼女はある意味不幸だろう。

大体覚えてしまえば問題ないはずだと当たりをつけて端末を閉じる。

そして。

「さて、どう処置したもんだかな」

『単純に項目消去でいいんじゃないかねえのか』

「それで余計な記憶まで消したら大事だろうが。つか記憶の消去なんて今はやらないっていい加減覚えるよ」  
『となると遡及封印か』

項目消去も遡及封印もどちらも人の記憶を操作する術式である。項目消去とはある特定の単語に関連する記憶を消去してしまう術式であり、遡及封印とは特定時間域の記憶を封じてしまう術式である。

主にレギオンや自分たちの存在が無闇に広がらないための措置であり、確実性を求めるのならば項目消去が望ましいが下手をうつつと重要な記憶を消しかねない危険がある。

そのため龍夜は遡及封印で処置をするのが常であった。

「最初から現場にいたわけじゃないからどの位遡るべきかは正確にはわからんが。けど大体の予測はつくしな」

灯駈は制服姿であり、さらに鞆も持っていた。そして他に荷物を持っていない事を考えると学校からまっすぐに帰宅してきている公算が立つ。

さらに生徒手帳の中に電車の定期券も見つかった。このことから、彼女が電車通学であることも確実となる。

つまり彼女は、学校から電車に乗って下校し、自宅へ向かう途中でこの森の結界に気づき意図的か偶然か、コレを破壊。先程の状況に至ったと考えられた。

となると封印すべきは今から15分ほど前までの記憶。電車を降りたか降らないか位の時間帯が望ましいだろう。

『ふむ。まあ問題ないだろうな』

「じゃあそれで」

龍夜は右手の人差し指を灯駈の額へ近づけて、ぶん投げられた。

灯駈の意識は随分前に戻っていた。

戻っていたが、体を動かす力も気力も尽き果ててしまっており、さらにはなぜそんなことになったのかもわからなかった。特に目の前の気配から危険も感じなかったため、ひとまず抱き起こされて運ばれるままになっていたのだ。

目を開く気力と体力が戻るのを待ちながら。

「この娘、神葉学園の生徒って……高校生だと……俺のいつこ下つて嘘だろ！」

『なにいつ？ おいちよつとまで龍夜、今の子供は発育がいいんじゃないのか?!』

とりあえず気力だけは一気に湧き上がったので、目を覚ましたらとにかくこの失礼な男をぶん殴ろうとそれだけは心に固く誓った。

決定打だったのは、なにやら物騒な単語が耳に入った時だった。上手く聞き取ることはできなかったが、消去法の封印だのと。それが自分に対して向けられているというのがまた、どうしようもなく不快だった。

なので。

その失礼な男の指が自分の額に近づいた瞬間。

気力の全てをかき集め搾り出して、手首をつかみ逆の手で男の襟を巻き込み、足を払いながら相手を引き倒し　完全に油断した相手を放り投げた。

視界は未だにぼやけていてよくわからない。なにやら真つ黒な物体に見えるが、やはり普通の、生身の人間だということだけはわかった。なのでそれならば恐るるにたらず。

ふらふらと立ち上がり、その無礼な男に対して指を突きつけた。



完全に油断していたー訳ではなかった。

未だに森は瘴気に満ちており、レギオンがどこからともなく現れても何の不思議もない。だから警戒はしていたのだ。

だというのに、まったく反応さえできずに投げられた。

その事に羞恥と少なくない屈辱を感じながら、それでも受身をとって立ち上がる。

立ち上がった龍夜の視線の先に四糸灯駆は立っている。足元はおぼつかず、視線もふらふらと宙をさまよっている。

が、それでも気迫だけは本物である。

肌を差す怒気を感じながら、龍夜はじつと少女の言葉を待った。

なにやら言いたげな表情で指を付きつけられたからだ。

やがて、小さな形のよい口から音がこぼれた。

「……あのね」

声はかすれていた。が、凜とした響きが確かにある。思わず、耳を傾けてしまう声。

「あんた達が、なにしようとしてるかわかんない。けど変なこと、しないで」

小さくない怒りの込められた言葉。

「……俺は」

どう言葉をつないだものかと、続ける言葉を飲み込む。

が、すぐに結論を出す。言葉を偽ったところで彼女には何の意味もない。それを悟った。

「今の君の記憶を封じようとしていた。全て、じゃない。今ここであった血生臭い、暗い部分。その部分だけを封じようとしたんだ」

「うっさいバカ。そんなの頼んでないわよ」

もっともな言葉に、しかし龍夜はひるまない。

「そうだな。けど俺はそうする方がいいと思っっている。そして俺はあなたの意見を聞き入れる義務はない」

少女の怒り、苛立ちが膨れ上がる。もとより覚悟していたが、心底肝が冷える状況だった。

もしも彼女が本気で向かってきた場合、龍夜には彼女を無傷のまま取り押さえる自信がない。最悪、無理矢理に気絶させざるを得なくなる。それだけは勘弁願いたかった。

「……じゃあ、そうやって、あたしがこんな出来事に関わる度にあんたがわざわざそんな事してくれるって言うの？ そうじゃないんでしょ？」

なんとなくわかるわ。あんたみたいな根無し草、だいたいみんな同じ空気してるから。だからわかるよ。あんたは結局今だけしかここにいないお助けキャラ。ボーナスステージ。

次にあたしがさつきみたいにならしたらその時にはきつとあんたはいない。そうでしょ」

「それは……」

「何も言わなくていいってば。そして、あたしはやっぱりきつと同じ目に合うのよ。だったらあたしは、今この時に、今のことを覚えておきたいわ。次は怯えなくてすむように、次は恐れなくてすむように」

灯駈は、ふらふらと、それでも歯を食いしばって立っている。

「ねえ。お願いだから」

何をとは訊かれなかった。だから龍夜も答えられなかった。

ただ返事だけは返すべきだと。今はその場面だと自覚した。

故に返事を返す。答えは決まっていた。

「俺たちの事は、必要ないな？」

『おい、龍夜?!』

「それから……見ただろ。あれ。あの、地面に転がってるの。あれも、いいいな？」

「………うん、ありがと。約束、だからね」

「ああ」

龍夜の返事に満足したのか、灯駈は力を失い、その場に倒れた。その場は階段だったのでごっ、ごっ、となにやら痛そうな音がしたものの、もはや限界を超えていたらしくびくりとも動かない。

深い溜息が漏れた。

『いいのか龍夜。正直こんな記憶、遺しておく方が酷だぜ？ どうせ意識も朦朧としてたんだ。今のやりとりだつてまともに覚えちゃいねえ いやそれどころか、そもそも封じてしまえば今の約束だつて』

サマエルの言葉を首を振って遮る龍夜。その表情には明らかな苦悩が見て取れた。

「そつだよ約束したんだよ。例えどんな状況でも、この娘は選んだんだ。だつたら俺がそれを約束した以上、守る義務がある。そつだ、俺にはその義務がある」

龍夜の言葉に、サマエルは何も言わなかった。

言葉に込められた迷いと、それ以上の意地を見て。

「ひとまずだから、今の会話の時間とか含めて……まあ五分もないくらいか。その辺りの部分だけを封印する。いいな？」

しばらくの無言。だがしかしやがて観念したのか。

『わかった、わーかったよ。お前がそこまで言うつてんなら仕方ねえ』

相棒の消極的賛同を得て、龍夜は四条灯駈と自分たちの、僅かな会話の時間。それを封印した。

封印の条件は、あくまで時間によるもの。

また、あくまで封印であるため、何かきっかけ……例えばほぼありえない確率ではあるうが、今回のようにレギオンと遭遇してしまつたり、龍夜と何かしら強い印象を伴う形で接触するなどがあれば、封印は解けてしまう可能性もある。

が、彼女の言葉通り龍夜は長くこの街にいることもないということ。そしてこれも彼女の言葉のとおり、彼女が次にレギオンと遭遇することがあつても、それは彼女自身の問題であることから、そこは問題ではないだろうと判断した。

少なくとも龍夜から灯駈に積極亭に接触を図ることはない。自分たちの存在を隠すためだけなら、それで問題はないだろうというのが、龍夜の考えだった。

こうして、四条灯駈の記憶は封じられた。

彼女が心底怯え、恐怖した刹那の出会いには彼女の心にはっきりと根を張り、それがこれから力になるか足を引くのかは彼女次第。そして彼女は忘れた。己がどうして助かったのかを。

それでも、鍵は残された。

それから三十分程して。

龍夜は森の社の前に戻ってきていた。

灯駈は四条の屋敷の近くの公園に放置してきた。結界も張ってあるためレギオンに襲われる心配もない。

ここへ戻ってきた理由は、調査と……弔いだ。

「……………」

『改めて見ると本当に酷いな、これは。よほど人間時代に恨みを買ってたのかね』

「サマエル。今でもあのく大天使級は人間だよ。ほとんど本能だけとはいえ、やっぱり人間なんだ」

人間が、これをやったのだ。

苦々しい思いに胸を満たされ、龍夜は顔をしかめた。

森の小さな社の裏手。

四条灯駈が目にした物。

それは。

人間。

否。

その残骸としか言えない物だった。

手足は、揃っていない。左足が見当たらないのだ。また、明らかに内蔵のパーツも足りていない。もしかしたらあたりの草むらに散らばっているのかもしれないが、それを探す気にもならない。

頭蓋は砕かれ。

中身は引き摺り出され。

それにつながった諸々が、野ざらしにされている。

なによりも狂気を感じさせるのは、それら全てに歯型が残っていたことだった。

歯を使い分解した。そうも思ったが、どうもそれだけではないらしい。

分解した後についたと思いき歯型がいくつもあつた。

食らつたのだ。

人が、人を。

「なんで……」

嘆きの声は誰にも届かない。

『龍夜』

否。聴く者はいた。常に龍夜と共にある、姿なき声。

その声に、龍夜は頷く。

「ああ。そうだな」

竹刀袋を下ろし、社に立てかける。散らばった部位を可能なかぎり集め、手を合わせる。

そして。

「サマエル、炎を」

『ああ。了解した』

サマエルの返事と共に青白い炎が立ち上り、無残な残骸をせめてと灰に返してゆく。

草むらのあちこちでも、同じように青い炎が立ち上る。しかし燃

え移ることはなく、静かに揺れて、やがて消えていった。  
静かに、静かに。  
後には、何も遺さずに。

月が出ていた。

月光の中。また龍夜は立ち尽くす。

絶望したわけではない。

諦めたわけでもない。

考えていた。

竹刀袋を手に取り、柄に当たる部分を額に当てる。こつ、こつ、こつ、一定のリズム。龍夜の考えるときの癖だ。時間がなくても考えなければならぬことがある場合、ひとつひとつの疑問点にかかずらう暇がない場合。このリズムに乗って思考を絶え間なく進めていく。

果たして、あのく大天使級が何者であるのか。目的が何であるのか。

あれは未だに一応は人間である以上、その意識に行動は縛られる。だが強い本能と欲望に突き動かされる衝動的な存在でもある。総合すれば、素体となった人間の強い意識が極端な行動となって現れやすい、ということでもある。  
つまり正体がわかれば次の犠牲者が出る以前に補足が可能であるということだ。

龍夜はコートのポケットから紙を取り出す。炎の明かりに照らされた紙には、四人の人物のプロフィールや近況などが記されていた。即ち、加賀原南帆と、彼女をいじめていた三人。

四条の屋敷から離れた後に受け取った調査報告には、龍夜の予想

通りのことが書いてあった。

即ち。

「加賀原南帆は、いじめを苦にしてはいなかった。

成績をストレスに感じていたのは、明らかにいじめていた側の三人の方だった。

つまり 加賀原南帆は、レギオンになる素質は極めて薄かった……か」

レギオンに憑かれるのは、レギオンを生み出す程の心の闇を持っているからこそ。逆を言えば、暗い感情をある程度自制できるような精神状態の人間は、レギオンに憑かれはしない、ということにもなる。

散らばっていた制服は、四糸灯駈のモノとは明らかに違うものだった。即ち、加賀原南帆のものではない。

加賀原南帆は行方不明。そしてこれまでの調査で、いじめていた三人の内ひとり、が、昨晚から行方不明だということもわかった。

つまり……レギオンとなったのは、いじめていた三人の内ひとりではないだろうか。

もし、そうであるとするならば。

「加賀原南帆は、一体、どこで、どうなった……？」

問題はそこへ立ち返る。事件の発覚が何者かの腕であるのならば、その謎を解く鍵もまた、腕の所有者と共にあるべきだ。

立ち込める瘴気に肌を刺されながら思考する。

レギオン。欲望に突き動かされる人間。その衝動の結果。

衝動。

そう、衝動だ。

<大天使級>。その行動は 特にレギオンの特性が強くなる日が沈んでからは、とにかく欲求を優先した衝動的なものになる。だからこんなに、食い散らされていた。

ここは奴の『巢』だ。レギオンに衝動を刺激されている間の拠点になっている。つまりここにいる間、あの<大天使級>はほぼ本能のみで動いている状態だ。  
なら。

それならば、である。

はたして、この社は何者が手入れをしていたのだろうか。

龍夜は、顔を上げ。

社の正面へと回る。

階段を登り、扉に手をかける。

大きさからすれば、人間がひとりにはいるのに十分な広さを持っている。  
いる。

だから。

その扉を開け放ったときに見えた光景は。

予想通りだった。

予想通りだった。からこそ。

『 龍夜 』

いい加減、限界だったのだ。



そもそも初動が遅れていた。＜大天使級＞に至る前に、適切な処置をしなければならぬのだ。そうでなくては、被害は加速度的に広がる。

レギオンは心の闇から生まれ、心の闇に住み、その闇を広げる。そして、闇を広げられた人間は、より多くのレギオンを生む。

故に、<sup>レギオン</sup>軍勢。

それなのに。

やって来てみれば既に一週間領地担当の領主は所在不明。＜大天使級＞となったレギオンの登場。し犠牲者は最低でも二人ときた。先程はついに、目の前で犠牲者を出すところだった。

もう、限界なのだ。

「っ」

食いしばった歯の隙間から漏れた空気は。

「あああああああああつ！！」  
すぐに怒りの叫びに変わる。

拳を壁に何度も何度も何度も叩きつけ、怒りと痛みで真っ赤になる視線はそれでも眼前の光景から逸らさず、その惨劇を脳に焼き付け。

「サマエルっ！！」

ほとんど悲鳴のその声に、サマエルは無言で応じる。即ち、事切れた目の前の哀れな少女の骸に、青い炎を灯す事で。

龍夜は。

少女が身につけていたであろう、フレームの歪んだメガネを拾い上げる。

少しだけ、それを祈るように握って、炎の中に投げ入れた。灰になってゆく。

右腕のない、四条灯駈と同じ制服の少女が、たった一人に見送られ。

炎が、尽きた。

そして炎が、ごうごうと燃え盛っていた。

龍夜の中に。その瞳の中に。

「サマエル。ケリを付けるぞ」

『当然だ。当然だろう、なあ、相棒』

「ああ」

聞くまでもないこと。

龍夜は社の扉を閉め、歩き出す。

森の闇の中、不気味な瘴気に包まれながら、その意志は燦然と輝き、瞳の光は刃のごとく鋭く。

未だ謎は多く、しかし時間は幾許も無く。

故に行動に躊躇いは要らず。意志が火を灯し決意が引き金を落とす。

この街はもはや戦場。

彼にとっての戦場となった。

携帯端末を取り出し番号を入力。

数コールの後、相手の声を聞くのも煩わしく。

「今から言うものをよこせ。すぐに。すぐにだー!!」

この街には敵がいる。

彼の 篠中龍夜の敵が。

ごうごうして、戦いははじまった。

それは思いの外、長いものになった。

四条灯駈は声を聞いた。

それは怒りの叫び。それは嘆きの咆哮。

聞き覚えのない声だった。

聞いたことのないはずの声だった。

それでもなぜか。

その声は忘れてはならないような気がした。

声に導かれ目を覚ます。

視界に入るのは見慣れた天井。自室の天井だった。

それでもなぜか、今自分がここにいることが確かだと思えずに。

ふと、外を見る。

月が出ていた。

いつもと同じはずの、夜だった。

## 陰・這い出る（後書き）

設定説明パート。

次回、第一章クライマックスです。ようやくプロローグの終わりが見えてきた感じですよ。

時に、今更気づいたのですが、某有名格闘漫画と同じ字面で勘違い誘発の危険性がありますね。これ。

なので第一章終了時にタイトル変えます。

## 陰・斬り裂く・影

01 - 04：陰・斬り裂く・影

彼女は激怒した。

なんですかそれはどういう事ですか。そんな事があっていいはずないでしょうにっ。

そのような具合だ。

何に對してかというのと、とある領地の領主がすでに一週間以上連絡が取れないという状態に對して。さらに言えば、その調査を外部の人間に依頼したことについて。

「まったく……身内の問題くらい自分たちで解決できなくてなんのための組織ですかっ」

とはいえ、彼女も理解はしているつもりだ。

組織は <楽園騎士団>は先の大戦において戦力を大きく失った。その影響から未だに抜け切れていないのだ。

戦闘の中心となった欧州本部の被害は甚大であり、今でも度々日本から人員を派遣せざるを得ない状況だ。それが響いて日本支部でも慢性的な人員不足なのである。

とはいえ自国を守る余裕を失っているようでは本末転倒だ、と彼女は考える。

今回の件は、それが露呈したものだと言っている。

それを差し置いても、外部協力者の存在が許せなかった。

彼女はそう言っただけで済まないが、彼女のことを知る人間は事実のところをしっかりと見抜いていた。

つまるところ。

外部協力者の『人選』が気に入らないのだ。

とはいえ、彼女の言い分は理にかなっていた。

今回の外部協力者は実績に乏しく、予測不能の事態を任せるには能力的に不安があるのではないか、という事だ。

それは確かに理屈の上でも正しく正論であるのだが、今さら決定を覆せるわけでもないし、そもそもこの決定は彼女でさえ手出しのできない領分で決められていた。

それがまた、彼女の不満を助長させる一因でもあるのだが。

「とにかく、私は許せません」

白い肌と白い髪。日本人離れした容姿はそれ以上に人間離れして美しく、可憐であった。

室内蛍光灯の簡素な光のもとにあつてさえ輝く白い髪はあまりに長く、今のように低めの椅子に腰掛けると床についてしまうため膝の上でまとめられている。

白い肌にはシミ一つなく、対レギオンの筆頭と言える騎士団において幾多の激戦をくぐり抜けてきたにもかかわらずキズ一つない。

整った顔立ちには中学生らしい歳相応の活気が息づき、魅力をさらに輝かせていた。

質素な椅子に腰掛け粗茶を飲む仕草さえ異様に様になっている。

<楽園騎士団>日本支部において彼女は「姫」と呼ばれる。いや、他国の騎士団や、それどころか、外部の人間にまでそのように呼ばれる。

その姫は不満を顔に彼女にぶつけてきた。音で表すならばぶんぶん、という感じで。

「はあ……えと、それで姫はどうしたいんです？」

「どうにかして騎士団からきちんと人員を派遣出来ればいいのです」

けれど」

「それは……さすがに難しいですよ。だって団長の決定ですよ？」  
「だから困っているのです」

ため息を付く姿を見ながら、こっそりと三奈は笑みをこぼした。

すずはし みな  
鈴橋三奈。年齢は十八。主に姫の世話係をする、騎士団における非常に貴重な事務隊員である。

もうこの愚痴に付き合って三時間にもなるが、三奈は姫のこうした行為に付き合うこと事態は嫌いではない。普段は努めて表情を作っている『姫』が、こうして年相応の感情の豊かさでころころと表情を見ているのはむしろ好きだった。

ただ、溜め込む傾向にあるためか、一度始まるとやたら長いという問題があるが。

「確かに大きな実績はありませんが丁寧な仕事をする人ですよ、あの人は」

「むー。三奈は彼の肩を持つのですか？」

「ええと、そういう事じゃなくてー」

そもそも彼にしても唐突な話だったはずなのだが。この場合肩を持つというのなら上層部の方になるはずなのだ。

が、もう姫の中では彼が積極的に仕事を持って行ったということになっていくらしい。

「姫はどうして、そんなに彼を嫌うのですか？ 確か前回の時にも随分とその、あれでしたけど」

いちゃもんとか言いがかりと表現して問題ないレベルの発言の数々を思い出し、それを微妙な言葉で濁す。

この状況で姫の神経を逆なでするのは自殺行為である。

「……あれ、っていう言い方が気にかかりますけど、まあいいです。だってあの人、変じゃないですか」

「あー……」

変人。

その認識に異論を挟むことは、残念ながら三奈にもできなかった。

話題になっているのは無論、龍夜の事である。

騎士団の騎士と龍夜では対レギオンの姿勢が微妙に異なっているため、そこが姫には引つ掛かりを覚えるところなのだろう、と三奈は考えている。こればかりは互いの育ってきた環境や教育してきた人間からの影響が色濃いために、どうしようも無い。

「まあなんといいですか、彼は……そう、偽善者、ですからね」「偽善者？」

あまり響きの良くない言葉に表情に不審を顕にする姫。

当然の反応かな、と思いつながら、誤解のないように訂正を加える。「ええまあその、悪い人ではないんです。ただその、状況に流されやすい上に頑固なので」

「……それ、任務を任せるにとても向いているようにおもえません」「そう思うのも無理は無いかもしれませんが。でもきつと、彼を表現するのに最も適した言葉がそれで　でも、一番不正確な言葉もきつとそれなんです」

「よく、わかりません。三奈の言うことは難しいです」

「そうですね……うーん」

どう説明したものか、と頭を悩ませていると、電話がなった。

外部との専用回線のものだ。

番号を見てみると。

「あらあら、噂をすればなんとやら、という奴ですね」

「彼から、ですか？」

姫は椅子を少し電話から遠ざけた。

ずいぶんと苦手意識を持っているんだな、苦笑を浮かべながら電話を取る。

「はい、もしも　え？　あのそれはどういう……ひゃっ！　わ、わかりました！　わかりましたから落ち着いてくださいー！！」

姫の目の前で三奈は明らかに狼狽していた。

耳を済ましてみると、なにやら大声で怒鳴っているらしい。姫は



むつとする。三奈にはとても良くしてもらっており、数少ない友人と呼べる間柄なのだ。それを怒鳴られていい気はしない。

だから、そちらに意識を向けたせいで、三奈がとんでもないことをしているという事に気づくのに遅れてしまった。

「……？ 三奈、なにしてるの……ってちょっと待ちなさい、あなたそのデータは……っ！」

「はい。送信しました。……ええ、はい。もう、少しは落ち着いてくださいね。ええ、はい。それじゃあご武運を」

電話を切って、三奈がふうと一息つく。

姫はそれを、ぼかんと見ていることしかできなかった。  
が。

「み、みみみ三奈！ あなた、今自分が何をしたのか分かってい  
るのですか?!」

「いえまあその、必要ださっさとよこせ、なんて言われちゃいま  
し  
たから」

三奈が操作した端末にうつっているもの。それは間違いなく、神  
明市の行方不明の領主、その人の詳細な情報であった。

騎士団所属の騎士の情報は、コンピュータによって厳重に管理さ  
れており、普通なら外部への持ち出しや送信などできてはいけな  
いはずなのだが。

なにしろ騎士の情報というのは即ち騎士団の切り札なのだ。同じ  
騎士団内でさえ不用意なやりとりは禁じられているというのに、そ  
れを外部の人間に送信するなど。しかも、わざわざセキュリティま  
で破って。

「あ、あああなたそれ、処罰ものですよ？ 分かっているのです  
か??」

「ええまあ分かっているんですけどね。でもほら、やっぱりどうに  
かしたいじゃないですか。頑張ってるんですから」

それは。

そうなのだろうが。

「けれど……規律や、規範を守らなくては、場合によっては逆に被害を広げる形になりかねません」

これだけ情報の扱いに慎重になるのには理由があるのだ。過去騎士団が手痛い被害を被った事は幾度とあるが、そのうちの何度かは騎士の情報が事前に漏れていた事が原因であった。

「そうなんですけどね。だから彼は偽善者なんです」

三奈は椅子に腰かけ直しながら、端末から情報操作の痕跡を消して、姫に向かいなおす。

「目の前しか見えてないんです。そのために全力を出して、その後ろで被害が出ていることもきちんと気付いている。でも、目の前をどうにかせずにはいられないんです。だって、目に映っているのはそっちだから。」

情けないくらい自分本位な他者救済。自覚がある分、なお悪質……

……とは彼の言葉ですけど、私も同じ意見です。

それでも、誰かを助けようと、頑張っているのなら……頑張っているじゃないですか」

三奈はそう言って、ぬるくなったお茶をすすった。

姫は何も言えず。

けれどやはり納得はできず。

一口お茶をすすり、口の中を潤してから。

「けれど、私の友人のあなたにあんな怒鳴り声を上げていい理由にはやはりありません。やっぱり私は、彼のことは嫌いです」

ふくれっ面で、そう零した。

龍夜はひときわ高いビルの屋上の縁に立ち、街を見下ろしていた。時刻はそろそろ九時を回った。

レギオンの活動も、これから時間と共にさらに活発になる時間帯

だ。

龍夜はじつと街を見下ろしている。

もはややることは全てやった。後は獲物が網にかかるのを待つのみ。

もう一度、端末をひらく。

そこにはある人物の詳細な情報が展開されていた。

三奈に危険を犯して取得してもらった情報だ。ずいぶん手際よく手に入れてもらったが、龍夜とてこれがどれほどの危険な行為かは分かっていた。

もし発覚した場合、三奈は問答無用で背信行為を疑われ、最悪処刑となってしまうこともありえる。

しかしだからと言って、騎士団に正面から掛け合ったところでこの精度の情報は期待できない。

それほどの情報なのだ。騎士の個人情報とは。

だが、それを無理して差し出させた。この街のレギオンを狩るため、人を守るためだと。

偽善。

そう分かっているても、止められない性分だと理解していた。

まるでレギオンだと皮肉を言ったのは三奈だ。感情はそれに反発したが理性は納得し、その時は何も言えなかった。

きつと今でも何も言えないだろうと、内心で溜息をつく。情報に目を通す。

『アレックス・キング』

『神明市を中心とした複数の市を領地とする』

そこには、彼の騎士としての履歴、能力、技量などが詳細に記録されていた。

技量としては十二分。隊長位に付いていないのがおかしい位の実

績と実力の持ち主であることが伺えた。

何よりも特筆すべきはその領地の広さだろう。神明市全体どころか複数の領地の掛け持ち。人手不足もあるだろうが、だからと言って実力の伴わない者をその任にあてられるほど、騎士団は腐ってなければ余裕があるわけでもない。

一流の騎士。龍夜はそう判断した。

その彼の定期報告もまたその実力を裏付けるのに十分な精度と量を持ち合わせていた。

その中には、領地の分析結果も記載されている。

レギオンにも、集まりやすい場所というものがある。心の闇から生まれ、形を成しやすい場所というべきか。

例えば、夕方のあの森などが分かりやすい。

そういった場所では人は正気を失いやすく、レギオンも形を成しやすい。また、瘴気が人の精神を不安定にさせる作用もあり、長居すれば体調を崩すこともある。

集重点と呼べる場所。その場所についても、網羅されていた。

このビルの屋上も、そのひとつだ。

街外れのこのビルは建設工事終了後すぐに自殺が三件も起こったためテナントが入らず、そのまま放置されたものだ。

いかにも、な曰くのあるビルなのである。

神明市の南西のこのあたりは、そういったビルが複数集まっっていて治安もあまり良くはない。無論、そういった場所にこそ集まる人間が、こうして夜を照らしているのだが……。

話を戻そう。

龍夜は、街中のそういったスポット全てに、結界を張った。気の巡りを浄化し、気脈を活性化させる結果だ。レギオンの嫌う結界。

そうして残っているのは、ここだけ。ここだけは結界を張らず、今、街じゅうのレギオンは小さな陰に潜んでいることだろう。

だが。

とてもではないが、小さな陰ではその身を隠すことができないよ

うな。そんな存在がいたら。

そいつは果たして、どうすればよいだろうか。

結界を破る？

とてもタダでは済まないし、そんな事をすれば、たちまち結界を張った人間が飛んでくる。結界を破って力を失った状態で戦うなど、愚の骨頂であろう。

レギオンは本能と欲求で動いているからこそ、自らの存在をむやみに危険に晒したりはしない。

それでは影に潜まず、堂々としている？

不可能だ。レギオンにより衝動を刺激されている状態で、我慢が効くはずがない。次の獲物が欲しくて欲しくてたまらない筈だ。

ならば。

答えはひとつ。

「結界を張った人間を」

「殺してしまえばいい」

立ち上がる。竹刀袋から中身を取り出す。

中身は、日本刀だった。

鞘は黒く余計な装飾を一切省いた無骨な印象がある。しかし、鞘に収まったままであるにもかかわらず、見る者を圧倒する何かがあった。

刃渡り二尺。

レギオンを斬る。ただそのために生まれた一筋の刃。

銘を『天穿牙』と言う。

彼はしばらく手の中の刀を見つめ 振り返った。

そこにはいつからいたのか、ひとりの少女。

資料で知っていた。ずっと見ていた。だからその顔を見れば名前  
はわかる 筈だった。

「ようこそ 加賀原南帆」

そして。

『さらばだ 加賀原南帆』

刃の存在理由。

それが果たされる時は、今ここにある。

少女は晒っている。

壊れた笑顔を浮かべ続けて。

表情は蠟人形のように固まったまま。

「どうして……わかったの？」

どうしてだろう。わからないな。わかんないね。わかんないや。

あんなにあんなにあんなにあんなに。きちんときちんと、隠してきたのに」

ニタニタ、ニヤニヤ。

壊れた笑顔。口は動かない。声はどこから発しているのか。

『そうだな。上手いこと隠してた……俺達も、最初の被害者はあんなで間違いない。そう思ってた』

「そうだね。そうだよ。そうなんだよ。

じゃあなんで、どうして。わかったの。わかつちやうの？」

「巧すぎるんだよ。事件の隠蔽方法が、じゃない。お前が犯人でないと、そういう状況証拠が揃うのが。」

片方の獲物は原型もない位に死体を食い散らしたくせに、もう片方の獲物は腕を切り取り頭蓋をぶち抜くだけで済ませるだど？

そんな都合のいいことがあってたまるか!!」  
そう。

龍夜が社の中で見たものは、神葉学園の制服を身につけ、片腕を

切り取られ、頭部を粉碎された死体だった。

あまりにも。

あまりにも違いすぎる。

本能と欲求が支配する存在の行動にしては一貫性が感じられない。  
だから疑った。

可能性を。

「なあおい、お前……そのバラバラの体は一体なんの冗談のつもりだ、ああっ?!」

加賀原南帆。

左右の足の長さが違う。

左右の腕の長さが違う。

袖から出た肌の色が違う。

違う。違う。違う。違う。

顔が、加賀原南帆のものとは違う。

それが答え。

彼女は。もはや彼女と呼ぶべきなのかさえ不確かなこの存在は。  
自らの殺した人間たちのパーツを継ぎ接ぎに、自らを構築したのだ。

「だって。だって。だって。ねえ。楽しそうなんだよ、あいつら。  
足を。手を。肌を。目を。顔を。あんなに着飾って。

だから。だからさあ。そんなに楽しいっていうのなら……分けて  
くれても、いいじゃない」

壊れた笑顔で壊れたことを言う。ある意味それはふさわしい姿なのか。

いじめは、たしかに苦しめていなかったのだろつ。  
だがきつと彼女は初めてだったのだ。自分とあまりにも違う感性  
を持ち、習慣を持つ、そういう人種と直に接するのは。

異文化と言つても良いほどの存在と衝撃。

それに触れた彼女の中に生まれたのは、侮蔑でも羨望でも排他でも同調でもなく、嫉妬だった。  
ただ、それだけのありきたりな話で。  
そしてそれだけでは終わらなかつた。  
結論は、それだけの事だったのだろう。

龍夜が刀の柄に手を掛ける。

夜のような黒目黒髪に、コートもシャツもパンツも黒。全てが黒いその姿は不吉を運ぶ死神を思わせる。

「お前の事情は知らない。もしかしたら同情の余地がどこかにあるのかも知れない。

が、それらの全てがもはやどうでもいい。

お前の終着は今ここだ。ここでお前の執着、切り捨てさせてもらう」

加賀原南帆は。

レギオンは。

笑って。

晒って。

『カヒッ』

『カヒヒヒヒヒッ』

『あはははっ！ あははははははははっ！！』

ふわりと、浮き上がり、次の瞬間には五メートル程の上空の位置で停止した。

『……龍夜、こいつは』

「ああ……」

笑い声は響き続けている。だが、その姿はもはや見えない。

黒い霧が渦を巻いて、その姿を覆い隠してしまっているせいだ。

ただ、その奥から感じる不吉な気配は物理的な圧迫感さえ伴っていた。



もはやあの森の比ではない。いや、あの時は力を隠していたのか。力を存分に出すことができる時間帯になるまで。

やがて哄笑が収まり。

黒い靄がゆっくりと晴れてゆく。

中から現れたのは 筆舌に尽くしがたい姿をした存在だった。

無理にでも一番近い形を当てはめるとするならば、かろうじてクラゲという言葉で表現できないこともない。

巨大な丸い肉の塊から、無数の触手が生えており、肉の塊のそこかしこには牙をむき出しにした口がかちかちと音を立てている。

触手は全て人間の腕の形をしているが、関節がいくつつあるのが見当もつかない。

そして、肉の塊 仮に脳と呼ぶが、この脳は半球状をしており直径は三メートル程。ぐるりと円周には昆虫の足のようなものが生えている。

脳はびくんびくんと脈打っている。シワに見える表面は、よくみると人間の足が絡み合っているものだった。

まるで人間に対するあらん限りの悪意を込めて作ったかのような肉のオブジェ。

人間という生き物のパーツは見て取れる。

だがそこに、人間としての痕跡は何一つ残っていない。

このような姿く大天使級>が取ることはありえない。

つまり。

「<権天使級>！」

『既にその位階に達していたか』

サマエルの声にも平時の余裕は既にない。龍夜も決して心中穏やかではない。

だがそれでも。

退くという選択肢だけは、ありえない。

必要なのは覚悟。

「……やるぞ、サマエル」

『ああ。いつでも』

息をつく。

レギオンは上空にとどまったまま動かない。動けないのだ。

人としての存在を捨てその位階を上がったレギオンは、物質に対して直接影響をあたえることが出来なくなる。

しかし今龍夜が感じているように、瘴気を撒き散らし下級のレギオンを無尽蔵に生み出す。

故に、倒すにはこちら側に引き摺り出さなくてはならない。

その手法は単純。

声を張り上げる。

「訊こう！ 『汝の名は何と為す』！」

それは言葉。

こちらと『奴ら』を結びつけ 引き摺り下ろす。

レギオンが、揺れた。

半透明のそれがゆっくりと高度を下げ、にわかには動きが慌ただしくなる。

そして、ピタリと止まり。

答えが返る。

『我は』

声はどこか、加賀原南帆の色を残しており。

それはまるで、人間の声の要素をぶつ切りにして、無理やり組み直したような、不快な音。

『我はゲヘナ 業火の軍勢であるがゆえに！！』

瞬間。龍夜は跳ねた。

直前まで居た空間が無数の触手に蹂躪されるのを尻目に、手近な足へ。

鞘を腰に挿し刀を抜く。

「神淨四相流・一伎型 虎牙突穿」

踏み込みと共に繰り出された突きが昆虫のような節足の半ばまで突き刺さる。手を刃に添え軽く振動を与え、気を通して衝突点で爆発を起こす。

足が吹き飛び。千切れた断面から黒い靄が血の代わりと言わんばかりに噴き出した。

龍夜はその結果を見届けぬまま、別の足を足場に宙へ翔ぶ。

放つ斬撃は三つ。脳に大きな亀裂が入る。

『ルオオオオオオオオオオッ！！！！』

脳の口がパクリと開き、中から炎の弾丸が無数に放たれた。

「サマエルっ」

『いちいち言わなくてもわかってるって』

ざり、と龍夜を青光が包む。光は炎を弾くが、威力に流されるのは防げない。

「……っ」と

炎が収まると同時に着地。屋上の端にまで押し戻された。

「さすがに、固いな」

ゲヘナと名乗ったレギオンを見やると、龍夜の切断した足は断面から今まさに足が生えてきているところだった。さらに、脳につけ

た傷は新たな口となっている。

今の攻撃の全てが、相手の存在にまで届いていないのだ。

<権天使級>以上にまで上り詰めたレギオンを倒すには、単純にダメージを与えるだけでは倒すことはできない。

レギオンは軍勢。

あの黒い靄こそがレギオンなのだ。

結合の弱いく天使級>やく大天使級>であれば、物理的な攻撃である程度の効果は望めるがそれ以上の階級相手ではそうもいかない。わずかな時間でその結合を回復されてしまう。

「とはいえ、いきなり奥の手まで出すわけにもな　どのくらいかかる」

『ああまで……：まだもう少し時間がかかりそうだ。なんとか凌いでもらうしかねえな』

「了解　つと！」

文字通り手を伸ばしてきた触手を切り捨てる。

刃の勢いに乗りくるりと反転、さらに二本の触手を纏めて断ち切る。

「おおおおつ！！！」

次々に繰り出される触手と炎。

右から触手が、躲す。火炎放射を踏み込むことで潜りぬけ、足を三本、断ち切る。足に絡みつくと触手を踏み千切り、牙を鳴らす口から飛びすさる。

死角から放たれた足を踊るようなステップでかわすが、肩が浅く挟られバランスが崩れる。姿勢が崩れ動きが僅かな停滞を見せた。

『アハハハはハハ！　ハッはハッハッ！！』

狂ったような笑顔を浮かべながら鋭い足を床に突き刺しながらぶよぶよと身を揺らし踊るゲヘナ。触手を狂ったように四方八方に叩きつけ、炎の雨を撒き散らす。

「くっ、そっ、がっ！！！！！」

炎を見切り、触手を切り捨て、足の隙間を縫うように駈ける龍夜。

しかしどれだけの速度で動こうと、嵐のような攻撃の全てを避けられる道理はない。既に体には無数の傷が走っていた。

「サマエル、まだかつ?!」

『あと少し耐える! こつちだつて必死でやってる!』

しなる足を刀で受け、しかし吹き飛ばされる。立ち上がるまもなく襲いかかる触手の嵐を、ある者は切り捨て、あるものは流して捌く。

『ひゃああつああああああはははははは!』

業を煮やしたか。

脳が天地逆転し、足の関節を逆に曲げ立ち上がり、触手は空へと手を伸ばし、燃えた。

「つておいこらマジかよ!!」

百を超える炎の腕がゆらゆらと揺れ 龍夜目指して槍のような鋭さで襲いかかる。

「おおおおつ!!」

飛んで躲す。いくらなんでも、炎を刀で切ることはできない。

飛んだ龍夜向けて、昆虫そのものの動きで脳が迫る。

受身とりその場でしゃがんだまま刀を鞘に添え、構える。

「神淨四相流・一伎型 籠轍」

真一門の斬撃。ぐるりと膝を支点に回転し刃で円を描く。鋒込めた気によって空気そのものを爆散させた。

爆圧は炎の触手だけでなくゲヘナ本体も押し返した。無論、中心にいる龍夜もただでは済まないが。

「か……はっ!! クソツタレが……肺が潰れるところだったぞ!!」

『くすくすくす。』

すごいね。うん、すごい。

驚きだ。驚きだよ。驚き、驚きだね』

龍夜の悪態に声が帰ってきた。

他でもない。ゲヘナ 加賀原南帆だ。





炎の光さえ吸い込む漆黒は、その全身を覆っていた。頭部を覆う兜は龍を模しており、睨みつける真紅の眼光がゲヘナを射抜く。

触れれば切り裂く鋭さを全身に纏っているが、禍々しさはそこには存在しない。

むしろ鍛え抜かれた刀のような美しささえあった。

腰に佩きたるは一本の刀。

黒い鞘には竜の装飾が施されている。

刃渡り三尺の唯一無二。

銘を『星震天穿牙』。

鎧が、ゆっくりと刀を抜く。

銀の刃が月と炎の光にさらされ、静かに輝く。

鋒をゲヘナに向け、鎧が口を聞いた。

「龍影影装 刃牙」

その声は紛れもない龍夜のもの。

これこそが、騎士が騎士と呼ばれる所以。騎士鎧の着装。

騎士鎧にはいくつか能力があるが、まず分かりやすいのがそのものの鎧としての能力。

『オオオオオオオツ！！』

無数の炎の触手が龍夜 刃牙に襲いかかる。

しかし刃牙は特に身構えるでもなく触手は鎧に突き刺さり 弾かれる。

二度三度と繰り返しても結果は同じ。

単純な強度だけでなく、レギオンに対して強い耐性を持つ。それが騎士鎧なのだ。



それを悟ったか、ゲヘナが無数の触手をひとつに纏め、巨大なムチとして叩付けた。

しかし刃牙は腰を落として左手を差し出し、その炎を受け止めた。さらに受け止めた触手を引いて、

「おおおおおおっ！！」

脳ごと持ち上げ、叩きつけた。

地震のような衝撃と共に、ゲヘナが屋上の床を砕く。二度、三度とそれを繰り返すと床が壊れ、下階へと落下した。

このように、レギオンがある程度まとまった状態であれば、意志一つで炎の形態をとっていようとレギオンに触れることができる。

レギオンに対しての絶対的な攻撃力と防御力。

これこそが騎士鎧刃牙の力であり、龍夜の力である。

無論、これだけではレギオンを討伐するには力が足りない。刃牙が刃牙たる理由――他の騎士であれば持っている能力を有していない事から、決定打に不足する。

それを補うのが。

『見えてるな、龍夜？』

「ああ、良好だ。さすが、と言っておこうか」

刃牙の周りを漂う球体の黒い闇から声が聞こえた。龍夜がサマエルと呼ぶ、その声である。

それはレギオンの黒い霧に似ており、しかし決定的に違う。色は同じ黒ながら、刃牙同様すべてを飲み込む深さを持っている。そして霧のようにあやふやした不定形ではなく、確かな存在感を持って刃牙の周りを漂っていた。

サマエルの力により、下階を見下ろす刃牙の視界にはその決定力不足を補うための情報が視えていた。

「そこか」

右足を大きく引き、腰を落とす。突き出した左の手甲に刀の背を

あて、鋒を低めに構える。  
刀に流し込まれた気が大気を灼き、震わせる。  
今、刃牙の視界にはゲヘナの『核』がみえている。  
レギオンは軍団。軍団である以上、統括する存在があつて然るべき。即ち――脳を中心一片三センチメートルの立方体。

「神浄四相流・一伎型 陰滅影牙」

音を置き去りにした突。

影さえ残さぬ疾風疾駆。

抵抗のために放たれた炎諸共を刃に巻き込み。

醜悪な肉を引き裂き。

灰色の『核』に白刃が突き立つ。

それでも刃牙は止まらず、巨体諸共壁に激突する。

ぎしり、と、核のひび割れる音が響く。

激しい抵抗の炎が室内を荒れ狂う。

「龍咆！」

手首を捻り、気を送り込み続ける。

龍の咆哮が響き渡る。刀に送りおまれる気が、破壊の力を伴って溢れ出す。

『星震天穿牙』がより強く輝く。それでもなお黒き鎧が、己の全力を、牙を突き立てる。より強く、より強く。

そして。

ガラスが割れるような音とともに、ついに灰色が、砕けた。

その光景を、何人は偶然目にしていた。

打ち捨てられた高層ビルの最上階の壁が、轟音と共に炎を噴き出

したのだ。

そこで何が起こったのかを理解したものはいなかった。  
炎と閃光の向こうに漆黒の鎧を見たものも。

『核』が砕けた瞬間、僅かな靄がレギオンの形を取り　しかしすぐさま、より黒い闇　サマエルに吸いこまれて消えた。

それを見届けて、龍夜は刃牙の着装を解く。

鎧が継ぎ目から離れ、形を失い、龍夜の影の中へ消えて行った。

燃える炎は空気の逃げ道を得たことでより荒れ狂う。すぐにここから避難しなければ、龍夜といえど危険だ。

だが。

少し離れたところに視線を投げた。

四肢を失い、全身に傷を追った少女が、倒れていた。

胸は微かに上下を繰り返しているが長く持つことはないだろう。

彼女はおよそ人間とは思えぬ所業を行った。レギオンに取り憑かれたとはいえ、その行動のトリガーは彼女の内にあるものだ。

だから、彼女のことは許しがたい。

しかしそれでも。

龍夜は彼女に歩み寄り、彼女を抱き上げた。

「……はは、優しいね、君」

炎の音に掻き消されそうな微かな声。驚いて視線を向けると、抱え上げた少女が笑っていた。

疲れと諦めと……色々な感情が詰まった笑顔だった。

「……意識があるとは、思わなかった」

「うん……うん、これはたぶん、残り香。わたしの中のあいつらが、まだ少し残ってるから」

「……そう、か」

龍夜は何も言わず。

床を蹴り、天井の穴から屋上へと出た。

遠くからサイレンの音が近づいてきている。誰かが通報したのだらう。

炎の熱から遠ざかり夜の風を浴びる。屋上は酷い有様だったが、それでもどうにか、腕の中の少女を下ろせる場所を探し当てた。

静かに下ろす。彼女はずっと閉じていた目を開いて、

「ありがとう」

とささやいた。

「気分はどうだ」

「うん。思ったより平気……あんな事したのに、変なの」

浮かべた苦笑を見て、龍夜はたまらない気持ちになる。

彼女を許す気持ちはやはりない。

だが、彼女を哀れに思う気持ちも拭えない。

そんな龍夜を見て、加賀原南帆は悲しげに顔を歪めた。

「なんか、ごめんなさい……わたしのせいで、こんな事になっちゃって」

「別にいいさ。いつもの事だよ。この程度の騒ぎならー」

「そう、じゃなくてさ。わたしのせいで悲しい顔をさせてるみたいだから」

龍夜は口を閉じる。

「なんかねー。あのこ達の事だって、別に嫌いじゃなかったんだ。

うん、むしろ、好きだったよ。

わたしにはできないこと、真似できないことを、あんなに生き活きとしてできるんだもん。

帰りに寄り道したとか、喧嘩して家出して友達のところ泊まったとか、男の人と……とかさ。

うん。羨ましかった。羨ましかったけど、すごく遠く感じて……それでよかった、筈なのに」

「レギオンはちょっとした切欠で心に棲みつく。あなたに非はあつ

ても、落ち度はない」

「あはは……ありがとう。うん、そうやってちゃんと叱ってくれて、嬉しいよ。」

慰められたら、悲しくなる。

あんな自分が自分の全部だって、そう言われるみたいで呼吸がだんだんと浅くなっていく。

彼女が穏やかに、意識を失っていくのを感じていた。

ふと思う。これは不公平だろうか。他者を理不尽に蹂躪した人物が、報いを受けたとはいえ、穏やかに息を引き取ろうとしている。

とても龍夜には答えは出せそうになかったが……それでも、目の前の彼女の最後を左右する気にはなれなかった。

それが偽善だと自覚していても。

「……あのこ達、ひどいことしちゃったな」

「略式で、あくまでこちらの流儀だが……一応、焼いて弔いはしておいた」

「ほんと……なにから、なにまで……ありがとう」

「いや……そういえば、ひとつ聞いておきたいことがある……牧師にあつたか？」

彼女は目を少し見開いて　それでも何も見えていないだろうが

龍夜の方を見ながら、微かに、うなずいた。

「……あつたよ。優しい人だったよ。怖い人、だったけど」

そうか。と答えて、それきり口を閉じた。

浅い呼吸の間隔がだんだんと長くなる。

龍夜は夜をじっと見つめている。

「なまえ……そういえば、きいてないな……」

「龍夜　いや、篠中龍夜だ。敵にはそう名乗ることにしている」

「そ、か。うん。……ありがとう、しの、うち……ん」  
最後に。

長い吐息を小さく残して。

加賀原南帆は、息を引き取った。

塾の同級生を殺害し。

己の消息を隠すために他者の血肉をむさぼり、切り貼りし。炎をまき散らして一人の騎士を殺害しようとし。

凶悪と言って差し支えない惨禍をまき散らした少女は。

その騎士に看取られて。

幾多の苦悩と後悔を胸に。

静かに、人生の幕を閉じた。

所業に反して、あまりにも穏やかに。

ゆっくりと、彼女の亡骸を抱え上げる。

『どうするんだ、その娘』

「こんな死体を出すわけにもいかんだろ。焼いて、社の裏に墓でも建てるさ」

『そうか。それで、これからどうする？』

「どうもこうもねえよ。敵は潰す、徹底的にだ」

『だろうな。じゃ、ひとまず俺は帰るぜ』

闇がふわりと龍夜の体の中へ溶ける。

龍夜は屋上の縁に立ち、夜の街を見下ろす。

たとえ姿は見えなくても、確かに敵を見据えながら。

漆黒騎士刃牙。

今はまだ知る者も少ない、ただの放浪者の騎士に過ぎない。

その名が夜の世に知れ渡るには、まだしばらくの時間と幾つもの戦いが必要であった。

## 陰・斬り裂く・影（後書き）

Bパート終了。

エピソードのCパートを挟んで、2章へと続きます。

ちなみに、前話のあとがきにも書いておりましたが、タイトルが某有名格闘技マンガと被って非常に紛らわしいので、2章開始時点で変更します。

ここまで読んでいただいて、さらに先まで読んでいただけの方は覚えておいていただけると有難く。

タイトルは「刃牙」から「夜の刃、月の牙」へと変更いたします。

それでは。

## エピソード（前書き）

第一章エピソードです。

第二章から、タイトルを『刃牙』から『夜の刃、月の牙』へと変更いたします。



## エピソード

### 01 - エピソード

彼女は頭を抱えていた。

神門市南西にある、打ち捨てられた一五階建てビルの一三階から上が全焼した。報告書の中にそんな一文を見つけたからである。

「何をしてきているのですかね、あの人は……!!」

「まー、派手にやっちゃいましたね」

そばに控える三奈も呆れ顔だ。

ここは<楽園騎士団>日本支部。東京都にあるその本部ビルの、さらに姫専用の部屋である。

三奈が上げてきた神門市での定期報告。その報告書の内容に姫は呆れているのだった。

「まあ、他に待ち伏せできるような場所がなかった、ということもあるのでしょうかね」

「それにしたってこれは……。このような報告書、母様にどう報告したのか考えただけで頭が痛いです」

「同感です」

それでも、三奈の不正行為に関してはうまく隠している。そこはさすがにこちらも配慮したということだろう。

「ともかく依頼の任務はこのまま続けてもらうとして……やはりうちからも誰か派遣するべきではないでしょうか」

「とは言いましても姫、ご存知のとおり、今は中国南東の例の件で人員が」

「……そうでした。わかりました。ひとまずこちらは彼に任せ、い

ざという時の為に人員の選定だけ進めておきましょう。

正直なところ<権天使級>がこれほど突発的に発生するなど異常事態だと思えませんから」

「少し調べてみたのですが、やはり一ヶ月未満での<権天使級>へのシフトは過去の事例としては存在しません。国内だけでなく、世界的に見ても」

三奈の表情はどこかすぐれない。

やはり不安なのだろうと姫は思い、意識してその顔に明るい笑顔を浮かべる。

「そうね……けれど、異常事態ではあるけれど非常事態ではありません。」

幸い今回の件で彼には最低<権天使級>への対処能力があることがわかりました。それならば、アレックス氏程は見込めないにしろ、神明市とその周囲へのある程度の対応を見込めるかもしれません。

……ええ、業腹ですけれども」

「あはは……それでは、彼には領主調査の依頼に加え、該当地域の対レギオンの対応も依頼する形で」

「ええ。お願いしますね」

三奈はお辞儀を一つして部屋から出て行った。

それを見送り、ふうとひとつ溜息をつく。

報告書を見る。

「まったく……唐突にもほどがあります」

前日までの調査ではせいぜい<天使級>との交戦が数回。という報告だったのに、今朝上がってきた報告は<大天使級>との接触、及びその<大天使級>が<権天使級>となりこれに応戦、討伐したとあった。

どんな展開の速さだ、と驚いたのは何も姫だけではない。噂に敏感な者が、既に騎士団内でも話題にしているのを彼女は感じていた。

あの『落ちこぼれ』が単身<権天使級>を撃破した

あまりいい噂ではない。明らかに彼を見下している中身に、彼女は辟易としていた。

彼女も彼の実力に対して猜疑心はあるが、個人でレギオンに対抗しようとするような無茶な人間が、何年も生き延びられる甘い世界でないことは知っている。一定以上の力はあるだろうと認識はしていた。

「ってなんで私があの人をさばうようなことを考えなければならぬのですかっ！」

まったく不愉快である。

それもこれも、いきなりこんな訳の分からない報告書上げてくるほうが悪い。

そんな言いがかりとしかいいようのない事を考えながら、さっさと次の書類へと彼女は移っていった。

「失礼いたします」

姫の部屋を後にして、三奈はふうと息を一つつく。

正直、今朝送られてきた報告書は彼女の度肝を抜くものだった。無論、彼の能力を疑うつもりは毛頭ない。

三奈の知る限り『騎士としての実力』であれば龍夜はどれだけ頑張っても中の下が限界だと思っている。しかし同時に『戦士としての実力』を鑑みた場合、騎士団内でも彼に敵う相手は数少なくなると思っていた。

それでも。

「これはちよっと……やり過ぎですよ、龍夜さん」

彼が動けば、どうしようもなく動きを押さえおけない種類の人間が何人か居る。

姫もその傾向があるが、それよりも厄介なのが　いや、今いな  
い人間の事を考えても仕方がない。

それよりも彼女が気になったのは。

「アレックス氏について、ですなー」

『神明市の領主について、あらゆる情報が欲しい。容姿、経歴、能  
力、趣味嗜好、調査報告、精神鑑定、ありとあらゆる記録。全て。  
全てだ、すぐに寄越せ！！』

果たして、彼のあの依頼は何だったのか。

今回の報告書では、敵を誘導したのはアレックス・キングの定期  
報告から街の集中点を特定、結界を張り、追いつめた、となってい  
た。

無論それでは時間が足りない事から、前回の報告書を提出した直  
後に依頼を出し、それから丸一日かけて結界の構築作業をした、と  
いう体で報告書は出来上がっていた。

可能なのである。

その作業自体もそうだが、アレックス・キングの過去の定期報告  
書を渡すということも。その程度ならば、わざわざ騎士団のプロテ  
クトを破る必要がない。

故に、すべての情報を求めた龍夜の態度が気にかかる。

「……一体何を考えているんですかねー」

不安は尽きない。

窓から空を見上げた。

今日も、穏やかな秋晴れになりそうだった。

四条灯駈は不機嫌だった。

己に対して不甲斐なさを感じていた。

毎朝の定期的ジョギング。

そこで、自分の変化とどうとう向かい合うことになった。

「……………最悪だわ」

頭を振って、くるりと反転。きた道を引き返す。

公園に、足を踏み入れようとした瞬間。

体の芯から凍る恐怖に、体が動かなくなってしまったのだ。

なぜそんな事になったのか、自覚はあった。

昨日帰り道の途中、見知らぬ道に踏み入り、彼女は得体の知れないモノに殺されかけた。いや、殺されるはずだった。

どうして助かったのかはさっぱり理解出来ないが、その恐怖がこびりついて離れない。

なぜその恐怖をこの公園で思い出すのか理解出来ないが。  
とにかく、彼女は恐怖していた。

昨日灯駈が目が覚ますと自分の部屋で。すぐに、あの恐怖を思い出した。

自分がパジャマになっているのに気づいて、そもそもどうやって家に戻ってきたのかがわからず部屋で震えていると、四条式の門下であり住み込みをしている葉鉄が部屋部屋ってきた。

彼女の言葉によると、灯駈は家の近くの公園のベンチで鞆を枕にして眠っていたらしい。

あまりにもよく眠っていたので起こさずに背負って帰ってきたのだといった。

あまりにも普段どおりのその様子に、灯駈は自分が出会ったあの恐怖が夢だったのかと思った。

「あの、葉鉄姉え。あたしの制服……………その……………汚れて、なかった？  
制服？ そうねえ、少し泥が付いていたみたいだから、今洗濯してるわよう」

「う……………ん、そっか」

いつものおっとりとした葉鉄の仕草に、ほっとする。すると、何故か涙が出てきた。

「え……ちょ、あれ……なんでっ」

「どうしたんですか、灯駄ちゃん？」

「え、いや、ちょ、あたしにもわかんなくて、そのっ」

羞恥と戸惑いで真っ赤になる灯駄。それを見ていた葉鉄は、優しく微笑んで、静かに灯駄を胸にだきよせた。

ますます混乱して羞恥で頭の中が真っ白になるが、その暖かさと柔らかさに次第に落ち着いて、涙も収まって。

「……ありがとう、葉鉄姉え」

「いいんですよ。灯駄ちゃんは妹みたいなものですから  
いつもの言葉に妙に安心して。」

思い切り、その暖かさを胸に感じたくて。  
息を大きく吸い込んで。

ちのにおいがした

ああ。そうか、と。

あれが夢ではないと、現実だったのだと、そう、分かってしまった。  
た。

それでも、葉鉄の厚意がありがたかったので、何も気づかぬふりはしたが。

あの恐怖が現実だったとわかって、それでも彼女は安心した。少なくとも自分はアレに一瞬とはいえ対処を試みたのだ、と。

同時に恐怖は際限なかった。あの場で気を失った自分がなぜ生きているかは分からないが、死んで当然の流れだったのだ。あの存在は、それだけの相手なのだ。

「強さは恐怖と共に在れ。父さんはよく言うけどあれはちょっとね

……」  
今でも身が竦みそうになる。それでもこのままではいけないとジヨギングに出たというのに、まさかここでもそれを思い知らされることになるとは。

「……しばらくは、道場で型の練習でもしてるしかないかな」  
強いていつも通りに振る舞いながら、彼女は自宅へと駆け出した。

神葉学園一年八組。

智晴は自分の席で、難しい顔で手帳を見ていた。

「むう……どうにも、集まらないなあ」

彼女はとある人物に対しての情報を集めていた。

彼は彼女に情報収集のイロハを教えてくれた人物だ。その彼が、しばらく姿をみせていない。元々ふらりとどこかへ消えてしまう性質の人ではあったが、こうも連絡が取れないのは彼女としても初めてであった。

そして、今日見がてら彼の情報を集めだしては見たのだが。

「あつちもだめ、こつちもだめ。うーん、夏休みの終わりごろを境に、さつぱり情報がなくなってるな」

死んだか？ などと思うが、彼がそうやすやすとそんな事になるとも思えない。

大型トラックに追突されても平気な顔をしていた人外級である。むしろどうすれば死ぬのか教えてくださいといった感じであった。

「智晴、どうしたの？ なんか悩んでるみたいだけど」

「あつちゃんかあ……うん、ちょっと人探しで。なかなか追跡できなくてにやー」

「……珍しいわね、あなたが見つけれない人なんて」

「どうにも完全に人目を忍んでるみたいなんだよねコレ。なにか悪いことでもしたのかな」

智晴のひとりごとに灯駈が首をかしげる。

「『かな』って……よくわからないのに探しているの？ 珍しいわね」

「うん？ あー、あーあーあー違う違う。これ別に噂の追跡でも誰かに頼まれたわけでもなくてね。」

単純にあちしの師匠がちよい行方がわかんないから、探してるの」「行方不明って……最近物騒だし、ちゃんと警察とかに行ったらほうがいいんじゃないの？」

「けどあの警察嫌いだしなあ」

何してんのよその人、と眉をひそめる灯駈。

実際智晴も彼が何をしているのかはよく知らないが、何かありきたりでないことをしている雰囲気ではあった。

「どんな人なの、それ？」

「うん。そうだね、あっちゃんにも聞いたところかな。」

えとね、名前は『アレックス・キング』ていう、牧師さん。

あっちゃん、知らないかな？」

日が昇りきり、龍夜が目を覚ます。

昨晩は墓を作ったり痕跡を消したりで、結局報告書の仕上がり日が昇るあたりになってしまった。それから仮眠をとって、昼前によく目を覚ました次第だ。

人のいない廃墟に打ち捨てられたソファ。天井をぼーっと見上げて、今後のことを考える。

「ひとまず、アレックス・キングの行方を探るしかないな」

『まあ、本来の依頼もそれだったわけだしな。しかし本当に報告しなくていいのか、龍夜』

「別にいいだろ。依頼はこなす。その結果には特に言い含められていないし」



『お前それ詭弁な』

相手の想定外の部分を付いているのだから当然なのだが。龍夜は気にしない。

結局、自分の思うとおりが出来ればいいだけなのだ。

それがたまたま、人に受け入れられる形になっているだけで。

しかしそれももしかすると、今回の依頼が最後になるかもしれない。今後は騎士団から危険人物として手配され、それ以外の組織からも狙われる事になる可能性もある。

だが。

「それでも、俺の敵が 篠中龍夜の敵が出た以上、やめるわけにはいかない」

『へっ、相変わらず頑固な奴だ』

内ポケットから携帯端末を取り出す。

「アレックス・キングか……ひとまず、腹ごしらえをして町の北へ行こう。」

「どうやらそこで、牧師をしていたらしいからな」

『ああ。了解だ』

体を起こし、刀を竹刀袋に納め、布団替わりに体にかけていたコートを羽織る。

「敵はく楽園騎士団>アレックス・キング。  
やるぞ。」

「どうせ俺たちは落ちこぼれだ。」

「つまり手加減容赦一切無用」

『つまりそいつは』

不敵に笑う。

「いつも通りだ」

『いつも通りだ』

瞳に力を込めて、大きく足を踏み出した。

## エピソード（後書き）

というわけで第一章は終わりです。  
次は第二章。のんびり行きます。

風・彷徨う中（前書き）

プロローグである第一部終了につき。本編開始。

## 風・彷徨う中

なぜ騎士なのか。

なぜ剣を持つのか。

何のために。

誰のために。

というか理由があるのかそれは。

02 - 01：風・彷徨う中

案の定というべきか、痕跡はまるで残っていない。

そもそも最初に調査すべき場所だったはずなのに、これだけ調査が遅れたのはレギオン加賀原南帆が発生し、そちらの解決を優先しなくてはならなかったからだ。

時間を稼がれたのかはたまた単なる偶然か。

さりとて今考えなければならぬのはアレックス・キングの行方である。

龍夜はひとつの可能性を考えている。

アレックス・キングが何かしらの目的を持って、加賀原南帆のレギオン化を放置した可能性を、だ。いや、今ではさらにその先、積極的にそれを促していた可能性すら。

加賀原南帆がレギオンに憑かれ、権天使級>になった。

騎士団では1ヶ月未満での異例の事態だと判断している。無論、

ありのまま』を書き綴った彼の報告書がその認識を植えつけたのだが。

ありえない事態、だとは思わない。

レギオンの生態　生態と言っているのかどうかはそもそも謎だが、とにかくそれを龍夜自身完全に把握しているわけではない。千年以上の先人の積み重ねが『こうだった』という事実として残っているだけであり、根拠はないのだ。

その辺り、飛行機が飛ぶ理屈に似ている。

気の遠くなるほどの繰り返しを経て、共通項を見出し、そうであると定義付けているに過ぎない。

そしてもしも、その千年をひっくり返すような大きな変化がレギオンに起きていたら。

そう考えれば短期間での位階の変遷というのものない、とは言えない。

言えないが、そうだと断言するにはあまりにも弱すぎる。これが2例目、3例目と続くのならば根拠として真剣に考えることも必要であろうが……龍夜は、そちらの可能性を低く見積もった。

あるいは突然変異との考え方もできるが、それよりはまだ可能性の高いものを考えるべきだというのが龍夜の考え方だ。

つまり他の可能性　レギオンの変化を、当然抑制すべき存在がそれを過失か故意により怠っていた、と考えるのが自然だ。

騎士団も本来ならばその考えに至るはずである。

がしかし、それを阻む存在があった。

それが、アレックス・キングである。

彼が残した実績は確かなもので、僅かなレギオンの気配を感じ取り、災害を未然に防ぐ能力を十分に備えていた。事実、彼がここ神明市を領地としてからこれまで……それどころか、それ以前の活動地でも、<大天使級>の発生さえ稀であったのだ。

そんな彼が約二週間前に姿を消した。

そして<権天使級>が現れた。

誰もが当然の帰結として、最悪の事態を想定している段階、だろう。

龍夜は報告書に『ありのまま』を綴った。無論、三奈に不利になる部分はうまく隠してではあるが、必要な事実は曲げていない。

逆を言えば、最低限の必要な事実しか記載しなかった。

彼の私見も意見も何一つ交えていない、今時のニュースでもめつたに見えないような只の事実の羅列。

故に、彼の思惑に気付くものが現れるまで、もうしばらくの間がかかるだろう。

それにしても、本当に何から何まで、違和感がない。

部屋を見回して、そんな感想を抱く。

龍夜は現在、アレックス・キングが拠点としていた教会の調査をしている。

アレックス・キングはこの協会に住み、普段は牧師として生活をしてきた。教会の奥がそのまま居住空間になっているのだ。

近所付き合いは浅く広く、人のよい笑みを絶やさないために、評判は悪くなかったらしい。

しかし日本という土地柄、さほど教会というものに興味を持って普段から見ている人間は少ない。そのため、彼が消息を絶ったタイミングが掴めない状況となっていた。

唯一の目撃情報は、九月に入ってから一件。即ち、加賀原南帆の右腕が、公園で発見されるその日が最後だ。

「……時間軸がしっくりこないな」

『確かに、妙な感じだ』

話の流れを頭の中で整理する。

まず、九月に入ってからアレックス・キングの騎士団への定期報告がなくなる。

定期報告は週に二度。そして、三度目の定期報告がなかったため、龍夜が依頼を受けて神明市に派遣された。

ここまで、一週間経過。

その日の夜、公園で休んでいた龍夜を複数の<天使級>が襲撃。撃退直後、騒ぎを聞きつけた人々が集まり、なぜか加賀原南帆の右腕が見つかる。そして四日後、龍夜は加賀原南帆を討伐。

そうして今日、九月一二日。龍夜はアレックス・キングの痕跡を調査している。

騎士団の依頼が昼過ぎに正式にあつたが、それがなくてもこうしていたらう。騎士団の名前である程度の調査を公的機関に依頼できるのは大きいので早速活用しているが。

ともあれ、アレックス・キングが消息を絶つて約二週間。

しかし、最後に目撃されたのはその後、加賀原南帆の右腕が発見される日。つまり龍夜が夜の公園でレギオンに襲撃を受けたその日。「やはり、何かあるな。アレックス・キング」

『騎士団がやつ存在に違和感を感じるのも時間の問題だろう。調査はさつさと済ませたほうがいいんじゃないか？』

「そりゃ、そうなんだけどな……」

溜息をつく。

部屋は、違和感がなかった。

程々に整頓されており、程々に手入れが行き届いていない部分がある。

生活感そのままに残されており、いかにも、ある日突然失踪しました、と言わんばかりである。

『こうして見ていると、お前の想像は単なる妄想だな。くくくく』

「人が不安になっている最中に余計なこと言ってるんじゃないよ。」

根拠は勘が八割って所なんだ。今感情を刺激されると見落として出てくるだろうが」

『それ根拠って言わねえけどな。まあいい。いずれにせよ、不審は不審だ』



「そうだな。これだけ術式臭いつてのに日常生活の跡がくつきり残ってやがるのは気色悪い限りだ」

術式 この場合は精霊術式をさす。

大気中と自身の内に満ちた精霊という力を用い、現象を操る術を術式と呼ぶ。

術式にはそれこそ数多の流派があり、有名所で言えば陰陽道、修験道、魔道などがあるが、その全てにおいて精霊 流派により呼称は変わる を操る事は一致している。

そのなかでも精霊術式は、主に騎士が扱う術式である。

予め、発生させる現象を固定した符や魔方陣を用い、直接精霊を変質させることで現象を生む。使用できる術式が個人の得手不得手により大きく変わる上に、手札が固定されるものの、威力や速射性、持続性において高い精度を誇るのが特徴だ。

そして、その精霊術式のひとつの極地が着装 鎧の創造である。

教会は術式に満ちていた。

詳しく調査をしなければわからないだろうが、探せばそこかしこに符や魔方陣が見つかることだろう。

「……って言ってるそばから見つかったな」

キッチンのカウンターの小さな花瓶の下に敷かれた布。花瓶をどかして裏返してみると、精緻な魔方陣が描いてあった。

『ほう……見事なもんだな。剣士としても術師としても一流、か。喧嘩売る相手を間違えてるぜ、龍夜』

「腕がいいのは見れば何となく分かるが……それほどなのか、こいつは？」

『いや、この魔方陣単体であるならば単に腕がいい、というだけなんだがな。それを惜しげもなく、こんな所に使ってるのが、な。』

このレベルの魔方陣を量産できるんなら、術式研究者としても一流の腕だと考えて間違いないだろうぜ』

「ああ、そういう事」

術式を魔方陣に転写するには、どうしても人の手でなくてはならない。印刷などでも効果がない、とまではいかないが、はつきり言っただ手製のものの十分の一もその力を発揮できないのだ。

魔方陣の作成には知識と技量が必要になる。術式研究者の技量は、その速さと完成度で判断される。

超技工を駆使した術式ひとつを一年かけて作るものと、実用に耐えるレベルのものを月に百作成するもの、どちらも優秀なのだ。

その観点で言うならば、アレックス・キングは、超技工と言えずとも十分に匠の技を持っており、さらにそれを量産できる研究者ということになる。

総合的に見て非常に優秀だと言える。

「なんていうか、もうチートレベルだな」

「そうだな、俺たちとは段違いだ。が、まあ、それだけに、妙な話ではあるな」

「ああ。」

これだけの術式を敷地内にばらまいて……まるで、何かに怯えているみたいだ。

はつきり言っただ俺がここを攻めろっただ言われたらケツまくっただげるレベルだぞ。ほとんど城塞じゃねえか」

それでいて、定期報告には何一つ、異変が報告されていない。

こんなに明白に、この場所は異変を訴えているというのに。

「色んなことがズレている感じがするな。ワケわかんねえ」

時間の許すかぎり徹底的に調査すべきか。そんな事を考えていると、玄関の方で音がした。

「なんだ、客かあ？」

「さてな。とりあえず黙ってるよ、サマエル」

「承知、承知」

リビングを抜け、玄関へと向かう。そこには学生服姿の少女がいた。

彼女も、部屋の奥から現れた龍夜に戸惑っている様子だった。

「……ええと、俺は」

「うーわああちしの純潔もここまでかあ!!!」

「ぶん殴っていいか」

初対面から性犯罪者扱いされかけて若干キレかける龍夜。怒りの沸点はそれなりに低い。

「あー。スミマセン冗談です。人がいると思ってなかったんで驚いて思わず巫山戯てしまいました」

「……………えー」

どうしよう、この人怖い。そんな感想を抱く龍夜。

目の前の少女は驚いたと言うわりに、すでに自然体を感じさせていた。

端的に、龍夜は目の前の少女に気圧されていた。

「……こほん。俺は、ここの家主の、アレックス・キングに用があつて来た」

気をとりなおして、ひとまず自分の事情を伝える。

「え、師匠に？ ていうか師匠に知り合いなんていたんだ？」

「は。師匠？」

なんだそれは、と眉をひそめる。

「ええまあちよつとした。」

それで、そちらは師匠に用事が……でも師匠、最近割といい具合に消息不明ですよ？」

「知ってるよ。それで、行方を探せって言われてるんだ。あいつの上司に言われてな」

「ほあー。ってことは教会の人ですかー。それにしても滅茶苦茶悪人っぽいですねー!!」

俺はこの娘に対して何か悪事を働いただろうか、と本気で心配になる龍夜。無論、これが彼女の 湊智晴の素なのだが。

「実はあちしもずっと師匠を探してるんですよー。何か知っていたら教えて欲しかったりするのですが」

首を傾げる智晴に、龍夜はしばし考える。

正直彼女がアレックス・キングにつながる重大な情報を持っている可能性は低いだろう。

だが、何かしらヒントになる話を知っている可能性は否定出来ない。

しかし同時に、こちらも嘘を付くことができない相手でもある。

師匠、と呼んでいるということはそれなりに深い付き合いがあった可能性があるからだ。下手な嘘は不審を招きかねない。

(いや、というか師匠ってなんだよ、師匠って)

<楽園騎士団>において師弟関係というものは、ないわけではない。彼女がそんなはずはない。この街にいた騎士は、アレックス・キングただ一人。過去の報告書にもしつかりとそう記載されている。(まあその報告書を疑っている俺がそれを根拠にするってのも変な話だが)

目の前の少女は騎士だろうか、違うのだろうか。

様々な可能性と取るべき対処を思い浮かべ………決断。

「わかった。ひとまず、中へ入ってくれ」

「勝手に使っていいんすか？」

「ここの所有者はあくまでアレックス・キング個人じゃなくて所属組織だからな。許可は俺がもらってる」

「なるほど。それでは失礼を……」

靴を脱いで足を踏み出した少女がその場で固まった。どうしたのだろうと龍夜が見ていると、少女は若干マジに不安げな表情を見せて、

「あのー。ガチで襲うの勘弁ですよ？」

「口調を丁寧に行けるんなら頭ん中も丁寧に対応しやがれ」  
さすがにキレた。

何者かが居住区にいることは分かっていた。

その何者かがアレックス・キングではないことも、わかっていた。居住区の音は教会内の数力所の壁をずらすことで確認できるし、入り口の侵入者察知用の罨は綺麗にそのままだった。

智晴とアレックスの間の取り決めで、罨は入るたびに二つのパターンを交互に切り替える事になっていたのだ。

しかし居住区に入り込んだ人物は罨に気づきながら、それをもとに戻してしまった。それは、アレックスとの取決めに反するがゆえに、アレックスではない。

迷いはあったが、手がかりでもある。

意を決して踏み込んだ智晴の前に、その人物は普通に姿を現した。驚いたのはそれ故だ。てつきり、隠れたり襲ってくるものと考えていたのだから。

多少、信用してもよいか、と考えたが、それをすぐに改めた。

一人しかいない。

話し声は、複数だった。

だが現れた男は『俺』という一人称しか使わない上に、他に誰かがいることも言わない。

そのうえ全身黒づくめで怪しい事この上ない。

(失敗したかなー。うーん、でもにゃー)

その男は先ほどキッチンに向かってから戻ってこない。

(これで包丁とか取り出してきたら本当にどうしようかなー)

危機感と冒険心の入り混じる感想を抱く。

彼女には特別な力など何も無い。

智晴とアレックス・キングの関係は、情報収集のちょっとしたコツを教わり、その見返りに多少の家事をしていた、という程度のものだ。

危険を侵し、命をかけてまで探さなければならぬという程の理由はない。別に色っぽい感情があるわけでもない。

ただ、父親のように接してくれた相手がなぜ自分の知らぬ間に消えてしまったのか。その納得のいく理由が欲しいのだ。

考えていると、男が戻ってきた。お盆に、紅茶を載せている。カップは二つ。やはり、話していたもう一人は出てこないらしい。

（まあ、警戒されてるって事なのかもねー）

差し出された紅茶をしばらく見つめて、一口飲む。

「あ、うま」

「ずいぶんと上等なヤツが使いかけで残ってたんでな。せっかくだし、使わせてもらった」

「はあ……」

使いかけ、ということは既に封は空いていたのだろう。

が、今までにここに来たときにこんなにかい紅茶は飲んだことがなかった。出されなかっただけなのか、単に入れ方の問題なのか

「ま、いつか。ええと、それじゃ、なにかから話しましょう？」

「そう……だな。とりあえず、俺が知っていることから話そう」

その申し出は少々以外ではあったが、同時に自分が相手を疑っている事を見透かされているのだと理解した。

つまるところ、先に手の内を晒すことである程度の信用を得ようとしているのだろう。

（んー、こりゃちゃんと相手しないと大変かなー）

適当にこの場を濁した場合、今後まともな対応を取ってもらえなくなるだろう。

彼は今、彼にできる範囲でこちらに誠意を持って対応している。

それを蔑ろにできるような人間……あるいはそもそも理解出来ないような人間など、関係を形作るほうが有害である。

目の前の男は、そう判断するタイプの人間だ。

だから智晴も彼に誠意を持ってい応じることを決める。

無論、手札の全ては晒せない。そもそもそう多くはないのだし。

嘘は言わない。偽りはしない。

二人の互いの情報を突き合わせてみたものの、さして目あたらしい情報は見つからなかった。

「ふむーん。まあ、こんなもんでしょうねえ」

そううまくはいかない、と多少の落胆を声に混ぜる智晴。

向かい合う男は、なにやら難しい表情をしている。

「……………？ 何か気づいたことでも？」

「ん、ああいや、そうじゃなくて。なんていうか正直、驚いた。

俺は一応アレックス・キングの上部組織から情報を貰っているし、ある程度の情報網とか公的機関の情報とか、その辺の情報も見られるんだが……………君の情報は正確だった。それを個人で集めたというなら、正直舌を巻く」

「そりゃまああ、あちしの趣味、ですからねー」

「趣味……………で済むレベルか？」

「済みますよう。」

ていうか、趣味だからこそ無意味に無駄に、極限まで突き詰められるんじゃないすか？

仕事とか役割とかならそれをこなせるレベルにあればいいんだろ  
うけど、趣味ってそうじゃないっしょ？」

「……………なるほど。至言だな」

苦笑する男。

「ま、師匠の言葉なんすけどね」

智晴も、苦笑で答えた。

「にしても本当、どこいつちゃったんかねー、あの人は」

「こういう風に姿を消すことはよくあるのか？」

「んーまあ二、三日ふらっと居なくなったりはたまにしていたけど、二週間って言うのはさすがに。まあ、あちしも週に多くて二三回くらいしか来ないんだけどね」

「ふむ……………やっぱり何か別の方向から探していくしかないか」

「アテは？」

智晴の言葉に無言で両得手を挙げる男。

まあ、ある程度の時間が在ればできることはたいてい終わっているだろう。

これから先は発送の転換か、状況が一気に変わるのを待つか、そういつた話になってくる。

「……ところで、時間はいいのか。もう日も落ちてるみたいだが」

「お。ああー。そうだね、そろそろ帰らないと。あっちゃんにも心配されたし。」

あ、あっちゃんて言うのはあちしの親友で。愛しき人で、うん、可愛くて可愛くて、可愛いんだよね。ぶっちゃけ食べてえ」

目の前の男が何故か精神的に距離を取る。

なぜだろうか。灯駈に対する情熱をほんの僅か披露してみたただけだというのに。

「ええと……まあ、なんだ。そうか。うん。」

俺はもうしばらくここで時間を潰すが、帰りには気をつけるよ。まだ物騒だからな」

「、あいあいつと了解しました。それじゃああちしはこれで帰ります」

智晴は席を立つ。

男も続いて席を立ち、揃って玄関へと向かう。靴を履き、扉を開いたところで。

「あ。そういえば、連絡先……ていうか名前、聞いてなかったですね」

根本的に大事なところを思い出した。

意図的に避けていた部分を、最後の最後で突かれて、思わず口を閉ざす。



表情はうまく隠せた。しかし思考が止まった際に会話は続く。

「あちしは神葉学園一年の湊智晴って言います」

「……ああ、そうか。その制服どこかで見たと思ったら」  
むしろ、最近よく見ていた制服だ。

なぜ今まで気づかなかったのかと自分自身に大いに呆れる。

「俺は……」

言葉を区切り。

「龍夜、だ」

続ける言葉を選び。

「東雲龍夜」  
しのめ たつや

その瞬間、龍夜の体の内で劇的な変化が起こる。それを忌々しく思うもののやはり表情には出さず、少女　湊智晴へと携帯端末を差し出す。

互いの連絡先を赤外線で交換し、今度こそ出ようとした少女に、

龍夜はなんとなく気になったことを尋ねてみた。

「なあ。気を悪くしないで欲しいんだが……その変な一人称、何なんだ？」

「え？　ああ、キャラ付けっすよキャラ付け。」

もう、周りの知り合いがキャラ濃いのはわかりでしてねー。こうでもしないと埋もれちゃうんですよ」

龍夜は。

なんかこう色々と納得がいかないものを感じたが。

まあさておいて、智晴を見送った。

「……神葉学園は魔窟か？」

四条式に情報収集のエキスパート。しかも今の少女は、若干表情が年齢制限に引っかかりそうな瞬間までであった。

「それが埋もれる……だと……なんだそれは、人間の住む世界なのか？」

『俺達の知っている世界は、まだまだ小せえって事なのかもな……』  
さすがのサマエルも声に驚愕が滲んでいた。

首をひねりながら、奥の部屋に戻る。

とりあえず今一度情報の整理をして……その後、街に出る必要があるだろう。

今朝方、騎士団からアレックス・キングが領主として行っていた活動を可能な範囲で対応するよう求められた。

次の領主が決定するまでのつなぎだろう。

龍夜にはそんな広範囲をカバーできる力はない。

ともかく依頼を受けた以上は対応しなくてはならない。レギオンの発生を抑え、既にレギオンに侵されている人物がいれば、レギオンを除去できるのであればそうする必要があり、それが既にできないレベルであるのなら、しかるべき対応が必要になる。

「……つうか、これでアレックス・キングの捜査もしろってのはどう考えても俺のキャパ超えてんだがなあ」

『仕方ねえさ。じっくり腰をすえてやるしかねえだろうよ』

「まあ、そうだな」

ため息を付いて、残った紅茶を飲み干した。

突きだした拳から汗が散る。

交互に左右の拳を突き出す。規則正しいリズムで、正確な動作で物心付く前から繰り返し返してきた動作だ。

ただそれを、無心に繰り返し返す。

己の中の恐怖を忘れさらんとするように。

それでも。

「っ」

乱れた。

拳を下ろす。

「……ダメね。ダメすぎるわ」

あまりにも予想通りの結果に落胆すら沸かない。

ここは四条式の道場。

姿は灯駈ただひとり。

薄暗い明かりの中、ジャージ姿でぽつんと佇む姿は、儂く、力弱い印象を与える。

事実、彼女は弱っていた。

どうしても振り払えない恐怖とどう向き合うべきか、考えても考えてもわからないのだ。

体を動かせば少しはましになるかとも考えたが……逆に、あの時の恐怖を思い出す結果になった。

死、というものを、かつてないほどに意識した瞬間。

生、というものが、燃え上がり輝きを放った一刹那。

極限という経験が、彼女を混乱の底に叩き落とした。

途方に暮れていると、道場の隅から軽快な音楽な鳴り響いた。

携帯電話だ。しかも、この着信音は智晴からのものである。

「もしもし、智晴？」

「やつほうあつちゃん、元気かなー？」

「あなたほどではないけれど、程々に元気よ。」

「それで、アレックスさんは見つかったの？」

「いやあ、やつぱり帰ってないみたいだったね」

「そう……」

智晴は帰り際に師匠　アレックス・キングを探しに、ひとまず住んでいる家まで行くと言っていた。

やはり見つからなかったらしい。

「何か、変わりはない？」

「特に何も。ああでも、なんかめちゃくちや変な人が居たよ」

「大抵の人はあなたに変だと言われたら首括りかねないから、あま

り口にしないほうがいいと思うわよ」「

反射的に言葉が出た。

「うっひゃあ相変わらず冗談キツついなああっちゃんは！」

いや冗談でなく。

限りなくマジで。

言っても通じないだろうから言わないが。

「その変な人ってどんな人なの？」

「えっとねー。なんか信用しちゃダメだけど信頼してもよさそうな感じ」

「や、意味わからないから」

「だってそんな感じなんだっし。」

だって全身黒ずくめの男の人で眼つきが明らかに放送禁止レベルなんだよー。

ありゃ絶対変な人だってば」

「……………ねえ、智晴。その人の話、ちょっと聞かせて欲しいんだけど」

風・彷徨う中（後書き）

術式とこれからの話。

順調に外堀を埋められていく龍夜。

最初に殻を破るのは誰なのか。

## 光・翳るいま

02 - 02:光・翳るいま

夜の街。

ビルの谷間。

銀光が夜を抉る。

突き出された剣先が黒い体を突き破る。手首を捻り、横に斬り払う。

「ろくげ・べ！」

奇怪な断末魔を上げる<天使級>レギオンを葬り去る。

蹴り飛ばした体はそのまま黒い霧となって消える。

それを最後まで見届けることなく、刀を逆手に持ち替え、背後に突き出す。

鈍い手心えと共に、また一体、レギオンを葬った。

「どんだけ沸いてんだよっ」

悪態をつく籠夜。そうなるのも仕方のない状況だった。

なにしろ彼を囲むのはおよそ三十体にも及ぶ<天使級>達。

「これでもう四日目だ。何がどうなればこんな愉快な事になるってんだ？」

『さあて、俺としてはお前の実力が足りていないってのが理想的な回答だな』

「足りてねえのは事実だろうけどそれだけでこんなになるんならとっの昔に死んでるってえー……のっ」

膝蹴りから踵落とし。ぐしゃりと頭蓋を砕き念入りに踏み潰す。

背後から襲ってきた腕を斬り上げで断ち、懐に踏み込んで首を落とす。残った体を蹴り、ビルの壁面に向かって飛んだ。

壁に張り付いていたレギオンの頭頂から股間までを真つ二つに斬

り分け、壁を蹴る。蹴る。蹴る。

三角飛びの要領で屋上へと登る。

「ふう……ま、こうなってるよな」

屋上には、となりのビルの上も含めてさらに多くのレギオンが溢れていた。

下からも、次々にレギオンが登ってくる。

総勢百体とまではいかないだろうが、それに迫る数だ。

『はっはあっ！ さすがに壮観だな、こいつは。さて、死ぬかな？』  
「かもな」

溜息をつく。幸せが逃げていくと言うが、果たして逃げていくほどの幸せがここにあるのかどうにも疑問だ。

死ぬつもりはないが。

刀を腰だめに構える。気を送り込まれた刃が、白く輝き涼やかな響きを奏でる。

その音に、レギオン達がたじろいだ。刹那を狙い、体の回転を使い刃を大きく横に振るう。

暴風が木をなぎ倒すように五体のレギオンを斬り裂き、吹き飛ばし、砕く。

「おおおおおおあああああ！」

気合いと共に燃え上がる気を刃に纏わせた突きから放つ。刃から放たれた螺旋の輝きがさらなるレギオンを葬る。

月光の中、黒い悪魔よりなお深い夜色の黒衣が疾風のごとく駆け抜け、次々に敵を葬り去る。

が、同類の末路など意にも介さない欲望の使徒達は腕を、足を、頭を、体を凶器と化し怒涛の勢いで龍夜に襲いかかる。数に任せた圧倒的な物量戦。

いかに超常の力を操るといえど振るうのはあくまで一個人。処理できる情報も手数も限界がいずれ訪れる。

龍夜はジリジリと追い込まれていった。

『龍夜、そろそろビルの端だ』

「余裕に構えてる暇があるのなら少しは手伝え！」

『無理だつて。連日連夜の戦闘でこっちももう力が残ってないんだ。これ以上使えばお前が死ぬぞ』

分かりきっていた回答に口の端を歪める。

その時、死角から白骨うごめく触手が襲いかかってきた。かろうじて刃を寝かせて受ける。

しかしその隙について黒い牙が群れをなして龍夜の胸に喰らいつく。

「が……っ、はっ……！！！」

牙の首をまとめて叩つ斬る。

傷口が燃えるような痛みを訴え。

目の前が夜の闇よりも暗くなり。

足元がふらついて。

浮遊感。

足を踏み外したのだと、コンクリートが目の前に広がってようやく気づいた。

東雲龍夜という名前が、嫌に頭の中にこびりついて離れなかった。ぼうつと席に座っていると、ふとした拍子にその名前が頭の中に浮かび上がる。

「あっちゃんあっちゃんもしかしてそいつは、恋ってやつかい……？」

「智晴、あなたね……」

ハードボイルドを装うような声の智晴に、灯駈は呆れた。

「はいはい。そうですねそうですねよ」



「やん。もつと構ってよう……まあマジだったらあの野郎ただじゃおかねえけど」

「？ 智晴、なにか言った？」

「んーん、べつにー？」

その一瞬の智晴の表情を見ていたクラスメイトは後に語る。あれはすでに一人や二人殺っている眼だったと。

「で、あっちゃんは何でそんなにあの人が気になるの？」

「気になるって言うか……」

言葉を一旦切り、自分の中で考えをまとめる。

「もしかしたら、一度見たことがあるかもしれないから。それでちよつと」

「そうなの？ どこで？」

「北泉公園。腕が見つかる夜に、ね」

思い返すのは暗い公園のベンチに座り、身じろぎ一つせずうつむいた姿だ。

そして　しっかりと抱えこんだ、細長い袋。竹刀袋。中身はなんだったのだろうか。

「……あんまり信用しないようがいいかも、その人」

「それは大丈夫だよ。言ったでしょ、信用できないけど信頼はできるって」

胸をはる智晴だが、言葉の意味がよくわからずに首を傾げる。

「この前もそんな事言っていたけど……結局それ、どついう意味なの？」

「ええつと……なんとなく、って感じなんだけど。言ってることを信じるのはダメだけど助けを求めたら助けてくれそうな、そんな感じ」

言葉を飲み込み、咀嚼し。

そして出てきた結論は別の言葉になっていた。

「それってつまり只のお人好しじゃないの？」

「あー。それだ」

智晴が得心がいったとばかりに頷く。

灯駆はそれを見て頭痛を覚えて頭を抱えた。

「そうやって油断していると、また危ないことに巻き込まれるわよ？」

「そうは言っても性分だからねー。意識してどうこうなるものでもないんです」

それはまあ。そのとおり。

灯駆も、自分の好奇心で痛い目を見て、今もそれを引きずっている。いや、引きずられているのか。

「とにかく気をつけなさいよ……あれから何も無いけど、まだ腕の犯人だつて見つかつていないんだから」

その灯駆の言葉に、智晴は例えがたい感情を顔に載せた。

「なに？　どうかしたの？」

「いやあなんといいいますかなあ。これも勘つていうか、本当に根拠のない、揚げ足取りみたいなものなんだけどにやー」

腕を組んでくるくと回り始める。

数回転してぴたり、とこちらを向いて停止する。

「腕の犯人も、腕の持ち主も、もう出てこないかもしれない」

「……………どうして？」

頭の何処かで答えを予想しながら。予感しながら。

「『まだ』危ないって。ある人が言ってたんだよねー」

言葉の意味を考えるのなら『まだ』という言葉には区切りを付ける意味がある。何かが終わわり、しかし、完結してはいない。

故にその人物は『まだ』という言葉を使ったのだ。

この場合、完結していかないものとはなにか。区切ったものはなにか。危険とはなんなのか。

単純に考えれば、この数日間この街を賑わしている不穏な噂に思い至るのは必至。

失言というほどのものではないが、明らかな失点ではある。

たははー、と乾いた笑い声は虚しく。

まったく、というため息は重く。

居心地の悪い空気が生まれる。それを断ち切るように、校内放送のチャイムが鳴り響いた。

放送の中身は、間近に迫った生徒会役員選挙の演説だった。それを聞いた智晴の表情に陰が墮ちる。

「智晴？ どうしたの？」

「あー……うん。もし本当に、腕の持ち主も、犯人も見つからないなら、この人にとっても辛い事になるかなって思ってた」

現在演説を行っているのは、会長に立候補している葛籠雪杜つづらゆきとだった。

「……どういう事？」

「この人、加賀原先輩の事、好きだったんだって」

再び重くなった空気に押しつぶされるように。

二人揃って、胸から空気を吐き出した。

四肢が鉛で出来ているようで、それでいて、奇妙な浮遊感に包まれて。

そんな不思議な感覚の中、龍夜は夢を見ていた。

まだ東雲でも篠中でもない、いつかの日々。

龍夜の人生において最も短い平穏だった時間。

心を許せる人に囲まれて、当然のように幸せを享受し。

「……まったく」

強引に目を覚ます。

強制的な覚醒は頭に鈍痛を伴った。光が目を刺し、顔をしかめる。気怠さと爽快感の相反する感覚が体をじつとりと包み、思考が目の前の情報を処理できずにただ呆然と天井を見上げていた。

随分と久しぶりに、深い眠りについていたらしい。

「ここ数日、まともに寝ることも出来なかったからな」

教会で湊智晴と会話をしたその後数日は、いたって穏やかな夜だった。

が、四日前を境に状況は急変した。毎夜毎夜、おびただしい数の天使級>レギオンが発生したのだ。

「そして……なんで俺は、生きてるんだ？」

起き上がりかけて、腹の激痛がそれを妨げる。悲鳴はどうか押さえ込んだが、全身をどつと嫌な汗が流れた。

一度落ち着いて、自分の状況を確認する。

まず、自分は生きている。まあ、ここが死後の世界でなければ、だが。

ベッドに寝かされており、周りは白いカーテンで囲まれている。カーテンの隙間から差し込む光がまぶしかった。

軽く腹の傷に触れてみると、それはほとんど癒えかけの状態だった。

「……かなり深くいった感触があったんだがな。

というか、これはどういう状態だ？」

ベッドに仰向けのままため息をついて、違和感。

胸に直接何かが貼り付けてあるようだった。触れてみると、さらにとした手触り。紙のようだった。剥がして見る。

長さ十五センチメートルほどの紙に、複雑な文字が墨で大きく書き込まれていた。なんて書いてあるのかは読めないが、そこにこめられたものは感じる事ができた。

すなわち、精霊の気配。

紙からはうつすらと精霊の気配を感じることができた。正確には、精霊を用いた術式の気配を。

文字を指でなぞる。

悪質な気配はしない。

「生命力回復……気力回復……いや、精霊供給か？」

流派も、よくわからないな……門倉式の陰陽術の名残があるが土御門のパターンが出ているし。

俺の知らない間に派閥の統合でも起きたのか？」

頭を悩ませていると、なにやら大きな音が鳴り響く。

ぴんぽんぽんぽーん。

あまりにも聞きなれた、それでも龍夜からして見せると、どこかなじみのないリズム。

『続いて、生徒会長候補、竜胆棗さんの演説です』

そんな声の後に、凜とした少女の声が小難しい話を凜とした声に載せて語りだす。声は、見上げた先のスピーカーから聞こえていた。

「……いや、ちょっと待て」

ありえない事態。

まさか、ありえない。そう思うものの、今の状況で自分がいる場所がそうであるという確信は揺らがない。

「ここ、学校か！ どののだ？」

なぜ、どうして。そんな彼の疑問に答えるように、ガラリ、と扉の開く音が聞こえた。

「ん。ああ、目が覚めたのか」

入ってきたのは男らしかった。声が若い。おそらく生徒なのだろうとあたりをつける。

足音はまっすぐにこちらへ向かってきており迷いはない。

ということは、龍夜をここへ運んだのはこの男なのか。いったいなぜ。何が目的で。

疑問を胸の中に押し込め、体に力を漲らせる。

体調は万全ではない。腹の傷も、無理な動きをすればすぐさばばっくなりいくだろう。

しかしそれでも、備えは必要だった。

緊張を押し殺す。

やってきた男がカーテンを引いた。

男　やはり少年だった。

怜悯な印象を持った痩身で背が高く、めがねをかけていた。

少年は龍夜の様子さっと視線で確認し、腕を組んで感心したようにうなずく。

「ふむ……顔色は、悪くない。昨晩はどうなるかと思ったが、やはり騎士は体の鍛え方が違うな」

「なに？」

「安心してくれ……と言っても、なかなか難しそうだな。

ひとまずだ。君の身柄の安全は保証する。疑問があれば答えよう。無論、授業に支障の出ない範囲ではなるがな」

そういつて彼は笑う。人好きのする笑顔だった。

「その発言の根拠は？」

「ない。が、君を保護し、手当てをした。さらには拘束もせずここに一人にしておいた。

このあたりを加味して判断してもらえると助かる」

つまり最低、現状では、敵対の意思はないと言うこと。

「なるほど。言いたいことはわかった。

が、そうなつてくると余計に気になるな。

なぜ俺に対してここまでのことをする？ 勝手に見せてもらった

が、この符、そこいらにあるレベルのものじゃないな」

ひらひらと術符をかざす龍夜の言葉に、少年は感心の表情を浮かべる。

「ほう。騎士だというのにわかるのか、そいつが」

「俺は騎士としては二流以下だね。おかげで余計な知識にも色々手を出してんだよ。

で、こいつだ。

流派はわからんが、こういった符の作成には紙と墨汁の『質』が重要になってくる。正しくは紙と墨汁に含まれる精霊の配分だな」

「そつだ。

精霊の性質、とでも言うのかな。別の物体に練りこんだ精霊は、互いに反発する性質を持つ。

紙と墨に精霊を練りこめばそれらは反発し、紙に書いた文字はすぐに消えてしまうが　字を書く際に、筆から精霊を送り込み、精霊同士を焼き付けることで固着させることができる。それも、強靱にだ。

刀の製法と同じ、と考えればわかりやすいな。

強く大量の力を込めた紙と筆を用意すれば、それだけ強い符を創ることができる。もっとも、筆に込めなくてはならない精霊も並大抵ではなくなるが。

こうして作った符は大量の精霊が封じられており、強力な術式を扱うには強力な符を用意する、と言うのがまあ土御門のセオリーだな

「土御門、か」

「ああ。とはいえ傍流も傍流。その上破門を受けているがな」

少年の言葉になにやら物騒な響きを感じる。しかし少年は龍夜の訝しげな表情を黙殺する。

無言。

先に口を開いたのは龍夜だった。

「まあいい。助けてもらったのなら恩に着る。

で、何で助けた」

鋭い視線で相手を射抜く。

「ふむ……その前に、状況説明からいいかな。

まず俺の名は葛籠雪杜。ここ、神葉学園の二年生だ……うん、どうした、頭を抱えて」

「いや……続けてくれ」

龍夜の感想。また神葉学園かよ。

「そうか、それでは続けよう。

そもその始まりは、俺が君の観察を始めたのがきっかけだ」

雪杜は前々から龍夜の存在……というより、騎士団の所属しない騎士についてはある程度情報を把握していたらしい。

自分と同じようなはぐれもの達に興味があったと言うのだ。

龍夜もそんななかの一人だった。

普通ならそれだけだったのだが、ある日、勘当された実家筋からこの街で<権天使級>が討伐され、しかもそれを討伐したのが流れ者にして変わり者、そして落ち零れと呼ばれる騎士だったという。

それに興味を抱いた雪杜は、龍夜を探し始めたのだと言う。

といつても、さほど苦労はしなかった。

騎士の務めとして、街でレギオンの発生しやすいポイントを淨化しに巡回するのはわかりきっている。

ゆえに、そういったポイントで待ち伏せていれば必ず相手は姿を現す。

幸いにも一日目にして相手を捕捉。

三十体のレギオンを相手に漆黒の鎧をまとい戦う姿がそこにはあった。

しかし。

「状況が判断できなくてね。出るに出不れなかったんだ。

あの大量のレギオンは、いったいなんだ。どこから湧いてくる。

本家の連中は<権天使級>へのシフトの早さや黒い鎧という点ばかりに気が行っているらしいが……焦点はそこではないだろうに」

「術式家系は研究者としての色が強い連中が多いからな。それも致し方なしと行ったところだろう。」

まったく逆の騎士団も似たような状況なのは頭が痛い。

まあ連中は物事の始まりが<最悪の事態>であることが多いからな。未然に防ぐための手の打ち方が下手なんだ」

互いにそれぞれの不満を口にする。

「まあ、悪口を言っても仕方がない。

とはいえ状況の説明はほほこまでだ。

あとは昨晚、君が百体近いレギオンに囲まれ、ビルから落下し、僕がそれを寸でのところで受け止めたと言うわけだ」

「レギオンどもは、どうなった？」

「どうもこうも」



肩をすくめる雪杜。

「消えたよ。君が落ちたのを確認してすぐにね」

「そう、か」

異常事態。

またしても異常事態である。

レギオンが、個人を組織だつて攻撃する。

今までに例を見ない事態だ。

「単純に気のせい、あるいは偶然、と言った可能性は 希望的観測か」

「ああ。僕もそう思う。」

さあそこで、僕の目的に移ろうか。

君はいつたい何者だ。なぜ、あんなことになっている」

「知らん。俺が知りたいぐらいだ」

雪杜は冷然と。

龍夜は苛烈に。

互いに視線をぶつけ合う。

双方自ら視線をそらすのは負けだと言わんばかりに、睨み合う。

先に視線をそらしたのは雪杜だった。

「そうか。ともあれ、君が怪我をしたのが昨晚。傷はその場ですぐ

に癒したがあくまで応急手当だ。しばらくまともに動けないだろう。

ひとまず傷を癒すといい。

この状況、僕個人としても興味がある。

ああそれから、ここの養護教諭も術師だ。刀も彼女に預かっても

らっている」

そう言い残して、雪杜はその場を後にした。

それを見送ってから龍夜は上半身を起こす。

動けないことは、ないだろう。

が、今無理をすれば次こそ命を落とす。

「……百体ごときで、これか」

ため息をつく。

百対一という戦力差は一見絶大に見えるが、騎士であるのならはその程度の数、と言う言葉の元に斬り捨てることができる数だ。それができないのは、ひとえに龍夜の騎士としての力不足であった。

『いやいや、お前の場合は向き不向きも関係してるだろ。物量戦つてのはお前にとっては最悪の戦法だ。』

有効過ぎて嫌味なくらいにな』

「サマエル。起きてたのか」  
姿なき声に安堵する。

いるのはわかっていたが、その状態までは判断できていなかった。『ああ。今の野郎の符が効いたみたいだな。おかげで状態は万全だ。これなら、お前の怪我也明日中には治るだろうぜ』

「そうか。それはよかったが……やっぱり、今の状態は無理があるな」

『そうだなあ……わかりきってたことだがな。とはいえ今すぐに『器』を用意できるあてはないんだし、割り切っていくしかねーだろ』  
「だな。」

ひとまず、休むとしようか」  
ゆっくりと体を横たえる。目を閉じると、すぐに睡魔が襲ってきた。

薄れ行く意識の中、最後に龍夜が考えたことは。

(……そついや、騎士団に定期報告、してねえなあ)  
そんなことだった。

雪杜は廊下で立ち止まり、保健室を振り返る。

彼はどうするだろうか。ふと考えた。

逃げると言ったことはないだろう。話してみてわかった。あれは、

状況を最大限利用し尽くすタイプの人間だ。自分と似たタイプと言ってもよい。

そういった手合いはまともに相手をするだけ無駄だが、行く先もわかりやすい。

騎士としての職務がある以上、無理は避け、実利を取るはずだ。

「後は適当に理由をかこつけてついて回ればいい。

そうだ。

見極めさせてもらうぞ、東雲龍夜」

懐から一枚の資料を取り出し、くしゃりと握りつぶす。

その瞳には、まぎれもない殺意がにじんでいた。

レギオンは夜行性だが、何も夜しか活動しないというわけではない。

低位のものは活動範囲も活動時間も限られてくるが、高位のものになるごとにその制限は小さくなる。

騎士団の記録にも数体しか残されていない<熾天使級>は何の制約もなく思うがまま、望むがままにその暴威をまき散らしたとされている。

富士樹海。情念渦巻くこの森はこの国の騎士にとって最も危険な土地の一つである。

「<力天使級>三体、<大天使級>を多数引き連れて方向を北へ修正。どうやらこちらに気づいたようです。速度は秒速四十メートル。十七秒後に烈華、翠風両騎士交戦を開始します。戦闘開始確認後、残り二名も待機場所から現場へ直行、奇襲をかけます」

手元の端末に次々に送られてくる情報を即座に整理し、状況を告げる三奈。

彼女の隣には、暗い森の中であってなお白い姫の姿。

二人は敵の迫る前線からさらに三百メートルほど離れた位置で、さらに数名の護衛（彼らは騎士ではないが）とともに待機していた。

三奈は情報の収集、集約を担当。姫は作戦指揮及び切り札としてここにいる。

<力天使級>三体相手に騎士四人は戦力としては足りているが、万全とは言いがたい。対処を間違えば最悪の結果になりかねない。

「本当はあと二人……<力天使級>の倍の数は用意したかったのですが」

「仕方ないですよ姫様。今はむしろこの状況で四人集まったことを喜ぶべきかと」

「相も変わらず人手不足は深刻ですね」  
肩をすくめる。

プレッシャーは一瞬毎に大きくなってきている。森の奥の奥に得体の知れない存在を感じる。

もはや三奈からの報告を聞くまでもなく、その瞬間の訪れを肌で感じる。

そして。

「戦闘 開始」

三奈の言葉と同時に、森の奥で閃光が生まれ、上空に向けて巨大な火柱が立ち上る。

離れていても肌を焼くほどの熱風が吹きつけ、草木を激しく揺らした。

「遭遇の第一撃で<大天使級>の大半は消滅。残りは散り散りに逃げているようです。どうしますか、姫様？」

「ここで放っておけば後々都会へ出てくることは目に見えています。被害が出るのが分かっている見逃す必要はありません。術師に対応させてください」

「了解です。皆さん、お願いします。一班は西へ、二班と三班は東へ。南へはアリカへ行ってもらうことにします」

「天隙騎士ですね。確かに適任でしょう」

三奈の提案はそのまま受け入れられ、待機していた術師達が一斉に森の中へと走り去る。

その場に残るのは姫と三奈ただ二人になる。

「とはいえ<力天使級>に対しての攻撃力不足はやはり否めません。

術師たちを向かわせなくて大丈夫でしょうか？」

「三奈のいう事はもつともです。けれど防御力において不安がある以上、前線へ出すことは出来ません」

姫はきっぱりと言いつつ切った。

レギオンと戦いになる以上死の危険は常に付きまとうものだが、相手が中級の<力天使級>と下級の<大天使級>ではそのレベルは段違いになる。

その上レギオンに対して圧倒的防御力を誇る騎士と生身を曝け出さねばならない術師とではそもそもの防御力自体に天と地の差がある。

適正で言えば、姫の発言は正しい。

しかしそれは戦力が十分に整っているからこそいえる事。

いくら鉄壁を誇ろうと攻撃が続けばダメージは重なる。決定打がないまま長期戦になり不利になるのは常に人間。

そして決着をつけるには、騎士四人の攻撃力では心もとないのもまた事実。

「それでも……やるしかないんです」

己がどれほどの無茶を要求しているのか自覚している。それでも、その決定を覆すことはない。

覚悟と願いのこもった視線で、まっすぐに先を見つめていた。

翠風騎士・轟鷗。

烈風を自在に操る騎士である。目元が横に開いたなめらかなフォルムをした翡翠色の鎧を纏い、大斧を武器とする。

「てえええいつ」

斧を一振りすることに風が舞い進路にあるものごとくを切り裂き、破壊する。いかなく力天使級>といえども無傷ではいられない

い。

その後を追うように深紅の炎が迸る。

烈華騎士・錫禪<sup>しゃくせん</sup>。

炎をその身にまとう騎士。鎧もまた炎をそのまま固めたかのような色形をしている。

鎧の上から拳に装着した大人の胴体ほどの大きさもある巨大な手甲を轟々と赤く燃やし、怒涛の連続攻撃をレギオンに叩き込む。その一撃の威力は轟鳴の大斧さえも凌ぐ。

互いに、数多くのレギオンとの戦いを積み重ねてきた歴戦の騎士で、特に錫禪は前大戦を経験した優秀な騎士だ。

しかし。

「……増援はまだか？ さすがにこれ以上はこっちが持たなくなりそうだ」

「今、歌穩さんが向かっているそうです」

声はそれぞれ低く太い成熟した男を思わせるものと、若さの残る少年のものだ。

「天隙騎士はどうした？」

「打ち漏らしの処理をしているそうです。まあ、あの人ならそれも一瞬でしょう」

「そうか。その一瞬でこっちがやられなきゃいいがな」

「冗談になってないあたり、キツツイですねえ」

<力天使級>三体を前に言葉を交わす錫禪と轟鳴。戦闘が始まって一分ほどだが、二人とも既に息が上がっている。

騎士の防御力をもってして驚異であると言わざるをえない攻撃力を持つ敵が、三体。その現実が二人の精神に多大な負担を強いていた。

レギオンの攻撃は一撃の威力が重い上に奇妙な特殊能力を持っていることも珍しくない。事実、目の前にいる三体の<力天使級>の内二体はそれぞれ個別の特殊能力を有していた。

残る一体は能力は有していないが、その代わりとでもいうように

異常なまでの防御力を備えていた。

とはいえ、こちらの攻撃が効かないほどではない。それでも倒しにくい、という状態は二人の神経をじわじわと浸食する。

「さて、轟鳴。お前あとどれくらい残ってる？」

「残り三百つてとこですな。そちらは？」

「四百がいいところだな……どんなに頑張っても二体が限度か」

「ええ。早くお二人に来ていただかないとっ」

二人左右に飛ぶ。一瞬前まで二人がいた居たその場所を、黒い牙が地面からまっすぐに上へと突き破った。その高さは周囲の木々を追い越し、一瞬で小さなビル程の高さにまで達する。

黒い牙は無論、レギオンの一部ではなく、牙そのものが一体のレギオンだ。

影から影へ。大地の中から唐突に現れる暗殺者。

その刃の鋭さは騎士の鎧すらやすやすと切り裂いてみせた。二人の騎士の鎧に小さく切り傷を付けているほとんどが、この影の牙によるものだった。

「ちっ。動きが読みづらい！」

錫禅は舌打ちとともに炎を全身に纏い、気合と共に拳を大地に叩きつけた。

大地が赤く染まりヒビ割れ、隙間から炎が吹き出す。影の牙は炎の直撃を避けるように地に潜りその場から姿を消した。

しかし錫禅はさらに大地を劫火で焼く。熱波に焼かれた地面は赤く溶け溶岩となり、蛇の体と猿の頭と犬の四肢を混ぜたような姿をしたレギオンに襲いかかった。

「ぜぜれれれだでしししし」

赤い飛沫を全身に受けたレギオンが悲鳴を上げる。そのレギオンに上空から風圧がのしかかる。ダイヤモンドすら圧潰させるその風圧を天空から放つのは轟鳴。

さらに爆発させた大気の流れに乗って接近、猿の頭を大斧で叩き割る。風圧が頭から胴体までを吹き飛ばし、カマイタチが無数の傷



をその全身に刻みこむ。

その轟鳴めかけ、別のレギオンが襲いかかった。無数の岩石の集合体。その隙間から昆虫の足のような節足が突き出している。

猛烈な勢いで襲いかかる圧倒的質量に対して、足元の暴れる胴体を斧にまとった風と共になぎ払い、ぶつける。放物線さえ描かずにまっすぐに岩石レギオンへと向かう合成レギオン。

衝突はしかし、岩石レギオンの動きを止めるには至らない。

しかし僅かに勢いの衰えた隙について、その足元をくぐり抜け、ついでに足を数本、まとめて切り裂いた。

岩石レギオンは合成レギオンを体に巻きつけたまま回転し身を沈めるが、すぐに立ち上がる。もとより上下左右の区別のない体だ。転倒という概念がないのかもしれない。

絡まりあったレギオンに向けて、錫禅が燃え盛る炎を全身にまとった体当たりをぶちかます。

衝突の轟音は天まで響き、衝撃は木々をなぎ倒す。

が、無数の足で大地に根を張ったように、岩石レギオンは動かない。

「う……お、ご……あつ！」

炎がさらに赤く輝く。熱量が膨れ上がる。

岩石レギオンは動かず、動じず。ジリジリと錫禅を押し返す。

むしろ間に挟まれている合成レギオンの方が圧力と熱波にまみれて大変なことになっていた。頭を失い、胴体を無数に切り刻まれ、岩石に巻きつけられて焼かれ、もはや瀕死の状態であった。

そこに。

「錫禅さん退いてください!!」

轟鳴の声と共に、後ろに飛び退く錫禅。

空に浮かぶ轟鳴が振りかざす大斧に込められた精霊が盛大な歌声を奏で、空間を震わせる。

物理現象を伴わないエネルギーの奔流が刃に集約。翡翠色の光の粒子が渦となる。

もはや光の集合となったそれを、大きく振りかざした斧を、振り下ろす。

渦が波になり波濤となってレギオンを襲った。

精霊の風。

物理現象を伴わない豪風が無音の破壊を撒き散らす刃となり、絡まりあつた二体のレギオンの全身をいたぶる。

レギオンは人の負の想念に反応した精霊だと言われている。

真偽はともあれ、その構成が『異常な』精霊によってなされていることは紛れもない事実だ。

その存在が高まるほどに、その体を構成する精霊の純度は高まり、<力天使級>ともなれば七割近くは精霊で構成されている。

その分、物理現象に縛られなくなり、その形態、生態共に無限の存在だと言える。岩石レギオンのあの巨体を、昆虫のような細い拙速で支えているのが良い証拠だ。

全ては精霊の量と密度がその強さの基準となる。

そして物理現象に縛られないということは単純な暴力的手段では効果が薄いということ。

そういつたレギオンに対して騎士が取る攻撃手段は、鎧に刻まれた精霊術式による物理・精霊両面からの同時攻撃。彼らの鎧の色は『彩』と呼ばれ、発動できる術式の属性と密接に関係する。

精霊の風は轟鳴の対レギオン攻撃の究極形態のひとつだ。

カマイタチや烈風、風圧などを一切生じない、文字通り活性化させた精霊を直接ぶつける『だけ』の技。

物理攻撃に対して非常に高い防御力を発揮する岩石レギオンのような相手に対し、その物理防御を無視してダメージを与えるための技だ。

合成レギオンが散り散りに砕け、それでもなお絶命せずにバラバラの体でのたうち回る。岩石レギオンも無数の亀裂をその全身に刻む。

しかしそれでも、まだ足りない。

岩石レギオンの威容はまだ健在であるし、バラバラになったレギオンはそれぞれが別々の個体として手足を生やす。

「くそ、これでもダメかっ！」

轟鳴が力を失ったように落下する。全力を攻撃に注いだがゆえに、その身を空にとどめておく力を失ったのだ。

その彼の落下点の地面に、黒い渦が生まれる。

牙レギオンの攻撃の予兆に気づいた轟鳴が斧の柄を立てる。が、そんなものである鋭い一撃を防げるとは到底考えていない。せめて四肢のひとつ程度で済ませる決意で攻撃の一瞬を見極めんと落下地点を睨みつけ。

音よりも早く、黒の一撃が迫る。衝突　その直前の瞬間、衝撃で視界がぶれた。

「があああっ！」

轟鳴を蹴り飛ばした錫禪が悲鳴をあげる。

膝から曲げた足を真下から、脛から太ももを貫通し、それでも止まらなかった牙に肘を打ちつけて受け止めていた。

その腕も半ばまで貫かれている。

ずっ。

みずっぱい音を立てて、出現と同様の唐突さで牙が消える。同時に、支えを失った錫禪は大地にたたきつけられた。

「く……そ、が……っ。痛えじゃねえか……っ」

激痛に苛まれながらも体を起こす。が、足と腕からは血が溢れ、炎の鮮烈な赤を不吉な黒い赤で塗りつぶしてゆく。

死体にたかる蛆虫のように、バラバラになった蛇レギオン立ちがわらわらと集まってくる。

残された片腕に炎を灯すが、先程までの力強さはそこにはなく。

弱々しい炎がゆらゆらと揺れるのみ。

轟鳴はいい具合に力強く蹴り飛ばしたため、戻って来るまでもうしばらく時間がかかるだろう。決定的な瞬間は、少なくとも見ずにすむ。

そう考え、薄く笑みを浮かべた錫禅の周りを、じりじりと伺うように距離を詰める蛇レギオンたち。

それを。

「涼やかなれ刹那の悪夢

水籠みずかご」

直方体の水の塊が、一体残らず全ての蛇レギオンを飲み込んだ。

「こいつは……」

かすれた声でつぶやく錫禅。その彼の前に、木の上からひとりの騎士が飛び降りてきた。

「まったく、これだから男は。勝手に格好をつけて死ぬのは迷惑だからやめろっていつも言ってるでしょ」

「返す言葉もない」

現れたのは薙刀を手にした碧色の鎧の騎士だった。

碧水騎士・歌穩かのん。錫禅と同じく、前大戦を経験した騎士だ。

鎧は身軽さを重視したような身軽なもので、水を思わせる意匠が彫り込まれている。兜は頭の上半分を覆うバイザーのような形をしており、長い髪が精霊の影響で青く染まり、ふわりと重力を無視して軽く浮いていた。

背筋を伸ばしてまっすぐに立つ姿は凜とした雰囲気をもっていた。

別名、水鏡の騎士。

由来は水を操る能力から だけではなく。

「死ぬならせめてもう一働きしてくれる。ていうか働いて。いや、無理とか言われても知りません、とりあえず動いて。いいから」

機械的な口調で極めて冷静な声で水の膜を岩石レギオンに向かっ

て連続投射。続けざまの衝撃でその巨体を一気に吹き飛ばす。その動作に波紋一つ程のゆらぎもなく。

波のない湖面のような鉄面皮から、そのような呼び名が付いていた。

「死にかけに、ずいぶんと無茶を言う……っ！！」

血を吐きながら。それでも。

魂の彩そのままに。

持ち上げた片腕が。鎧が。真紅の炎と、燃え上がる。

「焼けよ滅ぼせ皆々等しく  
紅蓮颯連くれんくれん」

腕を大地に打ち付ける。炎が弾け、火の粉が舞い舞い散る火の粉が集まり連なり水の籠の周囲で渦を巻く。

轟々と音を立てて超高速で渦を巻く火の粉の熱は水籠を一瞬で沸騰させ、内部に超高温の蒸気の竜巻を生み出した。

炎と水の渦で内部に閉じ込めたレギオンの全身を切り刻み、捻じ切る。細かく刻んで再生するのであれば、もはや再生できぬほど刻んで千切り砕いて滅するより他にない。

凝縮した精霊の嵐が、蛇レギオンの群れのことごとくを精霊粒子にまで分解した。

「ご苦労様、烈華」

「いやそろそろ本格的に死にそうなんだがな」

「いつそ冷ややかとさえ言える歌穩に対し息も絶え絶えの錫禅。

「助けてはくれんかね」

「助けて欲しいんだ。へえ。ふうん。はっ」

「鼻で笑いやがったこの女……」

「ははは、まったくこの男は」

「声にも表情にも一切の笑いを含まずに言葉だけ笑うな、怖い」

「どうしろと」

「せめて疑問形で尋ねろよ、なあ。ていうかそろそろ死ぬ、いい加

減にしないと手遅れになる」

「わかったわよ」

くるりと薙刀を回して柄で軽く錫禪の腹をたたく。精霊によびかけ大気中の水分を集め傷口に固着させ、出血を塞ぐ。

「分子運動を停止させた水で傷口をふさぎ、損傷した細胞の代替物質を生成した。ひとまず動けるでしょうが痛みは消えないから、のこりは天隙にでも頼んでね」

「ひとまず動けるだけで助かるよ」

応急処置を受けた錫禪がゆっくりと足の調子確かめるように立ち上がる。

「こちらとしては怪我人は後ろに下がっていてもらうほうが気兼ねせずに済むんだけど？」

「お前ひとりであの二体を相手できるわけないだろ」

「死にぞこないが」

「お前俺のこととんだだけ嫌いなんだよ……」

戦闘そっちのけで戦慄する錫禪。

会話をしつつも手足をぐるぐると回し、ひとまずの調子を見る。

ざっと見積もりを立てて、

「全力動作は二回が限界だな」

そう結論づけた。

そのとき、森の奥からゴロゴロと音が響いてきた。岩石レギオンが迫ってくる音だ。

巨体と質量を生かした単純な攻撃。それだけに防ぐには全力を持つて当たる必要がある。感じる気配からして、すぐにもこの場に突っ込んでくるだろう。

「ひとまず俺が止める。その際に行けるか？」

「可能だけど……もう一体の牙型は？」

「気配は感じる。まあ、タイミングを見ているんだらうよ」

今最も牙レギオンの餌食として相応しいのは、機動力を削がれた錫禪だ。

次こそ、確実に止めを刺しに狙ってくる。

故に錫禅は己を囿として牙レギオンを誘き出すつもりだ。

岩石レギオンを受け止めれば、自然と動きは止まる。牙レギオンもその隙をつくつもりなのだろう。

そこを歌穩に迎え撃つてもらえば、うまくすれば二体同時に討伐することもできるかもしれない。

が。

「おごっ?!」

薙刀の背で割と容赦ない具合に脳天直撃を受けた錫禅が膝をついた。

「だから、勝手に格好をつけてしぬのはやめてっっていつてるでしょ。人の話、聞いてんの?」

歌穩は錫禅の前に立ち、薙刀を構える。

精霊が全身に満ち、青く輝く。

「防御はわたしが最も得意とするところでしょう。あなたはあなたの得意分野でサポートして」

「いや、だがな」

岩石レギオンの動きを止めるということは、牙レギオンの格好の標的になるということを意味する。

確かに歌穩は防御術を得意としているが、一瞬の状況判断やそもその鎧の防御力自体では錫禅に軍配が上がる。歌穩が牙レギオンの一撃をまともに受ければ、重体どころか再起不能になりかねない。そうなるとこの場における戦力は一気に低下する。

それならば、同じく再起不能を覚悟するならば歌穩を万全の状態に残すのが、戦況を進める上では確実な

「文句言うなら今すぐ傷口開くよ」

「攻撃はまかせろなあに問題ねえ!」

碧水騎士は決して冗談は言わない。

十年来の付き合いで嫌というほど身を持って味わっていた。

敵ではなく味方に再起不能に追い込まれては本末転倒もいいとこ

るである。

「ただし……多少巻き込むが、覚悟しろよ」

「覚悟してるわ。ほら、くるわよ」

ゴロゴロと言う音はもはや騒音となっている。秒速四十メートルを優に超える速度が今まさに迫ろうとしていた。

耳と肌と直感を頼りにタイミングを図る歌穩。

錫禅はゆっくりと距離をとりつつ、体内の精霊を圧縮、密度を高める。

そして。

「七連花」

歌穩が雑刀を突き出す。精霊が渦を巻き、七条の水が螺旋を描き、高速で回転し、その先端に。

馬鹿げた質量が馬鹿げた速度で衝突した。

衝突のエネルギーが一瞬で熱に転換、水が蒸発、爆発。

ガリガリと地表を削りながら十メートル以上押し込まれるも、レギオンの突進を食い止る。

回転を続け水槍を削り取るレギオン。

水槍を生み出し続け食い止める歌穩。

異質な、そして異物質に込められた精霊同士。激しく衝突し、反発し、火花が散る。

激しい攻防を目にしながら錫禅は意識を集中し、牙レギオンを探った。

意識の網を広げ、神経をとがらせ、そして。

「歌穩！」

「無理よ」

攻撃の気配を感じた錫禅の警告の声に歌穩はにべもない返事を返す。

相手の攻撃が激しすぎて、牙レギオンどころか巻き込み覚悟の錫禅の攻撃に対しての防御術すら展開できないというのだ。

躊躇。



威力を調節すれば歌穩は無事だ。

しかしその程度の威力ではレギオン達に手傷を負わせることすらできない。

手加減をしなければ。

歌穩はまず無事では済まない。

かといって何もしなければこのまま歌穩は黒い牙に貫かれることは必至。

何か、手は？

ない。

刹那にも満たない間隙に思考が走り、しかしその時間は牙レギオンにとっては十分な時間で。

故に。

彼女が割入らなければ、何もかもが無為に終わっていた筈だった。絶望を退ける彼女の声が高らかに響く。

「轟け残響　白乱華あーっ！」

はくらんか

明るく元気な、戦場には似つかわしくない声が響き、するどい閃光が二人の視界を縦横に斬り裂いた。

岩石レギオンに収束した光　雷撃が、その巨体を僅かに押し返し、回転を大きく削ぐ。

瞬間。

「灼熱地獄に哄笑上げる　劇炎！」

げきえん

天地に正方形の赤い面が生まれる。

面は広がり錫禅、歌穩、レギオン達を飲み込み。

空間を真紅に塗りつぶす。

面と面を結ぶ天地を空間まるごと焼き尽くすように炎で塗りつぶす精霊術式、劇炎。

空間内部に閉じ込められた相手は為す術も無くただ焼き尽くされる他はない。

しかし。

黒い牙が、紅の箱から突き出した。

破られた一点から結界が崩壊し、炎が爆散する。

熱気揺らめく跡に残されたのは、息を切らせる錫禅と、その攻撃を全力で凌いだ歌穩。そして黒い塊と化した岩石レギオンとポロボ口になった牙レギオン。

見るも無残な姿になりながらもレギオン達は健在。

このままでは牙レギオンは地に潜る。岩石レギオンはどうか仕留めることができても、もっとも厄介な神出鬼没の敵を逃すことになりかねない。

歯を食いしばる錫禅達。

そこに。

「ふたりとも、飛んでください!!」

ポロボ口になった轟鷗が前体重をかけて斧を大地に突き立てると同時、ありつたけの精霊を放出する。

衝撃。

地割れ。

突風。

そして、大地が持ち上がる。

岩盤がめくれ、厚さ十数メートルにもなる巨大な岩となり、無数に空へと吹き飛ぶ。

錫禅、歌穩も衝撃に合わせてるように飛び上がり、風や岩を利用して大勢を整える。

「なるほど、考えたな、轟鷗のヤツ!」

「あなたが考えがなさすぎるの。いい加減学びなさい」

体力の限界にありながらどこか余裕を伺わせる二人。その余裕は

根拠のないものではない。

岩石レギオンはこのような空中にあつては満足に動けず。

牙レギオンにしても、まさか移動触媒の大地ごと持ち上げられてしまつては、どこに隠れていようと意味が無い。

そして。

この程度の範囲なら、限界の二人に加えもう一人が加われれば確実にレギオンを葬れる。

富士樹海討伐遠征、最後のひとり。

「いい展開ですね、おふたりさま！ 出てきたばかりでなんですけれど、これで終わりにしちゃいますよっ」

「ようやく来ましたか、アリカ」

「はい！ 天隙騎士・閃、せつなただいま参上ですっ」

紫電を引いて天を翔けるひとりの少女。

右手には細身の剣。左手には円形の盾。

手甲足甲と胸当てのみの簡素な薄紫の鎧に、兜は額を守るだけと  
いうことのほか軽い作りになっている。

一五歳の歳相応の明るさを満面に浮かべながら、同時に鋭い戦士の視線はレギオンに向けられている。

ぱちり、と彼女の指先でひかりが弾ける。

「それでは、この場は僭越ながらあたしが指揮を取らせてもらいます。ふたりとも、準備はいいですか？」

「無論」

「どうぞ、お好きに」

答えた二人は最初からそのつもりだったらしく、既に構え、体内の力を高めていた。

風に囚われたレギオンたちは為す術も無い。

閃が盾と剣を打ち合わせる。

精霊が喜ぶように踊る。

踊りは瞬く間に狂喜へ変わり、狂喜は狂乱へ変じ、狂乱は狂気を呼び起こす。

精霊の暴走はそのまま雷という物理現象を生み出す。  
天隙騎士・閃。

その能力は、先ほど歌穩を圧倒する岩石レギオンを押し返した雷撃。

秩序ある暴走を、彼女は解き放つ。

「響け静寂　　はくへきむが白壁無我」

言葉通り、音はなかった。

ただ光の奔流となった雷撃が、二体のレギオンを飲み込んだ。

同時に放たれた劇炎と七連花。

異種の精霊同士の強力な反作用が、ついに二体の<力天使級>を滅ぼした。

地上に降りた錫禅と歌穩はもはや限界と、さっさと鎧の着装をとく。

それを見届けた轟鳴も、鎧の着装を解除した。

炎が、水が、風が。

ふわりと、精霊になって大気に消える。

そして、最後のひとり閃も、ひとりゆっくりと降りてきて着装を解除した。

「……なんとかおわりましたね」  
溜息をつく轟鳴　　すずむら　たいすけ鈴村大輔。

「つかなんでお前そんなボロボロなんだ？」

「誰かさんが全力で蹴り飛ばすからでしょうっ?!」

「ああ」

牙レギオンの一撃から逃がす際、かなり強烈に蹴りをかましたこ

とを思い出した。

錫禅

関屋工せきやたくみはだが涼しい顔。

「ありゃあお前が悪いだろ。あんなとこで全力使ってへるへるになるって、お前、初心者か」

「うっ」

「なにあなた、そんな馬鹿なことしたの。へえ。ふうん。それでこちがこんなな苦労したんだ。はっ」

歌穩

齋木遊乃さいきゆうのがれいとうびーむのような視線を放つ。

「あっははは！ 相変わらず大輔はばかだなー！」

対して閃 アリカ・ミチロギはひまわりのような笑顔。言っていることは大概だが。

「うわあ最後結構頑張ったのにこんな扱いですか僕！！」

「浮かせてただけでしょ」

「冷たい！ 工さんこの人相変わらず冷たいですよ！」

「俺に訴えかけてんじゃねえよ……ほら、終わったらさっさと帰るぞ。ていうか俺怪我がそろそろ開そうで結構ヤバ……あ」

言ってるそばから血が吹いた。

それを見た遊乃はため息をひとつ、ハイキックで工の顎を蹴り飛ばし意識を奪うと、さっさと傷口に応急処置用の精霊術式の符を張ってさっさと歩き出した。

「うっわあー。さっすが遊乃さん、うちの隊長に勝るとも劣らない冷血っぷり！ 感動した！ あたしは感動したぞ！！」

何が楽しいのか、惨劇を目にしたアリカは逆にテンションが上がってせつせと遊乃の後を付いていく。

残ったのは呆然とする大輔と、気絶させられた工だけ。

「……え、嘘、僕一人で運ぶんですか？ いやだって僕だってへ口へ口ですよ、体格差も相当なもんですよ？！ ねえ、ちょっと、おい、嘘マジで無視してるよっ！！」

結局、工は轟鳴がひきずりながらどうにか待機チームの場所まで運んだものの、引きずって運んだせいで靴が駄目になったと後に大層怒られるハメになる。

おかげでしばらく落ち込んだとか。

そんな。

ある意味微笑ましい光景を見て。

「いやはや、連携はまだまだですがまあ、個人技能の練度はなかなか高まってきているようで。豊重、豊重」

釣られたように微笑む、ひとりの男がいた。

大抵の人物が男に抱く第一印象は、お人好し。そんな外見をしている。

長身の割に穏やかな表情がそんな印象を抱かせるのかもしれない。

男は牧師の格好をしていた。

男は彼らを見ていた。見下ろしていた。

上空、七千メートルから。

「しかしまだまだ、期待には届きませんねえ。工くんなら何か気づけたかもしれません、まあ、あの傷では仕方ありませんか」

そうつぶやく彼の表情は、先ほどとは違ってかわって落胆の色が濃い。

「ねえ、君もそう思いませんか？」

そう言って、振り向いた先。

そこには、黒い塊がいた。

黒くて、蛇のような体で、犬のような四肢を持ち、猿のような頭をした。

レギオンが。

サイズは人間大だがそれでもく力天使級ともなれば十分な脅威

である。

レギオンは赤い結界に囲まれて、囚われていた。

この状況で誰が捕らえているかは問うまでもなく当然牧師である。牧師　アレックス・キングが、このレギオンを捕らえていた。

先ほど下で倒されたレギオンはこのレギオンの力の大部分ではあるが『核』ではない。それでも、己の体に相当のダメージを受ければ、それは核へと返ってくる。

本来これがレギオン討伐のスタンダードであって、最初から核狙いの戦い方は異端というより無謀の域なのである。

それはさておき。

アレックス・キングはレギオンに手を伸ばす。

何かを察したレギオンは驚くべきことに、アレックス・キングに牙を向くのではなく、ひたすらに怯えるように、逃げ場のない結界内でのたうちまわった。

レギオンを知る者が見たら卒倒するような光景だった。ありえない。

レギオンが、人間から逃げるなど。

だが事実、レギオンは狭い結界内で無意味に無様に暴れ、その甲斐虚しく。

「安心なさい、なかに、すぐに元気になれますよ」

黒を、吹き飛ばした。

結界内に残ったのは、小さな小さな青い欠片。

そのレギオンの『核』を握りしめたアレックス・キングは。

「ふふ」

小さく、少しだけ。

笑った。

「さて。それでは」

くるりと周り、歩き出す。  
空を。

何も無い空を、まるで普通に。  
鼻歌さえ歌いながら。

彼は歩く。歩いてゆく。

黒い。黒い足跡を残しながら。  
空を穢しながら。

歩みを進める。

進行方向は、ああ懐かしき。

我が領土。



闇・蔓延る（後書き）

年末年始、もっと更新したかった……。  
とりあえず、週一更新を基本姿勢に行きたいと思います。

## 風・降り立ちて

02 - 04：風・降り立ちて

騎士とはつまり、精霊を鎧としてまとう者の事だ。

術式により鎧を召喚し、着装する。

召喚する鎧は本人の資質により大きく左右されるため、様々な鎧の形が生まれる。

全身を覆う轟鷗のような鎧がやはり一般的だが、歌穩のように体の要所を守る鎧というものもそれなりに多い。その点、閃のように鎧と呼べないようなものは圧倒的少数派であり、珍しい部類に入る。ちなみに、閃は軽装である代わり強力な防御術式が常時展開されているため防御力自体は非常に高い。

轟鷗は風、錫禅は炎、歌穩は水、閃は雷という風に騎士たちは多彩な能力を各々持っているが、その能力の傾向は鎧の『彩』に左右される。

鎧を構成する精霊がどの属性を持っているかが、その能力を決めるのだ。

そして、騎士の鎧はそれ自体が無数の精霊術式を秘めており、騎士はその力を僅かな呪文で発動させることができるのだ。

それだけでなく、少し意識を向けるだけで精霊に属性を与え操ることもできる。轟鷗や錫禅が風や炎をまとして戦うように。

これら多彩な攻撃手段と堅固な防御力が騎士鎧の存在価値といえる。

ところが、その騎士たちの中において例外が存在する。発生したというべきか。

これまではなかったものが、唐突に生まれた。それこそが龍夜の存在である。

漆黑騎士・刃牙。

精霊が属性を持たないが故か彩を持たない、漆黑の鎧をまとう騎士。

彼はいかなる精霊術式を展開することもできないという、本来の騎士鎧に真つ向から勝負を挑むような奇跡っぷり。

無論完全に使用不可能というわけではない。たとえば、精霊の風のような精霊だけをぶつけるような術式を使えば『鎧に織り込んだ術式での攻撃』は可能である。

逆に言えば、それしかできない。

しかもそれもレギオンに大しては効果が薄くなる。轟鷲のように、属性を持たせることができないためだ。ニュートラルな精霊ではぶつけたところでレギオンに取り込まれる危険さえある。

故に刃牙の攻撃手段は直接攻撃のみに限られるというキワモノっぷり。

固有術式による攻撃手段はなく、運動補助や強化などの補助術式のみを頼りにレギオン相手に肉弾戦を挑む。

これは騎士に限らず類を見ない戦い方だった。

場合によっては極度のマゾとかいった扱いを受けかねないレベルで。

なぜ、このような事が起きたのか。

様々な憶測が生まれた。

本人の資質に問題があった。

鎧生成の術式に問題があった。

本人と調和する精霊の属性がなかった。  
そもそも例がないだけで常に内包されていた可能性だった。  
等々。

それらに対して龍夜は口を閉ざし、何一つ語ろうとはしなかった。  
否、唯一三奈に対しては口数少なく語ったことがあった。

例えば、彼は確かに騎士としての適性が低かったこと。

鎧を形成するために必要な『契素<sup>けいそ</sup>』が必要最低数に毛が生えた程度  
の数しか存在せず、鎧の形成自体が非常に困難であった。

例えば、彼が鎧を生成した術式はそのためにもほぼ根本からの改造  
を施したこと。

鎧を形成するための術式は古くから伝わるもので、それは一度自  
分に使ってしまったら鎧の形が固定されてしまい二度とは使えない。

そのため、普通に鎧を形成してはろくな物にならない事が分かりき  
っていた龍夜は、それを自力で組み替えた。騎士が自分自身に合わ  
せて鎧をカスタマイズするのはよくあることだが、術式の構造自体  
に手を加える例は少ない。それをできる技術者がほぼ皆無だからだ。  
それを龍夜はどうやってか、自力でやり遂げた。

そのように、三奈に語ったことがあった。

三奈はそれを誰にも語らず、ひっそりと胸に秘めている。

そうまでして騎士になる龍夜の想いを、結局聞き出せなかったか  
らだ。

以上の事情から漆黒騎士と通常の騎士ではその戦闘方式が大きく  
違う。

刃牙では逆立ちしたところで普通の騎士のような戦い方はできな  
いし、普通の騎士は刃牙のようになりスキな戦い方を選ぶ理由がな  
い。

結局のところ、刃牙は圧倒的防御力を有した剣士、でしかないの  
だ。

故にそれまで騎士団と共にレギオン討伐に当たる際には、彼は率先して露払いのような役割を買い、主戦力として前に立つようなことはなかった。防御力と狭い範囲での機動力に関しては高い評価があるため、囮役になることも多かった。

目に見える実績として<権天使級>を倒したのは、最近の件が初めてだったのだ。

しかし、そうなると次の疑問が出てきた。

どうやって<権天使級>を倒したのか、ということである。

切り刻めばいずれ消滅する<大天使級>までのレギオンとは違い<権天使級>には『核』がある。これを滅ぼさない限りレギオンは無限に再生する。

一般的な対応としては、レギオンの肉体を構成する精霊に対して高密度の精霊による攻撃を加えることで『核』に負荷をかけ討伐するという手法が取られる。

しかし漆黒騎士ではこれができない。

だが事実として<権天使級>を討伐した。

それは漆黒騎士が世に出た当初と同等かそれ以上に、多くの者の関心を引いた。

その方法は三奈も知らないが。

おおかたの予想は付いている。

彼女は実際にその存在を知らされてはいないが、龍夜には随分と頼りになる『相棒』がいる事は、なんとなく感じていた。

あるいは。

レギオンの『核』を狙い撃つことも可能だろうと。

そう予想はしていた。

していたが、まさかそんな世迷いごとをいち事務員兼姫の世話係が口にするわけにもいかず。

こうして、むっすー、と不機嫌極まりない顔をする可愛らしい姫を見ていることしかできない。

「まだ不満ですか、今日の戦闘が」

戦闘後の事後処理も終わり、ようやく騎士団日本支部ビルへと戻ったのは、日が沈んだ頃だった。

未明から戦闘準備を行い昼前に戦闘。そのまま事後処理をしてと引き上げるといふなかなかハードなスケジュールは、姫の体に重い疲労を残した。

「不満のない戦闘なんて今までにありませんよ。それでも、今回は反省点が多すぎます」

姫が特に気にしているのが、工の怪我の具合だった。

足を貫かれさらには腕も半ばまで切断された工。

応急処置をした遊乃の腕が良かったため傷自体は後遺症も残らずに済みそうだが、よほど強い衝撃を頭に受けたのか、半日たった今でも目を覚まさない。それが心配だった。

ちなみに事実関係をチクろうとした大輔は遊乃に捕まり裏で締め上げられたため、姫が真実を知り無駄な心配をしていただけだということに気付くのはまだ先の話。

目的である討伐には成功したものの、一人は重傷。

戦闘自体にしても連携が満足にとれているとは言えず、また、閃以外は時間限界ギリギリ。

時間限界 着装限界と呼ぶ 鎧を顕現できる制限時間には個人差があるのだ。今回、それをギリギリまで使うはめになった。

とても諸手をあげて喜べるような状況ではなかった。

「そもそも今回のレギオン発生には当初から不明点多すぎました。結局誰も、あのレギオンたちの『名』を聞いていませんし。一体誰があのレギオンたちを顕現させたのか……また、顕現させたその

当人はどうしたのか。

それ以前になぜ誰も気づけなかったのか」

「念のためにまた情報を集めてもらえますか。ここ数年の間で似たような事例がないか」

「それなんですけれど、この間龍夜さんのケースを調べるときに、実は似たような事例がありました。」

あの時は探しているものと若干違ったので除外したのですが」

そういいながら、いくつかの事例のデータを姫の端末に転送する。データを受け取った姫はさっそくそれを流し読む。

しばしの無言。

「……二年前、半年前、それと三ヶ月前。確かに同じようなケースですね。」

最初のケースはロンドン……次に中国。三ヶ月前のは九州ですか。こちら、担当したのは？」

「ロンドンと中国のケースに関しては各国の騎士団が。九州のケースも現地の騎士が数人がかりで対応しています。ただ……」

「ただ……？」

「そのどれもが騎士が複数人いるところへの唐突に<力天使級>が現れた遭遇戦だったみたいで」

「……全部が？」

「はい。事件にあったという騎士にも直接確認してみましたけど、友人同士で休暇をあわせて遊びに出かけたところにいきなり……だったそうで」

となると今回ののはまた別口のパターンだろうか。

いや。

そうは思えない。

今回レギオンの発生に気づいたのは、謎の情報があつたからだ。富士樹海に<中位>のレギオンが発生していると。

その人物が、遭遇してそのままやられたとしたら？

「いえ、それもおかしいわ。三体の<力天使級>を不用意に顕現さ

せれば自分がどうなるかわからないわかるはずだもの。それを騎士団に知らせて到着を待たずに『名』を尋ねる？ ただの自殺志願者だわ」「そうなんですよね。」

過去のケースは十分な戦力がその場にあり、その上<力天使級>という緊急の対応を要する相手だからこそ、その場ですぐに討伐しています。それにきちんと、近くの騎士団にも知らせているんですよ。

今回はそれらとは全て状況が食い違いを見せています」「嫌味なくらいに、きれいに、ね?」

「……ですねー」

ここまできれいに状況を揃えられてしまうと、何者かの意志の介在を疑わずにはいられない。

しかしそうなると同時に面倒な仮説を前提としなくてはならなくなる。

「レギオンの発生を感知できるような、そんな力を持った存在が、こちらを誘導している可能性かあ。」

三奈、そういった存在、聞いたことはある?」

「あれば騎士団どころか世界中の術者の話題総ざらいですよ」

「ですよね」

はあ、とふたりならんでため息をつく。

「そういえば」

気分を変えるために、三奈はあえてその話題を引く張り出した。

「龍夜さん、ようやく怪我が完治したみたいですよ」

「……、そうですか」

微妙な間において微妙な表情で微妙な返事をする、姫。

三奈がこの話題を出すのは嫌がらせなどではなく、良くも悪くも姫の気分を変える効果を期待してのことだ。

ついでにいうと、彼女が龍夜の話題をするのが趣味だという理由もある。

「いいいますか、なぜ<権天使級>を討伐出来る実力がありませんか」



百体の＜天使級＞相手に遅れをとりますか、彼は」

そういう姫の顔は不満気だ。

それがどんな感情から生まれるものなのか想像しながら、三奈は一応フォローを入れる。

「龍夜さんの鎧、性能が一對一に特化していますから。」

普通の精霊術式も使えるみたいですけど、それまでに使い過ぎて体力枯渇してみたいですし。

たまにやっちゃうんですよ彼、そういう迂闊な事してドツボにハマるって。何度死にかけても治らないんですよね」

血なまぐさい話題の割にほんわか楽しそうな三奈。

「……………」

「？　どうかしましたか、姫」

姫のジト目に気づいた三奈が首を傾げる。

「いえ別に」

貶しているくせになぜかのろけに聞こえた、ということに対しての無言の抗議とはさすがに気付かなかった。

書類をまとめて鍵付きの引き出しにしまい、小さな手提げカバンを手に立ち上がる姫。

「さて、今日の作業もこれで終わりです。三奈はまだ用事？」

「いえー、わたしも今日はそろそろ。」

というか姫様、そんなに根を詰めなくてもいいんですよ？　まだ学校だつてあるんですし。

土日のたびにここに来ていては大変じゃないですか？」

「平気です。どうせこれから先の時期の中学三年生なんて消化試合みたいなものですから。出校日だけ押さえたいれば普通に卒業できます。」

三奈も私の成績は知っているでしょう？　なんにも問題ありません」

「うーん、まあ、そうですね。あ、ほら、友達とかは……………」

「……………」

さつと視線をそらす姫。

ああやつぱり相変わらずかあと追求をやめる三奈。

その容姿と必要以上に丁寧かつ距離感をわきまえた態度と不定期に学校を休む、というキャラクターは、普通に考えて学校生活の場から弾かれて当然である。特に出席日数と必要単位の計算を覚えて効率的に休む、といったダメ技術に分類されるスキルを身につけてからは三奈も半ばあきらめの境地だった。

それでも、同年代の友人というものを持って欲しいという想いはある。

さらに希望を述べるのなら、騎士のように生傷の絶えない世界とは無縁の、普通に日の当る世界の友人を。

三奈自身、そういつた存在に幾度と無く助けられたからこそそう思うのだが、姫にそれを伝えるのはなかなか難しいところがあった。

姫は強すぎる。

今日の戦闘に関しても、姫が加わるだけで戦況は有利どころか勝利確実になっていた。

が、そのためにはクリアしなくてはならない問題が幾つもあり、姫の実戦投入はなかなか機会がない。しかし戦えば確実に勝利する。それほどの力を幼くして制御する必要に迫られた。

そしてそれに応える知性と自制が存在した。

精神の成熟を強いられ、他者との違いを自覚せざるを得ず、己の存在価値を認識せずにはいられなかった。

その境遇が姫を孤独にするも、彼女はすでにそれを苦と思うだけの経験すら積めずに歳を重ね。

孤独の平原にぽつんと立ち、その孤独に自分自身さえ気づいていない姿に『誰か』が重なってしまう。

「……高校では友達ができるといいですねえ」

「別に、騎士団にも三奈意外にも友達はいますから」

「でも片手の指の数が余るのは、ちょっと……」  
「うつつ……」

ついに涙目になる姫。

ちなみに三奈はそういう姫の顔も大好きだ。別にわざと泣かせようとは思わないが、わざわざご機嫌をとらずに自力で立ち直るまで存分にその表情を堪能する。

「三奈はたまにイジワルです」

「そんなことないですよ、普通です普通。超普通」

「そうでしょうか……」

疑わしい視線を向けるが残念ながら裏付けを取れるだけの友人関係が彼女には存在していなかった。

部屋を出て鍵をかけ、廊下を歩く。

騎士団が拠点としているビルは二十四時間稼働し続けるが、本格的に忙しくなるのはむしろこれからの時間だ。

すれ違う同僚たちと挨拶をかわしながらエレベーターで一階まで降りると、なにやらエントランスがにわかに騒がしくなっていた。

「何かあったんですかね」

「さあ、私はなにも聞いていませんが」

二人は顔を見合わせる。

出口付近に人が集まっており輪になっていた。

「どうかしたんですか？」

近場にいた中年の男性に問いかける。

「ああ、鈴橋さんと……それに、姫様も。」

いえね、ちょっとした喧嘩ですよ、喧嘩」

「喧嘩って……これから忙しくなるのにそんな事で体力使うつもりですか？ というかこんなところで辺に暴れて被害がでたらどうするんですか」

呆れる姫にしかし、若い隊員は笑って答えた。

「なあに、大丈夫ですよ。どうせすぐに決着付きますから」

その言葉と同時にバチリと光が音が弾け、ぎゃっという男の悲鳴

が響いた。

一瞬の間の後、うおおおおお！ という歓声が上がる。どうやら決着がついたらしかった。

「今の、何です？」

「術式の軽いぶつけあいだよ。」

ノーガードで相手に術式をぶつける。互いに使える術式と使用回数を限定しているから、速さと読みが勝負の決め手だな」

「へえー。で、結構儲けてるんですか？」

「いやあそりやあもつ、いい具合に盛りあが……って……」

さあー、と中年の隊員の顔から血の気が引く。

さらりとカマをかけた三奈は涼しい顔。その隣りの姫はじとつと隊員を見ている。

最大限の侮蔑と軽蔑と落胆とその他もろもろの感情を込めた視線だった。

「…………へえ」

姫の視線がふつと横にそれる。

「う…………うおおおおお！ す、すみマセンでした姫え！ 俺が、俺が悪かったです！

だからその冷たい視線をやめて下さい！ いつものあつたかい笑顔を見せて下さいいいいい！！」

マジ泣き入った男の声で、ようやく回りの人々も姫がここにいる事に気づいた。

それぞれ焦ったり手を振ったり急いで回れ右して全力で逃げたりそいつにつかみかかって引きずり倒したり、非常にみつともない。そのほとんどが成人以上だというのだからさらにひどい。

その奥からひよつこりと小柄な少女が顔を出した。

薄い栗色の髪を肩まで伸ばし元気な笑顔を満面に浮かべ意気揚々と、全身に雷を纏った（…………少女）少女。

騒動の片割れを発見して呆れたというよりは納得の表情を浮かべる姫。

「おー、姫ちゃん！ どつたのなんか疲れた顔してるけど」

「あなたは元気ですねアリカ。朝にあれだけの戦闘をしてきたというのに」

「あははっ。まあアタシはね！ ただ全力を出せばいいっていうか、それしかできないからさ、疲れはするけど辛くはないんだ」

ぐつと拳を握り腕を曲げるアリカ。無論力こぶなどはできないが、それだけで元気がありあまつている事は見て取れた。

「元気がありあまつているはかまいませんけど、あまりおっぴらに騒ぐものではありませんよ？」

「うん、わかった！」

本気で分かっているのか非常に疑わしかったが、姫はそれ以上の追求をやめた。

天隙騎士・閃の着装者であるアリカ・ミチロギ。

その性格を一言で表すのなら『自由』という言葉に尽きる。

「それにしても、一体どうしてこんなところで喧嘩を？」

三奈の疑問はもつともだった。

騎士が集まる場所だけあって、周辺だけでなくビルの下にもそれなりの訓練場が存在する。

結果も張つてあるためちよつとやそつとでは壊れない、緊急時にはシエルターにもなる優れものだ。

そんなモノがあるせいで全力の決闘をやらかす連中が発生するのがたまにキズではあるのだが。

「いやさ、なんか馬鹿みたいなこと言ってるヤツがいて、すんごいムカついたからついね」

ぶくつと頬をふくらませるアリカは本気で腹を立てている様子だった。

「はあ。あなたがそこまで怒るなんて珍しい。なにがあつたんですか？」

うん、とアリカは頷いて、簡単に経緯を語った。

ざっくりと話を聞いた三奈と姫は揃ってため息をついた。ここしばらくでため息の回数がうなぎのぼりだ。

「まあ、なんとというか……情けない話ですねー」

「言葉も出ません」

「だよ、だよねえ」

我が意を得たアリカは嬉しそうにジュースをずっと飲み込む。

三人は場所を変えて、騎士団ビル内の食堂で軽い食事をとっていた。

アリカの喧嘩の経緯は、ざっと以下の感じだった。

アリカが本日の戦闘の記録や訓練、待機任務を終えて帰ろうとしたところ、一人の若い騎士が気になることを口走った。

曰く、『漆黒騎士はレギオン討伐に関する重大な秘密を握っているに違いない』という事だった。

そうでもなければまともに術式を扱えない漆黒騎士がく権天使級>を倒せるわけがない、というのだ。

それは多少なりとも誰もが考えたことであり、同時に切って捨てた考えだった。

そのようなものがあるのならさっさと公開してしまえばいい。

仮に現状よりもレギオンを効率的に倒す手段があれば、彼自身の生存率も飛躍的に上昇するのだから。

対レギオンの姿勢をとったとき、人類が情報を秘匿せずに共有する傾向が生まれやすいのが、対レギオンの情報が対人間にはおよそ有効でないものが大多数であるからだ。

無論、強力な術式や特殊な現象を引き起こす手段などはそれぞれの組織で秘匿しているが、レギオン討伐に関してのノウハウは新しいものが発見され次第公開されるのが常だ。それ以外に使い道がないのだから。

だから漆黒騎士がそれを隠すメリットは何も無い。むしろ騎士団がその技術とやらを習得し人員の回転率を上げること、彼自身にも恩恵があると考えるのが道理。

しかしその男は、漆黒騎士は何かを企んでおりそれを秘匿しているとのたまった。

呆れて物が言えないとはこのことだ。自分自身の空想だけで物事を断定する。それはもはや妄想と言っていいレベルの妄言だ。

アリカも呆れてそれを指摘した。

だが男は自分の意見を曲げずに、あるうことか漆黒騎士を　　龍夜を侮辱する発言をした。

『どうせ落ちこぼれの騎士の成り損ないみたいなヤツだろう。どんな怪しい邪法を使っただか得体が知れねえぜ』

『はあ？　アンタなにさ、龍夜に会ったことがあるわけ？』

『そんな事ないけど、あわなくたってわかることがあるさ』

『バカみたい。あんたがどんな騎士かなんて知らないけど、あんたじゃ龍夜の相手にもなんないに決まってるよ！』

『なんだと……俺を馬鹿にするつもりか?!』

『バカにバカって言ってなにがわるいんだ!』

こんな感じで今にも鎧を召喚しそうなところで、途中で割って入った術者の男が先程の勝負方式を提案した、というわけだ。

「アリカも無茶しますねー。今日はもうそんなに着装限界まで時間残ってないでしょうに」

「ふんっ、あんなの相手に鎧なんていらんないよ!」

「まあケンカになりそうになったのはどうかと思いますけれど、アリカの意見がこの場合は正しいでしょうね。

まったく、いつかそんな人が出るかもしれない、とは思っていましたが、まさかうちから早速出るなんてさすがに落ち込みます」  
「バカだよねー。ああいうヤツは本人に会ったら直接言っちゃおうよ、

たぶん。あはは、そうなってたほうが面白かったかな！ あいつ、龍夜にやられたらきつと立ち直れないよ！」

「うわあ黒い。アリカ、あまり人の不幸を笑うようなことはしちゃだめですよ？」

「あははは、三奈だって真っ黒なくせに変なのー！」

仲良くかどつかは判然としないが、笑いあう友人ふたりを見てふと疑問を抱く姫。

「あのう……」

「はい？」

「んっ？」

「ふたりとも、あの人が負けるとは思っていないようですね……」

…

「うん、負けないよ龍夜は」

さらりと断言するアリカと、

「まあそういつたくだらない事を言うような人に負けるようなら愛想尽きますし」

信頼なのかどうでもいいのかよくわからない返事をする三奈。

「ていうかー、アタシにも勝てないんじゃないや龍夜には勝てないよ。アタシいまのところ負け越したもん」

「え、アリカあなたあの人と戦ったことがあるんですかっ?!」

「わたしもそれ、見ましたよ。何度もしているとはさすがに知りませんでしたけれど」

天隙騎士・閃は精霊術式による広範囲殲滅を得意とする騎士だ。

強力すぎて制御に難があるため集団戦では活躍の場は少ないが、少数による連携や個人戦では無類の強さを誇る。

それが、負けた？

しかも、何度も？

「相性が最悪だと思つのですけれど……」

多彩かつ強力な精霊術式による攻撃手段を持つ閃と近接攻撃手段しか持たない刃牙。



距離をとって戦えばまず閃が負けることはないように思った。

「あ、もしかして近接戦限定戦だった、とか？」

「いいえ姫様。わたしが見たのは一度きりですけど、その時はなんでもあり　術式制限なしの広範囲フィールド戦闘で、八十七秒で漆黒騎士・刃牙の一本勝ちでした」

「そそそ。それが最初の時だね。相性が悪いつていうならむしろアタシの方が悪いんだ。アタシの攻撃は大雑把だから　龍夜はその隙を付いてくる。雷撃の僅かな隙間、術式と術式の微かな間、そこを逃さずに一直線に向かってくる龍夜は　刃牙は、とっても怖かったよ！」

自分の敗北をしかしアリカは、目を輝かせて語る。

まるでお気に入りの映画のヒーローを語るように。

「それ以降の戦績はどうなっているんですか？」

「アタシが二勝で龍夜が四勝！　ここ最近は連勝してるよ！　まあ、もう一年以上やってないから今やったらどうなるかなんてわからないけどさ！」

「そう……なんですか」

そう嬉しそうに語るアリカの様子からして、最初の頃は完全に圧倒されていたのだろう。

この話は姫にとつては意外なことだった。

「まーそれでも<権天使級>を楽に倒せるかっていうと、そんな事はないんだろうけどね。刃牙の刃を一度鎧でうけてみれば分かるけど、あの斬撃、すごいんだ。重くて速くて鋭くて　でも、やつぱりレギオンを倒すにはちょっときついと思う。」

龍夜の精霊術の腕を考えたら、鎧を使わずに生身で術式だけで戦う方がまだ倒せるんじゃないかなあ。まあ、その分死ぬ確率がすごいことになるだろうけど」

「ですよ。さすがに何か革新的な情報を隠しているとは思いますが、どうやって倒したのかは興味があります。」

……三奈、どうしたんですか？」

「いえー、別に」

曖昧な笑みを浮かべる三奈に首を傾げる姫。

三奈は返事をごまかした。

まさかこの状況でトンデモ理論を発表するわけにもいかず。

そのまま話題は雑談へと移っていった。

「それじゃーね、三奈、姫ちゃん」

大きく手を振るアリカを見送って、三奈と姫は逆の方向へ歩き出した。

「アリカはいつでも元気ですなー」

「もうちょつと落ち着いてくれるといいんですけど……」

夜の道を歩く二人。

九月も半ばを過ぎたもののまだまだ暑さの気配は強い。それでも秋の気配を感じられるくらいに風の中に涼しさを感じることができた。

「元気なのは結構ですけど、それを内側に向けて発散させられるのは困りものです。」

あのこの相手をできる人材なんてそうそういるものでもないんですし」

それでも無闇にケンカをふっかける性格でないことを承知しているからか、姫はどこかおかしそうな様子。

「そういえば三奈、アリカはどうしてあの人と戦う事になったんですか？」

「ああ、それなら簡単な事ですよ」

三奈は当時の事を 二年前の事を思い出そうとして。

刹那、姫の右手が掻き消える。

ぎいん、と甲高い金属音と共に足元のコンクリートにスローイン

グナイフが突き立った。

「…………へ？」

突然の出来事に思考が追いつかない三奈の前に、いつの間にか力ツターナイフを手に持った姫が歩み出る。

「随分と突然な挨拶ですね。いくらあなたでも礼儀くらいは知っていると置いていましたけれど？」

チキ、チキ、チキ、とカッターナイフの刃を少しずつ伸ばしてゆく。

音がひとつ重なるたびにびりびりと大気を震わせるほどの怒気が空間を侵食する。

三奈を狙われた。

彼女を激情に駆り立てる理由としては十分過ぎた。

その怒気を全身に浴びせられて。

ふわり、と女が空間から溶け出した。

唐突に現れた二十代前半とおぼしき白いロングコートの女は、あくまでも笑顔で。

三奈は彼女をよく知っていたし。

真っ先にその存在に気づいた姫もそれは同じ。

「一体どういふつもりですか、南雲隊長。事と次第によつてはいくら私でも自制を放棄しますが」

「う、ふ、ふ、ふ。それも素敵な話だけれど、望ましい話じゃないわ。

大丈夫、あなたの腕を信用してのことよ、お姫様。きちんと殺気を込め急所を狙っていたでしょう？」

笑う女の言葉にゾツとする。

彼女 南雲朝緋の言葉のとおりなら、もし姫が気付かなかつたり反応が遅れたりしていれば三奈は危うく命を奪われるところだったのだ。

そしてそれを許す姫ではない。

ナイフを撃ち落とす事が間に合わない判断した瞬間、命をかけ

て三奈をかばったであろうことは容易に想像がつく。  
つまり。

本当に間に合わなければ犠牲になるのは姫になる。

「南雲隊長、あなた一体　　！！」

目の前が真っ赤に染まる三奈を、朝緋は右手を差し出すその動作だけで黙らせる。

単に意識を向けられた。それだけのことで息がつまり言葉を殺される。

存在感の絶対的な差。

騎士としての究極の形のひとつ。

その恐怖に全身が竦む。

それでも。

視線だけは抵抗をやめない。

そんな三奈に、朝緋はにこりと微笑んだ。

「三奈ちゃん、駄目よ。あなたはお姫様のアキレスなのだから。騎士団の誰もが忘れがちだけれど、私たちの敵はレギオンだとしても、レギオンだけが私たちを敵としてる訳ではないのよ？

油断しちゃあ、だめじゃない。

一番怖いものは、レギオンじゃないでしょう？」

「あなたに言われるまでもなく知っていますし自覚しています。わざわざそんなご高説を聞かせるためにやってきたんですか？ 久しぶりに日本に帰ってきたと思ったら、随分と暇なのですね」

姫はカッターの刃を朝緋に向ける。

表情は、無。しかし瞳には強い光が込められている。

「くす、くす、くす。そんなに怒らないですよ。

大丈夫、大丈夫よ。何もとって食べようだなんて、考えていないから。

本当はアリカの気配を追ってきたのだけれど、貴方達がみえたから、先にこちらに来たのよ。

三奈ちゃん。貴方に、お願いがあったから」

「お願い、ですか」

思わず表情を硬くする三奈に、朝緋は変わらない笑顔を向ける。手に提げた鞆から、小さな黒銀の腕輪を取り出した。

「これをね、あのこに、届けておいて欲しいの。何に使えるかはわからないけれど、あのこなら、何か使い道を、見つけるでしょうから」

ふわりと腕輪が浮かび上がり空を滑り三奈の目の前へ。

途端、三奈を縛っていた圧力が霧のように掻き消える。

そつと手を伸ばし、腕輪を取ろうとしたところで、横から入った手がそれを搔つ攫っていった。

腕輪をよこから奪った姫は、月光に晒すようにして腕輪を観察する。

「……別に仕掛けがあるわけでもないようですね」

「あら、ひどいわ。疑うの？」

「気をつけると、先ほど誰かに注意を受けましたので」

「ふ、ふ、ふ。そう、ね。貴方の言う通り、とても、とても、正しいわ、お姫様」

くるりと、背を向ける朝緋。

「それじゃあ、あのこに　龍夜に、お願いするわね、ふたりとも言葉を残して、現れた時と同じように、姿が薄れて消えていった。

二人は無言。

何も言えずに立ち尽くす。

「まったく……ただお土産を渡したいだけなら、自分でやればいいものを」

先に口を開いたのは姫だった。

既に普段の調子を取り戻したのか、表情も声も硬さが消えている。手にしていたナイフも、いつのまにやら仕舞いこんでしまったらしい。

しかし。

「……姫様、すみませんでした。わたしは、」

「黙りなさい、三奈。他人のくだらない意見を受ける必要なんてないわ」

三奈が何かを言いかけて、強い口調で遮られた。

「彼女の言うことももつともだけれど、それだけが全てではありませんし在り得ません。」

他人が怖いからという理由で全てに怯えるなんて馬鹿馬鹿しいにも程があります。

だから三奈、貴方は私の傍にいて下さい。お願いします」  
ぺこりと、きれいに腰を折って頭をさげる姫。

「そ、そんな姫さま！ やめてください！」

慌てる三奈だが、姫は決して姿勢を崩さず。

だから。

「うう……姫様、私からもお願いします。」

私は姫様の側付でいたのです。だから頭を上げてください、姫様。

そんな風にされてしまったら、困ってしまいます」

「はい、わかりました」

三奈が認めてようやく姫が頭を上げる。

からかうような視線に、羞恥で三奈の頬が朱に染まる。

「ふふ、いつも三奈にはやり込められてばかりですから。たまには、

私の気持ちも味わってください」

「ううう……そ、そんな事よりも！」

早くこの窮状を脱したいために、とりあえず話題の変更に出る三奈。

「そ、そのブレスレット！ それ、龍夜さんに届けないといけませんですよー！」

「ん、ああ。これですね。」

はい、三奈。お願いします。特に何か危険があるわけでもないよ  
うですから、普通に扱って大丈夫ですよ」

黒銀の腕輪を姫から受け取る。

よく見てみると、精緻な装飾が施された見事な腕輪だった。  
幅五ミリほどであるというのに、ぐるりと一周で何かの寓話を表しているようだ。

竜がところどころに出てきて、最後に人が槍を突き立てているところを見るに竜退治の逸話らしい。

「……え、これ龍夜さんにあげるんですか？」

「まあ確かに私も選択肢としてはどうかと思いますが」

龍夜　ドラゴンの字をその名に刻む人物に対しての贈り物としては、あまり趣味が良いとは言えない。

「それにしても南雲隊長は随分とあの人を気にかけていますね。なぜなのでしょう」

「さあ……龍夜さんもそこまでは」

結局。

話はそれで終わり。

二人はいつも通り、自宅へと戻ったのだった。

結局アリカと龍夜が戦うことになった二年前の件を姫に話された事に気づいたのは、家に帰ってさあ寝るか、という段になってからだった。

そういえば。

あの戦いも、発端をたどると南雲隊長の発言が原因だったな、と。そんな考えが浮かんで。

すぐに消えて眠りに落ちた。

風・降り立ちて（後書き）

主人公の出でこない話、二回目。  
次から話が龍夜へ戻ります。



## 道・未だ見えず

02 - 05：道・未だ見えず

誤魔化せと言われたため誤魔化した。

何をといえ、雪杜の符を使い龍夜が翌日には回復していたことである。

雪杜は破門を受けた身。

それでいて、騎士団の記録にうかつに残るような真似をすれば、破門どころでは済まされない可能性があるというのだ。

それを聞いた龍夜は。

「一体何をやらかしたんだ、あいつは……」

そんな風に思ったりもしたが、逆らう理由も特になかったので騎士団への報告には彼の驚異的な効力を持つ符　というより、彼の實力についての説明は記載しなかった。

単に、現地に住む術者に助けられ、助力を得た、とだけ記載した。当然三奈にはやたらと突っ込まれたが。

そのかわり、記録上一週間ほどまとめに動けない怪我を負った。いや、事実それだけで済めば幸運というレベルの深い傷を負ったのだ。龍夜が三日と経たずに完全に回復できたのはあくまで雪杜という強力なイレギュラーの存在があったからこそだ。

そんなわけでこの一週間と少し、龍夜は騎士団の報告書上は穏やかに。実際のところは毎夜毎夜わらわらと湧き出す<天使級>レギオンを狩るという風に過ごしている。

実はこれはかなりの無茶である。

なにしろこれだけの数のレギオン、もし見逃して<大天使級>や

それ以上の位階に昇ってしまえば大事になる。そうなれば結局龍夜の傷もそれを治した雪杜の力も露見する。

綱渡りという言葉すら生やさしい、そんな話だった。

そのはずなのだが。

「なんつーか、危なげがなさ過ぎてなんとも言いがたいな」

『だからこそ破門なんだろうけどな。ははは、異端故の爪弾きか、お前と同類だな、龍夜』

「それもなんか……」

素直に喜べない同類項である。

しかし現状は、確かに雪杜という存在があつてこそ成立していた。興味がある。

その言葉のとおりと言うべきか、雪杜は龍夜の夜の巡回についてまわり、レギオン討伐においてその力をいかなく発揮した。龍夜の傷を癒した符からもわかるように雪との術者としてのその実力は確かなもので、現状主戦力はむしろ雪杜の方である。

これは単純に向き不向きがあるの問題ではあるのだが、だからと言つて龍夜が悔しくないのかといえればそれはまた別の話だ。

『変に意地張つてるからだろう？ どうあがいたところでお前の得意分野は万象の術式なわけだし、たまにやスタイル変えればいいんだよ』

「レギオン相手に術者として立つ事に対しての違和感があるんだからしょうがないだろ」

『それが変な意地だつてんだろうに。』

ま、お前がそうしたいってんなら俺あ何もいわねえよ。

つつか龍夜、お前いつまでここに居座るつもりだ？』

「……………金がかからないって素晴らしいことだと思っただよ」

両手で顔を覆う龍夜。

現在龍夜はアレックス・キングが住んでいた教会に『勝手に』住み着いていた。

当然勝手に住んでいるため、電気ガス水道諸々の代金はアレック

ス・キングの口座から勝手に引き落とされる。

空き巣と変わらない。

一応、騎士団側には了解はとっているが所有権はあくまでアレックス・キングが持っている。

訴えられたら負けは確定だ。

『まあ確かに、怪我をするたびにバカにならない金が飛んでいくからなあ』

「あの野郎にもきつちりもってかれたしな……いや、確かにあの効力での金額は安いぞ。命には変えられないしな。でもなー？」

ソファに深く身を沈める。そこらの安ホテルよりもよっぽどいい物であるらしく、しっとりと体を包む感覚が嫌味なくらいに心地良い。

別に龍夜とて金欠状態であるわけではない。むしろ貯蓄には余裕がある。

余裕はあるが贅沢ができる身ではない。

刃牙は鎧としては非常に頑健な部類に入るが、広範囲の攻撃力が低いため多数の相手をするとうしても戦闘時間が長引いてしまう。そうなると着装限界を意識せねばならず、自然と鎧の召喚を控えなくてはならない。つまり生身での戦闘がどうしても発生することになる。

生身で戦える、限界ギリギリ。

それを超えない限りは龍夜が刃牙を召喚することは基本的に、ない。

そのため鎧の強度に反して龍夜の全身には大小様々な傷がある。

さらに、先日のようにギリギリを踏み越えてしまうこともある。

そういった事情がある以上、龍夜としては治療費をある程度蓄えておかなくてはならないという事情があるのだ。

さらに『天穿牙』という特殊な刀。この手入れにもまた、独自の術式を用意せねばならず、数力月に一度とはいえなかなかバカにならない出費を抱え込むハメになる。

これらの事情から、龍夜の台所事情は金額の割にあまり余裕が無いのであった。

仕事をせねば金は稼げず生活もできないが、仕事をすれば金が飛んでいく。これは龍夜が刃牙という鎧を形成した以上仕方のないことだった。

「年齢十七にして自転車操業を味わう男。それが龍夜だ。」

「昼は家に引きこもってごろごろして、夜は朝まで街を徘徊……学生なら補導まちがいなしだな」

「だらしねえなあ。あの野郎を見習えよ。たしかあいつ、生徒会長になるうとかしてんだらう？」

「お前が仮に学生やってたら間違いなく問題児側だよなあ」

「つつか中学校に関してはほとんど顔出してないのに卒業させてもらった立場だしな。問題児以前だろ」

「最終学歴、中卒（お情け）」

「なかなか涙を誘う経歴である。」

「もっとも、それさえ保護者の言いつけがなければ一度も顔を出すこともなかっただろうが。その上ひきこもりでもないので家にいないのだから連絡がつかない。」

「担任泣かせもいいところである。」

「あ？ 俺はもしかして、すごく嫌な生徒だったんじゃないだろうか」  
「今更気づいたのかよ。お前ずつとレギオンとばっか付き合ってるから結構頭の中乱暴っつーか乱雑っつーか、判断基準が暴力の有無だったり結構適当っていうか。割と酷いぞ、思想とか思考の軸が」

「……なぜ今さら言う」

「だって昔のお前に言っても聞く耳もってねーじゃん。お前俺の忠告無視して何度バカやらかしたか思い出せ？」

「我が身を振り返ってみるよ、なあ？」

「さすがに付き合いが長いだけあって龍夜の弱点を知り尽くしているサマエル。反論の糸口すら見いだせず口をつぐむ。」

「お前今はいいとして、戦えなくなったら飯食えなくなるよな。ど

「すんだ、女見つけてヒモでもすんのか？」

「ええええ……そんな真面目な話、いらねえよ……」

「いやいや真面目な話、将来の話。大事だろう？　なあ」

「声が笑ってやがんだよてめえ……」

騎士という一般的には日陰の存在であるものの、その多くは一般社会に普通に溶け込んでいる。

姫やアリカ、三奈は学生として。

龍夜と同じ歳であり術者でもある雪杜も、普通に学校に行き、生徒会長にまで立候補している。

工や遊乃は騎士団に正式に隊員として所属しているため、そこから給金を得ている。

学校もまともにかず子供の頃から世界中をふらふら回っている龍夜は変わり種であった。

龍夜の場合、社会性の欠如、対人能力の未熟さはどちらかと言えば環境よりも本人の資質の部分が大きい。

「今からでも学校に通ってみたらどうだ？」

どうせ、この先ずっと騎士をやって行くんだ。少し寄り道したっていいだろうに。

一人でやっていくにしても、社会性つてやつもこの先必要になるぜ？」

「……やたらと絡むな、お前」

「そりゃあな、これでも一応、お前の保護者だしよ。」

千年超える知恵袋が行つとけつっつてんだから、行つとけよ、学校。

「いやいや、正直な話俺も反省しているんだぜ？　お前の自由にさ

せすぎたせいでそんなふうになんか頑になるわコミュ不全に陥るわ」

「もういじめんのやめにしてくんねえかなあつ？！」

さすがにキレた。

正論だが完全に声が馬鹿にしている。いや、馬鹿にしていると見せかけて本心なのか。

何を言っても勝ちの目が見当たらない龍夜はおもむろに立ち上る。壁にかけてあるコートを羽織り、立てかけてあった刀を袋に収める。

『おいおい、こんな時間にどこ行く気だ？』

「出歩くには健全な時間だよちくしょうめ！」

現在昼の十一時過ぎ。

街の見回りをしながら歩いていけば、神葉学園へは十二時前には着く。

忍びこむことは難しく無いだろう。

「葛籠のやつと今日の相談だ。いい加減、やってることもかわりないしな」

『はいはい、またレギオンね。まったく真面目なヤツだよ、本当』

微塵もそんな事を思っていない声に辟易としながら、龍夜は教会を後にした。

一日平均、八十体。

これだけの数のレギオンが自然発生しているとすれば、この街の人間たちは相当病んでいるとしか言えない。

無論そんな事はない。無論完全にゼロ、などと言い切るつもりはないが、ほぼゼロパーセントの可能性をいちいち考慮していても身動きが取れなくなる。その程度の、捨てるべき、可能性というよりは空想の類でしかない。

二週間近い間それだけのレギオンが発生し続けるなど滅多にない事態である。

しかし、それがまた事態をややくしくしていた。

滅多にない、ということとは、完全になかったわけではないのだ。龍夜が可能性を完全に捨て去らなかつたのも、それが理由である。

疫病や災害、あるいは強大なレギオンの出現による瘴気による影響により、あるいはこれ以上のレギオン大量発生ということは歴史上幾度もある。

幾度もあるからこそ、よくよく調査をして原因を特定し、効果的な布陣をしかなくてはならない。

そう。

その調査が、今の龍夜の任務になってしまっているのだ。

本来の任務が滞ってしまうほどには重要な。

「ふむ。まるで足止めだな。誰かに恨みでも買っているのか？」

「正直その辺りを考え出したらキリがないってのが悲しいな。」

第一この際理由はどうでもいいだろ。目的と、相手の姿が一向に見えないのが問題だ。

いや、そもそも相手するのはなんだ。人間か？ レギオンか？

それともそれ以外の何かか？」

「レギオンだと断定しない理由は？」

「レギオンに集中的に狙われるような体質になったなんて思いたくない、以上」

「馬鹿か君は。まあ確かにレギオンが集団で個人を襲うというのはいまいち考えにくいな。統率する上位個体でもいるのなら別だが。」

これまでに何か狩り残しがいた可能性は？」

「否定はできんが……逆に聞くが、お前は自分の生活圏内に<権天使級>以上のレギオンがいて気づかないほど鈍感でいられるか？」

期間から考えて、最低一週間俺たちはそいつの存在に気づけていないわけだが」

「なるほど、的確な意見だ。とはいえ隠行に秀でた個体という可能性もある。可能性としては残しておくべきだろうな」

「あまり考えたくない可能性だけど……つつかまずいなこの弁当」  
龍夜がげんなりと箸をおいた。コンビニで買った弁当なのだが、

その半分も減っていない。

最近はず分と食費を削る日々が続いていたが、ここらでひとつい

いものを、と思つて半端に高いものを買つたのだが、安っぽい味でも満足のいく味でもない味付けが半端すぎて逆に舌が受付なかった。

「……お前、食べない？」

「いらん。僕は僕できちんと用意している」

「だよな」

雪杜の弁当は手作りだ。どうやら家にいる家政婦がつくつてくれているらしい。

家政婦つて。

理不尽な怒りを覚えたもののそれを表に出すほど恥知らずでもない龍夜はひとまずそれは飲み込んだが。

雪杜の弁当を見る。

特にこれといつて派手な印象はない。

が、ひとつの料理として非常にまとまりのある色彩とバリエーションを備えていた。理想的な弁当であるといえよう。

それぞれのおかずが、冷えても美味しく食べられるよう工夫が施されているあたりの心遣いがニクイ。

食材も良いものを使っているのだろう。葉の青さ、みずみずしさからして龍夜の普段食べているものとは違う輝きがある。

端的に言つて。

龍夜はとても嫉妬していた。

「これが今流行の格差社会つてヤツか……」

「何を馬鹿な事を言っている。食事は体を作る基本だ。そこに金をかけるのは前線に立つ術者としては重要な事だろう」

「そりゃあな、わかるんだけどよ。一番削りやすいのもまたそこなんだよな」

溜息をつく龍夜。同じようなことは師匠も言っていた。

ちなみにそのジジイは頻繁にそんな事を言っていた割に実勢している姿はとんと見たことがない。

「とにかく食べられるときに食べるべきだ」

「……ここ、学校つてことはなんかうつてるんじゃないのか」



「部外者に販売できるわけがないだろう」

さすがの雪杜も呆れ顔だ。

「別にいいだろ、売上がふえるわけだし」

「まず校内に部外者が入り込んでいる事自体が問題なんだ。つまり、今の君は他人に見つかれば悪くすれば警察に突き出される立場なんだぞ。」

我慢しろ」

龍夜はしぶしぶ、コンビニ弁当の続きを口に運ぶ。

雪杜はそんな龍夜を変なモノを見るような目で見ていた。

彼の立場から見ている龍夜という人間は、優秀な人間だった。

戦士としては。

それ以外の部分に関しては、はっきり言って破綻していると言えない。

まず騎士として。

これは噂通り落ちこぼれだ。騎士の優位性の大部分を占める攻撃系の精霊術式が扱えないのだから。

ただ盾役としては非常に優秀である。もっとも、二人が組んでは龍夜は騎士鎧をまもってはいるが、逆に言えば、生身でそれだけ戦えるという事になる。これも騎士としてどうなのかという話だ。

次に術者として。

これは、優秀だった。

騎士であり術式研究者であるというのは、珍しいことではない。

しかしそれでも龍夜の知識は多岐にわたるもので、雪杜としても興味深い話がいくつもあった。

そして最後に、一般人として。

コレが酷かった。

まずコミュニケーションが下手。作戦会議や任務中は理路整然とした物言いをしてくせに、今のように日常的な会話の中でたまに常識が欠落した発言がまざる。

非常識というよりは無常識。知らぬがゆえの軽拳が目立つ。会話をしていればわかる。

この男の日常会話とはレギオンに関することであり、非日常会話とは普通の生活のことなのだ。

どういう生き方をすればこういう人間が出来上がるんだ？  
奇妙な話だった。

ずっと戦い漬けの日々だったのか、と思わなくもないが、それにしては常識的に過ぎる。日本という文化に馴染んでいる。ただ、ルールや規則という物が抜け落ちているだけで。

経験。経験が圧倒的に足りていないのだ。

共通認識と言ってもいい。

『こつ』あれば『そう』でなくてはならない。

その無言の共有。暗黙の了解。

それが出来ていない。

龍夜の経歴について調べることはさほど難しくはなかった。

特定の組織に属しているわけではないが、特に隠しているわけでもなく、普通に調べれば普通にわかった。どこか組織 例えば騎士団 に属している場合往々にして個人情報に厳重に秘されるパターンが多いためこれは助かったと言える。  
が。

その足跡を追うことは容易ではなかった。

じっとしていないのだ。

まず中学時代の出席率が異様に悪い。義務教育でなければ留年、退学レベルだ。軽く見た限り学校行事にも積極的に参加した様子もない。いくつか参加した記録があるのは、単に登校したタイミンと行事が重なった偶然によるものだろう。

卒業式にも出ていないのだから徹底している。

ならば小学生のころは学校にきちんと行っていたのかということ、

あくまで中学時代に比べたらマシ、という程度でしかなかった。その間どこで何をしていたのかというと、これがわからない。これは組織に属していないことが逆に悪かった。

組織であればだれがどこへ何しに向かった、などの記録は残るが、個人であればそんなもの本人たちがその気にならなければ残さない。入出国記録を総当りにでもすればわかるかもしれないが、いくつかの事例を見てそれもやめた。明らかに密入国、密出国のケースが出てきたからだ。

こうなるともう痕跡をたどることも難しい。そもそも十年以上前の記録まで調べなくてはならないとなると量が膨大だ。雪杜の手に余る。

もつとも、今の龍夜を形作つたのがそういった事柄に由来するのであろう、ということはなんとなく想像がついた。

しかし。

子供にできる事柄ではない。

龍夜は少なくとも記録上は縁戚関係はすでに全滅している。

母はなく。姉も父も、十年前の大戦で行方不明。

そんな子供がどうやってはるばる欧州から帰国し、また誰にも知られず出国しているのか。そんな生活を、生き方を見つけたのか。

そもそも後見人となっている人物が何者なのか。本当にそんな人間がいるのか。

不審な点は山積みだった。

わからない。

わからないが、知らなくてはならない。

せねばならぬのだ。

葛籠雪杜は。

東雲龍夜を。

理解し。

納得。

それが得られなければ。

その時は。

「さて、そろそろ昼も終わりだ。僕は行く」

「わかった。とりあえず今日もやることは同じってことで」

「進歩がないな、腹立たしいことだ」

「変化があっても、それはそれで怖いかな」

「違う。と苦笑を浮かべる雪杜はそのまま保健室の扉を開き。

「ああそうだ。別に校内に潜むのに文句は言わんが、人に見つかることだけは避けるように。君のような厄介ごと、僕は抱え込みたくないのではな」

「わかつてるよ」

そのまま部屋をでた雪杜を見送り。

龍夜は天井を見上げる。

保険医の女は昼休みの最初に出ていったきり、帰ってくる気配はない。

少し話を聞きたい気もしたが、こちらから探すのも手間だし誰かに見つかるような真似はするなと釘を刺された。

「ひとまず人の流れが落ち着くのを待つて、外に出るか」

『ああ。それがいいだろうな』

今まで無言を貫いていたサマエルの同意の声。

サマエルは色々と特殊な存在なので、あまり人前で存在を明らかにしないようにしていた。

脳内で会話できるような便利設定もないため他人がいるときは一切コミュニケーションが取れなくなる。

龍夜が人気を避ける理由の一つである。

「それにしてもあいつ、何なんだろうな」

『なにつて、何がだ？ 別にホモにや見えないが』

「誰もんなこと言つてねえよ怖いこと言うなよ！」

『ああ、悪い悪い。』

嫌な記憶を刺激しちゃったか』

「思い出させるなあああっ!!」  
だんつ。

机を叩いて浮かび上がりそうになった記憶を奥底に押し戻す。  
強烈すぎて消えてくれないのが悲しかった。

『かはははっ。ま、お前に好んで近づくようなやつがまともなわけ  
ねーだろ。』

考えたって無駄の極みだぜ?』

「色々と言いたいことはあるが、まあ納得しておこうか」

はぐれものの自分にわざわざ連絡をよこす相手など、せいぜいが  
三奈か……あとはごくまれに、姉くらいなものか。師匠でさえ連絡  
をよこす事はない。あのジジイの場合はこちらから願い下げだが。

そんな事を考えていたせいだろうか。

人の近づく気配に気づくのが遅れた。

いや、二人のうちの片方が、もう片方の気配まで誤魔化したせい  
か。

ともかく。

がらり。

という音とともに扉が開き。

反射的に椅子から立ち上がり、滑りこむようにしてベッドの下に  
飛び込んだ。

「せんせい、いますかーい。おやま、おりましたね」

「……智晴あの子、うざい」

「この女親友にむかって死ぬほどぞんざいな言葉吐き捨てましたよ  
まったくー!!」

その声に。

龍夜は。

「なんでだ……」

頭を抱えた。

よりもよって。

知り合い二人。

この学園で。

いや、この街で四人しかいない、顔と名前を直接知っている人物。そのうちの二人だった。

四条灯麩。

湊智晴。

「……いやまてやばいぞ、この状況は限り無くやばい。智晴だけならともかく、灯麩がいる。

下手な動きをすれば、動きを察知されかねない。

故に身じろぎ一つできず。

龍夜はじつと、ベッドの下で息を潜める。

『……なんかこんな感じの都市伝説ってあったよなあ』  
黙れ。

茶化すサマエルを黙殺し、じつと耳をすます。

と。

「ほらほら、あっちゃん、無理しないで横になって

「うー

え。

ちよ。

そうして、おぼつかない足音が向かうのは、三つあるベッドのうち。

なぜか。

「う……ありがとう、智晴」

「ううん。いいの！ あっちゃんの寝顔を間近でペロペロできるのなら、それで！」

「今すぐ教室帰れ」

ぎしり。

と、歪んだ音を立てたのは。

龍夜の真上のベッド。

「……………なんでやねん」

「……………智晴？ 今なにか言った？」

「え？ 鼻息荒くしてるのに忙しくて口開いてる暇なかったけど」  
ベッドがさらにきしむ。音で、体を横にしたのだということが分る。

「智晴。あたし、あんたと一緒にいるとたまに身の危険を感じるんだけど」

「あー。じゃああっちゃんの危機察知能力は正常に働いてるってことだねー」

「あんたね……………はあ、もういいわ。ひとまず、ありがと」

「うんうん」

そう言って。智晴は椅子を引き寄せてきた。

おい。

授業。

ぶらぶらと揺れる足と、それに釣られてひらひら揺れるスカート  
の裾から視線を逸らし。

頭の中で様々な策を立てては却下立てては却下を繰り返し。

だめだー。

という結論だけが残った。

龍夜、敗北の瞬間である。割と珍しくない。

「にしてもあっちゃんが寝不足で体調崩すなんて、珍しいよね。頑丈さには自信があるって言ってるのに」

「あっただけどね……………最近ちょっと、心が折れかけたことがあって。夢見が、悪いのよ」

それがなんなのか。

なんとなく、理解できた。

居心地の悪さが広がる。他人の日記を意図せず読んでしまったと

きのような後味の悪さ。

今自分は、聞いてはならないことを。聞くべきではないことを聞いてしまったのだ。

そして。

「うーん、落ち込むあっちゃんもかわいいなあ」

迫り来る未知の恐怖。

智晴の発する異様な気配は正直龍夜をしてもどん引きさせるに申し分ない威力だった。

「智晴……あんた」

「うん。あっちゃんはいつもどおり。いつもどおりカワイイんだから、何も心配しないでいいんだよ。

怖いことも、辛いことも。

あっちゃんなら、きっと大丈夫」

「なにそれ。根拠ないじゃない。

でも。

うん。

ありがとね」

すう、と。

呼吸が穏やかになる。

たったそれだけ。

その言葉だけで。魔法のように。

龍夜の胸に去来するのは、衝撃と、安堵。

灯駈の恐怖は自分の不手際が招いたことだ。

レギオンに対して恐怖を抱くのは人間として当然のこと。

それを正しく処置できなかったのは、龍夜の責任だ。

だから。

智晴の存在に、感謝した。



四条灯麩という少女のそばに、湊智晴という少女がいてくれたことを。

そして。

龍夜はその場に完全に釘付けにされたということに戦慄した。

結局。

智晴がさつても灯麩を刺激するわけにもいかず、龍夜はそれから放課後まで、ベッドの下から出てこられなかった。

ベッドで眠る少女の下に潜む男。

変態である。

道・未だ見えぬ（後書き）

そろそろ、主人公のメッキが剥がれてくる頃。

傷・癒えず

02 - 06：傷・癒えず

イメージは、黒だ。

臭いは鉄。

深くて。重くて。鮮烈な。

脳に刃で直接記憶を刻み込まれたみたいに。

深く。

重く。

鋭く。

眩く。

暗く。

脳髓に絡みついて離れない。放してくれない。

(嫌だ

拒絶する。

無駄だと。

知りつつ。

自分という存在さえも曖昧で、自分がここにいるのかどうかも不安定で。

今にも折れそうな心だけを支えに、暗い泥の中に意識が沈む。

息苦しくて、なのに抵抗もできずに。

冷たい鉄の水に沈められるように、体から熱が奪われ、全てが消

え、霞んで。

(嫌だよ 誰か )

叫ぶ思いは声にならず。

そもそも自分には喉もなく。

そもそも自分という存在もなく。

ならば。

(誰か、助けて)

『私』って、なんなの。

自分の存在が、黒いものに、喰われる。

塗りつぶされる。

塗り替えられる。

その恐怖に、絶望に。

「あ  
」

ふわり、と。光が浮かび上がる。下から上へ。ふわふわ、ゆらゆら。

昇ってゆく。進んでゆく。

ふと、自分が『ここ』にいることが理解できた。ここがどこかはわからない、相変わらぬ深い闇の中だけれども。確かに自分が在るということが、すたん、と胸の中に降りてきた。

「暖かい……」

どんなに深い暗闇も、絶望も、今の自分の心を折ることはできない。この温もりがある限り。

そんな確信が安堵となって胸に広がり。

ゆっくり、瞳を開く。

オレンジ色の光が風に揺れるカーテンの向こうで、ゆらゆらと揺れていた。

意識はあるが思考が働かず。

灯駆は。

ただ、ぼつと。

夢をみたことだけは覚えていた。

どんな夢なのかは、忘れてしまっていたけれど。ただ、ここ最近いつも見ていた夢とは、なんとなく違ったような気がする。

目が覚めた後に襲ってくる、あの孤独感と虚無感がない。むしろ暖かな充足を感じる。

「……なんだろ」

よくはわからないけれど、悪くない気分だった。

心なしか、体もぽかぽかと暖かく熱を持っている気がする。それは嫌な感じのしない熱だ。

そのとき。

からり。

窓の開く音。

一瞬、風が強くなり、カーテンが大きく揺れる。

その揺れた隙間の向こうで、黒い影が窓から出て行った。気がする。なにせ寝起きな上一瞬の事だ。いまいち判然とはしなかった。ただ。

なんとなく「まあいつか」という気分だった。

黒というものに対して今の自分がマイナスのイメージを強く持っていることは自覚しているのに。些細な暗闇に、あの怪物を連想してしまうくせに。

なぜだか、今の黒い影のことはそんなふうに考えてしまったのだ。

「ま、いつか。風が気持ちいいしね」

夕方の風が火照った頬を優しく撫でる。

今の調子なら、夕闇も恐れずに歩くことができそうだ。

保健室の窓からそつと外に出た龍夜は、静かに、しかし深いため息をついた。

極度の緊張と、自己嫌悪。

実に昼休み終了から五時間もの間、同世代の女の子の眠るベッドの下に潜んでいるのは想像以上キツかった。

灯駄も随分と深く眠っている様子だったのでおそらく目は覚まさないだろう、と思いつつも、もしかしたら、と考えるとどうしても動けなかったのだ。

「はあ……なんか疲れた」

背中を壁に付けてずると腰をおろす。

保健室の窓の外は学園でも端に位置しており、人の気配はない。

木も植えてあるので、外から姿を見られる心配もないだろう。

遠くに響く運動部の掛け声をききながら、ぼうつと視線を上に向ける。

沈む夕日を静かに見つめた。

「良かったなあ見つからなくて。なんつったつけ、あの、休み時間の度に様子を見に来るアレックス・キングの知り合いの女の子」

「湊智晴」

「ああそいつだ。あの娘に見つかってたらおまえ、きっと口には出せないような目に遭わされたぜ、きつと」

「欠片も冗談に聞こえないんだが」

「冗談じゃねえからな」

休み時間の度にあの異様な気配が近づいてくるのはなかなか素敵なアトラクションっぷりだった。

「……参ってたな、あの娘」

『うん？ ああ四条式の方が。そりゃあそうだろう。レギオンの事を知っている様子でもなかったし、初戦がく大天使級>てのはなかなか、洒落にならんだろうなあ』

「やっぱりあの時、無理にでも記憶を消しとけばよかったかな」

『後悔してんのか？』

「してる。ずつとしていた。けど、きつとあのまま無理に記憶を消しても、後悔していたと思う」

自分を射抜いたまっすぐな視線を思い出す。

状況など何ひとつ分かっていなかっただろうに、自分自身にとって致命的な『傷』となるものだけはしっかりと見抜く瞳。

今の自分に足りないものを、彼女は持っている。

「何をどうするのが、一番いいんだろううな」

結局何もできなかった。

ただ気休め程度にと、ベッドの下に不安を和らげる符を貼り、さらには精神と肉体を活性化させるように気を送った。

うなされる声はおさまったので効果はあったのだろうが 本当

に、気休め程度だ。

『さあてなあ。ま、少なくともレギオン討伐に人生を捧げることは、ないだろうけどな』

「……またそこに話を持っていくのか」

『ああ。多分きつと、お前を一般社会になじませられる最後の機会だからな。ま、そうはいつでも素直に従うテーマじゃねえのは理解してるけどな。』

つてことでまあネチネチと小言を言っつて責め続ける事にしてみたつてわけだ』

「うっぜえ……」

『かははは。まあ俺の立場とはいいい符号なんじゃねえのか？』

さて龍夜それはそうと、もうそろそろいい時間じゃねえのか？』

サマエルの言葉に時計を見ると、時刻は五時も半ばを過ぎていた。今日の夜もどうせレギオンがわんさかと襲ってくるのだらうか

ら準備が必要だ。

雪社に任せておけばそうそう準備が必要な事態に陥ることはないだろうが、好き好んで油断を選ぶ必要もない。

立ち上がり、窓を振り返る。

カーテンの向こう側にいる少女の事を一瞬だけ想像して。

跳躍。

一足で学園を囲む塀を飛び越えた。

夕闇の中をひとり歩く。

いつまでたつても、灯駈の脳裏からはいつかのあの怪物の記憶は消えない。

ずっと消えないような気がしていた。

あれが、ナニモノであったのか。いったいどうなったのか。なぜ自分が無事なのか。

何もわからない。

わからないからこそ、怖い。

現代社会に生きてきて、完全に正体不明の存在、というものと遭遇する機会などほとんどない。

そしてそれが、見ただけで生理的嫌悪感で全身が拒絶の反応を全力で示すような存在だったのだ。精神へのダメージは計り知れない。

当然、灯駈は知らないことだが。

レギオンは人の精神に大してよくない影響を与える。

それは当然といえば当然。人間の負の感情が形を持ったのがレギオンであり、それらがより凝縮し、強力になったものが位階を昇るのだ。

真正面から何十人、何百人、何千人という数の、あらゆる負の感



情を向けられる嫌悪感がそこにはある。

憎悪。悪意。嫉妬。劣情。害意。不信。怨恨。猜疑。憤怒。嫌悪。  
絶望。

言葉にできるものからできないものまで、ありとあらゆる人間の  
負。

騎士や術師とて、訓練なしにいきなり向かえばあまりの衝撃に気を喪うこともあるくらいだ。

なんの知識も準備もなく、しかもく大天使級を凌いだ。それは素直に、賞賛されるべきことであった。

しかしそれを知っても、灯駈はやはりこの恐怖を乗り越えられない自分を不甲斐ないと評するだろう。

それは意地と呼ばれる感情だった。

ふと、その道に視線が向かう。

「まあ、さすがに行かないけどさ」

そこは、隙間の道。あの森に続く、隠された道。

さすがに、あの血と闇にまみれた場所に踏み入る勇氣も無謀も持ちあわせてはいない。

「近所にこんな場所があるっていうのも、なんていうかあんまりいい気持ちはないけど。」

……そういえば、あの時のあの

死体。

は。

どうなったのだろう。

いや、どうなったのか、は、分かっているのだ。

だって。

あれだけ。

ぐちゃ。

「ふう」

深く、深く息を吸い、ゆっくりと吐き出す。ひとつ、この日々から学んだことがある。

恐怖は自分の意志を折ることはできない、ということだ。

どれだけの恐怖が自分にのしかかろうとも、四条灯駈は四条灯駈としての意志を曲げず、変えず、貫くことができる。己がそうであるうとする限り。

だから。

「お墓くらい作ってあげないと、いくらなんでも、ね」「いや、それ以前に警察に通報するべきか。

ずっと思い出すことを避けていたが、よくよく考えなくとも自分が見た光景は異常な物であると同時に重要な物であるとも気づいた。気づいたが、どう説明したものか、と頭を悩ませる。まさか、見たこと、起きたことすべてを語るわけにもいくまい。どう考えても白い格子付きの部屋に閉じ込められる。

だから。

「はあ」

やれやれ、と呆れる。

自分の単純さに。

今日はちよつと調子が良いからと、あっさり前言を翻すのだから。

「まあ、見てから決めましようか」

足を向けた。

彼女に深い深い『傷』を残した、その森に。

森は。

秋の爽やかな風に包まれていた。

困惑が灯駈の表情に広がる。それは、社の前に立ったときに頂点に達した。

「ええと、これ、どういう事かしら？」

空気が澄んでいる。

程良く光の差し込む、森の中の社。

秋の夕暮れの光がチラチラと揺れ、夜の訪れが近いことを示していた。

そのすべてが。

「すぐく、いい場所みたいじゃない」  
いや。

事実、ここは条件自体は非常に恵まれた場所だったのだ。

閑静な住宅街の、さらに道一つ向こうにある、ひと目のない森。

地形のせいか風は心地良く吹き渡り、木々の奏でる葉ずれの音はささやかな歌となって耳を撫でる。

差し込む光も強すぎず弱すぎず、この時間だと特に陰影のコントラストが際立ってまた見事な情景を醸し出している。

そんな、素敵な場所。なのだ。  
ただ。

この前とは。

「空気が、ぜんぜん違う」

胸いっぱい、息を吸う。

気持ちやすらぐ。

以前のような、立っているだけで肺が押しつぶさそうな圧迫感も、

ねっとりとした嫌悪感も何一つない。

あるがまま、みたまま、そのまま。そんな世界が広がっていた。  
混乱する。

いや、悪いことでないことは確かだ。正直に言えば悪い予感がすればすぐに引き返すつもりだった。森に一步踏み込んでヤバイと感じたらすぐ帰るつもりだった。しかしそれはなく、それどころか迎え入れるように澄み渡る光景が広がって。

なにこれ。

色々と納得がいかない。

「……けど、まあよしとしましょうか」

ここはもう悪い場所ではない。

それだけが確かならばそれでいい。

警戒心は残したまま、しかし余裕を持って。

緊張の面持ちで、社の裏に回る。

「まあ、予想はしてたわよ」

何もなかった。

あれだけ生い茂っていた雑草が見事に綺麗に刈り取られていて。

むき出しになった地面には、何も残っていないかった。

試しに、自分が倒れた場所あたりの地面を撫でてみるも、ただの土の感触だけが返ってきた。指についた土の匂いを嗅いでみても、やはり変な匂いはしない。

つまりは、腐ったような臭いだとか血の臭いだとか。そういったものだ。

灯駆があゝの怪物に出会ってまだひと月も経っておらず、あれから雨は降っていない。もっとも、台風が近づいてきているようではあるが影響が出るのはまだ先だろう。

だから、痕跡が無くなる理由など本当はないのだが。

「まあ、あれだけの雑草が無くなっている、っていう時点で期待は

できないわよね……誰がやったのかしら。

警察？ の、仕事じゃないわよね。行政かしら。だとしても、あんなものが見つかればそれなりに騒ぎになってそうなものだけれど「いや。」

あれだけのものだからこそ、逆に隠蔽にかかった、とか。

バラバラ死体という言葉すら生易しいものが見つかった、などということになれば、近所に住む人々にどれだけの不安を与えることになるか。そのあたりの事情を慮って隠した、とも考えられないだろうか。

確かなのは。

いずれにせよ、今自分がこの場所でできることは何ひとつなさそうだ、という事だけだ。

そう考えて、失笑が漏れた。

「また、わからないことばかり。いい加減、やになっちゃうわね」その時。

そちらに視線が向いたのは、本当に、ただの偶然だった。

灯駆が立っている社の裏側の、さらにその先。

雑草の刈り取られた領域の、ギリギリのラインにそれはあった。

最初は、それが何かはよくわからなかった。

けれど、近づいてみてわかった。

みつつ、土が小さく盛られており、その上にそれぞれ、大きな石がのせてある。

石の前には湯呑みが埋められており、湯呑みの中には水が入っていた。その隣には花。そして、それらの前には小さく灰が溜まっている。

簡易的ではあるものの、それが何であるのかは容易に想像がついた。

「お墓だ……」

みつつの、墓。

「こんなところに、誰が……」

いつからあるのだろう。花は比較的新しいらしく、まだ枯れてはいない。線香の灰が風で飛ばされていないことを考えても、最近、誰かがこの墓を参ったことは確実だろう。

たしかに、ここはいい場所だ。

死者の魂の安らぎを願うには十分な。

そこまで考えて。

思う。

この下に埋まっているのは。

はたして。

何、なのだろう。

犬。猫。代表的なペットといえばそれくらいだが、墓の大きさをらして猫はないだろう。ならば犬。大型犬が三匹。なるほど、それならばこの大きさも納得だ。何も不思議なことはない。

だからきつと、この下には天寿を全うした老犬が三匹。

「……って考えるのは、さすがに卑怯かしら」

社を振り返る。

正確には、先ほど、灯駈自身が土を検分した場所を。

大型犬の死体を抱えてあの細い道を通るのはなかなか大変だろう。

それよりも、ここにもともとあったものを埋めた、と考えたほうがよりしっくり来る。

つまり。

「そういう事、なかしら。」

でもそうなるは今度は、残りの二つがやっぱりわからないのよね「さてこれはどういう事だろうか。」

考え込もうとして、やめた。答えを得るには情報が少なすぎる。

そして今情報を得ようと思うのならば、きっとこの墓を暴くより他にはない。

ありえない。

己の恐怖を乗り越えるために。その程度の理由のために、墓を暴くなど。そんなこと、四条灯駈が許すはずがない。

だから、ここまで。

自分が知り得たことはここまでで、結論は結局何もわからない、という所まで。

それでいいと、納得する。

「うん、よし」

ひとまず、自分に出来ることはここにはもう残っていない。いや、ひとつしか残っていない。だから。灯駈はその場に腰を下ろし、手を合わせ、瞳を閉じる。心を鎮める。静かに、穏やかに。

この下で眠るのが人であろうと、なかろうと。

あるいは、万が一。自分が出会ったあの怪物であろうとも。

こうして墓を建てられたということは、この下で眠るものの死を、誰かが悼んだということだ。ならば自分も、祈るくらいはしてもよいだろう。

その魂が、どうか安らかでありますように。

家に帰る頃にはすっかり日が落ちてしまっていた。

「ただいまー」

「あらあ、おかえりなさい、灯駈ちゃん」

出迎えたのは緋金葉鉄あかがね はがね。現四条式において、三番目の腕を持つ。彼女は四条の家に住み込みをしているのだ。

「ただいま、葉鉄ねえ。きょうは仕事はもう終わったんだ」

「はいー。最近は街もだいたい平和で。ちよっと前はどこもかし

こも不安でいっぱい、といった感じだったんですけどねえ」

「そうなんだ」

ちなみに、葉鉄がなんの仕事をしているのか、灯駈は知らない。とうかきつと誰も知らない。以前灯駈の父が訪ねようとしていたが、数分後戻ってきたら訪ねようとした事自体を忘れてしまっていた。何をした。

なにかしらの職業に就いているのか、いないのか。それさえもわからない。なにかこう、ロクでもない雰囲気だけはぶんぶんしているのがまたタチの悪いところだ。

生活費はきつちりと出してくれる（その上懐には余裕があるのかお高い洋菓子和菓子をしょっちゅう買ってくる）ので、まあいいか、というふうに受け入れられている。

ともあれ。

そんな葉鉄の言葉に、ふと引つ掛かりを覚えた。

「不安でいっぱいっていうのは、やっぱり北泉公園の事件のせい？」

「んー、それもありますけどお、ビルの爆発事件の方が影響としては大きいかなあ、と思ったりなんか」

「ビルの……ああ、そういえば」

使われていないビルが何故かいきなり爆発したとか。それもかなりの勢いで。

ガスも電気も通っていないビルでの爆発で、幸いにも落下物等による被害もなく被害者はゼロ、という話だった。

「どうしてそれで、問題になるの？」

「場所が場所ですからねー。あのあたりはもともと治安が良くて、いくつかの派閥が縄張り争いを繰り返してるんですよー。

で、そんな場所でいきなり爆発。

どうも、誰も彼もが相手の挑発だ、と思い込んだみたいで「はー。なるほど」

見えない恐怖に踊らされた人たちが、またここにも。

「そうして考えてみると、新学期が始まってからこっち、街中不安



になっていたのね」

「そうなんですよね。まあ、見えないからこそ恐怖と警戒を抱いてしまっ、というのはわかるんですけどねー」。

あ、もうすぐご飯ですから。着替えてきてくださいね」

そういって、まったくもう骨の一本や二本でグダグダ言うのなら最初から言うこと聞いてくれてればよかったですけどねーまったく関節増やさないとこちらのいたいこともわからないんでしょっかー、と、まったくよくわからないひとりごとをつぶやきながら立ち去る葉鉄の背中を見送って、灯駆は自室に向かった。

自室についてまず通学カバンを机の横に起き、制服を脱いでハンガーにかける。

部屋着に着替えてカバンから携帯電話を取り出すと、メールの着信を示すランプが点滅していた。

着信数は一件。

送信者は。

「智晴じゃない。どうしたのかしら」

智晴とは校門の前で別れてそれっきりだ。今日も師匠の手がかりを探すと息巻いていた。

さては進展でもあったか、とメールを開いて、その感想が。

「馬鹿なのかしら」  
であった。

いや、彼女は酷くない。いや、彼女の智晴に対する扱いは若干酷いものはあるが、まあそれは彼女なりに心をゆるしている証でもある。

ともあれ、酷いものは別にある。

届いたメールの文面だ。

『今日って何Gだっけ』

意味が分からない。

しばし悩んで。

「あ、智晴？ このメールの文面、意味が分からないんだけど、あなた本格的に脳を……？」

メールではなく電話で直接聞いたですことにした。

『あーうー！ あっちゃん酷いよー！』

「ごめんごめん。でもこの文面で何を理解しろっていうのかがちよつと」

『いやあ。なんかこうびっくりしちゃってさー。このびっくりをどうやってあっちゃんに伝えようかって思ってその結果が』

「失敗ね」

『失敗か！ うーん、やっぱり強敵だなあ』

一体何と戦っているんだろうと思いましたが、まあそれはさておいて。

「それで智晴。一体何があったの？」

問う灯駈の声に、電波の向こうで智晴はしばらく口ごもり、やがてこう言った。

「あのさ、あっちゃん。

人が空飛ぶ所見た……っていったら、信じる？」

翌日、早朝。

早朝練習のある運動部の声を遠くに聞きながら、智晴の言葉を待つ灯駈。

場所は保健室の裏。奇しくも昨日、龍夜が夕焼けを見送っていた場所だ。

ここならば、うっかり他人に話を聞かれる心配もない。

「それで智晴。どういう事なの？」

「いやあ、まあその」

智晴が語るには、こういう事だった。

彼女は師匠を探している。が、手がかりは一向に見つからない。彼女の情報収集能力が十全に発揮されるのはこの街限定ではあるものの、逆に言えばこの街で人の口に登った話なら時間はかかれど集めることは可能。

そう自負していたのだが、どうやっても師匠の情報が集まらない。これは発送の転換が必要だと、ならば空の情報を手に入れようとなった。（なぜそうなるのか灯駆は問い詰めようとしたが諦めた）そうしてここ数日は、夜の街を高いビルから、夜の暗闇でもシャツに透けるブラの紐までバッチリ見える超高性能の双眼鏡を使って（あとで絶対に回収しようと灯駆は心に誓った）、夜空を観察していた。

特に重点的に人目につかない場所を探した。彼女が情報を手に入れないのなら、それは人の目に入らず、人の口に登らない場所であると考えたのだ。

そして。

見た。

その黒い影は、ビルからビルへ。凄まじい速度で移動していた。

その後を追うように、もうひとつの影。

その二つはグループらしく、常に合わせて移動を繰り返していた。驚いたのは、その速度と跳躍力。

ビルからビルへ飛び移るのだが、そのビルとビルの間にはビルが二、三棟建っているのだ。

彼女の特製双眼鏡をしてもその速度と距離で影の姿は判然としなかったが。

人影、だったように思う。

ということだった。

「つまり智晴は、得体の知れない何か、を見たっていうの？」

なぜこう次から次へと未知との遭遇が繰り返されるのか。今年の運勢はそういう流れなのか。嘆きつつ、尋ねる灯駈。

「うん。そういう事」

「そう、ねえ。正直なんとも言えない、というのがわたしの感想かな。

それだけなの？」

「それだけ、というかなんというか。むう」

困ったように智晴は人差し指を頬に当てる。

「……智晴。何があったの。教えて」

夕焼けの中で三つ並んだ墓石を思い出す。

何かあってからでは、遅い。

しばらく黙っていた智晴は、やがてゆっくりと、ためらいがちに口を開いた。

「……あったの」

「会った？ 誰に？」

ふるふる、と首を横に振る智晴。力のないその動作に、不安が胸の中で鎌首をもたげる。

「目が」

「め」

こくり。

「目が、合ったの」

ひやり、と心臓を直接冷たい手で握り締められたような。

「その、黒い人影と、目が合った気がするの」

智晴は。

困ったように笑って。

違う。困っているのだ。ただ、それを正直に顔に出すことをしないで。

だから。

「そう……」

手を打たなければ。

その黒い影が何者かなどは分からないが。そして、どうしてもあの怪物を連想してしまうが。それでも、いや、それならばなおのこと手を打たなくてはならない。

「うん。わかったわ、智晴。つまり、それが一体なんなのか、あるいは誰なのか。それがわからないのね」

「う~~~~ん」

しかし智晴の歯切れはやけに悪い。

というか。

これは。

まさか。

「思い至るフシでもある……って事？」

智晴は。

眉間にシワを寄せ、指を当て。

「あっちゃん、放課後、教会まで付き合ってくれない？」

顔を上げて、そういった。

傷・癒えず（後書き）

2章そろそろ折り返しです。

誰が傷を負うのか。

## 陰・追い求め

02 - 07：陰・追い求め

世の中うまくいかねえなあ。

そんな事を考えながら、龍夜は教会のリビングのソファに深く体をうずめて横になっていた。

昨晚もいつものように大量の<天使級>レギオンとの戦いだった。数にしておおよそ五十体超。市街地で発生する量としてはやはり破格であり、周囲への影響を考慮して大型破壊術式が使えないため一気に撃破することもできない。

いつも通りの地道な戦いだった。

しかし、いつも通りでは終わらなかつた。

戦闘を終えた龍夜は、それでもなお自分に視線が注がれている事に気がついた。

そちらを振り返るも、周囲のビルには誰もいない。

試しに、視力強化の術式で視線を感じる方角をよくよく見てみると。

「見られてたよなあ、絶対」

「確かなのか？ 夜闇に加えてあの距離だぜ？ まともにくっこの姿を捉えられたとも思えねえけど」

「けど視線があつた『感』は確かにあつたんだよ。それに、その瞬間にあつちも逃げ出したし」

「顔は見てねえのか？」

「さすがに、そこまでは。ただまあ、なんとなく予想はつくといつかなんというか」

昨晚雪杜に問い詰められた時も言葉を濁してしまった。

雪杜はその人物がこのレギオン大量発生の原因である可能性を指

摘したが、龍夜としてはそれはないという考えを伝えた。何しろ動きが素人過ぎた。また、あの場には二人いたにも関わらず龍夜のみに注目していたのも不自然。

が、その不自然さは龍夜にとってよくない予感をもたらすものだった。

「俺のことを知ってる人間である可能性がある、な」

ほぼ行動を共にしていた二人（距離からすれば影くらいの認識しかできなかったはずだが）のうち、片方に注目する理由はそんなところだろう。

狙ったものか偶然かは別にしても、選択肢がある時、自分の知識や経験などが活かせる場面であればそれを優先するのは当然の事。

目撃者は、影を龍夜だと認識したからこそ、龍夜に注目した可能性が高い。

まあ、一目惚れをしたとかそれこそなんとなくの可能性もあるが、あの場面でそれを可能性として考慮に入れるのは遊びが過ぎるだろう。

その前提の場合、考えられる人物は複数出てくる。例えば、騎士団の連絡員や街の情報屋、警察関係者等、龍夜の任務に関しての情報を提供してくれるような人間だ。

しかし彼らであれば、少なくとも龍夜に視線を向けられて急いで姿を隠す理由がない。

それ以外で龍夜のことを知っているのは。

ひとりには、葛籠雪杜。

そして。

「湊智晴……か。そういうえば、アレックス・キングを探しているって話だったな」

意図してか偶然か、彼女は情報の断片に手をかけてしまったことになる。

龍夜としては気が重い話だ。

『どつする？ 記憶封印するか？』



「どつやつて。封印対象がわからんだろう。遡及封印にしても項目消去にしても、このパターンは難しいぞ」

相手がいつから、どの程度こちらのことを把握しているかがわからない。

半端な記憶操作は余計な混乱や、さらなる不信、好奇心を招く結果になる。

『じゃ、素直に全部話すか、それともしらを切るか？』

龍夜は口を閉ざした。

はつきり言っただけ。

これが何も知らない一般人や、敵対しているような人間であれば最悪項目消去という方法もあり得る。

しかし今回見つかった相手は一応とはいえ顔見知り。さらに、こちらの思惑とは別で、アレックス・キングの捜索をしている。さらにはその情報収集能力も高い。

慎重に、判断を下す。

「術式による記憶の操作は、ナシだ。かと言って素直に全部を話すわけにもいかない」

だから。

「核心以外を話す。話の焦点を逸らす。

逃げの一手だ」

『なるほど、下策だな』

「わかっている。わかっているさ。」

だからってそれ以外の手段はどうにも乱暴なものしかなくなってしまう。

それは俺の趣味には合わん」

『へ。趣味がどうこうってレベルの話でもないと思うがな。

ま、お前がそうしたいってんなら構いやしねえよ。

それにあの娘がここに来るとも限らねえしな』

龍夜は少し考えて、同意する。

「そうだな。」

情報収集能力が高いつてことは警戒心や危機察知能力も高いつて事になるだろうし。

昨晚の事で混乱していれば、今日いきなりやって来る、なんそことはないだろう。早くとも数日時間を開けるか」

あるいはもう会うこともないか。  
それは希望的観測が過ぎるか、と考えて。

ぴんぽーん。

呼び鈴が鳴った。

龍夜ソファから体を起こし、固まる。

サマエルも何も言わない。

時刻をみれば学校の終わる時間は過ぎている。

過ぎているが、この時間だと終わってすぐ、教会まで来たのではないか。

いや、まだこれが湊智晴の来訪を告げる物だと決まったわけでは

ぴんぽーん？

「いやどういった芸当だよ」

なぜか呼び鈴の音が微妙に疑問形の音に変わった。いつまでも出てこない龍夜を訝しんだのだろうが、まずそんな機能は付いていないし付ける意味自体がない。

しかし龍夜の硬直を解く効果はあった。

そしてついでに確信した。湊智晴の来訪を。

龍夜はわずかに緊張を顔に浮かべながら、玄関へと向かう。

そして扉の前に立つ頃にはその表情をいつもどおりのものに戻して。

「はいはい、どちらさま」

扉を開いて。

氷結した。

「や。どーも、東雲さん。この節はどうも、湊智晴です。んで、こちらがあちしの嫁兼親友の あたっ?!」

「初対面の人の前で変なコト言わないで。はじめまして、東雲龍夜さん。わたしは」

言葉を切って。

その澄んだ瞳でまっすぐに龍夜を射抜いて。

「四条灯駈です」

くそつたれ。

龍夜は心のなかで運命を罵った。

衝撃から立ち直ったのは早かった。

しかし持ち直すのには時間がかかりそうだと内心で現状を評価する。

(しかし予想し得た事態ではあるわけだ。俺がそれを怠っただけで湊智晴と四条式が友人関係にあることは分かっていたんだから)

己の迂闊を呪うが、それにしても湊智晴の行動の速さはどういう

事だ。恐怖心がない、というわけではないだろう。その証拠に、リビングのテーブルで向い合ってからというもの、落ち着かない様子だ。

以前ひとりで来た時はもう少し落ち着いた様子だったので、気にかかることがあるのは明白。

対象的に隣に座る灯駆は落ち着いた様子である。ただ、時折探るような視線を向けられるのは正直あまりいい気がしない。それは後ろめたさからくる感情だ。

(よくよく考えたら、記憶処理を施した相手とまともに向かい合うのはこれが初めてだな)

普通は記憶の封印を行った相手とは大事をとって接触をしないように心がけているのに。

つくづく、この街に来てから何ひとつ思い通りになっていないことを実感する。

そんなマイナス思考を脇におく。

目の前のことに集中しなければ、余計なボロを出しかねない。

「それで、二人は今日は何の用事で？ アレックス・キングの情報なら、相変わらず手詰まりの状態で手がかり無しなんだが」

それとなく、話題の道筋を作る。

「いやいや。今日の話はそれとはまた別の話なんですけどねー。なんと言いますか、あー」

歯切れが悪い。

やはり昨晚見ていたのは彼女かとあたりをつけるが、無論表情には出さない。

怪訝な表情を浮かべて見せながら、智晴の言葉を待つ。

「うーん、なんと言いますか、聞きにくいといたしますか。あー、言ったら変人扱いうけそうってどうか」

「難しい問題なのか？」

あと内心で既に変人認定は済ませてあるのだがこの気持はどこへ

持っていけばいいのかと、脳みその隅っこでそんな事を考える。  
考えてたら。

「智晴、あんたは十分に変人だからそこは気にしないでスパツと行きなさい」

「親友すげえな」

反射的に言葉が出た。思っても言うか、普通。

「何か？」

「いえ」

やたらと冷たい視線に睨まれて顔をそらす。もはや後ろめたさとか関係ない、ただの反射的な行動だった。

「うわあい、あっちゃん初対面の人にもすんごい容赦無いね。」

まあいいや。んじゃ東雲さんに質問！ 昨日の夜の十一時頃どこにいたか覚えてる？」

ストレートな質問に、龍夜は一旦間を空ける。昨晚のその時間は、レギオンの群れに遭遇する少し前。  
考える。

もし智晴がその時既にこちらの姿を目撃していたとしたら、ここで嘘を吐く事は余計な疑いを招きかねない。なら素直に答えるべきか？ それはそれで、自分の存在を肯定するだけだ。

ティーカップに視線を落とす。

琥珀色の液体から立ち上る湯気を二秒間眺めて。

「その時間なら、確か繁華街からここにもどってきている最中くらいだと思っが」

虚実混ぜた回答をする。

その時間はむしろ繁華街の影から影を領地調査していた時間だ。  
「ふむ、なるほど。」

それとちよいと質問なんだけど、東雲さんとうちの師匠って、同じ……ええと、会社？ 組織？ そういった関係の人、なんですよ  
ね」

「いや、若干違うな。業種が同じってだけで俺はフリーでうろつろ

してる」

「うるうる……」

なぜか灯麩が胡散くさげに見ているが龍夜には理由がよくわからない。なので話を続ける。

「アレックス・キングは業界最大手の管理職つてところか。で、俺は外注みたいな感じで、時折仕事を受けるような関係だな。

もっとも、アレックス・キング本人との面識はないけどな」

「ふむふむ、なるほど。んー、まあ、大体わかったかなあ。んじやあまあ、無理でもないのか」

なにやらひとり納得している様子の智晴に若干拍子抜けする。

彼女は一体何を確信したのか。

「その質問がいったい何になるんだ？」

「や。あくまであちしが納得したかっただけだから、もう大丈夫。

うん、納得した納得した」

「……いや、俺が納得できないんだが」

「いやまあ」

しかし智晴はそれ以上語るつもりはないらしく、紅茶を口にして、

「あ、やっぱりおいし」

と、前回と同じようなことを呟いた。

その様子を見て、龍夜は追求を諦めた。

すっかり落ち着いてしまっている。腹を決めたとも言える。

つまるところ、今回の彼女の中の問題は、彼女自身の手で決着がついてしまった。終わってしまった。

そうなった以上、あちらにその気がない限りはこちらからは手出しができない。果たして彼女はどのような結論を出したのか。それを調べることもできない。

取るつもりはないが、強引な手段を取ろうとしても、隣にいる灯麩が黙ってはいないだろう。

(……どのくらい強いんだろうな)

ふと、考える。

強靱な精神を持っていることは間違いない。常人ならば発狂しておかしくないレベルの負の精霊の影響を受けたはずなのに、日常生活を普通に贈っている様子が見て取れる。類稀な資質はあるだろう。武芸者としてもそれなりの腕はある。龍夜の実力が素人に簡単に投げられる程度のものならば、とうの昔に死んでいる。それは逆説的に彼女の実力を証明するものでもある。

が。  
(まあ、真面目にやれば負けはない……か?)

四条式と一伎型では、特性においての優劣はないはず。というよりも、互いに苦手とする種類の相手である。

そうであれば単純に地力と経験がものを言う。それらにおいて自身が負けているとは思わない。

自惚れではなく、単に現実として龍夜は『そうでなくてはならない』状況にあるのだ。

他の騎士と、無数多系統の術者と、そしてレギオンと相対するためには、能力的に不全を抱えている以上他の部分で挽回するしかないのだから。

そんな事を考えて見つめてしまっていたせいだろうか。

灯駈と目があった。

「……何か？」

「え、ああいやなんでも」

というかこいつは何でここにいるんだといういまさらの疑問がふつてわいた。

まあ口にだした瞬間なぜか怒られる気がしてならないので黙っているが。

単純に考えて、不安だったから付き添いが欲しかったというのと、護衛の役割、といったところか。

とはいえいくらなんでも今の灯駈は警戒心むき出しにも程がある。何かしただろうか。いや、何かしたかといえば記憶を封じるといふ人権侵害甚だしい所業をしているわけだが、今の灯駈はそれを覚

えているわけではない。つまりは初対面なのだ。  
それなのにこれだけ警戒心を向けられるのは、龍夜としては納得  
がいかないと同時に、不穏な空気を感じさせた。

はつきり言えば。

これまでに出会ったどんな人間よりも、目の前の男が胡散臭くて  
仕方がない。

出会った瞬間に、なぜか警戒心のゲージが一気に振り切れたのだ。  
灯駈自身にも根拠のない確信だったが、ひとまず彼女は自分の直感  
を信じることにした。

目の前の東雲龍夜という、黒ずくめの目付きの悪い男は信用に値  
しない、と。

智晴の意見ではお人好し、という話だったが、それも怪しいもの  
だと内心思う。

龍夜が自分の警戒心に不審をいだいているのは表情からも察せら  
れたが、灯駈は態度を改めるつもりはなかった。

紅茶に口をつけながら（悔しいことに、龍夜のいれた紅茶はこれ  
まで口にしたどんなものよりも味わい深かった）、こっそり目の前  
に座る龍夜を観察する。正確には、その体格を計測する。

灯駈が考えているのは、腕が発見されたあの夜、北泉公園にいた  
ベンチに腰掛ける男の事だ。

黒ずくめの上夜だった為にしっかりと姿を記憶できているわけ  
はないが、服装、体格共に一致している ように思う。

勘だが。

こんなことになるのならばあの夜しっかりと見ておけばよかったと  
思うものの、夜中にベンチに座る男もそれをガン見する少女も等し  
く変質者でしかないという事に気付いてその考えを捨てる。第一今



言っても仕方のないことでしかないわけで。

「あー、その、し……じょう、灯駈、さん？」

ためらいがちに龍夜が灯駈に声をかける。そこでようやく灯駈は自分が龍夜を半ば睨むように見ていたことに気が付いた。

さつきとは真逆の形だ。

「なんですか？」

ぶっきらぼうに答える灯駈。普段内心はともかく表面上は誰を相手にしても穏やかな対応をする灯駈を知っている智晴は、その様子を見て少なくない驚きを覚えた。

そんな智晴の様子には（これも珍しいことに）気付かず、灯駈は龍夜を見据える。

その表情に気圧されたのか、龍夜はためらいがちに口を開いた。

「いや……なんていうかな、俺が何かしたのかと思ってな。気のせいでなければさつきから睨みつけられている気がして」

「いえ気のせいではないので気にしないで下さい」

「あっちゃん今なんか無茶な注文が飛び出したよ？」

そうだろうか。

そうだろうか。

「ええと、別にあなたが何かをしたというわけではないですから。単純に第一印象がちよっとアレなだけで」

「またえらくどストレートな意見が来たなおい」

フォローをするつもりがつい本音で追い討ちをかけた灯駈に、さすがの龍夜も後ろめたさが吹っ飛んだのか地が顔を出す。

その龍夜の反応をみてさらにピクリと眉毛を動かしてじつとりと睨みつける灯駈。

智晴は我関せずといわんばかりに紅茶を飲みながら視線を逸らす。三者三様の反応が互いにすれ違い、微妙な空気がリビングに満ちる。

しばしの沈黙。

時計の音が冷たく響く。

それを打ち破ったのは灯駈だった。

ふう、と息を一つはいて、彼女はすつと綺麗な動作で頭を下げた。「ごめんなさい。なんだか、気が立っているみたいです。」

あなたと争いに来たわけではないですけど。なぜかあなたを見ると、頭の裏側がざわわしてしまつて」

「ああ……うん、そう……」

なぜか龍夜の表情が引きつったが理由はわからないので放置。

現状の灯駈の態度に一番不満をいいているのは、灯駈自身だった。

敵意と悪意と害意には、歴とした差があり意があり、なによりも発揮されるべき場というものがある。

敵意とは対抗勢力に対して向けるべき意志であり。

悪意とは否定存在に対して生じるべき感情であり。

害意とは対関係に対して発生しうる指向である。

殺意はまた別の分類になるから置いておくとして、感情の動きにより発生するこれらの情動は武芸者から切り離すことはできない。

武を奮つものとして感情はなくてはならないものだ。むしろ人よりもそれを滾らせ、進らせ、燃え上がらせ、そして抑え御さなくてはならない。

そして四条灯駈は武芸者だ。それを自覚し、己に課しており、何よりも自分の誇りとしている。

己の未熟も幼さも理解している。感情の暴走を抑えられないのは人として当然だとも思う。

けれど、その根源さえ見失うのはいくらなんでも許容の範囲を超

えていた。

敵意を抱くのならばその理由を。  
悪意を抱くのならばその原因を。  
害意を抱くのならばその対象を。

明確にしなければならぬ。

彼女が暴力を用いるその先を。  
そう。

彼女はしつかりと自覚している。

自身の暴力の衝動が龍夜に向かっていていることも、それがどこから生まれたのが理解できないことも。

だから。

(どうころんでも、この人とは一度、ちゃんと戦うことになるんだろうな)

彼女が彼女を知った時、それが実現することを、無意識の向こうで予感した。

結局微妙な空気のまま、時刻が六時を過ぎたあたりで解散となった。

二人を見送るために玄関へ出る龍夜。

「……結局、今日の用事はもういいのか？」

「それはもう平気なんで、まあ気にしないで下さいな」

「色々納得がいかねえ……」

「付き合わされた私も納得がいきませんけどね。まあ智晴のこういう気まぐれ暴走体質はいつものことなので、あまり気にしない方が精神衛生上正しいですよ」

「本当、容赦無いよな……」

「なにか問題でも？」

「いや」

もうこいつ記憶もどってるんじゃないのかとさえ感じる態度に龍夜も辟易する。

その上灯駈はそれを意識し自覚し反省しているというのだから、これ以上何かを言うわけにもいかず。腹の底から湧き出すため息の誘惑を抑えこむ。

「それじゃあまあ、そろそろ日の落ちる時間も早くなってきたし、気をつけて帰れよ」

「あいあい。東雲さんも、何があるかわからるので気をつけてくださいね」

「はいはい」

元気よく歩き出す智晴と、軽く頭を下げてそれに続く灯駈。そして。

「あ」

くるりと、智晴が振り返った。

「そいえば東雲さん、歳いくつ？ 勝手に同い年か少し上かなーって思ってたんだけど」

「？ 何だ急に。まあいいけどさ。俺の歳は十七だよ。お前らのいつこト」

その回答に。

「え」

と驚きを音に出したのは灯駈だった。

「てつきり年下か、せいぜい同い年位だと思ってた」  
対外的態度が崩れ、素の表情が顔を出していた。

それだけに発言内容が心底のものだとわかった。

「……童顔に見られたことは、さすがにないが」

「ですよねえ。むしろ東雲さん割と年上に見えますよね、眼つきのヤバさ……いえなんでも」

「おいこら言いかけたことを途中でやめるんじゃない」

「まあ表情とかがオトナっぽいつて感じで」

どう考えてもごまかしてしかない言葉に納得したわけではなかったが、追求はやめた。それを明らかにしたところで気分がよくなるわけでもなし。

「……で、俺ってそんな年齢低そうに見えるか？」

「言われれば確かに納得いくし不思議でもなんでもないんだけど……なんでだろう？」

彼女自身納得が行かないのか首をしきりにかしげる。

その視線は当然のように龍夜へと向かい、きよとん、と上から下に下から上にとじいつと見つめられ、だんだんと居心地が悪くなってきた。というか灯駈の背後ですごい形相をしている智晴が怖すぎた。

それに気付くことのない灯駈はしばらく龍夜を見つめて。

「……ねえ」

「あん？」

「あなた人間？」

凄まじいことを尋ねた。

生まれた空白は先程までのものとはまた別種。口にした灯駈も、自分が何を言ったのか、数秒たってようやく気づいたようで。

「あ、あれ？」

自分のブツ飛んだ発言に灯駈がうろたえ始めたその矢先。

「……ぷっ」

龍夜が、小さく吹き出して。

「だっはははははは！ こいつは傑作だ！」

大笑いしながら、ばんばん、と玄関の扉を叩く。

「な……なにもそんなに大笑いすることもないでしょう？！」

「い……いや……ぷっくくく！ ま、まさかそんな直球な質問をされるとは……くくく」

しばらく大笑いした龍夜は、散々笑い倒してから、顔をまっかに

した灯駈に向き直った。しかし顔は微妙ににやけている。

「ずいぶん愉快な友達を持つてるな、湊さん」

「あちしもあつちゃんのコレほどまでにブツ飛んだセリフは初体験だよ……初体験を東雲さんに奪われた!!」

「智晴、変なこと言わないで!」

「ま、まあまあ、落ち着けよ……いいじゃないか。で、俺は何に見える?」

「知りません!」

「あつははは! ま、なんだっていいか。第一印象を口で説明しろつてのが無理な話なんだし」

「それは、まあ」

赤い顔に憤懣やる方ないといった灯駈がやたら可愛らしく、それがまた笑いを誘った。

が、笑つとさらに機嫌が悪くなることも分かっているので、とりあえずそれは押し殺す。

「……くくくつ」

失敗していたが。

「くくつ! もういいです、帰りますから」

くるりと踵を返しおのしおという効果音が似合いそうな勢いで歩き出す灯駈と、それを追いかける智晴。

ともに小さくなってゆく背中をずっと見て、やがてそれが見えなくなつて。

「……疲れた」

ずるずると、玄関にだらしなくへたり込む。

『はっはっは。大変だな、龍夜』

「ああ。この苦労、てめえにも分けてやりたいくらいだ」

『わりいがノーサンキューってな。』

しっかし、結局何の用事だったんだろうなあ、ありゃ」

「さあな。何かを確信したのか、そうでないのか。頭の中でも覗けなきゃわかり用がない」

つまりはお手上げという事だ。

「ひとまず、しばらくは周囲に気を使ったほうがいいだろうな……問題は戦闘中にはその余裕がないって事だが」

『葛籠に結界でも張らせてみるか？ あいつなら外界遮断の結界くらい使えるだろ』

「つても場合によつてはあつちからこつちに走りまわるんだぞ。それで結界の範囲からでたら無意味だろ」

雪杜が使う術式を思い浮かべながら反論する。

雪杜は複数の流派を自己流に改造し複合した術式を扱うが、元の流派のどれにも移動式の結界というものはなかったはず。そもそも日本でそうだった術式は龍夜の知る限り存在していない。

『んー、まあ、なあ。』

それにしても、随分面白いことを言つてやがったな、四条式』

「ああ。そうだな。さすがつてところか」

先程の灯駈の言葉とその後の様子を思い出し、疲れた表情に笑みを浮かべる。

丘上の教会には、この時間、いい風が吹く。

穏やかな風が、前髪を揺らした。

『さて、浸るのは結構だがそろそろいい時間になってきたんじゃねーのか？』

「そうだな。もうそろそろ出ようか」

レギオンの活動が活発になる時間が近付いている。

もはや日課となつている大量のレギオンの群れとの戦いに備え、そろそろ用意をする時間だった。

気分を切り替え、部屋に戻る。

奥に隠しておいた刀袋を手に取り天穿牙を出す。少しだけ鞘から抜き、夕日に刃をかざした。

特に問題のない事を確認してから刀を納め、壁にかけたコートを

羽織る。

布に仕込んだ術式が正常に動作することを確認して、最後に部屋をぐるりと見回す。

「……………、ふん」

何か気が入らない。

けれどそれがなんなのかわからない。

そんな違和感をずっと感じている。

それが分かるまでは、この教会から離れることはできないだろう。

目を閉じ、息をつき、集中。

ゆっくりと、全身の気を高めてゆく。

数秒の間、呼吸が止まり。

目を開く。

この場に灯駆がいれば反射的に構えをとっていただろう。

たったそれだけで、龍夜の纏う空気が一変した。

極限まで高まった戦闘の意志を体内に抑えこみ、精神と肉体が臨戦態勢をつくっていた。

「さて」

呟く声は、濃くなる夜闇よりもなお昏く。

「殲滅戦だ」

感情のない瞳の奥に激しい闘志を宿らせて。

篠中龍夜が夜に歩み出す。

ゾツとする気配を一瞬覚えた気がした。

しかし僅か一瞬。何の気配なのかまではわからなかった。

ただ、あの化物ではないようだった。あれは冷たいが、今感じた



ものは触れれば燃えるほどに熱い気配だ。

なんとなく、後にした教会の方を振り返る。無論、十分以上歩いたここからでは既に何も見えないが。

「そういえば、智晴」

「ん、なんだねあっちゃん」

「あなた結局、何がしたかったの？ 何がわかったの？

まさか付き合った私にまで教えない、なんて事、言わないでしょ  
うね」

「そだねー。あっちゃんにはやっぱり言わないといけないよね。ホントは、気がすすまないんだけどさ」

困ったようなそうでもないような、微妙な表情の智晴。

「いいから、教えなさいよ。わからない事だらけで釈然としないわ  
」  
「うん。じゃあまあ。」

そもそも、なんであちしが東雲さんに会いに行ったかっていうと、昨日の夜見たものがなんだったのか、わからないから。

わからない物は怖いから。だから知りたかった。

正直ね、あっちゃん。あちしは東雲さんが何者で、どんな風な人間なのか、とかはどうでもいいんだ。

ただわからないことが嫌だった。それを確かめたかった。ただそれだけなんだよね」

だから。

「あっちゃんの最後の質問、割とあちしにとっては大事な話だったんだよ。」

あの人が人間でもそうでなくても、あの人が昨日そこにいたんだって事が分かればいいだけだから」

灯駈は。

言葉を失った。

「ビルからビルに飛び移って、身長は何倍もの高さを跳んで、目で追いつかない速さで動きまわる。」

むしろ人間じゃないって方が、説得力が出るからね」

事実さえ分かれば、自分の常識など必要がないと言わんばかりの親友に。

今までも何度も片鱗は見てきたが、まともはその姿を見るのはコレが初めてだ。

噂喰い、湊智晴。

「……それで、結局確信したの？」

「うん、したよ。昨日見たのは東雲さんだった。

可能性がとても高い。少なくともそれを否定出来ない。

だったら後は、追いかけるだけ。追いつくだけだよ」

にやりと、夕日の沈んだ薄暗い世界で、智晴の気配が一段と深くなった気がした。

「どうしてそれが確信できたの？ 正直私には何一つわからないんだけど」

「そうかな。わかるよ。」

東雲さん、昨日繁華街にいた事を否定しなかったよね？ あれは無理に否定してこちらの嫌疑が深まることを嫌がったからだよ。

だからそこは否定しなかった。何をしていたのか、どこに行っていたのかさえ誤魔化せば、嫌疑は晴らせなくとも確信させずに済むと考えたから」

「そうね。でもそれだけじゃ、あの人がそこにいた事しかわからないじゃない」

「うん。だから聞いたよね。」

東雲さんは師匠と同じ仕事の人。同じ仕事をしているということ、同じことが出来るだけの能力があるって言うこと」

それは灯駈にも理解できた。けれどそれが一体何になるというのか。

アレックス・キングは牧師である。牧師ないしそれに準ずる仕事をしているから超常的な身体能力が得られるわけではないだろうに。そう思っていた灯駈に。

「東雲さんも、トラックに引かれても平気なだけの身体能力があっ

「当然だつてこと」

「それネタじゃなかったの?!」

衝撃の事実。

アレックス・キングにまつわるエピソードは幾つか聞かされていたが、そのなかでも特に突拍子も無いものだった。てっきり冗談だと思つていたら、どうやらマジ話だったらしい。

「やだなあっちゃん、本当に決まつてるじゃない。」

師匠はトラックに引かれても傷一つなく、当然のように動きまわる人だつたよ。

ね、あっちゃん。あっちゃんならそれができる?」

「……さすがに、それはちよつと」

迫り来るトラックを想像する。壁のように迫るトラック相手では、威力を横に逸らす事もできない。例えば四条式『散葉柳』を使い衝撃を殺せば吹き飛ばされても死ぬことはないだろうが、負傷は免れないだろう。

「だから東雲さんもそれに準ずる能力が　ま、陳腐な言い方になるけど、人間離れた力を持つてること。」

師匠も牧師だけど、どうにもそれ以外にもなにかあるっていう感じはあつたし、東雲さんはきつとそつち関係のひとなんだらうね」  
つまりは。

常識はずれな連中の。

灯駈はかぶりを振った。

「智晴。あなた自分が何言つてるか理解してるの?　あなた、そんなとんでもないモノを追いかけようとしているのよ?」

今すぐ手を引きなさい。そんなものに関わつたら、命が幾つあつても足りないわよ」

「にははー。そおだねー。そうなんだけど。」

……あっちゃん、割と普通に受け入れるね。何かあつたの?」

「っ、それは」

そつだ。

智晴の話は突拍子もなく、普通に考えれば頭ごなしに否定されて当然のものだ。

それでも、それを否定出来ないのは。

「……………、とにかく」

内心を抑えこむ。重要なのはそちらではない。

「やめてよ、智晴。私はいやよ、あなたに何かあつたら」

「にははは。大丈夫大丈夫、これでも引き際は弁えてるんだから。」

……心配しないで、灯駄ちゃん。あたしが灯駄ちゃんの前から居なくなるなんてこと、ないんだから」

普段のキャラを崩し、優しげな笑みを浮かべる智晴に。

なぜか灯駄は胸が締め付けられるように。

「絶対、だからね」

「うん、絶対だよ」

ぎゅっと、強く差し出された手のひらを握りしめた。

二日後。

湊智晴は行方不明となる。

陰・追い求め（後書き）

遅くなりました。

こいつら早く仲良くなってくれないと話が進みづらくて困ります。

## 道筋・ゆらぎ

02 - 08 : 道筋・ゆらぎ

油断をするとすぐさまその隙を付いてくる。嫌がらせの腕に関してはこの世界は右に出るモノはない。

日付も変わる時刻。

龍夜と雪杜はビルとビルの隙間に身を潜めていた。

人ひとり座り込むのがやっとといった具合の、小さな路地。互いに別々の道の先を警戒しながら、体をやすめている。

互いに呼吸は荒く、座り込んだ姿は疲労に満ちていた。

それもそのはず。

龍夜は五十体近い数の<天使級>レギオンの相手をしたのだ。

ちなみに雪杜は八十体を超えている。

合わせてゆうに百体を超える数のレギオンの大群である。これほどの規模の大攻勢というのは非常に珍しい。

「くっそ、殲滅戦どころか消耗戦かよ……」

つい数時間前の自分の言葉に対して愚痴をこぼす龍夜。

「一体、何があればこんな大増殖が起きるといふんだ。僕らの知らないところでこの街が大災害にでもあったとでも言わない限り納得できないぞ」

雪杜も顔をしかめる。次から次に現れるレギオンたちにうんざりしているのはこちらも同じだ。

むしろ広範囲をカバーする役目を負っている分龍夜よりも疲労の

色は濃い。

とくに負担になっているのは、広範囲の警戒だった。

智晴がこちらの事情に気付いた可能性は、既に両者で共有してある。彼女がどれだけこちらの事情に勘付いているかは分からないが、何度も目撃されてしまうのは避けたいところ。

ということ、戦闘の前から戦闘中までとにかく周囲に気を配っていたのだが、これだけの数を相手にしながらの警戒というのはとんでもない負担になっていた。

「この街に来てからわけのわからない事ばかりだが、これもまた輪をかけて酷いな。」

なあ葛籠。本当に、レギオンの反応はないのか？」

「僕自身疑いが晴れなくて何度も試している。にもかかわらず、やはりく大天使級>以上のレギオンの反応は見られない。」

君こそ、何か思い当たる節はないのか？」

「あつたらどうにかしてるよ」

今回のようにく大天使級>が大量発生した場合、疑うべきはく大天使級>以上の存在だ。自然的に発生するく大天使級>とは違い、ベースとなる核をもつく大天使級>以上のレギオンは、存在の強度も安定度もケタが違う。

そして、負の精霊が寄り集める性質がある。いや、自然により集まっているのか。

ともかく上位のレギオンはく大天使級>レギオン大量発生の温床となるのだ。つまり大量のく大天使級>が発生した場合く大天使級>以上のレギオンが存在している可能性が高い。

のだが。

先ほどから……どころか、ほぼ毎日、雪社はレギオンの反応を探っていた。

具体的には、自分を中心に同心円状に広がる探査術式を街の各所で使用し、強いレギオンの反応を探している。

その場合、地上数メートル以上の高さはカバーできないが、そこは龍夜が視力強化と暗視の術式を使って目視で確認している。

どちらも完璧を保証するものではないが、これだけの＜天使級＞を産み出しておきながら完全にしつぽをつかませない相手というのも常識的には考えにくい。

イメージとして例えられるのは、炎だろう。

燃える炎を＜大天使級＞以上のレギオンと想定し、火の粉を＜天使級＞、酸素を人の負の感情に見立てる。

『炎』は『酸素』を取り込み大きくなり、大きくなった『炎』はより多くの『火の粉』を吐き出す。その繰り返しだ。

当然、大きな炎はそれだけ人目に付くし、隠し通すためには何かしらの対策がなければならぬ。

そういった手段を持って生まれるレギオンもないでもないが、それならばそれで、何かしらの痕跡が残るものだ。

今回二人は、術式による精霊の動きの調査意外にも有視界調査や熱源反応、磁力反応などあらゆる調査を行った。

にもかかわらず一向に反応がない。

レギオンの反応どころか、何らかの手段をもって姿を隠しているのならば存在しなくてはならないはずの痕跡さえ掴めない。

つまり。

「この場合導きだされる結論は『何の対策もなしにこちらの探索をかわしている』、か」

「そんな事があり得るのか？」

雪杜の疑問に龍夜は顔をしかめる。

「まあ、可能性としてはな。例えば超高空にいるとか、あるいは地下にいたりとかな。」



つつてもそのどちらの場合も肝心の人間の負の感情が集まらないから、これだけ大量のレギオンを生み出し続けるのは難しいだろうな」

もしこの可能性が現実のものだとするのならば、今この街には中級どころか上級のレギオンが存在する可能性が高い。より上位のレギオンがその存在を削りながら下級のレギオンを大量に生み出す事は珍しくない。

もしそれが現実なら、この街は、終わりだ。

「……ともかく、こんな事を続けていれればいずれこちらの力が底をつく。早いところ手を打たないと、以前の君の二の舞だ」

「つつても支援を呼ぼうにも、この状況をどう説明したもんかね……お前の方で何かツテはないのか？」

「あるにはあるが、迂闊に連絡を取ろうものなら本家の連中がここぞとばかりに僕の首を取りに来るだろうね。」

はつきり言うけど、奴らにとつてはレギオンも僕も大差ないよ。むしろ明確に敵対した経験がある分、僕の方が厄介だと思っているんじゃないかな」

「……つまり？」

「レギオン無視して僕を消して、それで終わり。むしろ街ひとつ引き換えに僕を始末できるんだし、お釣りが出るとか思いそуд」

「俺以上に壮絶なもん抱えてんじゃないかねーか……」

どういふ人生だと思わなくもないが。

逆に突っ込まれる事請け合いなので、それ以上は踏み込まない。

手探りですらない距離感。

ぎりぎりまで離れて走る平行線。

それが二人の距離感であり、協力関係である。

要は疑心暗鬼に凝り固まっているだけなのだが。

その時。

ざわざわと、全身を舐め回すような悪寒が走った。龍夜は素早く空へと視線を投げ、雪柱はすぐさま探查術式を起動。

「……レギオンの接近を確認。一体どこから沸いたのか、また新手だ」

「仕事か義務みてーにご苦労なことだな。先に出る」

言葉を置き去り、龍夜が走る。

暗い路地には月光も届かず、数歩先は闇の向こう。それでも。姿勢を低く矢のように真っ直ぐに、駆け。

「シッ」

鋭く息を吐き、右手で鞘に収まった刀を突き出す。

地面からわき出しかけていたレギオンの頭蓋が飛び散り、黒い靄となり消え去る。

左手を鞘に、右手を柄にそれぞれかけ、素早く刀を抜き、刃はそのまま上へ、鞘は地面へ。

視線さえ向けずに二体のレギオンを葬り去る。

しかし胸ががら空きとなった龍夜に向けて、闇の奥から体組織をぶちぶちと引きちぎりながらレギオンが首を伸ばす。

鋭い牙が龍夜の腹に喰らいつく。

寸前。

龍夜の背後から飛来した無数の光の針がレギオンの首を地面に縫いつけた。

がちん、と音を立ててレギオンの牙が龍夜のシャツを浅く切り裂き。

龍夜のブーツが頸部を踏み抜く。

「ぺら、ぐら・ぜ・らー！」

千切れ転がる頭部が悲鳴をあげながら、霧となり消える。が。

「ぜ、ら」ほげげ「げ、ぎ・ららぜ」「ば」「ぬげく、じぬ」「む」「ず  
がげら」「がら・らげぐ」「、じらるらるらる」「ば」「ば」

絡み合い、溶け合い、混ざり合いながらせり出す、闇。

一瞥し、身をかがめた龍夜は。

「邪魔だ、退け！」

雪杜の言葉を受け、跳躍。

術式で強化された脚力はコンクリートを砕き、その身を屋上の高さ  
にまで運んだ。

地上では紅蓮の光が渦をなし、耳障りな悲鳴を飲み込みながらレ  
ギオンの群れを焼き尽くす。

見届けるまでもなく決まりきった結末からは視線を逸らし、今や  
屋上を見下ろす高さにまで飛んだ龍夜は。

「……ここまできると、いつそ笑いが出るな」

言葉のとおり、引きつった笑みが浮かび。

『ははっ、嫌がらせだとしたら、そいつ、相当才能があるな』

雪杜から離れた事をいいことに、サマエルがいつも通りの軽口を  
叩く。

周囲五棟のビルの屋上。

そこは闇の亡者共によって埋め尽くされていた。

その数ざっと数えて二百。

心底うんざりしたと言わんばかりに歪む顔。

ため息。

そして、その体はやがて重力に引かれ。

落下。

刀を一旦収め。

群がる闇共を見下す。

コートの内ポケットから十枚以上の符を掴み、無造作にばらまく。  
レギオン達はその身を歪め、飛びかかると力を込める。

そして。

かつ、と。

空中に生まれた見えない足場に降り立つ。

レギオンよりもなお深く純粹な黒。

龍夜は。

「神浄四相流・一伎型

かじわだまひ  
籠轍」

四方から踊りかかるレギオン。それらを冷徹な視線で見据えながら。

渦になる。

神浄四相流・一伎型。

神浄四派の中では一点突破力においては他の追隨を許さず、最も攻撃的。

反面、防御においては苦手どころではなく、そもそも相手の攻撃を防ぐという概念事態を捨て去っている。

しかしそれは、身を守る手段を持たないという事を意味しない。

つまり『攻撃は最大の防御』を地で行く 特攻。

相手より先に。

相手より速く。

相手より前へ。

それを突き詰めたとき、一伎型が体現するのは『防性攻撃』。

見えない足場が気の圧力に耐え切れずに碎ける。

碎けた術式が精霊を光の結晶として撒き散らす。碎けた硝子のよ  
うに散らばるそれらを足場に、黒い渦となった龍夜が猛然と突き進  
む。

回転の勢いは凄まじく、飛びつこうとしたレギオンは弾かれ、そ  
の四肢があらぬ方向に曲がる。足場がわりに踏みつけられたレギオ  
ンの体は削られ、黒い霧と悲鳴をまき散らしながらバラバラと中身  
をぶち撒ける。

籠轍は体を中心にぐるりと一周、水平に刀を振るう技。

言ってしまうばただそれだけだが、その回転速度と刀に込められ  
た気の密度の桁が違う。

刃の鋒が生み出す気の轍に触れればたちまち爆発をおこし、周囲  
に破壊を撒き散らす。

レギオン加賀原南帆との戦闘の際には加速と気の密度が足りず一  
回転するのみとなり、自身にもダメージが返ってくる結果となつた  
が、本来はこのように連続して回転と前進を続けるものである。

破壊の轍を刻み続ける。

それこそが籠轍の真価である。

まるで龍夜の跡を轍を刻むように、次々と気の爆発が生まれ、巻  
き込まれたレギオンが頭を、足を、腕を、胴体を吹き飛ばされ霧と  
なつて消える。

「おおおおおおああああああつー！！」

龍夜の叫びと共に気が膨れ上がる。それに反応するように、龍夜  
のばらまいた符が四肢と刀に貼りつく。

回転速度がさらに上がる。

さらに刃からは冷気が噴き出す。

噴き出した冷気は獣のように荒れ狂い、レギオンの群れを蹂躪する。その精霊の圧力がレギオンを引き裂き、冷気が氷漬けにし、砕く。

渦巻く破壊を引き連れた龍夜は最後に大きく飛び上がり。

「籠轍 終！」

回転の勢いをそのまま縦に、レギオンを唐竹割りにして。爆散。

その勢いを背に受け床を滑り、振り返る。

「ちつくしよめ半分も減ってねえ！ いやわかってたけどな！！」  
悪態を吐き捨てた。

僅か四秒半の暴威はその通り道に無残と形容できるだけの破壊をまき散らした。

床は砕き、えぐれ、破片があちこち飛び散り。

レギオン共は四肢を頭部を内蔵を、癩癩を起こした子どもの手にかかったかのようにばら撒き。

進った冷気が大気を凍らせ、そそり立つ氷柱が敵を床に縫い付ける。

しかしそれでも、効果範囲が余りにも狭い。

始末できたのは二百のうちの四十余り。手傷を負わせたレギオンとなればその倍にもなるうが、どうせ元々が半不定形のような存在。すぐに元通りになるので損害に数えるのも馬鹿らしい。

「向き不向きがあるのは当然とはいえ、さすがにこの程度ってのは不甲斐ないを通り越して悪趣味なジョークにしか思えんな」

一伎型の真髄はあくまで一撃の重さにあり、一撃の大きさではない。

必殺の攻撃を放ったところで、一動作で倒せる敵はせいぜい三体がいいところ。

物量というのは龍夜に対して致命的なまでに有効な戦術なのだ。

それは同時に、龍夜はレギオンを苦手とする、という事とイコールでもある。相手がレギオンであり、さらには上位になればなるほど、その戦いに一対一はまず無くなる。

「そう思えば、やはりあいつは色々とおかしかったな」

この街はおかしなことばかりだ。

それらが独立しているのか、関連しているのか。

関連しているとすれば、その鍵は。

「さつさとケリをつけて、やつらの調査に戻らないといつまでも面倒が続きそうだな」

やはり、中心になるのはアレックス・キング。

いずれはしつぽを掴まねばなるまい。

そのためにはこの戦いを生き延びねばならないが。

まあ、今回は。

随分と楽ができる。

レギオンの大群が動きを止めた自分に集まるのを見て。

龍夜は笑う。嘲笑う。

まあ仕方ないことだ。向かうべき方向性としての『核』を持たない<天使級>はほぼ反射と反応だけで存在している。

目の前にあれだけ派手な暴力装置が現れたのなら、そちらに注目するのも仕方がない。

だから。

「任せたぞ、葛籠雪杜」

呼びかけに。

「任せれずとも果たすとも」

答えが返り。

「終に墜の槌降ろし、御魂よ御風を魅せ賜え」

きいん、と音が消える。

レギオンの動きが止まる。

そして。

「精霊符

じやうれいご じやうご  
蛇咬邪抗砂」

視界いっぱい群がる黒い陰が。

その一言で平らに均された。

効果音も僅かなもので、ぷちゅり、と小さな虫をひねり潰したよ  
うな音が僅かに聞こえただけ。

悲鳴も絶叫も、呼吸吐息も何一つ許さず残さず。

対象指定による空気圧による個別攻撃。

無駄の一切無いその術式を放ったのは他でもない。

「はっはっは。楽しいじゃないか」

「なあ本気でお前のキャラがわからないんだが」

えげつない笑顔を浮かべた雪杜である。

浮遊術式を使って、ゆっくりと上昇してくる彼の表情は、普段の  
仏頂面もどこへやら、笑顔一色。ただし子どもは間違ひなく泣く。

どうも術式を扱うときの彼はテンションがやたら高くなる。外れ  
るネジの数が一本二本どころでもない。

二人のたった作戦は単純。

地上のレギオンを片付けて雪杜の安全を確保し、龍夜が高く跳ん  
で時間と注目を集め、さらに派手な攻撃を加える事でその意識を完  
全に龍夜一人に向けさせる。

その隙に安全圏にまわった雪杜が準備に時間のかかる術式を用意  
し、一網打尽にする、というものだ。



戦闘時間にして三十秒程度の僅かな攻防であったが、二人の体力と精神力は大幅に削られた。

それでも笑っているのは互いに意地をはっているに過ぎない。そしてお互いにそれが分かっているからこそ、のっている。

まあ。

元来短気単純の龍夜と、変にテンション上がる雪杜の組み合わせでは、どうあってもこんな風なやりとりにならざるをえない面も大きい。

術師も騎士もこのご時世に生身で生来の能力『のみ』で戦おうとする変人集団だ。

自然、奇人とか変態とかそういうのに分類される種類のイキモノが多くなる。

とはいえ、さすがにここまでブツ飛んだ例はなかなか見ないが。  
マッシュシンドローム  
術式症候群。

言葉としてはよく聞くしそう名乗る人間にも何度か出会いはしたが、これほど重度かつその言葉以外を当てはめられないのは初めてだった。

まあしかしその腕もまた龍夜に衝撃を与えるには十分過ぎた。

これほどの使い手は同年代どころか、修練に熟練を重ねた術師にもなかなかいないだろう。

はつきりとこれ以上の術者と断言できる存在は、龍夜の知るところにおいても片手の数よりも少ない。

逆に言えば、それほどの術者を家から追い出し、かつ隙あらば命まで取るという事は、雪杜の抱えている事情が相当に重いものであることを伺わせた。

まあ、思い当たるフシもないではない。

雪杜の術式の系統が定まっていけないのだ。

日本国内、ありとあらゆる術式を自由気俣に取り込み、いじくり、こねくり、もはや独自体系とも言うべき規模になっていた。

こんな存在を赦しては、他家の人間はいい顔はしないだろう。自分たちが長年の研鑽を積んで来た術式を、気ままにいじくり回された拳句、他の系統と混ぜ合わされてしまうなど。

自分たちの受け継いできた歴史と伝統と技術を、まるで遊具のよう

に。

これ以上の屈辱があるだろうか。その事情を鑑みれば派手な行動を許されないという事は理解できるが。

(命を積極的に狙われるほどかという点、どうにもな)

不穩分子の一言で切り捨てるには、雪杜の能力は余りにも度を越えている。

雪杜の力がもたらす恩恵はそれがもたらす厄介を抱え込んでも余りあるだろう。

(わからんな、どうにも)

こんな日本の片隅で、術者の極限とも言える人間と、騎士の成り損ないの自分がこうして共闘するなど。

本来であれば在り得なかったはずの組み合わせ。

互いの能力がそれぞれの意味で常軌を逸していたからこそその巡りあわせ。

「そういうのは、大抵面倒事になるもんなんだよな……」

既に巻き込まれているが。

と。

「……おい、葛籠」

「何かな？」

「動くなこの馬鹿」

龍夜は呆れながら。

刀を軽く放り。

それが水平になった瞬間。

「失せとけ」

鎧を蹴り飛ばされた天穿牙がその場に鞘だけを残し、ミサイルかとツッコミを入れたくなるほどの速度で飛び出し。

雪杜の顔面親指二本分左を猛然と突き抜け。

背後二十メートルの位置からこちらを伺っていたレギオンの胴体に触れ、停止。

速度と質量全てのエネルギーを一身に受けたレギオンはそのまま爆散、霧になった。

「撃ち漏らすなよな」

「ふむ……たしかにこれは、僕のミスだな」

言葉と共に、雪杜が探査の術式を走らせる。

対象指定の攻撃という事は、そこから漏れた相手は無傷という事。捉えた相手は確実に葬ることができる分、漏れた相手には何も出れないというリスクも当然有る。

「にしても、それはそれで妙だね。撃ち漏らしたということは、少なくともあのレギオンは群れから離れた位置に最初から居たってことになる。

あれだけの数のレギオンが集団行動している中で、たった一匹がそれは。

強烈な違和感を感じさせる事だった。

先にも述べたように<天使級>は反射と反応だけで存在しており、単純な目的に沿ってしか行動しないし、できない。

それは『核』が　つまり強烈な目的意識を与えるような人間の意識がないから。

それが、まるでこちらを伺うように見えていた、という事は。

「……やつらは、あくまで確固とした目的をもって俺たちを狙っている、ていうことか」

「そう。そしてその目的は僕らの排除……ではない」  
沈黙。

ひとまず刀を術式で呼び寄せて、鞘に収める。

「いよいよもって訳がわからんが……それなりに状況はみえてきた、  
つてところか」

「そうだね。こうなつた以上、確実に<大天使級>以上のレギオン  
は存在している。<天使級>に目的があるのはそれ以上のレギオ  
ンが存在し、そこから生まれた何よりの証拠だからね」  
そう。

つまり。

「つまり、どうあつても見つけなけりゃ俺達の負けつてことか」

物量戦でレギオンと人間がぶつかれば、勝ち目は火を見るより明  
らか。

そもそも、人がいる限りレギオンは生まれ続けるのだから。

故に、その物量の元を絶たなくてはならない。

そしてそれは間違い無く存在する。

けれど。

どれだけ探しても見つからないものを、一体どうして見つけると  
いうのか。

果たしてこれは前に進んだのかそれとも崖っぷちに立ったのか。

終わりの見えない迷宮に迷い込んだかのような気持ちになったそ  
の時。

「  
またか」

「随分と威勢のいい事だな」

肌を粟立たせるその気配は紛れもなくレギオンのモノ。

こちらへと向かってくる無数の気配を感じながら、龍夜は刀を抜いた。

「次は撃ち漏らすなよ」

「くつくつくつく、当然だ次こそは徹底的に壊滅的に破滅的な攻撃をくれてやるとも」

「もうモード切り替わってんのかよ怖えよ！」

その夜。

二人の戦闘回数は二桁を数え、  
葬ったレギオンの総数は、千を超えた。

翌日。

大学の授業は午後一コマということで、鈴橋三奈は騎士団へ向かい、事務室へ入り、机に座り、自分の端末を立ち上げた。

大量の精霊術師と騎士を抱えるとはいえ、否、だからこそ、その事務処理は膨大になる。かつ、彼らは日々己の能力の研鑽に務める義務（という名の趣味）があるため、そういった部分をフォローする存在が専用で必要になる。

騎士団を組織として運営してきたのは、術者でも騎士でもなく、彼女たちのような一般人であった。

部屋には

幾つかの情報や報告をメールで受け取る。その中に、ここしばらくで見慣れた名前を見て自然口元に笑みが浮かんだ。

「ええと。『十体前後のレギオンの群れと遭遇するも現地術者の協力を得てこれを討伐。領地の浄化に尚も問題のある可能性。前任者の調査記録から漏れた集中点がないかの調査を願いたい』ですか。ふむ、なるほど」

数秒、考え込む。

その時、部屋に入ってきた女性が、三奈に声をかけた。

「あら三奈、朝からご苦労様」

「おはようございます、遠藤先輩」

につこりと営業スマイル。

それを見て。

ああまたあのクソガキなにかやらかしやがったな、と、事情はよくわからないものの遠藤さおり（48）は何かを悟った。

「ああ、うん……おはよう」

「？ どうしたんですか遠藤先輩、床に何かついていますか？」

「あ、ううん別にそういう事じゃなくてね。」

単純にあんたの内心から噴き出す悪鬼の如き殺意の波動を正面から受け止めたくないのよ……」

鈴橋三奈。

笑顔の裏に鬼を飼う、騎士団事務員期待の若手である。

「あ、すみません。ちょっと姫様の所に行ってきますから席を外しますね」

「ええ。早くいつてらっしゃい。主にこの部屋にいる人達の胃袋の健康のために」

既に三奈のプレッシャーにやられたのか、何人かの人間がお腹を押さえて机に突っ伏していた。

よくわからない言い回しに疑問符を浮かべながらも、件のメールを印刷し、三奈はそのまま部屋を後にする。

全員の安堵の溜息がひとつになった事など知らず、三奈は少し早めのペースで姫の部屋を目指した。

道筋・ゆらぎ（後書き）

道が途切れたときにつかむ物。

その僅かな手がかりは、希望となるか絶望となるか。

諦めないために走るのは誰なのか。



## 道・辿る(前書き)

日常編。

そろそろ2章も終わりです。

2章が終わりましたら一度今までの投稿分を見直します。今更ですが推敲とかしようと思ひまして。ええ。

その場のノリで書いているのでその辺りの調整もします。余裕があれば書き溜めとかもしてみようかと。

というか初心者なんだからもっと小さい軽い話書いて練習するべきだったんでしょーとか。まあ続けますが。

ということまで2章終了まで一気に行きます。あとたぶん3とか4とかで終わるか。きっと。

## 道・辿る

02 - 09 : 道・辿る

彼は倦んでいた。

己の能力に満足できず、より上を目指し??しかし世界はそれを許さない。

彼は今の彼以上を目指すことを禁じられ。

彼にとっての全てであったそれを制限された。

それは彼が彼であることを禁じられ、拒絶されたことと同義。

世界に捨てられた。

被害妄想のようなその意識は、それでも彼にとつてただひとつの真実だった。

彼女に出会うまでは。

彼は燻っていた。

彼にとつては『術』こそが全てでありそれ以外は些事に過ぎなかった。

他者も、他家も、他流派も。

己の望むままにあるがために存在する、ただの道具に過ぎない。そこにあるだけの砂礫に何の感情を抱くはずもない。

故に他者の集まりでしかない学校など行きたくもなかった。行く理由もなかった。

しかし行かねばならなくなった。世界に捨てられたから。

だが己ではない何者かが学校に通い、人のように生きること  
に一体何の意味があるのだろうか。

望むままにあることもできず、ただ諾々とある革人形。そんな  
も心の臓が動いている死体と何の違いがあるというのか。

くだらない、くだらない。何もかもが意味を成さない。

世界を閉ざすその思想は、それでも彼にとつて目の前にある事  
実だった。

しかし事実は観測点を変えることでその形を大きく変える。

己が何者であるのかを定める基準をほんの少しだけずらす。それ  
だけで、己の価値は激変するのだ。

彼女に出会ったから。

世界は一瞬で変革する。

世界は一瞬で変容する。

破壊はささいな理由で。

創造はささやかな形で。

理由は見えないけれど。

意味はそこにあるから。

それが運命だと思えた。

それは奇跡だと感じた。

だから考えてしまう。

果たして自分は、あの些細な奇跡に報いることができたのだろうか

かど。

葛籠雪杜の生活はその待遇とは裏腹に恵まれていると言っ  
て過言ではない。

彼がひとりで暮らすのは駅そばのマンションの3LDK。築年数  
も数年と新しく、警備員が常駐しており防犯セキュリティもそれな  
り。

無論高待遇を受けているのには理由がある。彼が神葉学園に入学  
して半年ほど立った頃、彼のほうが本家に取引を持ちかけたのだ。

『研究の成果を引き渡す代わりに、術式の研究と使用を認めて欲し  
い』

当然最初は猛烈な反発を受けた。それこそすぐにも刺客が送り  
込まれるほどに。

それも当然の成り行きといえた。彼の研究は新たな境地、次の  
地平へたどり着く可能性のある大きなものだったが、それは同時に  
他者を全て焼き尽くす光にもなり得るものだった。

巨大すぎる利が、絶大なる実が、想像を超えた破滅を運ぶ。雪杜  
を恐れるものはそれを恐れた。

つまるところ、本当に正しかったのは彼らの方だったのだろう。

しかし彼は粘り強く交渉した。

もともと彼としては術式の研究が出来れば他の事には興味はな  
かったのだ。その時はすでにその精神構造も大きく変化していたが、  
基礎的なスタンスは変わらない。

ただ妥協を覚えたに過ぎない。

彼が排斥を受ける原因となった研究に関しては今後封印する。その上で今後の研究については公開する。

これまでの積み重ねの廃棄と独自の研究の無条件公開というのは、術者にとって臍腑を捧げるのと同義だ。

それを行うと行った彼に対して、本家はひとつの条件をつけることでそれを了承した。

そうして、今の生活である。

この街へ来た当初は彼以外に住むものもない、今にも倒壊しそうな集合住宅に住んでいたが、さすがにそんな場所で術式の研究などできるわけもない。

彼の研究を守る意味で、このような高待遇を受けているのである。

雪杜が目を覚ますのは平日も土日も変わらない。

午前五時五分。

前日にどれだけ夜更かしをしようとして、このリズムだけは崩さない。

とはいえさすがに、激しい戦闘を一晚中繰り返し続けた上で二時間程度の睡眠というのは彼にとっても辛いものがあった。

無数の<天使級>レギオンとの戦闘を終え這々の体で自室に戻ったのが午前三時過ぎ。

服を着替えるどころか寝室まで歩くことさえ億劫で、リビングのソファに倒れこんだ。

極度の疲労と極限の緊張。

解放された肉体と精神はまどろみの時間をすっ飛ばし、まるで電源を落とすように彼の意識を眠りに落とした。

だから、だろうか。

ほんの僅か。過去に溺れてしまったのは。

「……まあ、僕も所詮はただの子供だったってことか」

そんな当然のことに苦笑する。

そんなことも知らなかったのだと。

「……さて。いつまでも気分浸っていても仕方がない、か」

体を起こすと疲労で体が軋んだ。ソファで寝たことが仇になったと顔をしかめるものの、今更だ。

シャワーを軽く浴びて疲労と汗を洗い落とした後は、トーストとバナナだけの軽い朝食を取って私服に着替える。

今日は土曜日。

学校は午前の半分だけ。

来週には生徒会役員選挙があるので、そちらの準備を進めなければならぬだろう。

頭の中で週末の予定を立てながら、術式研究用の部屋に入った。

部屋の入口の扉は嚴重な防衛術式が幾重にもかけられている。中には触れれば高圧の電流が流れるものもあるあたり、非常に剣呑。

それらひとつひとつをなれた仕草で解除し、部屋に入ったのは午前五時三十分。

ここから登校時刻までの二時間が、彼が彼であるための時間だ。

術式研究と一言で言っても、その手法も技法も千差万別だ。

同じ流派の中でさえその辺りをめぐって派閥対立が起こるくらいである。

触媒、媒介にするものや、経路、回路の組み立て方、果ては体内

精霊と自然精霊のどちらを使うかにいたるまで。

言ってしまうえばプログラミング言語の対立みたいなものか。

あの業界もなかなか言語使用者のこだわりのようなものがあつたりなかつたり結構するのだ。

例えば、ホームページを作ろうと考えたとする。

そこで使用するのは、HTMLというものになる。

が、そこに様々な要素を追加しようとすると、選択肢が一気に増える。

画面に動きを持たせたいのならばJavaScriptの使用をまず考えるだろう。

情報をデータベースに持たせて利用するのならばPHPやRuby、Pythonの利用などを思いつく人も多いに違いない。

そうして、望むものを作るためにどうすれば良いのか。

術式研究とはそのようなことの改善、改良の繰り返しである。

JavaScriptを使うにしても、素のまま使う人もいればjQuery等を使う人もいるだろう。

PHPとRuby、Pythonのどれを使っても、表面的には同じページを作ることには可能だ。

ただし、その中身???ソースコードと呼ぶ???に関してははっきりと別物になる。

どうすれば効率的に。

どうすれば効果的に。

どうすれば安全に。

どうすれば高速に。

どうすれば汎用的に。

どうすれば。どうすれば。どうすれば。

そうして高みを求め続ける。

さて。

それでは雪杜の研究はどのようなものになるのかといえば、最近はそのからさらに一步踏み込んでいる。

つまりは、プログラミング言語そのものの作成だ。

例えば昨晚の『蛇咬邪抗砂』の術式は、分類上『精霊術大系符術系統領域式大気術』となる。

これはそれぞれ次を表している。

大系は三つ存在する術式大系のいずれに属するかを。

系統は触媒とするものを。

式別は術式の効果範囲を。

術派は効果を表す媒介を。

左にあるもの程大きな枠組を表し、それゆえに別のものに置き換える事は難しい。

蛇咬邪抗砂と同じような対象指定による個別攻撃を、しかし大気圧ではなく雷撃で行いたければ術派を切り替えれば良い。当然、言うは易く行なうは難しではあるが。

しかしこれを符術系統以外で行おうとすればこれが意外に難しい。系統により術式の得手不得手が存在しているからだ。蛇咬邪抗砂の術式の考え方をそのまま持っていては、何百年かかろうとも同様の効果を発生させる術式は発動できない。

雪杜はこの壁を乗り越えようとしている。

即ち、いかなる触媒によってでも、容易に同様の効果を表す技術の開発を目指している。



無論容易なことではない。

そもそもが、これらの分類は人類が千年以上の時間をかけて蓄積し、磨き上げてきたものだ。

それらを一度取っ払い、既存の技術との互換性を持たせたまま、まったく新しい概念を生み出す。

それが、今、雪杜が雪杜である意味を、存在をかけて取り組んでいる事。

既に百冊を超えたアイデアノートを見返しながら、様々な触媒に術式を刻み込む。布に糸で、墨で、血で。糸は、色や素材を、墨は色や濃度を、血は濃度や種類を、それぞれ様々に試しながら、一方で符に刻んだ同様の効果を発揮させようとしている術式と、その効果の差異や影響、術式の強度等の違いを比べる。

そうして、どのような組み合わせ同士、どれだけ精霊を込めれば、想定効果を発揮するのかの記録を蓄積してゆく。

道具と手順の差を埋めるにはどうすれば良いのか。思考と試行の積み重ねをただ繰り返す。

かつての誰かが、そうしていたように。

そうこうしているうちに、こんこん、と部屋の扉がノックされた。しかし集中している雪杜はそれに気付くこともない。

こんこん。

もう一度、ノックされる。  
やはり気づかない雪杜。

そして。

どん！　どん！　どん！

もはやそれはノックではない。それはノックというにはあまりにも大きすぎた（音が）。大きく（音が）、激しく（扉の揺れかたが）、重く（衝撃が）、そして大雑把すぎた（テンションが）。つまりは殴っているだけだというだけの話だが。それにしても尋常な威力ではない。そしてそれに一向に気づかない雪杜もまた尋常な精神力あるいは無神経ではない。

そして。

まるで大砲の直撃を受けたかのように、扉が吹き飛んだ。

術式による強化のおかげかそのままの形を保ったまま吹き飛んだ扉は、薬品を大量に詰め込んだ棚にぶつかり、止まった。部屋の中の家具等は基本的に全て術式で強化されているのだ。

もつとも、中の薬品や書類などはその限りではないため、凄まじい振動により棚の中はぐちゃぐちゃになっていたが。

一方の雪杜はいとえば、背後を突っ切った扉の存在など微塵も知らずと。

「む……駄目だな」

ノートにバツ印を付けて。

「ダメなのはあんでしょっが」  
「む」

後頭部をスリッパで殴られて、ようやく部屋に入ってきた存在に気がついた。

「何だ君か。痛いじゃないか、何をするんだ」

「『何だ君か』じゃないっての。毎度毎度の繰り返しでいい加減うんざりするけど、時間、過ぎてるわよ」

呆れて目覚まし時計を付き出してきたのは、雪杜と同年の少女。隣の部屋に住む、佐々森芳鈴だった。

彼女もまた雪杜と同じく術者であり、彼の本家で術式を学んだ存在だ。

瞳には勝気な光がやどり、ショートヘアが活発な印象をあたえる、そんな少女だった。

彼女が突き出した時計は、確かに七時四五分を指し示していた。

「ふむ……怠慢じゃないのか、佐々森。僕の時間の管理は君の仕事だろう」

「喧嘩売ってるんなら全力で買っよ、ねえ？」

彼女の怒りは正しいが、雪杜に届くことはない。

「落ち着け。朝から血圧を高めると健康に害だぞ」

原因になだめられるともはや憎悪しかわかないのだが、いくら言ったところで意味が無いという事はこの一年ですっかりと思い知っていた。

故に芳鈴は用事だけを端的に伝える。

「ご飯、テーブルの上に用意しているから。勝手に食べてってよ。

別に術式の研究を続けるのは構わないけど、それで遅刻しても知らないからね」

「ふむ。わかった、ありがとう」

用事を済ませた芳鈴はそのまま部屋を出ようとするが、入り口のところまでピタリと動きを止めた。

「ねえ??? やっぱり、生徒会長にはなるの?」

「なるさ。いや、なれるかどうかはわからないけどね。

けどそのつもりではいるよ。それが？」

「それって、やっぱりあの女が理由なの？」

その言葉に。

今まで視線を合わせることのなかった雪杜が、ようやくそれを合  
わせた。

「僕がそうする理由と君の任務に、なにか関連があるのか」

冷たい目だった。

相手に対して何一つ感情を抱くことを拒絶している、そういう目  
だった。

背筋が凍る思いを必至に隠しながら、芳鈴は続ける。

「あんたの研究は本家に評価されてる。けど、生徒会になんて入っ  
たら研究が滞るかもしれないじゃない。」

そうなったら、そのうち本家はあるたを疑いだすに決まってるで  
しょ。研究を秘匿しているとか、そもそも最初から研究をやり通す  
つもりがなかった、とか。もしそうなったら、

「君が僕を殺す。それだけだろうに。そんな事先刻承知だよ。君に  
言われるまでもない」

「だったら！」

「自分の命をかけるものくらい自分で選ぶさ」

そうやって。

穏やかに笑う彼を見て。

「もういい」

視線に憎悪すら込めて、吐き捨てるように言葉を吐いて、芳鈴は  
部屋を後にした。

そんな彼女の後ろ姿を見ながら多少の後悔の念が首をもたげる。

重い役割を与えられたのは彼女だ。そして雪杜はその責任は自分  
にあると自覚している。その身勝手に振り回される彼女が自分を恨

むのは当然であり正当な権利だといえ、それを正面から受け止める義務が自分にはある、と考えていた。

互いに見事に的外れなのだが、まあそれはそれ。

「まあ、もう少し彼女には気をつかってあげられて然るべきなんだろうね。」

「……やっぱり、あなたみたいにはなれそうにもありませんよ、先輩」

思い出の中の彼女の笑顔に、そう呟いた。

芳鈴と雪杜は幼馴染みと言って良い間柄にある。

幼い頃の雪杜は、こども特有の無軌道さと傲慢さで、思うがままに術式の研究にのめり込んだ。

多くの子どもはそんな雪杜を排斥し（ようととして逆に手ひどい反撃を丁寧に刷り込まれトラウマを受け付けられ）たが、芳鈴は雪杜の研究を隣で眺めていた。

雪杜が何をしているのかを正確には理解できなかったが、次から次へと新しい奇跡を生み出す雪杜の研究に、彼女は夢中だった。

「それがまあ、いつの間にかあんな人格が歪んで……」

学校への道。

芳鈴は自転車で通っている。

速度は現在時速三十キロオーバー。怒りがペダルを踏み込む力に還元されているのだが、これが本気になると高速道路も走れる程の速度になるので今日はまだゆるいほうだ。

ぐちぐちと、雪杜への文句は際限なく溢れてくる。

「そうよ。いつもいつもいつつつつつも術式の事ばかり考えて、術式の事しか考えてなくて、術式以外のことなんか何一つ考えないくせに人当たりだけは良くて。

ふざけてるのかって話よね。いつの間にかあんな危ない研究までして、おかげで本家に研究やめるように言われて、おまけに禁忌指定と封印指定。馬鹿みたいじゃない。

それで何？ 駄目になったとたん無気力になってさ。人が何言ってもどうでもいいって顔をした上に何も言わずにふらっと姿を消したくせに、いきなり本家に喧嘩売るような取引仕掛けたと思えば、あたしが監視員になっていざとなれば殺せ？！

ふ、ざけんじゃないわよっ！！」

踏切寸前で煙をあげながらの猛ブレーキ。怒りの咆哮が踏切の鐘の音に掻き消される。隣で停車していた車のドライバーがぎょっと目をむく。

怒りは次から次へと溢れてきて、もはや彼女は自分が何に対して怒っているのかさえも分からなくなって。

それがまた、理不尽と分かっていても、雪杜への不満となって蓄積される。

完全な悪循環だ。

一体いつから自分はこうなってしまったのか。考えてみてもわからない。

任務を告げられたときは衝撃を受けたが、同時にやる気もあった。

雪杜がなにかまずいことをしでかしても、自分が止めてやれば良いのだと。だから、急な転校やらなにやらでゴタゴタはしたものの、この街に来たときはまだ不満はなかった。

彼が人が変わったかのように、術式以外に関しても意識を向け、思いやりと呼べる感情をもって接していたことは驚きだったが、そ

れは好意を持って受け入れるべき変化だと喜んだ。

そして、そんな風に変えた人物を、知って。

いや。

だから何だというのか。

あの人は関係ないだろう、あの人は。

「……アツタマいったい」

電車が通過する。風圧で揺れる髪をいじりながら、なぜ自分が落ち込んでいるのがよくわからなくて悲しくなった。

土曜日なので授業は半日で終わり。

放課後の校舎には、さっさと帰る者や部活に勤しむ者、残って友人たちと会話をしている者など様々。

雪社が生徒会役員選挙の準備と昼食のために学食を訪れた時も、そこには幾つかのグループが存在していた。いつもの騒々しさはさすがにないが、それでも賑わっている。

神葉学園は生徒数が多く、一学年に十以上のクラスが存在する。また、高校にしては珍しく学科が存在し、必要単位や選択授業が多く取り入れられているのが特徴だ。

もっとも、進級や卒業のための必要単位はほぼ必須科目で揃うので、普通に学校へ来ていればまず留年の憂き目を見ることはない。前例は存在するが。

そんな制度を好んで取り入れる学校なだけあり、校風は割と自由だ。校舎の施設は基本的に解放されており、使用に制限はない。

食堂も、常に調理のおばちゃんがスタンバイしておりまたメニュー

「も充実しているため、実は暇つぶしには調度良いスポットになっているのだ。」

雪杜はカツカレーセットを頼むと、隅のほうに陣取り資料を読む。そこには、自分が生徒会長となりなにをするのか、何を目指すのか、という事と、そのための案が幾つか書かれていた。

基本的には過去の選挙で使われた物を参考にして作り上げたものである。

「しかしそれゆえに、目新しさはどうしてもなくなってしまう、と……」

特に具体案のところ未だに形を持っていないのがまずい。

そこも過去のものを参考にすればよいではないかと思うかもしれないが、それは不可能なのだ。なにしろ、歴代の生徒会長はもれなく目標を達成してきたからだ。

歴代神葉学園の生徒会長たちの行動力は凄まじいの一言に尽きる。明らかな非常識でさえ、ゴリ押しや裏技、知略謀略を駆使して達成してきている。はつきり言ってお前らやり過ぎだと雪杜でさえツッコミを入れた。

しかしまあ考えて見れば、去年の生徒会長もやはりぶっ飛んでいた。

そんな非常識人間たちと自分のような平凡な人間が果たして並ぶことが出来るだろうか、と、無用の心配を彼はしている。

まあ、彼以外の候補者達もなかなかブツ飛んだ面子が揃っているので、当選できるかどうかという心配は決して無用のものではないが。

自分以外の二人の候補者の主張内容をまとめながら、さて自分はどうか戦うべきか、と思索する。



目指すものは見えている。いや、その言い方は正しくはない。ただ、彼女に教わったこと。それを、どうにか形にしたいというのが根底にある。

それは、雪杜が術式以外に初めて抱いた、執着と呼べる感情。

そして、初めて人に懐いた、恋という執着。

「あなたが僕に教えてくれたこと。僕はそれを、どうすれば形に出るのか。

あなたになりたいわけじゃない。あなたのように生きたいわけでもない。

僕は僕として、ただ。

ただ

祈るように、呟いて。

視線を書類から上げる。

既に二時間が経過しており、食堂の中に人はまばらだった。

ふと、離れた席に座る女子生徒二人に目がいった。

二人組の少女は、リボンの色からして一年生のようにだった。

なぜその二人が目についたのか、一瞬考えてすぐに答えが出る。

二人組の片方があの四条式だったからだ。

「ふむ。つまり、という事は

雪杜も、龍夜から話は聞いている。この学園の生徒にレギオンとの戦闘を目撃された可能性があるぞ。

写真や詳細資料などはさすがになかったが、軽く見た目の特徴などの話は聞いている。その中に、四条式の友人であると聞かされていた。

#### 四条式。

今でこそ小さくまとまっております門下は数名となつてゐるものの、その名前はよく知つてゐる。この国で裏の世界に見を長く置くほどにその名前は意味を持つてくるだろう。

それは特にこの国においてはそれはもはや伝説の名前なのである。数代前に裏の世界との関わりを明確に断つたものの、それ以前に積んだ業績は静かに、しかし深くこの世界に刻まれている。

即ち、徒手空拳にて悪鬼と渡り合う者共。

神拳・四条式。

冗談としか思えないような逸話は数知れず。

そんな四条の娘である以上、雪杜も顔ぐらひは知つていた。とはいえ家の方針か、術式との関わりなどはまつたく臭わないが。

その友人である少女に、戦闘を目撃された。

あるいは警戒されている可能性がある、という。ただ、疑いを受けてゐるのは龍夜ひとり。一緒にいた雪杜の存在が誰なのかまでは掴んでゐる様子はなく、今後の注意次第ではバレる心配もなかつたとの事。

とはいえじつと見ていてはあらぬ疑いを受けるかもしれない。  
と。

「なに下級生を凝視してんのよ。変態？ 変態なのね？ 死ねば？」

辛辣な言葉が背後から降り注いだ。

振り返ると、腕を組んだ芳鈴が椅子に座る雪杜を見下ろしてゐた。とはいえ芳鈴もさほど身長が高くはなく、見下ろすと言ってもアドバンテージは僅かなものだが。

「そういう誤解をまねくような物言いはやめてくれないかな。まだ今朝のことを怒つてゐるのかい？」

「朝から胃が痛くなるような話題をされて根に持たずにいられるほ

どサツパリした性格してないから。文句ある？」

「また随分と率直な言葉だね。」

わかった。わかったよ。君の機嫌を損ねて本家に陰口を叩かれるのも事だ。この場はデザートひとつで手を打ってくれないかな。

「ここのいちごパフェは君も好きだったろう？」

「……よ、よく知ってるわね。」

「監視者を観察するのは当然のことだ。振込明けの日にこの食堂で真っ先にパフェをがつついていれば嫌でも気付くさ。」

「そ。そう？ ……ん。あれ？ 今なんか馬鹿にされなかった？」

「ところで君は何をしに来たんだ？」

左手で髪をいじいじする芳鈴が事実気づく前に会話をさっさと進める雪杜。

割といい性格をしている。

「文句を言いに来た……つてのは冗談よ。はいこれ。追加での調査報告。」

差し出された封筒を受け取り、早速開く。

出てきた資料を二人で眺める。

「随分と足元見られたわ。それでもやっぱり騎士団関係の情報は掴みにくくてロクな情報はもらえなかったけどね。」

「確かに情報としての精度は低いけど、数はそれなりに揃ってるね。にしても何だコレは。一体普段は何をして生きているんだ、あの男は。」

資料は龍夜についてのものだった。

過去の記録。

龍夜がどこで、何をしてきたのか。

ひたすらに、それを集めたものだ。

ある時は中国で<天使級>レギオンの大群の征伐に参加。

ある時はロシアで術者の行方不明事件の捜査に協力。

ある時はインドで闇の拳闘大会に潜入調査。

ある時は<座天使級>討伐軍団の一員に参加。

そのような記録ばかりだ。  
つまり。

「基本的には裏方。前に立って何かするようなものは殆ど無く、あったとしても小さなものばかり、か」

「けどそれも仕方ないんじゃないの。何しろ悪名高い『漆黑騎士』だもの。前線に投入してまともな連携が取れるとも思えないし」

「確かにね。生身での戦闘を前提とした騎士なんて、他の騎士の攻撃に巻き込まれるのがオチだろうし」

「ま、鎧そのものの防御力は秀でているみたいだから鉄砲玉みたいな扱い方はできそうだけど」

敵陣に単体で突っ走ってゆく黒い騎士を想像する。

どうせレギオンの群れも黒いのですぐに区別できなくなること請け合いだろう。

そこに次々に絨毯爆撃のように投下される騎士の攻撃。

まあ、あの強度の鎧ならば耐えられないことはないだろうが鎧が耐え切ったところで本人の精神力がどれだけ耐えているのかは甚だ疑問である。

ざっと見た限り仕事の評価はされている。良い駒、といった扱いだろうが、だからこそ簡単に切り捨てるような真似はされまい。

使い勝手のよい駒は、長く使い潰すに限る。

自分自身が良い例だと薄く笑った。

それにしても。

「なんていうかまあ……やりたい放題だね、彼」

「さすがのあたしもこれ見たときは引いたよ。貞操観念の薄さで言うなら、あんたとい勝負なんじゃないの」

「いやさすがにそこは僕のほうが薄いよ」

「……何の争いよ」

呆れる芳鈴はさておいて。

ここで二人の言う貞操観念とは、いわば各派閥の縄張りの事だ。術式世界における派閥は一般的なそれと同様に、ややこしく複雑で面倒に絡み合っている。

雪杜の研究はそんな世界に風穴をあける可能性を秘めているのだが、それはここでは置いておく。

今は龍夜の話である。

龍夜の仕事の受け方は、一言で言って無節操。

例えば組織Aで依頼を受ける。そして数年後、思い出したかのように組織Bの依頼で組織Aを潰す。

平気でそんな事をしていた。まあそのどちらの組織もそもそも褒められた中身の組織ではなかったのだが。ちなみにそれが明らかになったのも、騎士団に龍夜が提出した資料からわかったことである。

これで恨まれない方がおかしい。

事実何度も集団で襲われているらしい。それら全てを撃退しているというのがまた見事にトチ狂っているが。

「どうにも彼の扱いと実力が乖離している気がするんだが」

「それは同意。けどやっぱり『漆黒騎士』でしょ？ どうしてもそのスペックで仕事を回すみたいなのよ。ついでにいうと、あっちもそういう仕事を選んで請けてる節もあるしね」

「ふうん……何か、人前に出たくない理由でもあるのか」

「そりゃ、あるんじゃないの。あんただって立場的には似たようなもんじゃない。

あなたは、例の研究。そしてこっちは、噂の鎧。

どちらも傷持ちって言えばその通りでしょ」

「まあ確かにね」

龍夜がいつどこで鎧を手に入れたのか。それは誰も知らない。少なくとも調べた限りではわからない。

意図的に隠しているか、そうでなくても積極的にふれ回るつもり

はないのだろう。

「ねえ。君の意見を訊かせて欲しいんだけど」

「何？ くだらないことだったら殴るわよ」

「怖いな。それじゃあ真面目な質問をしよう。」

彼 東雲龍夜の代名詞である『漆黒騎士』と、その鎧。

彼はそれを、望んで手に入れたのか、望まないうちにそうなったのか。

どっちだと思っ？」

芳鈴は雪杜の言葉を受け、しばし考え。

「……つまり、普通に術式で鎧を召喚したらそうなったのか、それとも最初からあの形の鎧を想定して作ったのか、ってこと？」

こくり、と雪杜が頷く。

もついちど芳鈴が考える。今度は深く。

彼女の中での答えはすぐに出た。当然前者だ。彼の資質がどれほどの物であったかは分からないが、存在として圧倒的に上位のものを相手取る事を前提にしながら特攻が必要なものを作るなど、正気の沙汰ではない。

それなら。

正気でなければ、そのような鎧を選ぶ理由があるだろうか。

あのような鎧を選ぶ理由は一体何か。漆黒騎士の利点を考える。

まず、どう考えてもその防御力はそのひとつだろう。強度だけならば上位レギオンの攻撃にも耐えられるのではなからうか。

しかし同時にデメリットがある。圧倒的な火力不足。術式が発動できないならば狩ることのできるレギオンはせいぜい<大天使級>が限界といったところだろう。

しかし先頃、彼が討ち倒したのは<権天使級>だ。

さて、この矛盾はどこから出てくるのか。

つまり。

「東雲龍夜はその剣術ひとつで、レギオンと対抗出来る。それを前提とするなら、あの防御力だけを突き詰めた鎧を選ぶこともある……かもしれない」

雪杜はそれに同意する。

「うん。そうだね。僕も同じ考えだよ。」

「けどそれって前提がまず無理っぽくない？ そんなの聞いたことないわよ」

「僕もそんな剣術は聞いたことはないけれど、前例が皆無ってわけではないからね」

雪杜の視線の先には、ケーキを食べながら会話を続けている下級生の少女たち。

「……四条式」

芳鈴が声を潜めた。

「けど四条式の伝説だつてどこまで信用できたものかわからないわよ。ていうかもう明らかにギャグとしか思えないような話もあるし。大体、そんな体術が廃れるにしてもほとんど広まることさえなかったって言うのはおかしいじゃない」

彼女の言葉のとおり、四条式の使い手は非常に少ない。

国内で十数人といったところだ。

「生身で身を守れるどころか、レギオンと渡り合える。それって、術者が飛びつかないほうがおかしいくらいの技能よ」

「ま。そうなんだけどね。そっちは何か有るのかもしれない。条件とか資格とかね。」

けど火のないところに煙は立たぬの通り四条式は確かにある。

それと同じような剣術があっても、おかしくはないだろう？」

「う〜。まあ、そう、かも」

しぶしぶといった様子で同意する芳鈴を見て、おかしそうに笑う

雪杜。

無茶を言っているのは理解している。

それでも、龍夜の剣技を目の当たりにすると、それも可能では、  
と思ってしまうのだ。

<天使級>を斬れるからと<大天使級>を斬ることができるわけ  
はない。まして<権天使級>と剣技ひとつで渡り合うなど本来なら  
ば夢物語。

しかし可能性を感じずにはいられない。

そして。

もしそうならば。

「雪杜。眼、怖いよ」

指摘を受けて我に返る。

「ふむ。どうにも感情的になるね。コレに関しては仕方がないと諦  
めてはいるけど、君に度々注意を受けるともうすこし考えたほうが  
よさそうだ」

苦笑を浮かべる雪杜。

芳鈴は。

( なによ )

なぜだかそれが悲しくて、悔しくて、やりきれなくて。

「雪杜」

「うん？」

「パフエ」

「うん」

「すぐ」

「うん」

半ば以上は、八つ当たりだった。



そんなやりとりがあっっているなど当然ながら露知らず。

龍夜は街を徘徊していた。

言葉が悪いがそうとしか言い表せない。

何しろ行く場所行く場所怪しかったり薄暗かったりなんか臭ったりと、普通であれば人が避けて通るような場所ばかりだからだ。

当然、龍夜がそんな場所を渡り歩くのにはそれなりの理由がある。別に趣味ではない。いやある意味趣味なのだが。

そういうわけで今も、どこか生臭いビルの谷間で、薄暗い闇をじっと見ていた。

「なし。なし。なし。どこもかしこもレギオンの気配はなし。

昨日の群れは一体どこから現れたんだ」

『完全に隠れおおせているな。』

こうなってくると俺たちの調査の行き届かない場所……ふむ、地下室なんてのはどうだ。あるいは下水道』

「分かってて言ってるだろ。レギオンの発生はあくまで人の通りの中で生まれる。」

こうやって薄汚れている場所にだって人の流れはあって……そしてその流れが特に淀んだ感情を含んでいるからこそ、レギオンが生まれる。

下水や地下室にそんな流れがあるなら、それは相当規模のマフィアや大量殺人犯のアジトだ。

そんな情報があれば真っ先にあたってるよ」

事実、夜に元気になる自由業の方々の周囲は集中的に調べてある。「ったく。こうなってくると本格的に三奈頼りになるな。……どう

しよう、俺どんどんあいつに頭が上がらなくなってる気がする」

『いやとつくの昔の話だろそれ……お前まだ同じ地平にいるつもりだったのかよ。俺はそのことに戦慄だよ』

「そこまで言うか貴様」

『事実じゃねーか。二年前日本に帰ってきてからこっち、お前あいつの世話にならなかつた方が少ねーんじゃねーの？』

「ぐ……っ！」

割と事実だった。

生活拠点を日本に移すことを決めた二年前。

あてにしていた姉は相変わらずの風来坊で連絡がつかず途方にくれ。

ひとまず仕事をとえば『漆黒騎士』ということでも門前払い。

明日の飯さえしれぬ窮状の龍夜に手を差し伸べたのは、他でもない三奈だった。

ちなみに。

あちらはしっかりと幼少児の龍夜の事を覚えていたのだが、龍夜はすっぱり忘れていた。

それが知られたときは恐怖であった。

今でも体が震える。

三奈怖い。マジ怖い。洒落にならない。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

『おい、龍夜。めんどくせえから帰ってこい』

「はっ?! ま、まあとにかくあれだ。もうこれだけ借りを作ればあとどれだけ借りを作っても同じだよな」

開き直る龍夜だが。

『そいつはどうだろうなあ……』

小声でつぶやいたサマエルの声には気付かなかった。  
その時。

コートの内側に振動。

携帯端末のバイブレーションだ。

取り出す。

固まる。

えー。まじでー。といった顔。

いやまあ待つていたは待つていたのだが、タイミングが悪すぎた。つまるどころ。

『鈴橋 三奈』

と、画面には表示されていた。

電話を受けないという選択肢は当然ない。あちらから連絡を入れてきたという事は何か伝えるべきことがあるということだろうし、無視すればあとでどんな目にあうのか想像もつかない。

というか想像したくない。

「はい、もしも三奈が元気にしてたかハッハッハッ！」

『どうやら何か失礼な想像をしていたようですね』  
なぜバレた。

あほか、というサマエルのつぶやきなど当然耳に入らない。

『まったく。毎度毎度のことながら、もう少し皮を被る事くらい覚えたらどうですか』

「被ってねえよ」

『はい？』

「いやなんでもない。」

それよりも、これは何の用事で？

『なんですか。用事が無いと電話をすることもダメなんですか？』

「いや……んなこと言わんが……」

どうにも調子が狂う。なんとなく、普段の三奈とは様子が違う。

「どうしたんだ」

『いえいえ。なんと言いますかね、そう。今朝送られてきた報告書に虚偽が混ざっていてそのことで姫様とお話をしたりしたんですが。まあ率直に言って、ええ。』

殺意、沸いちゃってるんですよね』  
び。と。

通話を切るボタンを押す。

沈黙。

ただただ沈黙だ。

しかし龍夜の体はカタカタと小刻みに震え脂汗がだくだくと溢れだし顔面は蒼白を通り越しもはや土気色。

そして電子音。

「あれ？ おかしいな。俺確かにバイブ機能オンにしてたはずなんだが」

げに恐ろしきは人の執念。

電子音は止まらない。一定時間成り続ければ自動的に留守録に切り替わるはずなのにその機能さえ働かない。

どういう事だ。

震える手で、通話ボタンを押す。

『いい度胸ですね、龍夜さん。命が惜しくないんですか？』  
「す」

すみませんでした。

恐怖で言葉がまともに出てこなかった。

しかしなぜか相手はその意味を正しく理解したらしく、よろしい、と答えた。

どうやら世界は彼の知らない法則で動いているらしい。

『虚偽報告なんて珍しくはないですけど、まあ今回は随分と重ねてくれたみたいじゃないですか。まあ考えて見ればおかしな話ですよ、あなたがまともな報告書を定期的に出してくれている、ということがある。』

ねえ龍夜さん。どうせ無駄でしょうからその街で何をしようとしているのか、なんてことは聞きません。

ただ、今何が起きているのか。それを教えてください』  
完璧だな。

干上がった喉を唾で潤しながら苦笑を浮かべる。  
退路を断たれた。ここでさらに嘘を重ねようものなら。

全ての約束が無意味になる、か。

それは優しさだ。

たとえ刃にまみれていようと炎をまとつていようと、それが優しさであることは疑いようがない。

選べと言っているのだ。そして、どのような答えを返してもそれを受け入れると。

嘘についても。それをただ受け入れると。

きつと三奈は嘘をついて、たとえそれに気づいたとしても、今まで通りに接してくれるだろう。

それを許すかどうかは龍夜次第。いつそ暴力的なまでの包容力。だから。

「……レギオンが大量発生している。昨晚の発生数は千以上で  
どうやら俺は、完全に狙われているらしい」

真実を伝えた。

それに。

『……ばっ』

三奈は。

『馬鹿ですか?! 千つて……そんなの非常事態もいいところじゃないですか! いくらあなただってそんな数相手にしたら』

「まあ、三回は死にかけたかな」

『っ!』

「大丈夫だ。状況が危なかったってだけで怪我をしたとかそういう事はないから。」

だから落ち着いてくれ。俺は問題ない」

『問題ないなんて……そんな事』

「大丈夫だよ。一応、強力な助っ人がいたからな」  
ただ。

それをしても、あれだけの猛攻が今日明日と続けば明後日にはどうなっているのか。

三奈もそれを察してか、口を閉ざす。

先ほどとは違う、重苦しい沈黙。

破ったのは龍夜だ。

「それで、連絡してきたのは？」

『……はい。そうですね』

鼻を嚼る音が聞こえた。

気づかないふりをして、拳を強く握った。

『今朝、あなたに頼まれてた調査のひとまずの結果です。』

結果というよりは推測ですが 今、この街の地図なんかを見ることはできますか？』

「いや、無理だな。けど地理はもう頭に入れている。話を進めてもらって問題ない」

『そうですか。それでは。』

いまあなたのいる街 というよりは、代理で管理してもらっている領地ですが、神明市を中心に広い範囲を持っています。

その街の東側に山がありますね？

どうもその中腹辺りには昔村があったようで。戦中にどういうわけか空襲を受けて滅んだようですが、ほぼ人の手が入っていないようなんです。

もっとも、打ち棄てられた村ということでの人の通りはないでしょうが……地上探索を回避し、人の想念を集約する。

その条件に合うものが、そこにはあるかと』  
つまり。

「防空壕か……！」

たしかにそこならば、充満し圧縮し密度を高めた想念が集まって

いる事は想像に難くない。

先程のサマエルの言葉は奇しくも真実の一面を付いていたのだ。

「助かった。ひとまず状況を確認する」

龍夜の顔に希望の光が宿る。

これは状況を一気に打開する可能性を秘めた情報だった。

『はい。わかりました。』

あ。それからコレは別件ですけど」

「ああ」

『南雲隊長からあなたへ荷物がひとつあります。おそらく今日明日中には届くかと』

えー。

一瞬で龍夜の表情が曇る。

だってあの人、マジで変なもんしかおくってこないし。

というか帰ってきてたのかあの人。

「……ああ、うん、わかったよ。受け取っとく」

本当ならば受けとりたくなどないのだが、受け取らなければどんな目に合うのかわからない。

「あれ？ 俺どんな目に合うのかわからないことばかりじゃね？  
五年前にたどり着くべきその真実に今更たどり着いた。余りにも遅すぎる。」

東雲あるいは篠中龍夜。

女性相手にはどこまでもヘタレになれる男だった。

「ひとまず今は調査に行くよ……」

『はい。……気を付けて、下さいね』

それは。

きつと、いつものような挨拶がわりの言葉ではなくて。

「……ああ。気をつけるよ」

素直に応える。

「じゃあな、三奈。すまな……いや、ありがとう」

謝罪の言葉を打ち消して感謝を伝える。

そのまま、通話を切った。

壁に背をつけて、僅かに瞳を閉じる。

日の当たらない壁は、じつとりと湿って冷たく、だからこそ、自分程度には相応しいと、自嘲する。

「さて。じゃあ、行くか」

気持ちを切り替えて、足を外へ向ける。

光の先へ。

闇の向こうへ。



## 道・辿る（後書き）

日常編ラブコメ風味。もっともずっと自分の中のあいつ（誰だよ）が訴えかけてくる。

というわけで困ったときの三奈えもん。

頼めば大体何とかしてくれる。

ひとまずひとつの話が無駄に長いのがアレなのでこまめに分けたほうが読みやすいんでしょうか。改行とかも。

Webで読みやすい書き方ってどんななのかも研究中です。

さて、ひとまずの終わりはみえてきました。

それでも決着はもう少し先。

なぜならこれは傷跡の話。

傷を負うために戦うのは誰なのか。

悪意・覗く(前)(前書き)

分けてみた。

## 悪意・覗く(前)

『ありがとう』

通話の切断はあっけなく味気なく、心と言葉がその場に取り残されたかのようで。

だから。

「なにが。ありがとうじゃねーってんですよ」

湿っぽくなつた声で、それでも笑つて悪態をこぼす。

「まったく、人の気も知らないで何をしてくれてるんですかね、あの人は」

三奈がいるのは楽園騎士団日本支部ビル。その最上階の展望室だ。日本にいる騎士はほぼ全てを管理する組織の総本山であるので高さも必然的に高くなる。街を見下ろすロケーションはなかなか良いはずなのだがどうにも人気が少ないというか人気がないのは、ここにいる人間たちの性質故だろう。地下の訓練場で暴れている方が性に合う人間の多いこと。

朝。

姫に龍夜が虚偽報告をしている可能性を告げた後、本来ならば大穴へ行くべきところを休んで、とにかくこれまでの報告書を洗いなおした。

龍夜の提出する定期報告書は基本的にそつがない。フォーマットにそつて必要な項目を淡々と埋めている印象だ。

これが例えばアリカだと、無駄に情報を詰め込みすぎて訳が分からなくなるし、遊乃は最低限すら記入しないスカスカの状態で提出する。大輔は的外れな説明がちらちらと書きこまれているし、工の報告書は大雑把な部分が多い。

しかしそれはどうしても出てくる『ズレ』であると三奈は考えていた。

あるいは個性と言い換えてもいい。

そういった部分を修正し補正するために、彼女たち事務の人間がいるのだ。

戦う意志と能力を持っている人間はそちらに力を使わせ、机の前に座る時間を可能な限り削る。人員不足の騎士団で効率用隊員を回すためには、どうしてもどこかにシワを寄せなくてはならない。彼女たちはそれを理解しているし、積極的に応援している。

無論、そういった部分を意識的に少なく作成する者もいる。が、そこには慣れや積み重ねといったものが存在するのが普通だ。姫も、ずいぶんとそのない報告書を提出するが、それでも『あの年齢にしては』という前提がについての事だ。

しかし龍夜の報告書にはそれが無い。

徹底的に省かれた無駄。

簡潔にまとめられた文章。

時系列の整った経緯。

はつきり言って、領主たる騎士としての能力が不足している龍夜に、それだけの情報を整理する時間があるわけがないのだ。

けれど現実に三奈に出てきた報告書は手直しが不必要いほど整ったものだった。

この不可能を可能にするには？

最初から答えがあれば良い。

想定した『結末』に向かって無理のない『設定』を作り上げれば作り上げたい報告書に必要な事実だけをピックアップしてそれ

以外を切り捨てれば、短時間で体裁を整えることができる。

やり方はコツさえ掴めば誰にでもできる。事実をベースにして、都合の悪い部分を改変すればいい。

無論問題行動である。

騎士団に敵対の意志あり、と疑われても仕方のない行動だ。もし敵性存在として認識されようものなら、今後騎士団から積極的に命を狙われることになる。

龍夜もそれは認識しているだろうし、特定組織に所属することをよしとしない彼にとってそれがどれほど致命的な問題なのか、他ならぬ彼自身が一番よくわかつているだろう。

そして最後まで隠し通せると思っていたとも思わない。

自画自賛にもなるが、三奈は自身のある種の能力には自信を持っている。

情報処理　というより、情報支配と呼ぶべきか。

電子端末を用いた情報制御において、彼女は異質と呼べる才能を有していた。

「まー、それでこれまでまったく気づけなかったというのも問題といえれば問題なんでしょうけど。」

龍夜さんでなければ気づけたんですよ。ええ」

誰にともなく言い訳をする。

「まったく……本当に、何をするつもりなんでしょうかね、あの人は」

まさか、まっとうに領主としての責務を代替するだけ、などということはもはやあるまい。

ましてや行方不明のアレックス・キングの捜索をしてはい終わり、などという結末もあるわけがない。

「おそらく、こちらに報告しようものなら即座に行動を制限せざるを得ない何か、といったところでしようけど。」

あの人のことだから直接的に被害を振りまくようなことではないでしょう、なんて言っても、まあ大抵の人は信じませんよね。特に今はタイミングが悪いですし」

龍夜の問題行動を握りつぶす判断を下したのは、他でもない、姫だ。

先日の、龍夜に対する根拠のない言いがかりが生まれるような環境でそのような事実をが明るみになれば、下手をすれば私刑に走るような輩がでないとも限らない。

何が起ころにしても騎士団内部に生まれる動揺は少なくないだろう。それは好ましい事態ではない。

姫はそう告げた。

それに。

龍夜は、その実績故に騎士から特に嫌悪されている。

「忌刈りの黒、だなんて名前、似合う人でもないんですけれど」

あまりにも扱いづらく、同時に駒としての汎用性の高さ故に重宝される。そして、『棄てた所で誰からも文句はでない』と来た。

その上仕事もより好みが少ない。

だからこそ人に疎まれるような仕事を任されてきた、という流れもある。

結局のところ。

「わたしがどれだけ悩んでも、彼が自分でどうにかなるうって思っ  
てくれないと、どうしようもないんですよね」

出てきたのは、そんなありきたりな結論だった。

たまに、昔のことを思い出す。

そこに周期もきつかけもない以上、本当に何気なく、何の理由もなしに浮かんでくるものなのだろう、と龍夜は考える。

どうしても血の匂いのつきまとう記憶が多いことには辟易とするが、それでも楽しい記憶はいくらでもある。そういったものが浮かび上がるたびに『ああそろそろ俺死ぬのかな』といった乾いた思考がぷかりと浮かび上がる。

不治の病に犯されているわけでも致命の傷を負ったわけでもない。ただ死というものの存在を、自分の中で当然の流れとして受け入れてしまっているせいだろう。

なにか特別な経験をしたわけでもない。強いて言うならばその人生を戦いに傾倒させていると言えるが、そのような人間は少ない。そして、そんな人間が例外なく死への忌避感を忘れて生きていく訳ではない。

己の死という生命であれば忌避すべき空想に、嫌悪も甘美もなく単純な可能性を見出す。

サマエルが『お前は長生きできない』とする理由であった。しかし同時に。

『お前は本当、しぶといよな』

その声に込められた感情は何だったのか。

年齢も性別も判然としない不可思議な声だから、その感情も容易には汲み取れない。

褒めていないことだけは直感的に理解できたが。

龍夜はその言葉に応えることなく、目の前の虚空を虚ろな目で見ている。その右手の指先は皮膚が裂け、血が滴っている。ちろりと

指先を舐めると、若干の熱を持っていた。

現在龍夜は山の中にあるという廃村を目指して歩いてきた。やはりレギオンの気配は感じ無いものの、漫然と探すのと明確な目的意識をもって探すのでは、そこに向けられる意識にも差が生じる。

漫然と探すのならば、一点に割く注意力は自然低くなる代わりに、広い範囲をカバーすることができる。

明確な目的を持って探すのであれば、広い範囲はカバーできないが僅かな違和感を察知することができる。

そして、その違和感に気付くことができたのはまさに後者の意識で探索を行った結果によるものだ。

探査術式を走らせた際に生じた、僅かな違和感。

それを追ってやってきた先にあったものは。

「『また』結界……か」

『ああ。それも、迂闊に踏み込めば全身を分子レベルで分解するタイプの、性質の悪いヤツだ。』

人払いの結界も同時に張ってある当たり一般人に対して親切と云えないこともないが……そのせいでこちらの結界に気付くことが困難になっているのは、まあ、狙ってるんだらうな』

「消極的攻撃と積極的殲滅か」

龍夜の指先を切り裂いた結界は、サマエルの言葉のとおり、物騒な性質を持っていた。

結界といえば防御のためのものというイメージが強いが、これはもう『一定範囲を囲んで停滞する接触対象を破壊する攻撃術式』とするべき代物に仕上がっている。

「こんな術式、知ってるか？」

『似たヤツは知識としちゃあ知っているが、ここまでの完成度のモンは初見だな。作れと言われれば作れるが、まあ作る意義はとにかく』



く低い。実用性って意味じゃあ最低と言って問題はねーだろ』

『頑丈さ』ではなく、『攻撃力』に主眼をおいて作られた結界であるため、ざっと見ただけでもその構成の脆さが判る。正面から精霊術式を撃ちこめば、確実に破壊できるだろう。

このような結界を使うとすれば近接戦闘だろうが、結界というのは展開に時間がかかり取り回しも悪いため定点設置という用途が基本。使い道としてはせいぜい突進してくる相手に対しての迎撃手段だろうが、攻守が激しく入れ替わるような戦闘でこんなものを展開していたら、下手をすれば自分が消し飛ぶハメになる。

誰が使うというのだ、こんな危険な術式。

「だよな。けど、そんな術式を作ったヤツがいて、そいつはこの中に何かを隠している。三奈の情報の通りなら、レギオンを困っている。」

……気に入らないな。目的は何だ？　どんな人間がレギオンを庇うような真似をする？」

結界の作成者がこの場所を隠したいのは確かだ。

先述したように結界が二重起動してあるため、攻撃結界の察知が困難になっている。一般人は人払いで遠ざけ、なお近づいてくる

つまり術者などといった種類の人間は攻撃結界で始末する。

えげつなささえ感じさせる底意地の悪さ。

見知らぬ何者かに対して容赦なしの殺意を發揮できる、そんな人種のやることだ。

『そついやあお前、手の傷はいいのかよ』

「ああ、このくらいなら別に平気だろ」

龍夜も、攻撃結界にはギリギリまで気付くことができなかった。すんでのところまで違和感に気づいたが、迂闊に右手の指先で結果に触れてしまったために浅くない傷を負った。

自己治癒力促進の札を指先に巻きつけるが、完治には時間がかかるだろう。

『いや、そつちもそうなんだけどよ。俺が言ってるのは手のひらの方。さつき電話中に爪が食い込んでたろ』

「……ああ」

左の手のひらには、確かに薄く赤い筋が入っていた。

「まあ、仕方なかるうよ、こいつは」

『はん、仕方ない、ね。そこんとこ、てめえがあいつに弱いのは貸し借りの問題だけじゃねーよな』

「言いたいことがあるなら言えばいいだろう」

『アホくせえ。察しろって言ってやるよ。いい加減もう少し相手の感情を尊重することを覚えるべきだぜ。』

今回のことにしたって、三奈に事前にある程度話を通しとけば済んだことじゃねーか。それとも、何時までも俺におんぶに抱っこするつもりか？』

「こんな場所で説教か。時と場合を少しは選べ」  
ため息を付いて。

右手が掻き消え飛び出してきた黒い影を捕まえる。

レギオン。

悲鳴が上がる前に首を抑え地面に顔面を叩きつける叩きつける叩きつける何度も何度も繰り返し繰り返し繰り返す。

抵抗が僅かに弱まった隙に右の踵で頸椎を踏み抜きこしゃりと柔らかな感触が足首まで突き抜け貫通、硬直と痙攣で動きた止まったのを見計らい、左足を踏み出して右足を大きく振り抜いた。

引きずられ飛ばされ足首からスッポ抜けた黒い影はぶらりとぼろ雑巾のように力なく、そのまま攻撃結界に衝突し。

「ぜひつ?!」

それは悲鳴だったのかそれとも単に音が漏れたただだったのか。僅かな光と共に砕け散り跡形もなく消え去った。

その一連。

半ば以上無意識の反応を終えて、龍夜の眉間にシワが寄る。

「……サマエル。時刻は？」

『午後三時二十九分、だな』

「同時時間帯でのレギオンとの交戦記録は？」

『それなりに。ただし今日みたいな秋晴れの天気の下だと、記憶では四つほど該当するか。』

騎士団に二例、その他二例つとこだな。

ちなみにその時は<座天使級>、<主天使級>が存在していたらしいが、さて今回はどうだろうな』

頷き、あたりを見回す。

山の中、と言っても日差しはそれなりに入ってきている。昔は存在したであろう道は完全に草木に覆われているものか。つては人が通った道だ。それなりにひらけているのはある意味当然の話だろう。だから。

「可能性は？」

何とは尋ねない。

『ないとは言いきれんだろう』

帰ってきた答えは想定内の物。

つまり。

「中級以上 下手をすれば上級のレギオン。普通ならば年単位の期間をかけて出現するものが、なんでこんな所にいる」

前任者は。

アレックス・キングは。

はたしてコレを知っていたのか。

知らず、舌打ちをする。

「騎士団への援軍要請は、やっぱり取り消すべきじゃなかったかな」  
『今更だな。そもそも<権天使級>を討ち取った時点であちらとしてもこれ以上の討ち漏らしは想定していないはずだ。とっくに援護体制なんざ解体してるよ。』

ハツハアツ！ それにしても、奴らに聞かせてやったらひっくり返るに違いないぜ。何しろ優秀な領主の領地でこれだけの不手際が出てくるんだ。よその組織からその能力に疑いを持たれてもおかしくねえな』

「そういう事もあり得るか。ったく、面倒な」

『組織だから面倒なことあれば、組織だからこなせることもある。そういう面倒を抱え込んで余りあるメリットがあるから、組織なんてものが出来るのさ。』

で、龍夜、これからどうする？』

一瞬、何を返すべきか、言葉に詰まった。

無論見逃すという選択肢はありえない。今の＜天使級＞レギオンの襲撃からして、この先に今回のレギオン大量発生の原因がある事は確実。

日光の下に出たく天使級＞は、ただそれだけで存在を消費し、すぐに消滅してしまうのだ。

それでも出てきた。それはこの先に何かがあることの確かな証左となる。

が。

果たして、この先にいるものがなんなのか。

もしも中級以上のレギオンが出てこようものならば、相手の特性がよほど相性が良くない限り今の龍夜では太刀打ち出来ない。

結界を壊し、突入することは簡単だろう。

しかしそれをして、もし中にいるものがこれ幸いと飛び出してきたら？

それを止めるすべはないかもしれない。

この結界は、近づくものを容赦なく死に至らしめるものだが。

同時に、中にいるものを完全にとは言わないまでも抑える効果も見られる。

可能性が浮かんで消える。

ただ。

「……明日の一番日が高い時間。その時間に勝負をかける」

時間がない。見逃せない。

進むしかない。

たとえ僅かな勝機しかないのだとしても。

『まあ、妥当な線か。とはいえ、そのためには今日の夜、襲ってくるだろう群れを撃退し、万全の状態に臨む必要があるわけだが。いけるか？』

「どうか。そもそも現状で、すでに万全とは程遠い状態だからな」  
連日の戦闘は龍夜の体力と体内の気力、精霊を消耗させている。

毎日夜に備えて回復をはかり、どうにかもたせているというのが実情だ。

しかし明日の日の高い時間に戦端を開くというのならば、それができない。

たとえば今日の夜、昨晚と同じような攻勢に遭えば、明日の昼まで回復に全てを費やしたとしても、全力の三割から四割程度の気力、精霊での戦闘を強いられることになるだろう。

「笑えないな」

『ああ。けどま、いつもそうだろ、俺達は』

己の全霊を尽くす。そんな戦いは幾つもあった。

だが全力を尽くせた戦いは少ない。

放浪者の宿命か、戦場に恵まれることは少なかった。

今回も、そんな戦いのひとつになる。

それだけの話だ。

そして。

「死ぬかね」

『かもな』

それもまた、一つの可能性。

『彼女』がそれを見ていたなら、きっと腹を抱えて笑ったに違いない。

「ふ、ふ、ふ、ふ。あなたは、ねえ、まだ信じるのね。そうやって、そうやって。昨日と同じ、今日だって、そう、信じるのね」  
愉快に。愉快とともに。

ほかのなにかにそうされるまえに。

「あなたは、何も信じなくていいのに」

刃をふりあげて。

蹂躞するに違いない。

故に龍夜は思い知る。

己の浅はかさと、世界の気まぐれを。

悪意・覗く(後)(前書き)

分けてみた。続き。

## 悪意・覗く（後）

02 - 10b:悪意・覗く（後）

災厄は降りかかるものだという。

つまりは見えないところから襲ってくるという事だ。気付けない。あるいは、気付くことが非常に困難だということ。

だからまあ。こういう結果になるわけですよ。

湊智晴。十六歳。

自己評価では容姿も成績も性格も普通。他者からの評価？ 推して量るべしである。

そんな彼女とアレックス・キングとの出会いは、彼女が中学二年生の春。学校の始業式から帰る途中の事であった。

智晴のメンタルはその時点である程度の完成を見せており、その能力をフルに活用させていた。

つまり、情報の『解析』である。

僅かな情報、不確かな噂。そういった小さな点を集合として俯瞰し、検証し、より大きな結論、より深い真実へとたどり着く能力。

洞察力とは違う一種の異能を彼女は獲得していた。

『解析』はあらゆる場面で彼女を助けた。人間関係やテスト、日々の些細な問題は、彼女にとって取るに足らない出来事に過ぎなかった。

「口と頭が働けばなんでも碎いて捌いて暴いてやるわよ」というのが彼女の口癖だった。

異端を排除するはずの学級という単位においてさえ、彼女はその



能力を利用することで己を排斥しようとするベクトルを解析、操作、分解し、バラバラにしてやった。

無敵だった。

だからそんな彼女がアレックス・キングと出会ったのは、本当にただの気まぐれと偶然と運命が重なった、些細な出来事に過ぎなかった。

その時、目の前で大型トラックに正面から突っ込んで行って吹っ飛ばされた男がいた。

さすがの智晴もびっくりである。彼女の能力はあくまで情報の解析であり、つまりは事前に種となる情報がひとつも存在しなければ対処のしようがないということでもある。

なんとなく目についた迷い猫のチラシを見て、なんとなく住宅街を探して歩いていたらその猫が今まさにトラックに引かれそうで、ああもうだめだと思った矢先にかつしりとした体つきの牧師が全力ダッシュで正面から突っ込んで行って猫を助けて、きれいに吹っ飛ばされるとか、どうやって予想しろというのか。

「うわあ」

という声は何の感情もこもっていない、衝撃のあまり反射的に漏れたただの音。

「えーっと、あれ、あれー？　つかしいな、猫を探してたら何でトンデモ事故目撃してんだろ、あたし」

しきりに首をひねりながら牧師へと駆け寄る。トラックの運転手も慌てた様子で運転席から降りてきていた。

正面衝突をかました牧師は数回バウンドした後、電柱にぶつかって止まっていた。ピクリとも動かない。

即死だろうか。

さすがにそれはぞつとしない。

「もしもーし。もしもーし！ 大丈夫ですかー?!」

「ええ、平気です」

「うわあっ?!」

むくりと何事もなかったかのように起き上がった牧師に、さすがに驚愕する。

「いやあ驚きました」

多少土で汚れていたが、男は傷一つない顔で微笑んでみせた。

座り込んでいるため正確にはわからないが、身長は二メートル近くあるようだ。肌の色は白く、顔も穏やかかつ気弱な雰囲気。微笑んでいるのだが、体つきはがっしりとしていた。

起き上がった牧師は両腕に抱えた猫を撫でながら立ち上がる。

「いや驚いたのはこっちだつてば！ え、何、生きてんですか?!」

「おや、わたしが生きている事がそんなにショックですか? ……」

そうですか、まさか生きていただけで他人に刺激を与えてしまう罪深い存在になっていたとは……もはやわたしは、生きてゆくすべを見いだせない」

どうやら喜劇的な悲観主義者らしい。

「あああああ！ あんた、大丈夫かい？ ちゃんと息しているかい?!」

駆け寄ってきたトラックの運転手が、シワの深い顔に大粒の汗をにじませながら声をかける。

そんな彼に対して牧師は穏やかな笑顔で。

「ええ、平気ですとも……今はまだ」

え、これから何かあるの、と目を剥くトラックの運転手だが、牧師はそんな事は気にせず服の汚れを払う。

「それにしても、気をつけたほうが良いですよ。この時間の住宅街は人の通りは少ないですが、だからと言って今のスピードで走っているのは、突然の事態に対応できない可能性がありますから」

「いや、今がまさにそうだったと思うんですけど」  
智晴のツッコミはしかし牧師には届かなかった。

「さて。それではわたしは、縄を買って帰るとしましょう」

「お、おい！　せめて病院に行かないと！！」

「いえいえ、平気ですとも。この程度の衝撃で死ぬような鍛え方はしていませんから」

「いやでもすごい勢いで」

「はっはっはっは」

何故か笑い声を上げて歩きだして、すぐその角を曲がっていつてしまった。

ぼかんと、口を開いてそれを見送った二人は、顔を見合わせて。

「ど、どうしますかね、これ？」

「いやあ。まあ、俺としちゃあ相手が生きていてくれたっただけで儲けもんなんだけどよお」

運転手は難しい顔でエンジンを切ったままの自分のトラックを振り返る。

トラックはトラックで、あの牧師と同じように何ひとつかわりない。

「……は？」

いやそれはさすがにおかしい。智晴はすぐに牧師を追って駆け出した。

「お、おいちょっと、どうするんだい？！」

「ちょっと気になることがあるから！　おじさんも、仕事に戻っていいと思うよ！」

「へえっ？！」

驚きの声を置き去りに、牧師を追いかける。

角を曲がると、牧師は先の道路を右に曲がるところだった。今の短時間の間に歩いたとするならば、歩行速度はかなり早いようだった。

た。

まともに追いかけると途中で見失う可能性がある。

「ええと？ 今確か『縄を買いに行く』って……っていつか今さら  
だけど縄って何のために」

一瞬疑問がよぎり。

瞬時に答えを知る。

「自分の首括るためか！ え、嘘、どれだけネガティブなの今の人  
?!」

ギャグだろうか。いや、なぜか違つと断言できた。したくはなかつたが。

「とにかく追いつかないと。ええと、この辺で縄売ってる店ってあつたっけ。ええと」

あのスーパーには……いや、それほど強い縄はその辺のスーパーでは売っていないだろう。となると日曜大工などの道具を扱っている店だろうか。しかしそれは先ほどの牧師が曲がった方向とは逆だ。こちらにある店で縄が売っていそうな店となると いやさすがにアダルトグッズで首を括るのは人としてどうだろうか。

それ以外にこの辺りにある店は、と。

そこまで考えて。

「んんんん？」

ふと、もうひとつの可能性に思い至る。

方向は一致しているし、そもそも牧師が事故にあった（と表現すべきかどうか大いに悩むが）原因を考えれば、そう悪くない結論だ。

そういう事ならば。

急ぐ理由は、特にないだろう。

待った時間は一時間もなかったのではないだろうか。

牧師は子猫を抱えてそこから出てきた。

掲げるのは『坂野動物病院』の看板。

まあ、つまりはそういう事だ。

「その子、大丈夫でした？」

「？」

病院のすぐ外で待っていた智晴に、牧師は一瞬驚きの表情を浮かべたが、すぐにそれは穏やかな笑顔になる。

「ええ、怪我もない健康体とのことでした。いやはや、誰一人怪我人が出なくてよかったですね」

「や、どう考えても怪我していないとおかしい人がいる気がするんですけど」

「気合いです」

「ですかー」

まさか信じるつもりもないが、まともに答えるつもりがないことがわかっただけでよしとする。

それに彼女は、別に牧師の非常識な身体構造に興味があつて追いかけたわけではない。

「ねえねえ牧師さん。あのさ、一体どうやったの？」

「はい？ 何がですか？」

「いやさあのトラックですよ。あんな勢いでこんな大人の質量がぶつかったのに、ヘコむどころか傷ひとつないんだもん。いったいどうやったんだらうって」

「ははあ、なるほど……」

牧師は納得し、感心したようだった。

「あの状況で、そこまで見ていましたか。いや驚きました。すぐにわたしを追ってきていたようですし、貴女はなかなか冷静な人物なようですね」

「野次馬根性が染み付いちゃってくせになってるんですよ。で、

回答は？」

「日頃の訓練の賜物です、と答えましょう」

「ありやりやりや」

智晴は笑って肩をすくめた。

繰り返しになるが、彼女の能力はあくまで解析に過ぎない。己の認識する範囲での事実、現実を分離裁断区分分類し、答えを見出す。彼女は手品の『仕組み』は暴けても『タネ』を自分で想像し創造する能力に欠けている。

己の知りうる現実以上が目の前に現れても、それを想像する事ができないのだ。

この時の彼女は四条式を知らないし、知っていても同じ事が再現できるとはにはわかには信じられなかっただろう。

牧師は智晴の前に風のように唐突に現れた『わけのわからないもの』だったのだ。

それが牧師　アレックス・キングと湊智晴の出会いだった。

未だに色あせない想い出を苦笑と共に振り返る。そういえばあの時の会話も、今日みたいな夕焼けの日だったと思いなながら。

風と言うにはいささか荒々しいというか突拍子も無いというか最大瞬間風速三桁数えそうとか諸々言いたいことは今でも思うが、あの牧師の穏やかな笑顔は風のような、という形容が似合っていた。

それからというもの、何かとつきまとう智晴に何を思ったのか、彼は情報の集め方、扱い方を教え、律した。

それまで無軌道に無造作に無条件に、鯨が水を飲み込むというよりはただ虚ろな穴のように受動的自動的に情報を吸収分解していた智晴。それを、必要な情報を能動的に、より高速かつ高精度で収集集積し、効率的に整理、管理、運用するすべを与えた。

『口と頭が働けばなんでも砕いて捌いて暴いてやるわよ』

という彼女に、モラルを教えた。世の中、知っているから知るこ

とができるから、と何でも暴き立てて良い訳ではない。少なくとも、ただのかよわい一般人の少女でしかない智晴は。

智晴はいつの間にかアレックス・キングを師匠と呼ぶようになり、お互い歳の離れた友人といった間柄を形作っていた。

「だからまあ、あつちゃんと言っような感情は正直、ないんだよね」  
教会への道を歩きながら独りごちた。

放課後、食堂でご飯を食べながら自分と師匠の馴れ初めを語った智晴に、灯駆は「そんなに必至に探すのは、その人が好きだったから？」と尋ねた。智晴は、笑って否定した。

アレックス・キングに対して特別な感情を持っていることは否定はしない。が、それが所謂恋愛感情かというところ、それは否とする。恋とか愛とか憧れとか、そんな湿っぽいものじゃなく、もっとあっさりして乾いていて、それでいて心地良くて程々の距離感がある、そういうものだ。

見てくれは確かに悪くないし、通りがかりで猫をトラックから庇う優しさも持ち合わせている。が、いかんせんメンタル的部分が壊滅的だった。ちょっととした冗談でショックを受けるし自分自身に絶望するし、自殺の手段ならいくらでもその場で思いつく。

三十こえたいい大人が自分の半分程度の歳の少女に言い負かされて大声あげて泣きながらダッシュで走り去る姿は限り無くシニールだった。

父親のいない智晴としてはこう言うのが父親だろうかと思うこともあればこんな父親は勘弁願うと思うこともある、愉快な人間だったことだけは確かだ。

だからまあ、執着なんだろう。

誰だつて同じはずだ。普段何気なく身につけていたアクセサリがある日突然行方不明になるとか。

いつも歩いている道にあった桜の木が、何の前触れもなく切り倒されていたとか。

そういつ、いつも通りがいつの間にか変えられてしまったことへの拒否感と、執着。

智晴は、本当に、なんとなく。  
師匠を探していた。

「っていつても、さっすがにねー」

手がかり無しでは何も解析のしようがない 訳ではまあ、ないのだが。

とはいえ。

「完つ全に避けられちゃってるもんじゃー」  
判ることといえはそのくらいのものだ。

アレックス・キングは、明らかに智晴の索敵を意識して姿を消している。龍夜が痕跡を見つけられないとボヤいているが、そちらは副次的な作用に過ぎない。

あくまでも智晴に対しての情報隠蔽を主として行動している。それは確実だった。

智晴が情報をバラバラに個別のものとして扱っていたのは昔の話  
今は情報を線 正確には、連結点を持つ線の集合体として捉えている。

特定の情報はそこに至る因子があり、またそこから発生する結果がある。因果は巡り広がり無数の傷跡を世界に残す。その傷跡を情報と呼び、智晴は好んで喰らい、飲み込み、弄ぶ。

生きている以上それを残さずに済むことは不可能。

が。

隠すことはできる。



「東雲さん側の事情は、あちしも知らない部分だからねー。そつちのテクを駆使されたら、さすがに追いつらい感じだ」とはいえ。

僅かな推測も立てられないというわけではない。

「戻ってくるつもりはあるみたいだけど……それでも、まあ素直に顔はだしてくんなさそーだし」

智晴はアレックス・キングの失踪を突発的なものではなく計画的なもの。さらには、一時的であると予想を立て、またそれを疑ってもいなかった。

タイミングは分からないが、今年中には戻るだろう。それがどのような形で、何をもたらすのか、までは、さすがに龍夜の領域の事情に踏み入る必要があるだろうが。

「東雲さん、かあ……あの人もよくわかんないなー」

何か異常な能力を有しているであろう、全身黒づくめの姿を思い浮かべる。

服装だけならともかく、髪の色瞳の色まであそこまで見事な黒はなかなかいない。

初めて見たときは、影の中からそのまま形をもって浮かび上がったかのような、奇妙な感覚を覚えた。

智晴が彼に対し抱く印象は、虚ろさと激しさ。

一見冷静に見える応対を受けたものの、果たして腹の中でどのような算段を立てているのか、察することは難しかった。反面、感情は表情や態度にすぐ出てくるため感情が薄いという印象はない。

しかもどうにもそれが意識されている様子がない、というのがまた恐ろしい。

思考を隠すという思想をおそらく持っていない様子だった。感情と思考回路の切り離しがよっぽど上手く出来ているのだろう。どうすればそんな事ができるのかはさておいて、随分と並外れた狂人具合であるとは思った。

「何をどうすればああなるのか、個人的には興味もあり恐怖もあり。

ま、とりあえずあっちゃんには近づけられない感じだねえ。気を付けないと」

二度目の龍夜との話の時。

あの時灯駈を連れて行ったことはおそらく智晴の人生最大のミスだった。

なぜ事前に気付けなかったのかと自問するが、まあそれむりじゃない？ という回答も自分の中で出ていた。つまり、どうしようもない。

灯駈は、龍夜の何か（・・・）を理解した。

それも、本人の気づかない本能の部分で。

智晴の見る限り二人に共通項は見当たらない。まさか前世がどうかソウルメイトがどうか、そんな訳のわからないものを持ち出す趣味もない。

それでも出会ったばかりの狂人の中身を灯駈が覗き込み、何かしらを理解したというのなら。

智晴にはわからない共感が二人の間にはあるのだろう。とはいえ。「あっちゃんはまともすぎるくらいまともだし、東雲さんはまともに見えるだけのぶっ壊れだし。何がどう共感したんだろーね」

首をひねりながら、坂の上を見上げる。

坂を登りきれば教会だ。何か変化があるとも思わないが、念のためということ足運んだ次第。

この時の彼女にこの後の運命など知ることが出来るわけもなく。彼女はなんとなしのいつものように、坂道を登っていった。

教会の前に、一台のバイクが停まっていた。  
郵便物が届いたらしい。

教会の前にはポストがない。居住区への入り口は教会内と裏にまわったところにあるが、教会の入り口は基本的に閉まっているので、運転手は裏へまわったのだろう。

「って、師匠宛の荷物とかはどうするんだろ」

龍夜が預かるのか本人が戻るまで郵便局にとどめておくのか。いずれにせよ話を聞いておかなくてはならない。なんなら、自分が預かっても良いと考えて、そちらへ向かう。

「もっしもし、郵便やさん」

夕焼けに染まる教会を迂回する。教会は木に囲まれているせいで、裏へ回ろうとするとやや日に陰りが生まれるが、暗いと感じる程でもない。

逆回りに回られてすれ違いにならないように声をあげながら、裏口へとたどり着いた。

が、誰もいない。

「あれ？ おかしいなあ」

逆から回ってしまったのだろうかと考える。そうだとするならば、そろそろバイクの音が聞こえてきてもよさそうだが、それもない。

試しに扉の取っ手を回してみるも、手応えは硬い。

呼び鈴を鳴らす。反応はない。どうやら龍夜は外出しているらしい。

バイクの音はやはり聞こえない。

辺りは静かだから、エンジン音を聞き逃したということもないだろう。

はて。

配達人はどこへ消えたのだろうか。

「……もしもし？ どなたかー？」

あるいはバイクの走り去る音を聞き逃したか。

そんな事を考えていると。

「……………」

「ん？」  
裏口のさらに先、曲がったところで、葉擦れのような音が聞こえた。

ほんの一瞬、気のせいと済ませてしまえるような、そんな音。

不意に。

空気が変わる。

不吉な予感が全身を包んだ。

予感だとか直感だとかそんな生やさしいものではない。  
確信。

本能が今すぐここを立ち去れと金切り声をあげている。  
しかし。

「あははは……足が動かないや」

危険な目に遭うのは慣れているとはいかなくとも、それなりに経験がある。

危険の集まる場所というものはたしかにあるし、そういった場所は空気が違う。それはおそらくこびりついた色や臭いが一般からズレているということなのだろうが。

これは、違った。

殺人事件の現場よりも濃密でじつとりと湿った、いじめの現場をより凄惨に悪辣にしたかのような、感情の渦。

全身の肌という肌をナメクジが這いずり回り、血管を流れる血の一滴までもが泥水へ変じ、肌と肉のすき間をウジ虫が蠢いているよ

うな。

ありとあらゆる理不尽かつ荒唐無稽な負の感情を、それこそ世界中の人間から向けられているような。

圧迫感というより、閉塞感。

精神を追い詰め追い込み、奈落へ放り込むような、焦燥感。

吐き気と頭痛と目眩が同時にあるいは入れ替わりに襲い、意識が拡散し収斂し、自分自身が理解できなくなる、孤独感。

「あ。は、は、は」

引きつった頬は痙攣し奇妙な笑顔を演出し。

なぜ。

ちよつと。

ねえ。

足が。

勝手に。

「あ……う……」

止まらない。

足が前に進む。

忌避感も拒否感も拒絶感も意味をなさず。

その恐怖故に足が止まらない。

ゆっくり。

ゆっくりと。

壁の角を、曲がる。

そこには。

「あ……れ……？」

倒れる男が一人。

格好からして、郵便配達に来たのだろう。

慌てて駆け寄るが、特に怪我をしている様子はなく、服装に乱れもないことから争った形跡も見当たらない。

と。

「うんにゃ？」

手のひらを、ぐっば、ぐっばと開いて閉じてを繰り返す。

手足の関節を伸び縮みさせる。

何の変哲もなく、普通に動く。いつも通りの自分の体だ。ただ、得体の知れない恐怖の残した冷や汗だけが残っていた。

「あれー？」

しきりに首をひねる。納得がいかない。いくわけがない。

しかしどれだけ悩んでも答えはでない。

しばらくそうして首をかしげていたが当然何かが判るワケもなく。仕方無しに、ひとまず配達を起こすことを思いつく。

「もしもし、大丈夫ですか？ 何かあったんですか？」

ぺちぺちと頬を叩くが反応がない。頭を強く打つているとか、あるいは脳内出血だったりすれば外からはわからないから、その辺だろうか。とすれば、今ここで智晴にできることは何も無い。むしろ何かすることで余計に悪化しかねない。

ひとまず救急車を呼ぼうと携帯電話を取り出し　そこで、地面に落ちているものに気がついた。

封筒だ。中に何かが入っているのか、こんもりと膨らんでいる。手に持ってみても重さはそれほど感じない。

宛名は。

『東雲龍夜』

となっていた。

「東雲さん宛？ ……なんで？」

首をかしげるが、そういえばこの教会がアレックス・キングの個人資産等ではないことを思い出す。その調査をしている龍夜がいるのだから、それに当てたものも届くだろうと納得した。

感情的には、若干の抵抗を覚えたが。

ひとまずそれを持って、携帯電話を開きながら立ち上がる。

ふと、足元に陰がかかった。

なんだろうと振り返り。

。

あ。

え。

こきゅう、が。

「け、せげ、らせ」

めが、みえな。

ちが、これ。

ちかい。

ちかくに。

めのまえに。

そこに。

くろいものがいた。



悪意・覗く(後) (後書き)

出会いはいつも唐突。

よいものもわるいものも。

ということとで相変わらずのローテーション文章ですが、そろそろテンション上げていけそうな感じですよ。

術式の定義の話はいつすればいいんだろう。

というわけで次回へ続きます。

## 執念・群がる（前）

02 - 11a : 執念・群がる（前）

夕食は多めに、いつもより贅沢にしておいた。

最後の晚餐にするつもりなど当然ない。モチベーションを上げるためだ。食事と活力は切っても切り離せない関係にある。

もつとも、今夜もく天使級>の群れに襲われることを考えて腹八分で収めておいたが。

食事が終わってからはファミレスで時間が経つのを待つ。時間が過ぎるのを待つだけなら教会でもいいはずなのだが、あそこは術式が癪に障る。

龍夜は人よりも術式や精霊の動きに対して感覚が鋭敏であるため、精神の休養という意味ではあまりふさわしくないのだ。

そうして時間を潰してからファミレスを後にした。

陽は沈んでいるがレギオンが活性化する時間まではまだ時間がある。一度教会に戻り、術式などの準備をしていればいい時間になるだろう。

今夜と明日への備えもそうだが、雪杜にどう伝えるかも問題だ。

戦況としては既に詰み。明日討伐にかかるにしても敗色濃厚。そんな戦いに、その場限りの協力者を巻き込むのはさすがに良心が痛む。

とはいえうまく討伐できるにせよそうでないにせよ雪杜の手を借りずにいることはできない以上、どこかで関わってもらう必要はあ

るだろう。

「とはいえ、難しい状況だな。

完全に巻き込んだほうが俺としては助かるが、あいつにそこまで付き合う義理はないからな。俺が負けた場合はあいつ一人でやるのかそれともさっさと逃げるか……普通に考えれば後者だけだな」  
なんとなく。

彼の様子を観察していると、前者の行動を取る気がしなくもない。そうになると、龍夜の負債をすべて回すことになる。

それはどうにも、後味が悪い。

「結局、勝たなきゃ何かしらしこりは残るってわけか。当然だが」  
敗北から得るものなど何も無い。少なくとも龍夜は実践において『敗北』したことはかつて一度もない。故に知らない、と言うべきだろうか。

もつとも負けたことがない訳ではない。この場合の『敗北』とは、決定的徹底的に、立ち上がる意志も力も砕かれることを言う。そしてそうなった場合龍夜は間違い無く死ぬ。騎士団や各組織ならばフオー役の仲間がいるだろうが、そんなものがいた事のない龍夜はひとりで勝手に死ぬより他はない。

そう思っていた。

今回はそうは行かない。

龍夜の死は同時に雪杜の死の可能性を跳ね上げ、それはこの街全体の危険度も一気に上昇することを意味する。

これまで、独りか、あるいは集団の中の一人として、後ろから付いていくか。そんな戦いばかりだった。

独りの戦いの時はそうせざるを得ない理由があったし、集団の中の一人であれば自分ひとりが戦況に大きく係わるつもりもなかった。今度の戦いは、龍夜がすぐにも対処せねばならない問題であり、同時に独りではない。

そして、依頼で動いて入るものの協力者自体は龍夜自身の状況から生まれたものであり、そして龍夜が前に立つべき状況。すべてが、これまでにない立場を龍夜に要求していた。

「面倒……は、面倒だけど、それ以上に、怖いな、コレは」

『くくく……』。覚えておけよ、龍夜。それが他人を背負う本来の責任って奴だ。

自分ひとりの時には感じられない恐怖ってヤツだ。

テムエの父母姉全員縁のない感情だったが……まあ、お前はそうでもねーみたいだな。いやいや、安心したぜ？』

「責任、ね」

『そーだよ。まあ、一族全員ぶっ壊れだから仕方ねーにしても、それでもそれぞれにある種の責任を持って個体として戦ってたんだぜ？ けどその辺、お前は最初から覚悟だけが決まってたせいでなおざりになってたんだよな。』

ようく、知っておけ龍夜。例え明日死ぬとしても今のお前よりせめてひとつくらい成長して死んどけ。でねーと俺の寝覚めが悪いからな』

「まあ確かに、順番としては逆か」

死の覚悟が常にあるから、その先にあるものを感じ取れない。

本当は原因となる事象が存在してから、死の覚悟を固めるべきなのに。

自分ひとりでは終わらない恐怖。

本来なら最初から知っておくべき現実。

ある意味、現実を、事実を見過ぎていたがために見過ごしていた  
真実。

自分が、死ぬことで。

自分以外の誰かが死に。

その誰かが救うはずだった人々まで殺してしまう。

ただそれだけのことを、ほんの少しながら、龍夜は理解しはじめていた。

灯駆にその電話がかかってきたのは、夜も更けてきてから。二十時を周り、明日の休日をどう過ごすかを考えていた頃だった。

相手は、智晴の母親。

要件は、智晴の行方。

ふたりきりの家族の湊母娘はまるで姉妹のような仲の良さで、智晴はそんな母親に心配をかけることを特に嫌う。だったら趣味をどうにかしろとは思うもの、それはそれ、これはこれ、らしい。

話によると、いつも遅くなるときは事前に連絡をよこすのにそれがないのだという。

携帯に幾度もかけているが、電波が届かないか電源が入っていないというお決まりの声が届ってくるだけ。

こんな事は初めてで、何かあったのではないかと。

そして、灯駆なら何か知っているのではないかと。

「だから気を付けるってあれほど言ったのに……！」

服装をパジャマからハーフパンツとシャツにに着替えパーカーを羽織って家を出たのはその連絡を受けてすぐだ。

ひとまず智晴の母には、心当たりを当たってみることを伝えた。

心当たりとは当然、あの教会だ。

昼休みにアレックス・キング氏についての話を聞いた。そのあとで、念のため顔を出してみると言っていた。

「あああもう、付いていけばよかったかなあ……っ……っ！」

完全に油断していた灯駆だが、さすがにここで彼女に保護責任を

求めるのは無理があるだろう。だが、常々智晴の身边に気を配っていた　　というか配らざるを得なかった彼女は、自分の油断がこの状態を招いたと責任を感じていた。

智晴がそうそう危険の一端を踏み越えるような事はないとは知っているものの、油断する必要のない場所で襲ってくる災難だって当然ある。

「お願いだから教会にいてよ、智晴……」  
奥歯を噛み締める。

「マザコンのくせに、母親に心配かけてんじゃないわよ」

場合によっては、あのいけ好かない男に助力を求めることも視野に入れながら。

最悪。

それが灯駄の龍夜への第一印象だった。

何が悪いのか、自分でもわからない。

顔はまあ、悪くない。

服装も黒ずくめという不審者も裸足で逃げ出すような格好であることを除けば、清潔だったし印象は悪くない。

体つきや、足の運びにブレがないことから、相当鍛え抜いているであろうことも見て取れた。

鋭すぎる眼光は泣いている子どもも謝り倒すレベルだろうが、態度は乱雑だが横暴という訳でもないので会話しているの全体の印象はイーブンといったところか。

で、あるにもかかわらず。

これでもかと言わんばかりに、龍夜への拒否感が次から次へと沸き上がってきた。

どうやら龍夜がこちらへ抱いた印象も似たようなものであることも感じ取れた。

故に、最悪。

互いの存在が互いを拒絶しストレスの元になるのだから、そうとしか言い表しようがない。

けれど同時に。

あの男の手を借りなければならぬ。そんな予感　あるいは確信をいだいて。

灯駆はひたすら、教会へと走った。

途中で力尽きてタクシーを拾って、少くない金額を払って教会前で降りる。

「あとで絶対に払ってもらうからね、智晴……！！」  
灯駆の前にはそびえるように建つ教会。夜闇に浮かぶシルエットは、どことなく不吉を感じさせる。

周囲に建物も存在しないため、余計に暗く感じる。

嫌な予感を振り払うように、走る。

教会の扉を叩くが、反応はない。

「……いないのかしら」

無駄足だったか。

せめて智晴がここへ来たことだけでも確認が取ればよかったのだが。

そんな事を考えながら、今度は裏へと回る。

そちらにも出入口があることは、智晴に聞かされて把握していた。世の中何が役に立つかわからないと苦笑を浮かべる。

「さて。誰かいませんか、と」

数度、扉を叩く。

返事はない。

そもそも明かりも、人の気配もない。龍夜もいないのか、いても気配を隠しているのか。

「いえ……何でも疑ってちゃキリがないわ。ああもう、でもこれでは手がかりなくなっちゃったじゃない……！」

焦りに急ぎ立てられる自分を必死で抑えながら、次はどうするべきか考える。

しかし考えても手は浮かばない。そもそも彼女はどこにでもいる普通の女子高生に過ぎないのだ。智晴のように失せ物探しを片手間に片付けられる方が珍しいのだ。

「……ああもう、しょうがないわね」  
携帯電話を取り出し、家に電話して皆の助力を求めようと考えたが。

なぜかふと、思った。

もしかしたら今、智晴の携帯にかけたら繋がるのではないかと、なぜそんなことを思ったのか、自分でもわからないけれど。

指は疑問を無視して。

あまりにも慣れた操作で。

もう何度呼び出したのかわからない番号をアドレス帳から呼び出し。

呼び出し音。

そして。

なぜにこれほどまでに居心地が悪い空間が生まれてしまったのか。龍夜は、きりきりと胃を締め上げるプレッシャーに叫んで暴れた



いという訳の分からない衝動をどうにか押さえ込んでいた。

ちなみに、同じプレッシャーを受けているはずの雪杜はなぜか涼しい顔。こいつ脳みそちゃんが入ってんだろうかと本気で疑う。

そして二人の少し後ろには、プレッシャーの根源がついてきていた。

芳鈴である。

凄まじく不機嫌である。不満を隠す様子などさらさらなく、むしろ『はいはいあんたらあたしもう腹立しいことこの上ねーんですけど理解してますかー?』という内心をこれでもかとアピールしている。

話の流れは単純である。

龍夜が事情を馬鹿正直に雪杜に話す。

雪杜、さすがにそいつはヤバいと自分の目で見て調査することを申し出る。

装備を整えるために一度家に戻る。

もどってきたらおまけ付き。

そしておまけが超キレてる。

龍夜としてはワケがわからない。雪杜を睨むがそちらも困った顔を返すのみ。

それも当然。雪杜自身もまさか芳鈴が付いてくるなど思っていなかったのだから。彼女の役目はあくまで監視であり保護ではない。

彼女が守らなくてはならないのは雪杜自身ではなく、雪杜の生み出した研究結果のみだ。

雪杜が龍夜とレギオンの討伐をしていることは既に伝えていたし、状況も報告していた。その能力を駆使して二人にそれとわからないように常に監視もしていただろう。

だから、今回も監視するのみだと、そう考えていた。

まさか装備を整えるために戻った際に、一応と事情を伝えたとな

ん凄まじい勢いで怒りを爆発させるとは思っていなかったのだ。  
こうして、男ふたりは互いに意味不明のプレッシャーに身を晒されながら山道を歩いていった。

三人がその場所に着いたのは、すっかり日も落ちた時間。

時刻は既に八時を大きく回っていた。

結界を見た雪杜は、なるほどと呟いてしげしげとそれを観察する。  
「確かに悪質だね。いや、いっそ偏執的といった方がいいのかな」  
「偏執って……何に對してだ？」

「さあ？ でもこの結界からはある種の意志が見える。強烈なまでの『他者の排除』という意志がね。よほど周りが嫌いなのか憎いのか……僕もまあ人のことをとやかく言える立場ではないけれど、この結界を作った人とは仲良くなれそうにないね」

その声に呆れの成分が多く含まれていたのは、おそらく気のせいではないだろう。

しかし。

「そうか？ お前は割と普通に日常に溶け込んでるように見えるが」  
「君から見たら誰だってそうだろうに」

よりにもよって術式症候群相手に言われた龍夜がこっそり心理的ダメージを負う。

「というかまあ、僕はマシになった口だからね。以前の僕はきつと君以上に日常に溶け込んでいなかったし、たぶん、そういうのが嫌いだったよ」

「はあん」

なんと返事をしたものか悩み、結局よくわからない音を返した。

そんな二人をみて。

芳鈴は、苦虫を噛み潰したような顔をした。

「で、実際に要望に応じて現場に連れてきたわけだが。どうするんだ、お前」

「さて、どうでしょうか。僕にも一応事情がある以上、この街から離れるわけにもいかないし。となると、こんな結界があるのは非常に心の健康によろしくない。

ま、君に協力するよ」

「そーかい」

軽く視線をかわす。

雪杜の言葉に嘘はない。しかし全てではない。

そもそも同行中に幾度と無く殺気を飛ばすような相手が、そんなまともな理由だけでつきまとうはずもないだろう。

龍夜にはその目的は見えないが。

おそらく最初から、口にだすものとは別の目的を持って、雪杜は自分と行動を共にしている。

(面倒ではあるが、まあ、いつもの事か)

おそらく気にしても無駄。追求したところで素直に話すとは思えないし、逆に素直に話されたらそれは藪蛇だ。基本的に、こちらに事情を明かすのは相手がいろいろな意味で覚悟を決めている場合なのだから。

だから、その時までには放置する。

あるいはそれがその場しのぎに過ぎず、いずれ取り返しのかない結果を招くことになるうとも。

今死ななければ、それでいい。

投げやりでも捨て鉢でもなく、状況が許さないから火種を抱え続ける。その果ての、余りにも退廃した思考回路。

サマエルがどこで教育を間違えたか、と頭を悩ませる龍夜の性質である。

さてこれからどうするか。

三人で顔を付き合わせて考える。

龍夜が主張する明日の日の高い時間からの襲撃だが、これに待ったをかけたのは雪杜。

今回レギオンが巢食うのがまるで日の届かない地下であるなら、明日の昼だろうが夜だろうが条件は変わらない。レギオンの動きを鈍らせるのは時間ではなくあくまで陽光であるからだ。

続いて主張したのは、これまで黙りこくっていた芳鈴。

無数の罵倒の言葉に埋め尽くされていたが、要約するとお前ひとりで勝手に突っ込んで勝手に死ぬ、ということだった。雪杜まで命をかける理由はない、さつさと安全な場所まで逃げて騎士団なりどこかの組織集団なりに連絡を入れるのが筋だ、と。

それには残る二人も同意した。したのだが。

「時間がなさすぎる」

その一言で却下。

あれだけの数の＜天使級＞を一晚でも放置しようものなら、どれだけの数の＜大天使級＞素体が出来上がるのか想像もつかない。

体内に巢食ったレギオンが全て＜大天使級＞へと至るわけではないが、母数が大きくなれば発生の可能性は当然上がる。そしてごく最近の例外を除いてレギオンの成長速度は似通っている。つまり、最悪の場合複数の＜大天使級＞が局所的に同時に発生することになる。そうなれば、この街はあつと一瞬間に地獄と化すだろう。

結局今出るか、明日出るかの違いでしかない。

そうになると、様子見程度の装備の今挑むのは得策ではないだろう。その上時間的にはそろそろレギオンが最も活性化する時間。装備を整えに戻る時間もない。

一度退いて、明日出直す。

その方向で全員の意見が 約一名不満いっぱいの人間がいるにはいたが、ようやくまとまろうとしていた頃。

「……ねえ、なに、あれ？」

結界の向こうに視線を向けていた芳鈴がそれに気づいた。その視線の先を追うと、確かに、草むらの奥で何かがチカチカと光っている。

月明かりも届かない上に草に覆われているためその正体は判然としないが、規則的な点滅は人工物である証拠だろう。

「っ！！」

「ちよっ、」

「何を?!」

驚愕を背後に、刀を竹刀袋から取り出し腰に差す龍夜。集中を高め、体内の気の循環を爆発的に増幅させる。

。 空気の流れさえも眼球で捉えんと、瞬きひとつせず光点を見つめ

腰が僅かに落ち、風を斬り裂く鋭さで。

鋭い呼吸と共に、白刃が煌く。

一筋の光が刹那走り抜け。

結界を、斬り裂いた。

雪杜も、芳鈴も、その光景をすっかりと見ていた（……）。

術師である彼らは一般人よりもはるかに精霊や術式を捉える霊的視力に優れている。故に、物理的な要因ではない変化も、少し目を凝らせば見ることが可能なのだ。

その視界において。

龍夜は、一切の術式も気の発揮もなく、攻撃結界のみ（・・・）を斬り裂いてみせたのだ。

「 は、ははは」

「えー……………」

あまりの非常識に二人揃って顔をひきつらせる。

一方の龍夜は、さっさと光源に向かっていった。座り込み、それを手に取る。

それを見た芳鈴が声を漏らす。

「携帯電話……………え？」

芳鈴も気づいた。その矛盾に。

携帯電話が落ちていたのは攻撃結界の向こう側。

触れた物全てを砕く結界の内側だ。

人間が入れない場所に、なぜ人間が持ち込まなければ存在しないはずのものが落ちてしているのか。

「え……………ちよつと、これって、一体 うひゃあつ?!」

龍夜の手の中で携帯電話が震え、音を立てる。着信だ。着信音は場にそぐわない可愛らしい曲調だった。

三人、顔を見合わせる。

出るべきか、無視するべきか。

「出てみよう。もしかしたら、僕らの知らない間に被害者が出てくるかもしれない」

レギオン相手に想定通りに進むと考えるほうが間違っている。この場合は、何者かが結界内に侵入したと考えるのが妥当。

そうなったとき、その人物が被害者なのか、あるいは目的を持った第三者なのか。いずれにせよ、電話にでることで情報を手に入れられる可能性は、高い。

雪杜の提案に、乗る。

折りたたみ式のそれを開き、耳に当てながら通話ボタンを押す。

不覚にも、送信者名を確認もせず。

否。あるいはそれが、東雲龍夜の名を聞いた彼女の運命が引き寄せた必然だったのかもしれない。

故に。

「もしもし」

声が重なり。

「……………」

沈黙が連なり。

「はあああああああつ?!」

驚愕が連続したのも、当然の結末といえた。

なんでだ。

なんで。

「お前……四条式かつ?!」

『そういうあんたその声は東雲龍夜つ?!』

互いに大音量を出したせいで、その会話は残る二人にも全て聞こえていた。双方、やつちまったという表情だ。

いくらなんでもここでこの人選は、ババを引いたに等しい。

「何でお前がこの電話に……………」

『それはこつちのセリフよ! あなた、智晴を何処へやったの?!』

その言葉に。

龍夜の顔から感情が抜け落ちる。頭が冷え、思考が加速する。

「この電話は、湊のものなのか?」

『はあ？ そんなの、当たり前じゃないの！』

以前会ったときよりも敵意が剥き出しなものには気づいたが、気にかけるほどのことでもない。

「いや、待て。俺も今この電話を拾ったばかりなんだ。事情がよくわからない」

『拾ったって……だって、ずっと繋がらなかったはずなのよ。それが急に繋がるようになったなんておかしいわ』  
ずっと繋がらなかった。

それは結界の効力によるものだろう。その結界を断ち切ったことで、携帯が外界と繋がるようになったのか。

なんとというタイミングの良さ。いや、悪さか。  
しかし。

「湊は今日、どこで、何をしていたのかわからないか？」

『……本当に、何も知らないの？』

「ああ」

龍夜の答えに返ってきたのは沈黙。

電話の向こうで考えている彼女の姿が思い浮かぶ。

『智晴は、教会に行ったはずよ。学校が終わって、一緒に少し話した後だから たぶん、夕方の五時にはなっていないと思うけれど』

その時間は 龍夜は、食事をとりに外に出ていた時間だ。

戻ったのは六時過ぎ。それから雪杜と会って話をし、雪杜はそのまま装備を整えに一旦戻った。そうして、山の麓で待ち合わせをして現在に至る。

その間、当然ながら智晴は見えない。つまりおよそ四時間、彼女の消息は不明ということになる。

普通ならば多少慌て過ぎかと思うが、こんな場所に携帯電話が落ちていたことはそれが杞憂ではないことを証明する。

しかし。

「……一体、何がどうなっていていやる」

智晴がどうやって結界を通過したのか。



教会に行っているはずの彼女がなぜ山へ来たのか。  
現状では何一つ判断できない。できないが、良くない方向へ事態  
が進んでいることだけは確かだった。

ひとつ年下の、快活な少女の笑顔を思い出す。

一筋縄では行かない、なかなか食べないところはあがるが、それ  
もひとえに自分の師を アレックス・キングを思つてのことだろ  
う。

彼女が巻き込まれる謂われはないはずであつたし。

なによりもそれは、ルール違反だ。

眉間に皺を寄せ奥歯を噛み締める。

生ぬるい風が吹き抜け、木々を揺らした。

『ちょっと、黙っていないでなにか言つてよ。ていうか今何処にい  
るの？ 今からいくから、とにかく場所を教えて！』

「……今いるのは、繁華街の脇道に入ったところだ。二丁目のバス  
停の前にパチンコ屋があるな？ その右手の小さな路地に入って、  
二つ目の角を右に入つたところ。とりあえず、パチンコ屋の前にい  
るからそこに来い」

『 分かつたわ。とにかく、あなたは智晴を知らないのね？ 』

「ああ。俺も驚いているところだ」

『 そう。じゃあ、すぐに行くから、待っていないさい 』

その言葉を最後に、通話が切れた。

龍夜は大きく息を吐く。

「……繁華街の、パチンコ屋」

「路地を入れて二つ目の角」

じとつと。

薄汚い物を観るような視線が二つ、突き刺さる。

「いや……まさか本当のこと言うわけにもいかんだろ」

「そりゃあそうかも知れないけどさ、よくもまあそんな嘘をペラペラと言えるもんだなって思っただけ。にしても、二丁目のバス停の近くにパチンコ屋なんてあったっけ。あのへん、飲み屋ばかりだったよ  
うな気がするけど」

「あん？　なんだ、二丁目なんてバス停、ほんとうにあるのか」

「は？」

「いや、だから、全部出任せだから」

徹頭徹尾。

嘘だった。

さて、と息をつく暇もなく。

「世の中、便利になったものよね」

素早く携帯を操作する。

相手より早く通話を切ったのはそのためなのだから。

夜の暗闇の中、携帯電話のモニターの光を顔にうけながらアプリを起動、検索。

世の中には、電話番号を入力することで相手の位置をGPSから検索するサービスが存在する。

ただし悪用を避けるために相手がこちらに許可を出している必要があるが、灯駈と智晴は互いにこれを利用している。

お互いによつぽどのがなければ使わない事は約束するまでもない（だいいち智晴にはこんな機能自体必要になることが稀である）

し、事実この機能で灯駈は何度か智晴の危ない場面に駆けつけたこともある。

当然、相手の電話が通じなければこの機能の使い道はない。という事今日は活躍の場が与えられなかったのだが。

相手の電話が生きていることがわかれば話は別だ。

当たり前の話だが。

灯駈は龍夜の言葉を信じなかった。

というか、葉擦れや虫の声が聞こえる繁華街って何処だという話である。

そうして。

「やっぱり……」

位置情報を見た灯駈は吐き棄てる。そこに表示された場所は、指定された場所とはまるで真逆の場所だった。

「山の中、ね……いかにもって感じがして、逆に安心出来るのはなんなのかしら」

こちらを煙にまこうとしたことは腹立たしいが、同時に龍夜が智晴を手にかけて可能性は既に彼女の中にはない。もしそうだとしたら、この時点で灯駈を遠ざけるのは悪手としか言えないだろう。何をしているにせよ、それが法的倫理的に外れた行為ならば隠し通さなくてはならない。そしてそれは灯駈との電話によって既に瓦解している。

ならば次に打つべきは、灯駈の口封じであるべきだ。

まあ、智晴が龍夜から逃げている最中で、そちらを追っていると  
いう可能性も一瞬思い浮かんだが。

「『あれ』から逃げ切れるとは、さすがに思わないしね」

あえて龍夜を『あれ』と表す。それだけ、龍夜という存在は得体のしれないものだった。

龍夜に狙われて五分と逃げ切れる人間は、少なくともこの国の学生でそうはいないだろう。灯駈でさえ難しいかもしれない。

「きつと、本当に偶然、このタイミングで携帯を見つけたってところかしら。なんで山の中に智晴やあいつがいるのかはわからないけど」

そして。

きつと。

「……怖い、かな」

手の震えを自覚し、胸に抱く。

自分の予想のつかないことが続いている。

そして予感がある。

此処から先は、本当に、引き返す道さえ失う道程になる。

あるいは。

あの、黒い化物たちが関わっていることを、既に確信している。

だから。

「嫌だよ……怖いよ……」

声が震える。

視界が歪む。

月明かりの下。

星明かりの中。

ゆっくりと。

足を踏み出す。

向かう先は、悩むまでもない。

「怖いよ、智晴。あんたを失うのが」

その恐れは力になる。

執念・群がる（前）（後書き）

絶望的なまでに話が進まない。

執念・群がる(後) (前書き)

3月中に終わりたかった。

執念・群がる（後）

02 - 11b：執念・群がる（後）

そこには死が充満していた。

結界を破壊した龍夜へ対しての最初のアクションは、殴打だった。それも見事なりバーブロー。上手く衝撃を逃さなかったらおそらく骨の一本二本は持って行かれていただろう。

「で？ 状況は軽く最悪になったわけだけど、どうするのよこれ」  
殴打した本人は涼しい顔で膝をつく龍夜を見下ろしていた。芳鈴である。

これ、とはつまり攻撃結界だ。人払いの結界は残っているため一般人が寄ってくることはないだろうが、レギオンはもはや無制限に出入りができるようになってしまった。

「どうもこうも……まあ、どうにかするしかないだろうね」  
雪社は口元を抑えている。どうやら笑いをこらえているらしい。それらを忌々しく思いながら立ち上がった龍夜は、刀を竹刀袋に戻し山の中へと視線を投じた。

「まあ、攻撃結界が内外を物理的に切り離していたんだし、それがなくなつた以上は」

「誰かさんがぶつた斬つたからね」

「……なくなつた以上は！」



強引に話を進める。この件に関しては何となくとも芳鈴に下手に逆らうべきではないと本能的に判断した。

「不本意だが、現状の装備で臨むしかないだろうな。時間帯としては最悪もいいところだが、同時にこちらのコンディションは最悪という程でもないだろ」

龍夜の言葉に雪杜は肩をすくめてみせた。お互い、日中の間に力は回復させている。

「そうだね。結界があつてあの数だつて言うのなら、結界の内側にどれだけの勢力があることやら。そんなのが無制限に溢れ出したらと思うとゾツとする。佐々森も、それでいいね」

「今更あたしだけ文句言つてもしょうがないでしょ。分かったわよ行くわよ行けばいいんでしょ!」

「いや、別に無理してこなくても　いや、なんでもない。じゃあ行くか」

無理してつきあわせるつもりもない龍夜だったが、悪鬼も泣いて謝る形相の前に口を閉ざした。

そしてたどり着いた場所は。

「……なに、これ」

芳鈴は色を失い、龍夜と雪杜も絶句する。

辿りつくまでに気づいていた。あまりの腐臭に。

ひんやりと足首まで泥沼に埋まってしまったかのような倦怠感、漂う瘴気のせいかな。

それでも。

目の前の光景は、予想を超え想像の埒外であり、許容をしがたいものだった。

三人が立つのは村の入口、であったであろう場所。舗装された形跡があることからそう判断した。

視界に広がるのは荒廃した光景だ。ひざ丈程もある雑草が無造作に生い茂り、所々は地肌が晒されている。かつて家だった物はほとんどが焼け落ち、形を残していない。

錆びついた鎖が風に揺れて軋む音が、ひどく耳障りだ。

もはや面影すら残っていないかつての人々の生活の場。

そこには。

あまりにも生々しい、死が。絶望が。憎悪が。呪いが。恨みが。悪意が。悲哀が。

人間が、あつた。

視界に入るだけでもすでにその数は両手の数を優に超え同時にその姿にひとつとしてまともなものはないあるものは腕があるものは足があるものは首があるものはそれらすべてが欠け落ち抜け落ちこそげ落ち無残な断面を晒して腐れ落ちたそれらには無数の蛆がたかり醜悪な白と黒のコントラストはいっそ悪趣味な笑いを誘うほどで。

死体の山。

言葉にすればそれで済む。単純で陳腐な言葉。

それでも。

目にすればそれは物理的な衝撃を錯覚させるほどの動揺を、彼ら三人に容赦なく与えた。

誰も口を開かない。

まず、龍夜が足を踏み出した。続いて、雪杜。二人を見て、迷いながらも芳鈴があとに続く。

ひとりひとり、手を合わせて黙禱を捧げてから、観察し、検査する。

手袋の持ち合わせはないので直に触れることはしないが、可能なかぎりの情報を得ようと務める。

「……随分、慣れてるんだね」

四人目を観察する龍夜に、雪杜が声をかけた。

「慣れ……まあそうだな。慣れは慣れか」

「その人達には悪いけど、あたしはちよつと近寄り難いわね。よく平気ね、あなた」

龍夜は顔だけ振り向き、暫く考えるようにして、また、亡骸に向きあう。

しかし言葉だけは返した。

「昔 一七九二年、現在のトルコ共和国に当たる地域の、ある小さな村を異変が襲った。

全滅 というよりも壊滅という有様だったらしい。家も、家畜も、農作物も、当然人も。全てが等しく滅ぼされていたそうだ。ああ、まるで村を恨んで恨んで憎くて憎くてしかたない何か、感情のままに蹂躪したかのように。

真実が判明するのは、三度目の調査隊が派遣されてからだだった。いや、違うな。もはや調査隊ではなくそれは討伐隊という物々しさだった。

そう。前二つの調査隊は、村に入るといふ報告を残して、誰ひとりとして帰還しなかったんだ。

そうして、入念かつ万全の準備を敷いた討伐隊を待っていたのは  
立ち上がり、あたりを見回す。

「憎悪と絶望を糧にした、殺し合いの跡だった。  
村人も、調査隊も、何者かによって滅ぼされたのではなく 自  
分たちで自分たちを喰い合ったんだ。文字通りな」

生ぬるい風が足元を撫でる。

月明かりの下に立つ黒衣の男はあまりにも不気味で不吉だった。  
見えない壁に押されるように一歩下がりそうになる芳鈴の背中を  
雪杜が支える。

彼女が見上げると、彼はいつもの薄い笑みを浮かべていた。若干  
の無理が透けて見える事に安堵を覚えた。

「随分と興味深い話だと思う。確かに、この状況に符合する点もあ  
るかもしれない。

けれど、その話は一体どこから？ そして、どうしてそんな事に？  
当然、話のオチはあるんだろう？」

龍夜は。

ふ、と顔をそらす。その先にはまた別の亡骸。

もとは若い女性だったのだろう。服装からそう判断する。もはや  
顔を判断できるほどの原型もとどめていないが、きっと美しい人だ  
つたに違いない。

両手にしっかりと、守るように抱いた小さな命がそれを証明して  
いる。

それが無駄だったのか、誰にもわからない。

ふたり分の祈りを捧げ、そばに膝をつく。

羽虫が不快な音を立てて飛び立つが、意に介さず検分する。

「なぜその村や調査隊が同士討ちを始めたのか。答えはすぐに出た。村は内側からは出られないように結界で覆われ、外界とは完全に隔絶されていたんだ。食料はなく、井戸は限られた中、全滅はもはや確実。きつとそれは誰にでも分かっていただろう。が、それを受け入れられるかどうかはまた別の話だ。

当然、あまつた農作物や家畜を食べるだろう。だがそれも限界がある。おそらく、薪が尽き、火を起こせなくなった。暖を取ることも、調理することもできない。けれど死にたくない。

ならば食べるしかない。たとえそれが生でもな。

が、当然閉じられた世界ではそんな事が長く続くはずもない。家畜を育て続けようにも農作物の量にも限界がある。村人全員と家畜全て、それらを賄うことは当然不可能だ。

なら食べる人間を減らすしかない。

それでも足りない。人が減るより食料が先になくなる。しかし食わなければ死ぬ。

絶望と恐怖は憎悪を生む。なぜ自分がこんな目に合わなくてはならないのか。隣の人間が生きているせいで自分が苦しみ抜かなくてはならない。そこに倫理も道徳も必要ない。

暴走は、早かっただろうな。

食わなければ死ぬ。食うためには殺さなくてはならない。殺さなくては死ぬ。殺さなくては殺される。

ルールが出来てしまえば後はその線路の上を走ってしまっただけだ。誰かひとりガルールを作れば後の人間はそれに続けばいい。

殺して殺して、それでも足りなくなれば、殺したそれらを食い荒らし。そうした極限の無為な殺し合いが果ての果てまで続いて。

そうして、滅んだ。

調査隊はそれよりもいくらか冷静だっただろうが……そんな凄惨な現場に、奴らが生まれられないわけがない。

そう、レギオンだ。極限の状態はレギオンを産み、産まれたレギオンは調査隊の恐怖と絶望に這入り込み、より強く、大きく育つ。それを繰り返して、討伐隊がやってきた頃には」

亡骸の調査を終えて、立ち上がる。

月を見上げた。

辺りに明かりが少ないせい、星と月の光が、精神をざらりと撫で付けた。

「史上二例目の<熾天使級>。その名もダンテ　その素体となつた<座天使級>が既に出来上がっていた」

風が止む。

「村を覆う結果は<座天使級>の力により内部から崩壊。討伐隊も三名を残して後は全滅。

有名なくゴルゴタの丘の黄昏>は、こうしてはじまった」

視線を下げ、雪杜を見据える。

さすがに衝撃を受けていたが　それでも、その後ろの芳鈴に比べればまだ動揺を抑えているように見えた。

「　さすがにそれは、僕の想像をはるかに超えるね。　というか、この状況、もはや詰みなんじゃないのかい？」

「さあな。ま、それがこれと同じ状況かといえはそれはまた違うだろうし」

「というと？」

龍夜はしばらく、どう伝えたものかと悩んだものの、結局正直にありのままを伝えた。

「この死体な。ある程度まとまってここに供給されている。腐乱の仕方や程度の具合に随分と差がある。おそらく、数ヶ月に一度、ま

とまった人数が結界の中に連れてこられ　まあ、後の状況は今の村の説明とほとんど同じ、といったところだろうな」

雪杜の視線に剣呑な光が混ざる。

「そう。村も、ここも。レギオンを人工的につくろうとしている意志が確かに存在する」

「じゃあ、さっきの電話の湊って娘も、その目的で攫われたの?!」「どうだかな。それならここにいないことが逆に説明がつかない

ただまあ、見た限り死体が見当たらないのは救いといえば救いか」さすがに、顔見知りが無残な死に体を晒していても平気な顔で検分できるほど、龍夜は自制心が出来ていない。

というよりも二人の手前押さえてはいるが、既に限界はすぐそこだった。

(「まただ。また、結界。結界の中でレギオンが、安全に確実に、狩りをし、力を伸ばす環境がある」)

レギオン加賀原南帆と近い状況だ。

忌々しい。

内心で吐き棄てる。

既に撃鉄は起こされた。あとは軽く落とすためのきっかけがあれば、たやすく暴走するだろう。

もはやそれを止められるとは彼自身思っていなかったし、サマエルもたとえ二人の目がなかったとしても止めるつもりはない。

既に戦端は開かれていた。

「ひとまず、彼らを弔ってからレギオンの巣を探し　」

龍夜が符を出すために懐に手を入れた瞬間。

二人の術師が同時に構える。

「精霊符・驟雨炎槍」

「鈴硝術式・賽宴」

雪杜が取り出したのは、三枚一組の符。それを天に向かって放り投げると、それは一瞬でもえあがり小さな太陽を生み出した。

同時に芳鈴は右手を振り、空間を歪め、硝子の鈴を取り出した。それを独特のリズムで二度、三度と振る。音はなく、キラキラと硝子の粒子が舞い散る。

そしてふたりは声を重ねて。

「  
割砕  
」

太陽が砕け。

粒子が氾濫する。

砕けた太陽は無数の火の槍となり大地に降り注ぎ、闇に紛れた愚かな異形共に突き刺さり炎を上げる。

氾濫した粒子は増殖を繰り返しながら芳鈴から同心円状に広がり、異形の陰のみを切り裂き、穿つ。

僅か数秒にして、彼らを取り囲むように炎と光が荒れ狂う異界が出来上がっていた。

「  
いつの間に  
」

ひとり、僅かに気付くのに遅れた龍夜はあっけにとられるが。

「  
っ！  
」

まるで津波のように迫り来る悪寒を感じ、そちらに視線を投じた。

「  
どつやら  
」



「探す手間が」  
「省けたみたいね」

無数のレギオンの気配が合わさり、巨大なひとつの存在のように  
さえ感じられる。

信じられないほどの数と密度。

もし、この中に<大天使級>や<権天使級>。それこそ先の話の  
ように上位の個体が存在していれば いや、今考えることはそれ  
ではない。

念のため作成していた文面を、ポケットの中で携帯端末を操作し  
て送信する。

これで、明日までに何の連絡もなければ騎士団の討伐隊が結成さ  
れるだろう。それでも、もしかしたら遅い可能性が高い。  
故に。

「さあ 行くぞ」

黒鞘から白刃を抜き放ち。

「足は引つ 張らないようにね」

符と短剣を両の手に備え。

「男なんだから、あたしよりもみっともないようだったらひっぱた  
くわよ」

左手にも鈴を取り出して。

同時に、駆け出した。

同時刻。

山の中を歩いていた灯駈は、まっすぐにその方角へと向かってい

た。

既に携帯は見えていない。当たり前だが、龍夜があの後すぐに電源を落としてしまったからだ。

もしかしたら足取りを追えないかと思っていたが、その心配はなかった。

肌をさすような感覚を辿っていけば、きっとそこにたどり着くと分かっていたからだ。この感覚には覚えがある。あの黒い化物がいた場所と同じ感覚だ。

人避けの境界が、彼女を逆にその場所へと導いていくことになるとは、さすがの龍夜も予想しなかっただろう。

万が一、一般人が来ることを防ぐための処置が裏目に出たというわけだ。

「あー、なんか気分悪くなってきた」

秋の山を登っているはずなのに、空気はむせ返るようなねっとりとした粘度と湿度を感じさせた。しかしそれが錯覚であることも理解していた。

山に立ち込める瘴気が影響を及ぼしているのだ。もっとも彼女は瘴気というものの存在を知らないもので『なんとなく良くないものが影響している』程度の認識だったが。

それでも足はその『なんとなく良くないもの』の方へと向かう。一足ごとに重くなる空気を蹴り飛ばしながら、自分にはずみをつけるような足取りで力強く歩いていくと、その歩みが止まった。

不快感。

明確な敵意。いや、悪意か。

敵意や殺意は向けられることに抵抗はあるがいつそ清々しささえ感じることもあるが、悪意はねっとり肌にとわりつくようで不快感しか感じない。

忘れようにも忘れられない感覚。

あの時の恐怖の借りを返す時が来た。

冷たい汗が流れる。震えを自覚する。

頭から冷水を浴びせられたように体が冷える。

故に。

自覚する。

「うん」

強さは恐怖と共に在れ。

その時 己の血の滾りをこそ知れ。

ひゅ、と。

小さく息を吸い。

腰を低く重心を落とし、大きく足を踏み出す。

一步目 地を蹴り、推進力とする。

二歩目 その力で加速を得る。

三歩目 腰、膝、足へと流れるような力の受け渡しは、神速の

踏み込みの予兆となり。

四歩目は、三十メートル離れた敵の目の前で、大地を踏みしめるための力となった。

縮地。

一般人からして見せればその動きは瞬間移動と大差ない。

「神浄四相流・四条式」

四条式に武器はない。必要ないというのが正しい。

また、よくある武術のように己の肉体を苛め抜くような訓練も必要ない。とはいえ習得の過程でおどろいてもそういった道は避けざるを得ないが。

四条式の武器は、その身ひとつ ではなく。

「くだんくすし  
件崩試」

レギオンの反応速度は人間のそれを遙かに超越する。術式で常に強化状態にあるような龍夜たちとはかく、それができない灯駈はどれだけ早く動いてもレギオン相手に先手を取ることはできない。

故に、一瞬の不意をついた接近も、相手の反射的な爪の反撃の方が先に繰り出される。

己の頭蓋を砕く黒い爪。

十分の一秒にも満たない未来の結末。

それを灯駈は、三步目の時点で知っていた。

であるからこそその必然。爪の軌道を優しくしかし鋭く上へ逸らす。そのまま相手の肘に当たる部位に拳を当て、懐に深く入り肩で軽く相手の胸に触れ 四歩目の力を、爆発させる。

夜の山に爆発音が響き、灯駈と化物を中心に大地が砕け凹む。

土煙が一切の光を遮り、視界は闇に埋まった。

そして化物は。

「けひ、ぜ……」

砕けた肘が弧を描き、己の脳天をブチ抜き、腐臭と黒い液体と気体を振りまいていた。

その胴体には大穴が開き、かろうじて端っこが繋がっているだけ。力を失い、倒れる 前に、霧となって消える<天使級>。

月煙が晴れた。そこに立つのは、小柄で、美しい、月光を浴びて

輝く夜の妖精のようで。

刹那の破壊をもたらした少女の可憐な姿は、ミスマッチながらひたすら美しく。

はらりと、長いポニーテールの髪が背中を流れた。

構えを解き、己の生み出したクレーターの中心に静かに立つ。

これが四条式。

相手の攻撃をそのまま武器とする。割って、砕いて、折って、千切って。そうして、相手の力を削ぎながら己の力として返し、相手の生命を殺いでゆく。

手加減無用の無双の神拳。

灯駄も、自分の全力を見たのは初めてだった。全力の出し方も今までではよくわからなかった。

「ふうん」

納得したようなよくわかっていないような、曖昧な思いをそのまま音に出して。

まあいいか、とまた歩き出す。

周囲に化物の気配が他にないことを確認して、より大きくうごめく化物の気配めざして足を踏み出した。

ふと、誰かの言葉を思い出す。

「……レギオン」

覚えていない記憶の底から、敵の名前を思い出す。

「レギオン」

腑に落ちない思いはあるものの、解き明かす時は今ではない。

歩みをすすめる。

目的に必要なのは敵の名前ではないのだから。  
友を。

親友を。

己のかけがえのないものを取り戻す。

相手が人であろうとそうでなかろうと関係はない。

目的は定まっている。

行動は確定している。

思考は直結している。

感情は昂ぶっている。

いづれ。

神浄四相流・四条式 正統継承者 四条灯麩。

初陣。

執念・群がる（後）（後書き）

さあ先端は開かれました。

そして気づきました。

この話主人公が弱いんじゃないじゃなくて主人公の周りの連中が強すぎるんだよ！

## 妄執・溢れる

02 - 12: 妄執・溢れる

騎士団日本支部の地下訓練場は広い。

階層は三つに分けられており、一階層の高さは約十メートル、総床面積はドームをおよそ二つ分を誇る広さを誇っている。

そのほぼ全てが訓練場として機能する。

いくつかの局面を想定されたフィールドがあり、それぞれの場所でそれぞれの戦い方を学ぶことができる。

これだけ大規模な訓練施設が必要になったのは、ひとえに頻発する世界各地への騎士の派遣が背景にある。日本国内では想定できないシチュエーションでの戦闘を強いられた騎士たちが、想定以上の打撃を受けて帰って来る、といったことが多かったのだ。

そんなわけで作られた多様な訓練施設ではあるが、そのなかでもやはり人気不人気というものは出てくる。

ここは、そのなかでもとりわけ人気の無い訓練スペースだった。

部屋を支配するのは、耳の痛くなるような静寂。

部屋に満ちるのは、全てを塗りつぶし覆う暗黒。

想定訓練暗室。自身の指先さえ見えない完全な闇。

騎士団の近最下層のさらに隅の小部屋。

その中にぼつりと、光があった。

ゆらゆらとゆらめき、輝き、火の粉を放つ炎の騎士鎧。



烈華騎士・錫禪。

日本国内でも有数の実力を持つ彼は、暗闇の中、腰を落とし、両腕をだらりと下げ、肩の力を抜き、それでも暗闇の奥の奥を射抜くように見つめて。

「発」

言葉と同時に、火花が散る。

空間に焦げ臭いにおいが漂う。何かを焼いたのだ。

その後も数度、同じことを繰り返す。闇の奥から手を伸ばす何かに向けて、術式を繰り返し、正確に、最小限最大効率の威力で放つ。

錫禪は優秀な騎士だが、その鎧の性能は実を言うと平凡なものに過ぎない。

全身を覆うスタンダードな形の鎧。

能力は炎を操る能力で、それ以上も以下も隠し玉もない。

身体能力の強化も突出しているとは言えない。

そんな彼が実力者と呼ばれるのは、磨き上げられた精霊の制御能力がゆえである。

騎士鎧の召喚に多大な精霊を費やし、さらに術式をばらまく。鎧の効果で燃費は良いがそれでも多大な肉体的精神的疲労を伴う騎士。その中であって、より少ない労力で事を成そうとする風潮は実は強くない。

多少の粗さ拙さはさておいて、最大火力による戦闘が騎士の戦闘の常だ。普通の術者がそんな事をすればあつという間にガス欠を起こすが、少なくとも騎士鎧を展開している間の騎士にはその心配はない。故にとりうる限り最大の破壊を用いる。

錫禅　工はそれでは駄目だと考えた。それでは、結局のところ火力で撃ち負けるような相手には手出しができない。

戦闘とは　さらに突き詰めるならば殺し合いとは破壊力だけで決まるものではない。

なまじ騎士の戦闘はそれが通じてしまったために、その当然の事実が軽く見られがちだ。特に、大戦以後の若い騎士にはその風潮が顕著に見られる。

力を凝縮し、引き絞る。

これだけで術式だけでなく単純な武器攻撃力は瞬間的に格段に跳ね上がる。

錫禅はこの暗闇の中、ただそれだけを繰り返し続けている。暗闇の奥から不定期に打ち出される精霊の弾丸を、己の炎で撃ち落としているのだ。

火花が空間を焼くごとにその身を覆う炎は小さく細くなり、同時に部屋の気温はぐんぐんと上昇していく。

というか既にコンクリートが溶け出していて結構ヤバイ事態になっている。

「錫禅さんストップ、ストップです!!」

部屋に光の亀裂が入り、そこから小さな影が飛び込んできた。

光をそのまま切り取ったみたいない白い少女。姫である。

「よお、姫さん」

「『よお、姫さん』じゃないですよ！　また部屋をダメにするつもりですか?!」

「ん……ああ、またやっちゃったか」

ようやく部屋の惨状に気づいた錫禅が、部屋の明かりの精霊符を

起動させる。

そうしてようやく部屋の全容が明らかになった。

部屋はコンクリート打ちっぱなしの一片十メートルの正方形をしていた。壁には多種多様な術符が張られている。そのなかのいくつかが照明用の符のなっているのだ。

その部屋は所々コンクリートが溶けかかっている。錫禅の熱気にやられたのだ。一応術式で保護しているはずなのだが、錫禅の術式には抗することができなかったと見える。

「まったく……医務室を抜けだして何をしているのかと思えば。それもこんな時間に」

「いやな、寝っぱなしってのも結構きついぜ？ もう穴もふさがったんだし、立ってるだけなら問題ねーって言う話だしよ」

「それで部屋をダメにされてはたまったものではありませんよ」

「違うない」

錫禅は苦笑とともに鎧の着装を解く。

炎が弾け、同時に部屋の空気が一気に冷えた。気圧差で僅かに風が吹くが、それも錫禅　工がほとんど抑えたらしくそよ風程度のものだった。

「……相変わらず、見事なものですね」

「俺ぐらいの歳になるともう伸びしろも期待できないからな。こうやって小手先の技術でどうにか凌ぐしかないんだよ」

「その言い草だと、相変わらず隊長への昇進は断り続けているようですね」

「そういうのは本当に実力のあるヤツに任せておけばいい、てのが俺の意見なんでね」

工は肩をすくめる。

姫としては工の部隊をまとめ上げる指揮能力や調整能力についても大きく期待しているのだが、言っても聞き入れてはくれないだろう。それにそれを姫が望んでいることは工自身がよく理解している。理解して、それでも聞き入れるつもりはないのだ。

「わかりました。そもそもわたしには人事への口出しの権利もありませんから何も言いません。とはいえ、この部屋の惨状については小言のひとつふたつ言わせていただきますけれど」

「はっはっは。いやあ、久しぶりでちょいと熱が入りすぎちゃったようだな」

「ようだな、ではありません！ まったく、これで何回目ですか。それも毎度毎度暗室ばかり。利用者が少ないから大した問題にはなっていないが……」

「ああ、それぞれ」

「？」

言葉を遮って工が疑問を挟む。

「この暗室、何で人気がないんだ？ 正直、在り得ない指数は高いけど同時に同じ状態になった場合の厄介具合も同じく高いだろ、完全な暗闇は」

「簡単ですよ。そもそも完全な暗闇かつ限られた空間の中でのまともな戦闘をするような風潮がない、というだけです」

騎士の力が十全に発揮されるのは、障害物の有無ではなく力を振るうその場所の広さだ。

空間、行動を制約されることは、騎士にとってその力を大きく削られる事を意味する。

そういった状態になった騎士は。

ぶっ飛ばす。

広い空間がないのなら、自分で作ればいい。乱暴かつ単純明快だが、それを可能にする力とそしてそれだけの利がある。

「まあ、最近の騎士はなんつーか、派手だもんな」

ふたりとも遠い目をしながら部屋をでる。扉を閉めようとしたが歪んで閉まらなかつた。来月給料減るかな。そんな事を考えながら

歩き出す。

「わたしも少々困っているんですけど、ね」

ちなみに事後処理は姫の領分だ。そうそう施設を吹っ飛ばされることはないが、それでも年に数度ある。その度に、胃がキリキリと痛む思いをしている。

「しかしそれだと対応出来ない場面もいくつかあると思うがね。例えばこんな、地下深くや、後は洞窟の中とかか。下手に吹っ飛ばせば自分が無事では済まない状況つてのは結構あり得るだろ」

「そういう場面があるから、あなたのような熟練者があちこち駆けずり回るはめになつてるのが、現状の騎士団なんですよ」

「……なるほど」

大戦で多くの戦力を失った騎士団は、熟練した技術を持つものの絶対数が少ない。

正直、工が自分を隊長と認めないのも、大戦前の騎士たちを基準として見ているところが大きいのだ。彼らからすれば工は己を小隊長にもなれない程度と見ていた。

優秀な騎士の指導を受け大戦を経験した、二十代後半の騎士。

その数は少ない。そして、それ以上の年齢の騎士になると、もっと少ない。

あーそついやこの国も伝統技能の後継がいなくて結構大変だよなー、などと人ごとのように考える工だが、実際問題切羽詰った問題ではある。

「まあ、轟鷲もまともに使えるようになるにはまだ掛かりそうだし、閃は二年前から随分伸びたとはいえ、まだムラがある。確かに、単独で任務を任せるには難しいな」

「ええ。最低でも三人組での任務でしょうね。出来れば、早いところひとり立ちして欲しいところではありますが」

その言葉に工は破顔した。

「ははははっ！ 姫さんが言っても説得力はないな」

「う」

騎士団の中で誰が一番一人で戦わせられないかといえば、満場一致でこの小さな姫君であることは違いない。

「そ、それはそうと、関谷さんはこの部屋を良く使いますね。まあ、これではばらく使用禁止ですが」

「攻めるな姫さん！ まあ、集中できるからな。一人でできる訓練なんて限られているし　ああけど、この部屋で組み手やったときは面白かったな」

「え？」

「あ」

つい思わず口をついて出た言葉に、姫が反応する。口止めされていたのだが。

「暗室で組み手なんて聞いたことありませんよ？　誰とやったんですか、そんな無茶苦茶」

呆れと興味が半々の姫を見ながらしかし、工は次の瞬間にはそれが不満いっぱいになっていることが容易に想像できた。

上手くはぐらかしてやりたいところではあるが、既に彼女もなにか気づいているのか機嫌が下方修正されているまっ最中だ。さっさと爆弾を落として気分を蹴散らすほうがお互いのためだろう。

そうして、工はその名を口にする。

憎悪は刃を鈍らせる。

絶望は刃筋を狂わせる。

静謐に。誠実に。

己の身に刻まれた動きを正確に再現する。何百、何千と繰り返した動作を、愚直といえる素直さで、無感動に。

しかし感情はなくてはならない。

怒りは静かに深く。

恐怖は苛烈に鋭く。

己という存在を定義してゆく。

自分自身という器を満たしてゆく。

それは龍夜をひとつの刃として昇華させるための儀式。

神淨四相流・一伎型 皆伝 東雲龍夜。

推参。

轟、と荒れ狂う風のただ中を龍の顎が食いちぎるように、黒い陰をより黒い影が次々に葬る。

携えるのは暗い洞窟の闇の中にあつてさえ白く輝く一筋の刃。ただでさえ光のない洞窟の中での全力疾走及び三次元空間を生かした立体的な機動を当然のようにこなすその姿は、後ろから付いていつているふたりに驚きを通り越して呆れをもたらした。

「なんていうか、まあ、爽快な光景ではあるね」

「非常識って言うんじゃないの、こういうのは」

三人がレギオンの気配を追って踏み入ったのは、洞窟をそのまま防空壕として改造したものだ。入り口は隠され、腐食した木の扉が申し訳程度に残っていた。

幅と高さは人間二人がなんとか並んで通ることが出来る程度の広さしかなく、全力疾走ができるようなものでもない。

しかしそれはすぐに終わった。

いや、終わらなかつたというべきか。

洞窟は、奥に十メートルほど進んだところで、その姿を大きく変

えた。

幅は三人が並んで歩くには十分な余裕があり、また、高さも五メートル近くある。

道は急な下り坂が続いており、ひたすらに地の底へと三人を誘う。その奥底から、無限を思わせる数で溢れ出てくる、レギオン。それらを例外なくなぎ払いながら三人は進んできたのだ。

龍夜は変幻自在かつ追従不可能の剣技をもって、レギオンの中央を貫き、食い荒らす。

芳鈴が鈴を振ると、音の代わりに光の粒子が広がり、レギオンを貫く。

そして勢いをなくしたレギオンを雪柱が維持する風の術式が捻じ切り、壁に叩きつける。

洞窟に入って十数分で、既に百を超えるレギオンを葬った。

にもかかわらず、黒の波濤はとどまることを知らない。

終わりさえ見えない。

果たして三人はどこまで地下深くを行けばよいのか 誰も何もわからない。

「体力、精霊、どちらも温存したいところでは、あるんだけどね…  
…！！」

その余裕がない。

討ち漏らしが街に出て人間に憑いてしまえば、また別の脅威が生まれる。

一体ならまだしも、二十ともなれば今後何が起こるかわからない。



「まったく、難儀な状況だよ、これは」

「うっさいわねそんなのあたしだって一緒なんだから愚痴こぼさないですよ！ 気が散る！！」

芳鈴の表情には余裕がない。

龍夜はともかくとして芳鈴と雪杜の命を守っているのは彼女の術式なのだ。プレッシャーに押しつぶされることはない。責任感の強さはそのまま力になる。が、同時に精神力を鑢のように削ってゆく。

長くは持たない。

後衛二人は、既にそのことを悟っている。

無論、龍夜もそれは同じ意見だ。

戦場によって運用できなくなるような軟弱な剣術でも情弱な鍛え方でもない。けれど、疲労のたまり方は違ってくる。

平面方向だけでなく立体的な機動はむしろ龍夜の得意とするところではあるが、当然限界は近くなる。

さらにここしばらくの戦いで体に蓄積された疲労は確実にその身を蝕んでいる。

つまりは。

「くっそやつべえ限界だったのおい！！」

『落ち着けバカ』

天井を足場に横へ飛ぶ。すれ違いざまに三体のレギオンを連続で切り裂いた。その反動を利用して背中から壁に着地、そのまま床に下りる。

待ち構えるレギオンが首を伸ばすが、額を軽く切りつけて軌道を

逸らす。がら空きになった首を柄頭で粉碎し、そのままの勢いで刀を返し、奥にいるレギオンを両断した。

「<天使級>、<天使級>、<天使級>　　って事は、いるのは最高でも<能天使級>か？」

「いや、それにしちやあ数が多すぎる。とはいえ、それ以上の階級のレギオンがいるなら<大天使級>以上が出てこないのは、おかしいんだがな……」

ある程度以上のレギオンは自身の核を劣化コピーして下級のレギオンを生み出すことが出来る。というか勝手に生まれてくる。生まれてくるレギオンの数と階級は親レギオンの階級に比例し<能天使級>以下ならば<大天使級>が発生することはない。

という事はある奥に座して待つであろうレギオンの階級が限られてくる、のだが。

それにしても数が多すぎる。これだけの数のレギオンを配下として持つならどれだけ低く見ても<主天使級>がいるはず。

「まあ、たどり着いてから考えればいいだろ。今はひとまず」  
『ここを切り抜けること、だな　　っと、俺はそろそろ黙るぜ』

その言葉通り、サマエルの声と気配がすつつと消える。龍夜の中奥深くに。

雪杜たちとの距離が詰まったためだ。どうやら足を緩めすぎたらしい。

サマエルの存在を知っているのはこの世でも数名。しかも、それは龍夜が教えたのではなく、最初から知っていたものばかりだ。

一伎型の存在を隠すのは好奇の目で見られるからであり、それを疎ましく思うからだ、サマエルの存在を知られることは命の危険さえ伴う。

それぐらい、その存在は秘されてなくてはならないものなのだ。

「やあ、東雲。そろそろ限界かい？」

「とつくに。まあやりくりが出来ないわけでもない。最悪、鎧を出せばいいしな」

「それで安全なのは君だけなんだけどね。まあいい。それで、どうする？」

辺りを見回すと、ひとまず見当たる範囲に敵はない。

見回す、とはいうが、光源は雪杜が維持している小さな光の術式のみ。その光も弱々しい。エコである。

そのため、基本的には自分の感覚で探ることになる。術式で探そうにも、洞窟内にレギオンの存在がうつすらと充満しているため使い物にならない。

「方針を変えよう。一気に奥まで行く」

「途中に出てくる連中に討ち漏らしが出ると思うけど？」

「ここに内向きに結界を張る。外からは入れて中からは出られないようにしていれば問題はない。持続時間も短めに設定すれば力もそれほど使わなくて済むだろ」

「ふむ、なるほど」

顎に拳をあてながら首肯する雪杜。

持続時間が必要なのは長時間戦う力が残っていないからだ。それが必要即ち、自分達が死んでいる、という事を意味する。

むしろその時のために結界を強く張るべきでは、という意見はこの場では通らない。ここでそれだけの力を使おうものなら奥にたどりつくことさえ出来なくなるかもしれないのだから。

「先頭は俺が走る。葛籠は俺に風の術式を付けてくれ。で、お前ら

は自分のペースでついて来い。通り道は開けておく」

「それで、奥についた途端にあんたの死体が出迎える、なんてことにはならないでしょうね？」

「安心しろ。奥に着いたらすぐに鎧を着装する。とはいえ、相手の位階によっては瞬きするまもなく殺される事もあるだろうからなるべく早く来いよ」

その、龍夜の言葉に。

雪杜は僅かも顔色を変えず。だからその場で正常な反応を持ちえたたった一人は、奥歯をぎり、とかみ締めるだけだった。

バカにはバカの論法があり、正論が通じない。  
決して低くはない己の死の可能性を提示しておきながら『安心しろ』とのたまうバカは薬をつけようが殺して生き返らせようが意味がない。

それでいて、本気で龍夜は後衛二人を生かすつもりなのだ。

「ま、いいわ。出来うる限り急いであげるから、死ぬんじゃないわよ」

「ああ　じゃあ葛籠、頼む」

「わかった。術式の組み合わせは　そうだね、これで。」

精霊符　爛華・白虎咆哮融合　白華爛哮」

二枚の術符を同時に起動　効果を融合させる。

雪杜の符に込められた術式は、単体でも発動可能かつ十分な威力を持つが、同時に特異な性質を持っていた。

発動させる符の術式を、つなげることが出来るのだ。まるでパズルのピースのようにかみ合う部分があり、それをつなげることで新たな術式とする。

非常に珍しい上に難易度の高い技術である術式の融合。それを、手軽に行うことが出来る技術だった。

問題点としては使うことができるのが雪杜しかない、ということか。もつとも、応用はいくらでも利く技術である。

発動した術式はそれぞれ乱舞と狂風。

それらが融合し、龍夜の周囲で轟々とうねりを上げて風が荒れ狂う。その風圧に、雪杜と芳鈴は距離を取る。

それらを見やり。

「じゃ」

と、僅かな声を残して駆け出した。

纏う風さえ置き去りにするような勢いで、あっという間に光の届く範囲から出る。

黒く塗りつぶされる視界が闇に慣れるのを待たず駆け抜ける。

足を止めないまま刀を抜き、右手を引いて突きの形を取り、気を引き絞る。風が咆哮を上げて狂い、精霊が巻き込まれて光の粒子が弾丸のような速度ではらまかれる。

「神浄四相流・一伎型　獅子爪軀」

獅子爪軀。

気を受けた刃を大地に打ち付け駆け抜け、抉り削った礫を壁にする突進技。

刃に込めた気が連続して爆発を起こし、その勢いで砂礫を巻き上げるため、込める気の間、瞬間の爆発力、及び脚力で威力が大きく変化する。

さらに巻き上げた砂礫は白華爛哮により縦横に駆け巡り、加速し続ける。

猛風と礫の牙が、レギオンの軍団と正面から衝突　吹き飛ばした。

レギオン達の黒い壁の中央を凄まじい勢いで喰い荒らす。荒れ狂う暴風がレギオンに直立を許さず、飲み込み、壁に叩きつける。

風をくぐり抜けても、その先には亜音速にまで加速した礫が蛇のようにのたうち回っている。

その砂礫の壁を乗り越えても、龍夜の周りは気の爆発の余波で間断なく空間が斬り裂かれ続けているのだ。

突進する姿そのものが触れれば切れる獅子の爪。

限られた空間であればこそ、その真価が最大限にまで発揮される剣技である。

風が颯り、ぐちゃぐちゃに全身をねじ曲げ。

砂礫が突き刺さり、衝撃が無数の穴を明け。

爆発の衝撃が微塵に切り裂き、灰燼に帰す。

「跳弾に気を使わなくていいから楽だな。今度からは風の術式も併用するか」

そんな地獄絵図の中心を全力疾走している本人は、のんきな感想を述べていた。

『半端な風じゃあ意味ないと思うがな。しかしまあ、見事な術式だ。威力、持続力、運用するために必要な精霊、どれをとっても申し分ない。しかも他の術式との融合を前提としているから構成にいくらかの遊びがある。それが柔軟性を持たせているんだな。』

ふむ。なるほど、こいつは一級品だ』

相棒は、なにやら感心していた。

「やりあうとすれば、勝てるか？」

あまつさえ、本気で殺し合いの事を考え始めていた。

『お前が剣士、やつが術者であると考えたとき、その状況で変わってくるだろうな。ただ、お前がそうであるようにあいつも隠し玉をまだ何か持っているはずだし、まあ五分五分って所だろ』

そして冷静かつ正確に分析していた。

「五分か。やりたくねえな……」  
二度に一度死ぬ勝負は特攻と変わらない。  
そう遠くない未来を思い、溜息が漏れた。

当然その間も彼の周囲では地獄絵図が変わらず秒刻みで更新され続けているわけだが、まあわざわざ表現するほどのことでもない。

そうして一キロ弱走り続け、いくつかの群れを続けて突き抜けたその先。

「マズっ……！」

刀を突き立てて両足を前に突き出し、勢いを無理矢理殺す。

ガリガリと足元の岩盤を削りながらようやく静止したその場所は、ギリギリの場所だった。

つまさきほんの数センチの場所に、黒いものが張り付いていた。  
びくん、びくと脈動するその表面には葉の表面のように細かい管が浮き出していた。

その先は、明るかった。

少なくとも、これまで直進してきた道よりは、遥かに。

「月光……か。山の斜面に穴が開いているのか？ 危ないな……」

顔をしかめ、刀を納める。

言葉のとおり、その先の空間には白い光が差していた。

頭上の空間にいくつか亀裂が入っており、どうやらそこから月光が差し込んでいるようだ。

これまで通ってきた道よりもなお広い半球状の空間。小さな体育館程度の広さはあるだろう。

空間の高さは約二十メートル。龍夜のたつ横穴は床から高さ二メートル程度の位置にあった。軽く壁面に触れてみる。

先程までとはうって変わり、きれいに均されている。明らかに何者かの手が加わった形跡があった。まずもって防空壕を作った人間によるものではないだろうし、初めからあった空間でもないだろう。さて一体これはどういう事か、と考えたところで、視界の端で何かがうごめいた。

身を屈めて壁に背を寄せる。

意識を半分沈め、空間に解き放つ。知覚を網の目のように広げ、空間に何があるのかを把握しようとして。

「……いや、おい、待て」

己の知覚に触れる物の全体像を、ゆっくりと把握してゆく。

それは。

想像もしていなかったものだった。

「網の目のように広がったく大天使級>レギオンだと……?!」

地下の空間を埋め尽くしていたのは、網のように広がったく大天使級>のレギオンだった。そして、その網の目から次々にく天使級>が生まれてきているのだ。

「馬鹿な……く大天使級>からく天使級>が沸いてくるなんざ聞いたことねえぞ」

『はあん、なるほど。どうもこの空間を作ったヤツは、この大天使級を運用するために、地上であんなことをしていたワケか。』



意味不明だな。何がやりてえんだ、アレックス・キング』

「正直死ぬ覚悟だったんだがな………つうかやり辛いな。＜大天使級＞のくせに人型保っていないってのは。どれだけぶった斬れば討伐できると思う？」

『さてな。素直に核を探したほうが無難って気もするが、この範囲から探すのは中々骨が折れるぞ』

「だよなあ」

＜大天使級＞にも一応核は存在するのだが、＜権天使級＞のそれとは比べ物にならないくらい小さい。さすがの龍夜も、分子サイズのもを正確に斬るのは骨が折れる。

ともあれ。

「やるか」

露払いをすると宣言した以上、やるしかないだろう。

それに、相手がかかしら隠し玉を用意していないとも限らない。気を引き締めて、刀に手を添える。

一度、己の踏み入る世界を睥睨し。ゆっくりと目を閉じ、深く息を吸う。

「東雲龍夜　いや、篠中龍夜、参る」

誰に名乗ったわけでもない。

故に、その名は効果を表さないが。

己の心に楔を打ち込む事はできる。

ざり、と地を強く踏みしめ。

飛び出した。

灯駆は軽いランニングで、洞窟を進んでいた。  
その顔色は悪い。

「……ああ、駄目だ。思い出しちゃったよ」  
それでも、足は止めない。

廃村に広がっていた、無残な元・人間の姿。

正視に耐えないその光景を、無理に意識の外に追いやってどうにかレギオンの気配を追ってきたものの、気分はすこぶる悪かった。  
あの森の光景といい、今日のこれといい、最近の自分はグロに縁があるらしい。厄介な話だと呼吸を深くする。

洞窟の中の空気は冷えており、多少の息苦しさはあるものの難があるという程でもない。

暗闇にどうか視界は慣れてきてはいたが視界が悪いことに変わりはなく。故に、逸る気持ちを押さえての進行となっていた。

正直最初は本当にこの奥に何かがあるのか、自分の感覚を疑ったりはしたものの、その疑いはすぐに晴れた。

再び現れたそれを前に、彼女は足を止めた。

「また、戦闘の跡ね」

進んでいる途中で、「ごまかしようのない戦闘の跡が残っているのだ。」

その破壊はやりすぎ、の言葉で十分に説明ができるものばかりだ

った。

破壊は床のみならず壁、天井にまで及んでおり、その種類も様々だ。殴打、斬撃、炎、冷氣等々。一体何をどうすればこんな痕跡の残る戦いになるのか、彼女の常識の中ではちよっと思い至らない。

とはいえ、既に非常式な存在は目にした上になぜか当然のように撃破しているのです、まあそんなこともあるのかも、位の受け入れ方はしていた。投げやりともいう。

「……本格的に何者なのかしら、あの東雲って男は」

さらに言えば、足跡を見るに仲間が二人いるらしい。

進行速度がひとりだけ突出しているのが謎だが、まあそういう布陣なのだろう。

前で彼らが戦ってくれていてはおかげで自分がこうして安全に奥に進んでいるのだと思うと若干の後暗さはあるが。

「まあ、全部は追いついてから、よね」

気をとりなおして歩みを再開する。

彼女は気づいていない。

暗闇に目が慣れた程度でどうにかなる暗さではないことも、それを超越した暗視能力を己が発揮していることも。

足元の覚束無い、足場の不安定な急な坂道を、当たり前のように進めている自分の歩行能力も。

レギオンの存在がないことを、当然のように認識している自分の知覚能力も。

神浄四相流・四条式。

彼女はまだその意味を、知らない。

妄執・溢れる（後書き）

状況は単純ですが敵が厄介です。  
厄介すぎてどうやって倒したもんかと。

## 術刃・乱れる

02 - 13 : 術刃・乱れる

何の前触れもなく、それは始まった。

氷がいきなり沸騰したかのような唐突さ。

うつすらとした気配はずっと感じていたが、それが唐突に弾け膨れ上がり、爆発した。

ふたりは視線を交わし、先を目指す。

周りのレギオン（瀕死）のとどめを中断して疾走。どうせ放っておいてもすぐに消える。

それよりも、この異様な気配の相手が先だと判断した。

「結構深いね、この洞窟」

「明らかに人の手が入っている割に、目的が不明なもの。防空壕なら最初の十メートルで終わっているわ」

「ああ。何者かは分からないが、結界を張った本人だと考えるのが妥当だろうね。」

こんなところでレギオンを繁殖させて、一体何がしたいんだか。僕が言うのも何だけれど、はっきり言ってまともな神経の持ち主じゃあないね」

雪杜が吐き棄てる。

ああまったくもってまともじゃない。人を閉じ込めて互いを食らわせ、憎悪と後悔と絶望で染め上げ、あまつさえレギオンの温床に

してしまうなど。まったくもって人間の所業ではない。  
そして。

その行為に対して純粹に好奇心を抱いている自分自身もまた、まったくもって異端異質の鬼子といえる。

ああ、やはり自分は何一つ変わっていない。彼女のようにたいてい、せめて彼女に報いたいと、そう思って生きてみても、結局本質は変えられないのか。

けれど。

「……違うわよ」

「うん？」

「あんたって頭いいくせに単純っていうか素直って言うか……まあ、見てるこっちとしてはわかりやすくいいんだけどさ。あんたはちゃんと変わってるわよ。ああ、ちよつと違うか。」

成長してるのよ。別にさ、全部が全部変わんなきゃならないワケでもないでしょ？ 正直あたしだって、いち術者として、この儀式に何の意味があるのか、この先に何があるのか、知的好奇心がないわけじゃない。それはもう術者としての業みたいなもんなんだから気にしたって仕方ないわよ。

大事なのは、あんたがちゃんとその自分が異質で、異端で、あんたがなりたいあんたとは相容れないってことを自覚して、認める事じゃない。少なくとも今のあんたは昔よりずっとまともよ。術のために生きていた頃よりも、ずっとね」

それは、怒っているような、それでもどこか優しげな、そんな声だった。

雪社は自分が何を言われたのかしばらく理解できずにぼうつとして。

「あいたっ?!」

ずっこけた。

術の補助つきで走っていたためさながら交通事故みたいな音を立

て壁にぶつかって止まった。

「……あんた何してんの」

「いや、まあ」

天地ひっくり返って照れたように笑う雪杜に、芳鈴は心底呆れた様子。

立ち上がり砂を払って。

「……あー……」

天を仰いでなにやら奇妙な声を発し。

「何してんの？ 早くいかないよ」

「うん。まあ」

確かに、今は一刻が惜しい。だから色々な思いを明確に形にする時間もなくて、結局単純な言葉しか出てこない。

「ありがとう、佐々森。本当に」

それは、芳鈴がこれまでに見た中で、一番きれいな笑顔だった。

「ばっ……！ さ、さっさと行くわよ！！」

思わず顔をそらす芳鈴だが耳まで真っ赤に染めていてはあまり意味はない。

「ま、そうだね。じゃあ急ごうか」

なぜ怒られてるんだろうかなー、なんて落ち込んでいることはおくびにも出さず、術式を再起動。

意識を切り替える。

この先にあるものが、自分にとって何かしらの意味を持つ。

そんな予感を感じながら。

雪杜は駆け出した。

そして。





蹂躪する。

ぐるりと空間を見渡してみれば、壁床天井あちこちが焼け、凍り、溶け、割れ、砕けている。

「ぺぐぜ「き！ ゆーら」！！ じじまじ「ぎやぎよ！ ぎえ」「ぎよらぬぎー！」

四方八方から響く耳障りな晒い声が悪寒を誘う。

ああそうだろう可笑しいだろう。

何しろ、これだけ破壊を振りまいてなお、目の前のレギオンの数は増え続けている！

龍夜の全力の攻撃で減る数よりも、次々に地面の黒い網目からわき出してくるレギオンの数のほうが多いのだ。

それを見て、自分が何を見ているのかがわからなかったが、理解した瞬間に驚愕する間もなく肉体は反応した。

「佐々森、弓を！」

「う、うん、わかったー！」

芳鈴が鈴を一振りすると空間が歪む。そこに鈴をしまいこんで、今度は弓を取り出した。

赤い色の弓は所々金の装飾が施されており、優雅な佇まいを秘めている。

弦をかけ、構える。しかしつがえる弓はない。

弓を構える。その姿勢に乱れはなく、凜とした視線には一欠の動揺も見当たらない。

「被い給え。清め給え。守り給え。幸え給え」

言葉に合わせて弦を四度弾く。

りいん、りいん、と澄んだ音が空間に響き渡る。

それに。

ぐるり、と。

千を越える光が反応した。

レギオンの眼球の光。

視界に映る範囲で優に五百以上。

圧倒的数と密度。

めまいを覚えるほどのそれを前に、意識を張り詰め、水鏡のように意識を沈め。

弦を僅かに引き 放つ。

「わたしにみちをあけてあぐれ響け天鈴穿て胡蜂 蜂星流禍」

精霊術大系奏術系統放出式空間術『蜂星流禍』。

先に鳴らした音と視覚で道を定め体内に大量の精霊を取り込み、最後の爪弾きで道に向かって溜め込んだ精霊を瀑布のように放つ。

弓に宛てた指先に沿って真っ直ぐに放たれた精霊は道に沿って押し合うように流れ、超高密度の結晶を形成しながら鋭い光の矢と化する。

「ごう、と一直線に龍夜を囲むレギオンをまとめて飲み込み、向こうの壁に当たって砕け散る様はさながら津波のようだ。

「東雲、こつちに！」

「分かつてる！！」

雪杜の呼びかけに怒鳴り返すように返事をする龍夜。その声に余裕はない。

それはそうだ。なにしろ。

「嘘……まだ出てくるの?!」

床に張り付いた網の目のようなレギオン諸共に消し飛ばしたにもかかわらず、切れ目を塞ぐようにレギオンが広がり、埋まった網目からまたレギオンが生まれてくるのだ。

「なによこれ……!」

「佐々森、落ち着いて。とりあえず手を動かすんだ」

術式を放ち龍夜を援護しながら芳鈴を落ち着けようとする雪杜にも、さすがに焦りの色がにじむ。

龍夜、雪杜、芳鈴。

この三人ならば、楽観はできなくともある程度の事態なら対処できると踏んでいた。

油断しているつもりはなかったが、あくまでつもりでしかなかった現実にはぞを噛む。

駆け寄ってきた龍夜は、疲労の色も濃く、深手は負っていないもののいくつもの傷をその身に刻んでいる。

「鎧は着けないのかい?」

「あれな」。攻撃力と防御力はガツツリ上がるんだがいかんせん攻撃範囲が死ぬんでな」

「なるほど確かに漆黒騎士にとってはこう言うのは最悪の手合いなわけだ。

「というか一体これは何なんだ? この<天使級>を生み出すためだけのようなレギオンは」

雪杜の言葉に、龍夜が片側のまゆをぴくりと動かす。

「ふん、もうヤツの特性を掴んだか。ああ、その通り。こいつは地上の地獄を餌場として<天使級>を無尽蔵に生み出す、そういう<大天使級>レギオンだ。<大天使級>だから名前もなければ核を狙うのも一苦労。倒すためにはその存在に見合った損傷を与え続け、構成する負の精霊を散らすしかないわけだ」

「<大天使級> って、コレが?! 人の形をしていないじゃないな

い?!」

「……そう判断した根拠は？」

ふたりの反応を予想していた龍夜は、用意していた答えをそのまま返す。

「レギオンの位階を決めるのは本来その姿ではなくその体を構成する精霊の量と密度だ。こいつの場合、確かに量は大したものだが密度はスポンジ程度のもんだ」

ざくざくと足元の黒い網を斬りつけながら『ほらな』と視線で理解を促す。

「だから位階を定めるならばこいつは<大天使級>ってことだ。普通の刃物でも切断できる程度の密度では<権天使級>と比べるのもおこがましいレベルだよ」

無表情に平坦な声を載せているが、足元の網に刀を突き刺す作業は続いていた。というかだんだんと往復速度及び上下幅がいい具合に上昇している。まあつまりそういう事なのだろう。

ざくり、とひときわ大きく刀を突き立てた後それを引きぬき、肩に載せる。

「もつとも、存在を散らそうにも負の精霊がわっさわっさと上から降りてきてるから、それもままならないんだがな」

忌々しそうに天井に空いた穴を見上げる龍夜。なるほど、あの穴を通してあの地上から負の感情に染まった精霊が落ちてきているらしい。

まあなんとも、この<大天使級>にあつらえたような空間だ。

おそらくこの分だと昼に注ぐ日光の量もさほど多くはならないのだろう。この<大天使級>は、昼夜を問わずここで好きなだけレギオンを生み出すことができるわけだ。

ざつと空間を見渡す。

広くはなっているがやはり洞窟。それなりに障害物も多い。足元は相変わらずでこぼこしているし、身長よりも高い岩がいくつも生えている。視界の確保という意味では、通ってきた道のほうがましだったといえる。

「でも、それじゃあこのレギオンの素体になつた人間はどうなったの？　すでに人としての形は、ないってこと？」

「さてな。俺もそこがわからん。

そもそも<大天使級>となるには人間が必要で、人間が<大天使級>になつたのならその時点でその姿は完成している。あとは徐々に体組織を精霊に置き換えていくだけだ。

その点から言うなら、この<大天使級>は最初からこの形であるはず……なんだが……」

こんなアメーバみたいな人間がいたら大騒ぎというか、それは人間じゃない。

「<権天使級>と同等の能力を持つ<大天使級>って事になるのかな、この場合？　僕はそんなの聞いたことはないけれど」

「俺だつて同じだよ。おそらく、世界初つてやつだろつな」

皮肉げに口を歪める龍夜。どうせ世界初ならば、もっと華々しかったり有益だったりといった事で味わいたいところだろう。雪杜も同意見だ。

「じゃあ、それこそここを埋めてしまつとか、そういう事でもしなきゃならないの？」

「それで潰し損ねたらそれこそ最悪だぞ。温泉みたいに地下からポコレギオンが出てくる所が見たいのか、お前」

「う……」

龍夜の反論に口をつぐむ芳鈴。

「じゃあ、どうするんだい？」

「……、引つかかるといえば引つかかる点はある。たしかにコイツが人間の姿形を完全になくしているのは奇妙な話だ。

そして、今葛籠の言った事。もしそれらの要素が答えに結びついているとしたら？」

「雪杜の……？ えっと、あんたさつきなんて言ってたっけ？」

「<権天使級>と同等の能力を持つ<大天使級>だね。それがこれの答えだと？ もしそうなら、僕らに何か打つ手はあるの？」

戸惑う芳鈴の代わりに雪杜が答え、問う。

龍夜はわずかに瞳を閉じ、頷いた。

「この際、あり得るあり得ないを論じている場合でない事は確かです。事実として目の前に積み重なったピースを合わせて見える真実の輪郭はどうやったってその形に落ち着く。そして情けない話、そんな予断を抱かない限り、俺達はどこでこのまま死ぬしかない。」

言っておくが、これは賭けだ。もしこれが外れていた場合、俺達は無駄に踊るだけだ。馬鹿みたいにな。」

「どうだ？」

不恰好に唇を釣り上げる龍夜を、二人はじつと見る。

芳鈴は不安な色で。

雪杜は　まるで何かを測るかのよう。

視線を行ったり来たりさせる芳鈴にため息を一つついて、雪杜は答えを出した。

逃げるつもりがない以上、どうせ道は一つきりなのだから。

作戦は　作戦というほどのものでもない。

物量に対して物量で当たるといふ、単純にして愚の骨頂。  
しかも確実に敗北は見えている。

彼ら三人の要点はただひとつ。いかに死なずに殺すか、ただそれだけ。

「神淨四相流・一伎型

座継臈うすひき」

刀を鞘に収め、腰から抜く。右の膝をその場につき、左足のつま先に全体重を預ける。

左足に添えるように刀を立て、石のようにじっと動きを止める。

頭を垂れ、飛び掛ってくるレギオンを前髪の隙間から覗く。

先頭のレギオンの体が大きくしなり、腕が繰り出される。

風を切って迫るそれを、じっと、じっと、じっと。

ちり、と。

前髪に爪の先端が触れた、瞬間。

「べ、ぜぎ、じじえ？」

龍夜の姿が掻き消えた。

確実に獲物を捉えたハズのレギオンはその場でたたらを踏んで、首を傾げる。

そこに。

「っ」

いつの間にか体を入れ替えて後ろに回った龍夜。

しゃりん、と涼やかな音が響きレギオンの胴体が上下に分かれる。

さらに音が連続。レギオンが綺麗に一辺五センチメートルに寸断さ







ゆっくりと飲み込まれて押しつぶされているが無論この程度で倒すことはできない。

そして幕を下ろすのは彼の役目ではない。

「ひふみよいむなやこと　ふるべ　ゆらゆらと　ふるべ」

白い光を体か溢れさせて、天に向かって弓を引く芳鈴。

つがえるのは一筋の光。結晶化するほどに超高密度に圧縮された精霊の矢。

強く、大きく弦を引く。瞳を閉じ、祈るように頭を垂れ、矢を解き放つ。

「かがやくいのちのあめとなれ注げ聖歌広がれ氷雨

くたまがくいんつきかなで剗霊樂韻月奏」

精霊術大系奏術系統射出式精神術『剗霊樂韻奏月』。

放たれた矢は光の尾を螺旋に放出しながら天井に向かい、接触寸前で行くと反転。そのまま倍以上の速度で急降下し、無数に分裂した。

百を超える矢が大地とレギオンたちに突き刺さる。

そして。

りん、と、懐から取り出した鈴を芳鈴が一振り。

突き刺さった矢が伸び、空間が白い線で覆いつくされる。天井や壁のレギオンたちは突然の変化に対応できず多くが串刺しにされる。

そして、最後にもう一度、鈴を一振り。

りん、という響きが、光の矢を震わせ、やまびこのようにりん、という音が帰る。それは他の矢に伝播し、共鳴し、増幅され。

ガラスの碎けるような音とともに、精霊が爆発。矢に貫かれていたレギオンは内側から膨れ上がるように爆散し、逃れていたレギオ

ンも周囲を囲む破壊の檻から逃れられずに巻き込まれて消滅する。  
その中央に着地した龍夜が、素早く呪文を唱える。

「ひとつはふたつ、ふたつはよつつ、よつつはやつつ、面は連なり  
線は重なる、正負を一つに聖邪を一義に、理性と感情の機織りよ、  
意思と意志とを汲み上げて、我が祈りを聞き届ける 攻撃結界『  
獣牙陣』！」

ぎしり、と音を立てて空間が陽炎のように歪む。

攻撃結界『獣牙陣』。まさしく山に張られていた結界、その簡易  
版である。

効果は指定領域に外部からの接触に対して攻撃を返す結界を張る  
という物。指定領域は正八角形となり、空洞内にはこれで四つ目の  
展開となる。

壁際から、面と面を合わせるように展開して、これで四つ目。

つまりはこれが作戦である。

相手が一面に広がっているというのなら、その面自体を小さく制  
限してしまえば良い。このく大天使級を相手にする上で厄介なの  
は、その巨大さだ。一面にびっしりと広がった網目のそこかしこか  
らく天使級が出てくる上に、疎密がこうもはっきりしては直  
接攻撃も効果が薄い。

相手の密度を高めつつ、存在範囲を削る。

敵を徹底的に殲滅し、その範囲を結界で囲む。その繰り返しによ  
り、相手の存在範囲を制限しするのだ。しかしながら当然そんな事  
をすれば面積あたりのレギオンの層は厚くなる。

敵の密度を高める代わりにこちらの攻撃の効果も上がる。肉を切  
らせて骨を断つ、どころか、腕くれてやるから心臓よこせと言わん  
ばかりの乱暴な戦法である。

相手の戦力が底なしであるため賭けに出るにも状況を整える必要がある。相手を一箇所に集中させ、全力の攻撃で一気に消滅させる。失敗すれば待つのは死。あるいは結界を貼り終える前に。

広範囲の攻撃ができない龍夜が囷となり敵を集め、雪杜が芳鈴で地面の<大天使級>ごと結界を張る範囲を殲滅する。最後に結界の術式の詠唱をしていた龍夜がそれを展開する。

しかし。

「たいしたもんだな、まったく。即席で精霊術式を　それも詠唱術系統を構築するとは。まったく恐れ入る」

六つ目の結界を張りながら龍夜はひとりごちる。

精霊術大系詠唱術系統固定式空間術『略式・獣牙陣』。

詠唱術系統はその名のとおり、詠じるだけで術式を発動できるのが特徴だ。所謂魔法使いのイメージそのままではあるが、普及率及び使用者、研究者は少ない。実際に使うとなるとあまりにも使い勝手が悪いのだ。何しろ、言葉だけでなくイントネーションや息継ぎのタイミング、長さ、声の高さや大きさまで考慮に入れなくてはならず、個人間での効果の差が大きいからだ。

ヘタをすると、結界術式を展開しようとして自爆術式が発動、なんて笑えない事さえありうる。

他の精霊術式とは違い何一つ事前準備、道具がいらぬ代わりに、不自由危険極まりない系統である。

雪杜はそれを十分そこから即席で作り上げた。

「モデルがあるからゼロから作るより遥かに楽だよ」

とはいいが、同じことをやれといわれても龍夜にはできない。

それも、三人が同じように使えるように、術式にある程度のゆらぎと遊びを持たせてある。それは雪杜の個人的研究のほんの余録で

あるのだが、それを知らない龍夜としては革新的なアイデアであった。

術式に予定調和のムダを仕込む事で、逆に厳密な操作を必要とさせない仕様。詠唱が長くなりムダに力を消費するという事はあるが、この場においてはそれを補って余りある。

通常の結果であれば<天使級>が数十と集まり圧力をかければ破ることは可能だが、攻撃結果であれば圧力をかける間も与えない。総合的に見て、通常の強力な結果よりもムダのある攻撃結果の方が精霊を節約できる。

七つ目の結界を展開しながら、龍夜はひとつ息をつく。

焼けつくほどのどのの渴きを覚えていたが、解消する手段はここにはない。

深く息を吐いて乱れた呼吸を整える。

既に空洞の三分の一は結界で支配した。すなわちそれは、単位面積当たりの敵の量も三倍近くになったことを示す。実際、結界の外には無数の<天使級>がこちらをうかがっている。

<大天使級>の方も、網の目は随分と細かくなってきた。

「体力はまだ持つが 体が持たないか？」

深い傷は簡単な応急手当をしただけ。浅い傷の数はもはや数えきれない。

「やっぱり浅はかな作戦だったか」

「けどこうでもしないと戦いにさえならなかったらどうね」

雪杜の言葉も一理ある。が、勝てなければ何も意味はない。

勝たなくては。生きなくては。

何しろ、ここへ来た本来の目的は何一つ達成出来ていない。

予定を繰り上げた大元の理由。湊智晴の手がかりは未だ手にできていなかった。

ここに居るのか。こことは別のどこかに居るのか。  
安全なのか。そうでないのか。あるいは。

いずれにせよ、時間との勝負。

三人は揃って駆け出した。

七つ目。八つ目。

結界を展開する。

龍夜の刃は鈍ることなく、邪魔な岩ごと敵を斬り裂く。

縦横に走る術式を放つふたりは見事な連携で敵を寄せ付けない。

しかし疲労は隠せなかった。

「神浄四相流・一伎型 網剛狒々」

刀を大きく振りかぶり、僅かな停滞の後に振り下ろす。

網に目に広げた気が、巨大な拳を叩きつけたかのような破壊跡を  
岩盤に残し、まとめて二十近いレギオンがひしゃげ潰れた。

素早くその場を飛び退き襲いかかるレギオンをかわす。

明らかにレギオンの数が増えている。足を止めている隙がない。

「つぎ……ったいんだよ!!」

追ってくるレギオンを一刀のもとに切り伏せる。素早くその場で

身を屈め、背後から襲ってきた牙をやり過ごし、両手を地面についで蹴り上げる。ごしやりと頭蓋の碎ける感触と共に黒い霧が散った。それでも猛然と迫り来るレギオンたちを、雷の雨がなぎ払う。一瞬の閃光とともに全身が沸騰するような熱量が吹き荒れ、レギオンたちを跡形もなく焼き尽くした。

そして。

「っ！ 馬鹿、逃げる！！」

芳鈴。

そちらを見て目を見開く。

男ふたりと比べて体力の劣る以上、限界が来るのもまた早いはずだった。それを考慮に入れるべきだった。

精霊に乱れが生じ、術式の発動が僅かに遅れていた。

その彼女を見逃すまいと襲いかかる大量のレギオン。

龍夜が構える。遠い。届かない。

雪杜が符を放つ。遅い。間に合わない。

黒い波が華奢な少女に襲いかかる。

その瞳は諦めていない。それでも間に合わない事は分かりきっている。

駄目だ。

その思考を斬り裂いた。

たったひとつの黒い風。

それはあまりにも鮮烈で。

あまりにも流麗で。



深く美しく闇の中でも輝くような、艶やかな長い黒髪。  
芳鈴の前に躍り出て。  
くるりと舞いの様に回り。

「神浄四相流・四条式」

腕脚牙爪全てをいなし、ねじ曲げ、退ける。  
爪先ひとつとして不浄が触れることを許さず。  
己の手を血に染めることはない。

刹那の嵐が吹き荒れた。

「ふういんようか  
楓韻瑶歌」

はらり、と。

黒い髪が重力に従って落ちる。  
芳鈴よりも小柄な少女の顔が、月明かりに晒されて白く輝く。

「まったく」

ふたりを囲むレギオンたちは身動きも取れず、ただその場で固まっていた。

「わたしは智晴を探しに来ただけだっていうのに」

少女の顔色は決して良くはない。声もわずかに震えている。  
それでも。

「まさか人助けをすることになるなんて、思いもしなかったわ」

ほほ笑む。

少女の名前は。

「さあて、事情を説明してもらおうよ、東雲龍夜。それからそちらは葛籠先輩？」

不思議な組み合わせに疑問は尽きないけれど、わたしが知りたいことはただひとつ。当然、分かってるでしょ？」

言つて、邪魔なレギオンの腕を僅かにずらした。

「な」

雪杜が息を飲む。

ただそれだけの動きでレギオンが霧となって消えたのだ。

龍夜としても舌を巻く思いだった。

よもや、迫るレギオンの攻撃を全て逸らし、別のレギオンに向けるとは。しかもその際、力僅かに加えて威力を何倍にも高めている。今のはとどめでもなんでもない、ただのひと押し。

「智晴がどこにいるのか。知ってるなら教えてもらおうよ」

四条灯駈、参戦。

## 呪・顕る(前書き)

何度も書きなおした末に好き放題やってしまいました。

## 呪・顕る

02 - 14 : 呪・顕る

青い顔で。

震えながら。

それでも、瞳に力強い光を宿して。

四条灯駈は、現れた。

「お前、どうやってここに来た」

「あのコが危ないところに行くのはいつもの事なのよ。だから、お互いの場所をGPSで判るようにアプリケーションを設定してるの」

なるほど、と嘆息する。

そういった機能は自分の持つ携帯端末にも導入されている。携帯電話にもその機能があるとは知らなかったが、簡単な見落としではある。

しかし。

「……なんで来たんだ。面倒なことになってることは分かってただろ」

「面倒なことに智晴を巻き込んでおいて、はいそうですか、なんて放っておけないでしょう。確かにあんな、訳の分からないモノが出てくるなんて思ってたけど、幸か不幸か前に一度ああいうの

は見たことがあるからね」

龍夜は口を閉ざす。

やはりあの時無理にでも記憶を隠蔽しておくべきだったか。いや、たとえそうしていても智晴が行方不明になっている以上同じ流れだ。つまりとところ、何から何まで後手に回っている自分の迂闊さが全ての原因になっている。

不利劣勢はいつものことだが、それで他人を巻き込んでいるようでは三流以下もいところ。

己の不甲斐なさにいらだちを覚えるが、反省は後だ。

「で。湊か」

ほら、とポケットの中の携帯を放る。慌てて受け取る灯駈。

「山の中で拾った。本人は見つかっていないが、まあ最悪の事態にはなっていないだろ」

「……根拠は？」

「あいつは自分の命を軽く見るタイプか？ 状況に諦め、簡単に死んでもいいと思うような」

「ううん。命がかかるほど状況を抜けだすのに燃えるタイプ」

「だろうな。俺もそう感じた。だから平気だ。その意志がある限り、あいつの運命があいつを救う。少なくとも今回はな。そういう呪いがかかっている」

「呪い？」

物騒な響きを持つ言葉に灯駈が顔をしかめる。

「あー……まあ本人に害はねえよ。加護と言うには役に立たねえし罨と呼ぶにも平和すぎるし、何よりも発動条件が呪いがかかっているでな。便宜上そう呼んでいるだけだ」

気にするな。と、明らかに気になる言い回しをしている男が言っ

た。当然灯駈は納得いかない様子だったが、何を言っても聞きはしないような気がしたので、結局口は閉ざしたままだった。

「それで……あなたたちは結局、何をしに来たの？」

「俺たちはこいつらの駆除だよ」

と、奥でうごうごとと生まれてくる黒いものを指す。次の瞬間、光の槍がそいつらをなぎ払った。

「さつきはありがとうね。あなた、四条灯駈さんでしょう」

「え、あ、はい。そうですね……ええと」

「ああ、こっちが勝手に知ってるだけだから気にしないで。同じ学校なのよ。あたし二年の佐々森芳鈴」

「同じく二年の葛籠雪杜」

ふたりが名乗り、雪杜は同時に獣牙陣を展開する。その光景に、灯駈が目を見開いた。

「随分物騒なものがあると思ったら、先輩が作ってたんですね、その壁」

「へえ、君、これが見えるんだ」

「……？ ええ、まあ」

なるほど、と頷く雪杜。灯駈は雪杜が何に納得しているのか理解できずに困惑する。

代わりに龍夜が口を開いた。

「こいつは境界って言ってな。適性がないと見えないんだよ。まあ、よくフィクションにある魔法的なものと思ってりゃ問題はない」

「ふうん……魔法、ね。あなたもそれを使うの？」

「あー、まあ使えない事はないが、どっちかっていうとコレ専門だ」  
言っ、刀を持ち上げる。  
と、灯駈が僅かに顔をしかめた。

「……うん」

「おい、どうした」

「うん。なんかいきなり頭が痛くなって。おかしいわね……なんか  
デジャヴが……」

龍夜はそうか、とだけ口に出して刀を納める。

記憶の改ざんが既にほころび始めている。この状況で隠蔽するこ  
との意味は既に薄くなっているが、こちら側の事情について、知っ  
ていることは少ないに越したことはない。

知ればそれだけ因果を呼び寄せる。

何も知らない少女をこれ以上巻き込まないための、せめてもの悪  
あがきだった。

「さて、念の為に聞くが、今からでも戻るつもりはないか？」

「ないわ。智晴を見つけて帰る。そのために来たんだもの。そのた  
めに全力をつくすと決めて、ここに来たんだもの」

相変わらず。

頑固で、まっすぐで。  
だから。

「そうか」

「いいのかい？」

「よくねえよ。ねえけど、どうしようもねえ」

雪杜の疑問に、苦さの滲む声で答えた。どうしようもない。ただ、どうにかするしかない。

そう。

いつだって世界はそんなものだ。

現在の作戦を聞いた灯駈の反応は。

「随分と分の悪い賭聞こえるわね」

とあったが、特に反対はしなかった。知識のない自分が何を言うべきでもないと思ったのだろう。

それは龍夜たちにとっては歓迎すべきことだったが。

「四条式、か」

その意味をよく知るところの龍夜は、素直に歓迎したくはなかった。

四条式が裏の世界との関係を絶って久しい。それでも、その中をめぐる血と因果は、こうして確かに存在する。

そんな事を確かめるハメになるとは思っても見なかった。

結界の縁ギリギリに立つ。

視線の先数メートルには、既に無数の黒い影が群がっていた。後方には三人が控えている。



「因果な話だなあ、龍夜」  
「サマエル」

龍夜にしか聞こえない声。  
それはどこか寂しげな響きを伴っていた。

「奴らは覚悟を持って決別した。それでもこうして世界は追いかけてくる。」

四条式は決して逃げたんじゃない。戦士をやめたわけでもない。ただ、歩く場所を変えようとしただけだ。

それでも影は追ってくる。光のなかにいる限り、影はいつでもついてくるんだ」

故に。

「少なくとも、今は正面から立ち向かうしかない、か」

「ああ、そういう事だ相棒。」

は。葛籠の野郎に俺の存在を知らせるのはたしかに危険だが、な  
あに、交渉次第だと思っぜ？ いざとなれば俺を呼べ」

「そっちな まあ」

なるようになるぞ。

言葉を飲み込み。

術式を刃に絡め。

「神浄四相流・一伎型 虎牙突穿」

踏み出す。真っ直ぐに。

その姿を見た灯麩は息を飲んだ。

恐怖も絶望も飲み込んで、諦念と雑念を振りきって、その姿がまさに一振りの刃。

似ている。

どこが、とは言わないけれど。

そう感じた。

直感であるけれど、それは信じるに価するものだった。

四条式と似ている。

龍夜の苛烈を極めた攻撃的な戦法はむしろ四条式の真逆をゆくものだ。

しかしそれでも、その根底にある何かが、自分と同じものだと直感させる。

「……さて、それじゃあ、僕らもそろそろ行こうか。四条さんは、

芳鈴とセットで、離れないように、互いにかばいあう形だね」

「素人にこんな真似をさせて、ごめんね、四条さん」

「あ、いえ、気にしないで下さい。先輩たちも、無理を言ってますみません」

「なに、正直に言えば君のあの体術に大きく期待しているところもあるのさ。何しろ、状況は最悪だからね。藁にも縋りたいところなんだよ」

雪杜が歩き出す。

ふたりは最後に結界を出て、ふたりの討ち漏らしを徹底的に掃除する役割だ。

既に戦場には雷光と猛風が入り乱れ、銀の刃が黒い影を次々に屠る凄惨さを見せていた。

そこに、飛び込む。

恐怖がある。躊躇いが生まれる。

それでも。

覚悟は、ある。

「じゃあ、いくよ、四条さん」

「はい。佐々森先輩」

足をとめる理由は、今はない。

視界の大半が黒で埋まる。斬り裂き斬り払い斬り捨てて、その先から先から次々に黒の波が溢れてくる。

嫌気がさすほどの悪意の渦の中に居ながら、先程までよりも体が軽い。

「本当に、嫌気がさすな」

「おいおいここはダメエの未熟を嘆く場面だぜ？」

「毎度のこと、すぎ、て……っとお！ わざわざ今、やることでもねえ よっとー！」

左右のレギオンを斬り捨て、足元から湧き出たものは踏みつける。軽業師のような身のこなしで充満する闇の群勢の合間を抜け、悪夢のような正確さで致命的な一撃を刻んでゆく。

急激に、剣が冴えてきた。

理由はひとつ、四条式に違いないだろう。

先程まで感じていた焦燥感が、ひどく軽くなっていることを自覚していた。

状況が好転したわけではない。むしろ守るべき対象が増えたことはさらなる負担であるともいえる。それでも、いや、故に、と言っべきか。

龍夜のポテンシャルを引き出すための精神的な枷がひとつ外れたのだ。

劣勢であるからこそ全力を振り絞ることができ。己の制御の外側にまで及ぶ感情の波。そういったものが、今の龍夜の力を押し上げている。

「とはいえ、麻薬みたいなもんだけどな」

「だな。限界は近い。そろそろ落とし所が見つからねえと、まあ面白くねえ結果になりそうだな」

龍夜たちがこのまま敗北するか、あるいはそれを回避するために、龍夜の切り札を切るか。

死ねばそこまでだがここでカードを切ることは今後の活動に大きな制約が掛かる可能性がある。

葛籠雪杜。

どこか龍夜を敵視する男。

彼が龍夜のアキレスを黙って見逃すとは思えない。

さて、そろそろ状況が変わってくれないと辛いんだがな。

と。

まるでその龍夜の思考を読んだかのように。

レギオンたちが揃って動きを止めた。

「……なんだ？」

雪杜は今まさに放とうとしていた術式を止める。まるで波が退くように、黒い影が退いてゆく。

空洞の奥へ、奥へ、奥へ。

暗闇の底へ、底へ、底へ。

四人の見ている前で、あれだけいたレギオンは瞬く間に数を減らし、消えていった。

そして静寂が訪れる。

誰も微動だにせず。

誰も口を開かない。

例外なく、この場にいる誰もが理解していた。

何かが、来る。

暗闇の奥。そこから、ひきずり込むような、あるいは今にも破裂しそうな気配を感じる。

全身をじつとりとねぶる違和感。最初は小さかったそれが、ゆっくりゆっくり、確実に大きくなってゆく。

龍夜と灯駈は体内の気を高め。  
雪杜と芳鈴が術式を構成する。

静かな、無音の暴風雨のなか。

雲がかかったのか。  
月明かりが、消えた。

瞬間。

雪杜と龍夜はそれぞれ芳鈴と灯駈を抱え、大きく飛びすさった。  
それを追うように空間が歪み、音を奏でる。

あ；l s k d f j ヴォイス r ンて q @ 5 3 m ヴェ r w k t v あい  
l じゃ w 0 9 1 ^ 9 ! ! ! ! !

「精霊符・断空異識！」  
脳髓をかき回されるような音。しゃがみこみそれをとっさの術式  
で遮断する。

しかし。

「佐々森、結界を最小範囲で防御！！」

「了………解つ！！」

未だ異音の影響で顔をしかめていた芳鈴だが反応は早かった。何も  
無い空間から硝子の鈴を取り出し、二度、振る。

無音が広がり、雪杜の術式の内側を防御の精霊が満たす。

それを、覆うように、叩くように。

まるで樹の枝のような、無数の黒い鋭いものが弾丸のような速度で突き立つ。

「……なんなの、これ？」

「さて、ここの暗いとなんともね。けど……」

その視線が上へと向かう。

闇の中、目を凝らす。

気のせいでなければ、その視界いっぱい、うごめく黒い何かがあるようにも見える。

その雪杜の視線に気づいた芳鈴も、息を飲んで同じようにそれを見た。

やがて、黒の奔流が止まる。

ふたり同時に結界を解除し、立ち上がる。

辺りはまるで、黒い木の密集した森のようになっていた。黒い木々はどこか生物的な文様を浮かべており、不気味に鼓動している。

恐る恐る、芳鈴がそれに手を伸ばす。

「やめたほうがいい」

その手首を、雪杜が掴んだ。

「これ、気配は薄いけどレギオンだよ。何がおきるかわからない」

「え？」

「これが？」

言われてみれば、ほんのかすかにだがレギオンの気配を感じる。

しかしレギオンとして存在する事さえ難しいほどの密度の負の精霊しか感じ無い。

「……今日は訳のわからない事ばかりね」

「まったくだ」

油断無く辺りを見回しながら肩をすくめる。

「よう、生きてたか」

「ああその声は君か。君も無事だった　何してんだ東雲」

「？　何って何が」

頭上から降ってきた声に従って上を見上げた雪杜の視界には、龍夜と灯駟の姿があった。それは問題ない。問題なのは、ふたりの体勢だ。

なぜか龍夜は自分のコートの内側に抱え込むようにして灯駟を抱き抱えていた。場所が場所なら恋人が熱い抱擁を交わしているようにさえ見えるだろう。

月明かりさえない上に距離があるが、それでも灯駟が顔を真赤にしている事はわかった。

龍夜が足場に使っていたレギオン樹から飛び降りる。

「足場にして平気なのかい、それは？」

「一応足の裏に結界張ってたから平気だよ」

「それにしても、一体どうやって君たちは身を守ったんだい？　音を術式で遮断したら結界は張れないだろうに」

「うん？　いや、そうでもねえよ。コートに自動発動の防御術式をしこんでるからな。俺は音を遮断して、あとはコートの術式で身を守ってた。まあそうはいつてもまともにはぶつかればただじゃすまねえから、可能なかぎり避けてたけどな」

「避け……」

龍夜の言葉に絶句する。

なんだそれは。人間のやることなのか。いくら各種自動発動の術式があるからといって、あの速度の攻撃を少女ひとりをかばいながら避け続けるなど。そもそも自動発動の術式は便利な代わりに融通が効かないし燃費も相当に悪い。



強化系術式を使いつぱなしの身でよくもまあそんな無茶ができる  
と感心を通り越して呆れる思いだった。

「あのさ」

そんな空気を破ったのは、灯駈だった。

「いい加減、離して欲しいんだけど」

「ああ、悪かったな」

コートからいそいそと出てくる灯駈。誰とも視線を合わせようと  
はしない。

「……なにしてたんだ、お前？」

「なんでもないわよっ！……っ」

何も理解していない龍夜の言葉に噛み付くが、視線を合わせてし  
まい言葉を飲み込む。

「うっうっうっ、そ、そんなことより!!」

耳まで真っ赤にしてしまう。なんとというか、芳鈴はそんな灯駈を  
見て哀れに思うと同時に、持ち帰れないかなこの生き物、などと場違  
いなことを考えていた。

「この状況、一体何なの？いきなりこんな事になって正直わけわ  
からないんだけど」

「これ、なあ？」

龍夜もあたりを見回す。その声にも隠しようのない困惑が滲んで  
いた。

「相変わらず、気配は薄く広く　というより、この薄さはもはや  
大天使級ですらねえな。それでいて規模は権天使級以上、と。何が  
どうなってるんだろうな、これ」

なあ、と雪杜たちに視線を送る。当然、雪杜達も答えられない。

「もう……こんなんじゃ智晴がいつになったら見つかるのか」

「まあそうなんだけど……いやまてよ。今ならいけるんじゃないかねえのか」

「いけるって、何が？」

「葛籠。お前探査術式で人間探せねえか。よくわからんが、これだけレギオンの気配が薄ければ邪魔されることもないだろ」

「それは試してみないことにはなんとも言えないよ。とはいえやってみるだけの価値はありそうだね」

首を傾げる灯駈に芳鈴が説明する。

「つまりね、術式で人探しをしようって事よ。最初からそれができればよかったんだけど、レギオンの影響が強い場所だと探査系の術式はまともに動かないの。けど今はなぜかその気配が弱まっているからもしかしたら、ってこと」

「はあ……なるほど」

「お前も戦って分かったと思うが、レギオンの気配ってのは結局何百人分の人間の感情の寄せ集めだからな。人間を探す術式を使っても訳のわからねえことになるんだよ」

人ごみの中で一人一人を探すのおんなじことだ、と肩をすくめる。とりあえずそういうものか、と理解しておいた。

雪杜が足元の石を拾い上げ、短剣で砕く。砕いた意志は光になってふわりと空中に溶け消えた。

灯駈には何か広がっていく感覚だけが感じられた。それだけでも、相当な感度と才能であるのだが。

瞳を閉じ、術式を広げていく雪杜。

しばらくしてその瞳がひらく。剣呑な光を宿して。

「……どうした」

「なにかある……いや、ないのか？　しかしこの状況でこの現象は説明が……」

「おい、どうしたんだ？」

龍夜に問われた雪杜はやや戸惑いながらも、斜め上方を指で指し示した。

三人の視線がその先を追う。その先で、雲が晴れていき、ゆっくりと月明かりが差し込んできた。

そして、頭になったのは。

「う……」

灯駟が悲鳴を飲み込む。

芳鈴も嫌悪に顔をしかめた。

黒い、天井まで届く巨大な漆黒の樹。

幹の太さは四人が手をつないでも半分にも満たないほどに巨大で、しっかりと床に根をはっている。

しかしただの樹ではない。まるで人間の臓腑をより集めて重ねてかき混ぜたような、醜悪な外見をしている。

その表面を巨大な血管のような管がビッシリと覆い、他のレギオン樹同様わずかに脈動していた。

「……あれだけの巨体で、レギオンの気配が薄い。どういう事だ？ いや、それよりも、お前は何を感じたんだ、あいつから」

「うん。あの巨体。あの真ん中と、一番上にそれぞれ違う反応があった。」

真ん中にあるのは、凝縮された負の精霊の気配と、それと混ざり合うように人間の気配が。そして 上の方からは、何も感じなかった」

「何も、感じない？」

「そうだよ。人間の気配どころか、レギオンの内部であるというの

にその反応すら皆無だった。いや、こちらの探査精霊が受け付けない、というのが正しいのかな？ とにかくおかしい状況になってる」「ほっ」

龍夜はざっとレギオン大樹の全体を見る。

上か、中央か。

可能性として高いのは人間の気配があるという中央だろうが、しかし負の精霊の気配が凝縮されているというのが気がりでもある。あるいは先程までの濃密な気配の全てがそこに集まっているのだとすれば、一緒にいる人間はとうに発狂しておかしくはない。

それでは、呪いの条件に反する。

智晴に呪いがかかっている以上心身ともに致命的な状態になっていることはないはずだ。

呪いが発動していることは、感覚的にわかる。

故に龍夜が選択肢たのは。

「上にするか」

「簡単に決めたね」

「悩んで正解がでるか？」

雪杜はレギオン大樹を見上げ。

は、と鼻で笑った。

「それで、どういう作戦で？」

「相手が何を仕掛けてくるか何も分からん。である以上、電光石火の先制で一気に攻めるしかない。

葛籠。対象の詳細な場所を教える。探査できない位置、深さ、範囲。

四条式と佐々森は万が一に備えてこの場で待機。葛籠は加速術式

を三倍がけ」

「三倍？ 体が碎けるんじゃないのかい？」

「俺を何だと思ってんだ」

なるほど、と頷いた雪杜は、早速術式の構成にとりかかる。

灯駈と芳鈴は指示のとおり、ふたりからやや後ろに下がる。

龍夜は。

示された一点をまっすぐに見つめ。

刀を抜き、己の影に突き立てた。

「龍影影装 漆黒騎士・刃牙！」

言葉と同時に、その影がぶわっと膨らみ、龍の頭となってその姿を飲み込んだ。

「んなっ?!」

灯駈が息を飲む。

しかし次の瞬間、全身に叩きつけるような大量の精霊と気が放出された。

龍が形をなくし、渦を巻き、凝縮され、ひとつの形を取る。

最後に残ったのは夜色の鎧。龍頭をかたどった兜と、龍を想起させる全身の意匠。

漆黒騎士・刃牙。

刃牙が腰を落とす。  
雪杜が術式を発動する。  
瞬間。

影も残さず疾走した刃牙の姿を追うことができたのは、灯駟だけだった。

「……なに、あれ」

「あれは『騎士鎧』っていつてね。あれも精霊術　魔法のひとつの形よ。あれを使う魔法使いを、騎士って呼ぶの」

「まあ彼の場合、騎士っていう言葉に何かしら思い入れがある節が感じられるけどね」

「騎士……」

灯駟は呆然と、高速で駆け抜ける龍夜を視線で追いながら、その言葉を呟いた。

龍夜は、レギオン樹を足場に一気にレギオン大樹に接近する。黒い疾風は一切の躊躇を置き去りに、瞬きする間に大樹に肉薄していた。

気を受けて輝く星震天穿牙を鞘から抜き放つ。

跳躍から、その勢いのままに突き。

巨大な敵意に反応したレギオン大樹だったが、その速度の前には反応を行動に移す暇もない。

雪杜の示したポイントに寸分変わらず刃が突き立つ。

「ほづ……確かにこの奥、精霊を感じないな。龍夜、しくじるなよ？」

「誰にモノを言っている！」

突き立てた刃に捕まり、大樹の幹に取り付く。そのまま大量の気を星震天穿牙に注ぎこむ。

「神浄四相流・一伎型 龍咆」

解放された気が表面を爆破、破壊する。

素早く開いた穴から中にはいった刃牙は、そこに広がる空洞に僅かな驚きを見せた。

そして、その最奥。  
そこには。

「いたか、湊！」

気を失い力なく横たわる智晴がいた。

「脈は よし、問題ないな。呼吸もしっかりしている。精霊も異常はない。じゃあこの空間は一体……」

「ふむ。刃牙、そいつのポケットを調べてみる。そこから何か感じる いや、何も感じない」

刃牙は言われたとおり、ポケットの中を探る。と、そこから出てきたのはひとつのプレスレットだった。

色は黒く、表面に何かの意匠が施してある。

「ああ、そいつだ。ふむ、なるほど……」  
「サマエル？」

ふわり、と刃牙の中から黒い球体が浮かび上がった。

「そいつだ。そいつには何も……一切の精霊を感じない。なるほど害はないが、レギオンがうかつに触れたりすれば、コイツの中に取り込まれるだろうな」

「つまり湊が無事だったのは」

「こいつが原因だろう。低位のレギオンならば、こいつを取り込もうとした瞬間に逆に腕輪に取り込まれるだろうしな。確かに珍品ではあるが危険なものではない。持っておいて害はないだろうが、むしろ今回は幸運だったところか。ふむ、やっぱこれもテメエの呪いの効果か」

「だろうな。そうはいはい転がってるシロモノでもないだろうし」

どこでこんな珍しいものを手に入れたのか気になりはしたが、それは後回しだ。

ブレスレットを肌から離したおかげで、周囲のレギオンが活性化し始めている。

再び智晴のポケットにブレスレットを戻すと、その体を抱え上げた。

「さて、面倒になる前に一旦退く」

「それがいいだろ。目的の七割はこれで達成だ。あとは、この大樹をどうやって片付けるか、だな」

「それが一番面倒なんだけどな」

刃牙は息をついて、空洞から外に飛び出した。

瞬間。

「せ、げげげきぞへらやうあ、げびびびびだらせぐ、ううううー！

！ー！」



大樹が唐突に活性化し始めた。  
着地し、全速力で雪柱たちのもとへと戻る。  
ものの数秒で三人の元へとたどり着いた。

「智晴！」

最初に駆け寄ってきたのは灯駈だった。

「智晴！ 大丈夫なの?!」

「問題ない。意識は失っているが、外傷も、内蔵も怪我はない。精霊の流れにも乱れはないし、むしろここにいる誰よりも健康体だ」  
龍夜が下ろした智晴の体を抱きしめて、うつすらと涙を浮かべる灯駈。

「そう、よかった……ありがとう。本当に」

灯駈のまっすぐな視線に刃牙はたじろいだ。

「……別に、そういうのが俺たちの役割だからな。気にするな」  
そう言って、着装を解く。

「それよりお前はコイツをつれて下がってる。何か嫌な感じがする」  
言い放ち、龍夜はレギオン大樹を見上げた。

そのうちに、大樹の表面の脈動が激しくなり、周囲のレギオン樹もにわかにはざわめき始めた。

「たしかに、よくない感じだ。けどそれだと、彼女たちを離すのは逆に危険なんじゃないかな？」

「……どうだかな。それでこっちが身動きを取れなくなってジリ貧になれば、結局は同じだと思うが。」

けどまあ見えないところに行かれるよりは安全、か……。

悪い、さっきのは撤回だ。なるべく傍を離れるな。何が起るか  
はわからんが、何にでも対処しなきゃならん。こっから先は黙って

従ってくれ」

灯駈は神妙な顔で頷いた。状況を冷静に受け止めているのだろう。「わかったわ。でも、約束して。智晴は何がなんでも守るって」  
強い光。その瞳を真正面から受け止めて、龍夜も頷き返した。

「わかっているよ。お前らは守る。何に代えてもな」  
刀を抜く。

周囲の精霊がざわめく。

「俺は騎士だ。例え鎧が半端でもな。俺がそう決めた。なら、俺が  
そうである理由を為すだけだ」

威嚇するように、龍夜の気が高まる。

雪杜と芳鈴も術式を練り上げる。

灯駈はわずかに息を吐き、龍夜から託された智晴を背負う。

その重み、命の重さに心臓が縛り付けられるような痛みを覚えた  
が、歯を食いしばった。

極限まで意識を尖らせる。せめて己の守れるものを守るために。  
きつと。

目の前の三人は、それよりもずっと重いものを抱えているから。  
それを、なんとなく悟っていたから。

だからせめて、この手にあるものだけは、と。

故に。

その一撃に反応できたのは、奇跡ではなかった。

全身を刺すような悪寒が走り、ただ反射的にとっさに灯駈はその  
場から退いた。

次の瞬間、地面から無数の触手が飛び出していた。先程まで灯駈  
のいた位置　正確には、背負う智晴を狙っていた。

「まさか　湊を取り返すつもりか?!」

現れた触手を斬り捨てながら龍夜が驚愕を声に出す。

智晴のポケットには相変わらずブレスレットを忍ばせている。例え捕まえたところで下手に手出しはできない。それでもなお捕らえようとするのは？

いや、それを言うのならそもそもレギオンが人を拘束し監禁する、という事自体がおかしな話だ。それも気まぐれや衝動ではない。明確な目的を持っている。

「なんの為だかしらねえが」

刃を寝かせた刀を突き型の型で構える。

「飛べ、四条式!!」

「え、えええ?! ちょ、まっ!」

待たない。

そんな暇はない。

龍夜はそれを行動で語る。

「龍咆」

刃先が大地に触れた瞬間、刀を通して大量の気を放出する。

地中で膨張した気が、灯駈の足元の地面を砕いた。慌てて飛び跳ねた灯駈だが、ひとりを抱えて普通通りに飛べるはずもなく、爆風に煽られバランスを崩す。

その彼女たちを、黒衣が包んだ。術式の影響を遮断し、飛び散る礫を弾き返す、龍夜のコート。

包まれたまま、灯駈は地面に着地した。バランスを崩さなかったのは日頃の訓練の賜物だろう。

「い、いきなりなにをするのよ!」  
「足元の掃除だよ。見てみる。レギオン共の残りカスが、こんなに溢れていやがる」

龍夜の言葉のとおり、割れた地面からは黒い霧が昇っていた。さつと顔色を変え息を飲む。

「とにかく、そいつにくるまってポケットの札を定期的に新しいのに変えながら握ってる。ひとまずは、それで安全な筈だ」

「……どうするつもりなの?」

「あの樹をぶった切る。それしかないだろうな」

「まあ、根っこを張り巡らされているとしたら何処へ逃げても無駄だろうね。背中を見せたと思ったら足元からグサリなんて、笑い話にもならないよ」

男ふたりで暗い笑みを浮かべあう。

「あんたらね……笑ってる場合じゃないでしょ。レギオンも、この娘たちも、あたしたちの力じゃ手に余ってるでしょ」

その言葉に、龍夜は雪杜に、雪杜は龍夜に、冷たい視線を向ける。

「だ、そうだが。お前はどうかんだ?」

「……そうだねえ。僕らの身の安全を保証しなくていいのなら殲滅可能だよ。断言してもいい。間違いなくこの中の何人かは死ぬけどね。」

で、君は?」

「全力が出せれば、まあ不可能ではないかも知れない、ってところか。その全力を出す事ができないから問題なんだが」

「へえ、なんで?」

「体質的な問題でな」

互いに探るような、挑発的な視線をぶつけあう。  
ある意味レギオンよりも心臓に悪い空間がみるみるうちに広がっていく。

「……なんか、一気に空気が重くなった感じがしますけど」  
「うん、ごめん。あたしも思い切り間違った気がする」  
「あの……みんな仲間とかじゃ……ないんですか？」  
「仲間……じゃ、ないわねえ、困ったことに」

しかも誰ひとりとして、である。

各々が各々の思想と目的に基づいてたまたま同じ方向へ足を進めているだけであって、互いに手を取り合い庇い合うような間柄ではない。

それどころか、自分の命を守るために相手を平気で盾にするような関係だ。

今すぐ殺し合いを始めるほど殺伐とはしていないが、お互いに肩を組むような和やかでもない。芳鈴は思う。なにこれ滅茶苦茶面倒なんだけど。

今更だった。

そもそも、自分と雪杜の関係からして面倒この上ないのに、このふたり　今は三人も増えたのだから、それが面倒でなくてなんなのだ、という話だ。

「先輩、なんか喉の奥に棒でも詰まってるみたいな顔になってますけど」

「や、それどんな顔よ」

「いえなんとなく棒が喉に詰まってたらそんな表情しそうだなあと  
思っています。」

というか素人が言うのも何ですけどいいんですかあれ放っておい

て。なんかあの樹放ってここで戦争始めそうなんですが」

そんな灯駈の不安を、芳鈴は苦笑と共に一蹴した。

「……平気よ」

しかし横目に見たその瞳には、名状しがたい感情が見え隠れしている。

「雪杜はともかく、あの漆黒騎士の事なんてよく知らないけど……

あのふたり、なんだかんだで似てるから」

「似て……ますかね？」

灯駈の印象では、雪杜は理性に重きを置き、龍夜は感情を燃料に動いているように見えた。

「似てるわよ……忌々しいくらいに」

「え？」

後半の言葉は聞き取れず……しかし返した疑問に答えはなかった。

そんな暇はなかった。

「四条式！」

「え？」

眼前。

何も無いところ。

そこから、黒い靄が形を取り、節くれだった鋭い枝のようなそれが、なんの前触れもなく伸びる。

そして。

ぱっ。

と、赤いものが散り。

鉄の匂いが広がる。

熱いものを感じた。身を守るために反射的に差し出した、右の手

のひら。

べつとりと。

熱く。重く。

「く……はっ……」

声が漏れる。自分の目の前、庇うように立った背中から、苦しげな声が。

ずるりと、指先に触れる程度だったレギオン樹の枝が、背中の方こう側に引きぬかれた。

ぐらりと体が傾ぐ。それを支えようと、伸ばした手をそのまま、足を踏み出し。

倒れてきた、龍夜の背中を受け止め。

「あ……」

その手を、後ろに回された手が掴んだ。

しっかりとした、力強い手。

「東雲！」

雪杜の術式が、二人の周りに現れた黒い靄をなぎ払う。龍夜は刀をたて、膝を付いて、灯駈をかばい貫かれた脇腹を手のひらで抑える。

その上から、赤黒い液体が溢れて零れた。

「あ、ごめ、その」

何かを言わなければ。そう思うものの、思考は空白で言葉は滑り

意志が拡散し心が軋む。言葉が出ない。

そんな灯駈に、龍夜は強いて笑ってみせた。とはいえ、かなり苦しげな、歪んだ笑みだったが。

「問題ねえよ。このくらい、いつものことだ」

「で、でもこのコートがあれば、そんな傷……」

「いやいや、コート着てたって普段は前開けてるし。意味ねえし……」

「……」  
「けほ、と軽く咳をする。」

「今のはまあ、自業自得だしな」

「自業自得って……それを言うなら私の方が……」

「アホ言ってる素人。プロの俺たちが守るのも、それで馬鹿みるのも、俺達の責任だ。勝手に人の仕事取ってんじゃねえ」

手早くズボンのポケットから取り出した符を傷口に貼りつける動きによどみはない。事bのとおり、いつものことなのだろう。

灯駈にとってはそうでないのだとしても、そういう日々を生きてきたことは、用意に想像できた。

ああ、こいつは。

生きるルールが違うんだと、そう感じた。

「しかし厄介だな。この空間に充満した負の精霊そのものが、ヤツの武器になるってのか」

「それでも収束には時間がかかっていたから、気をつけていれば同じ手は食わずに済むと思うよ。とはいえ、厄介な相手であることに代わりはないか。」

どうも搦め手で小出しにしている印象がある。これ以上手札を切られる前に手を打たないと」

龍夜はしばし考え。



「……葛籠、お前が感じたって言う、もうひとつの気配。そっちに何かがある可能性は？」

「そうだねえ。正直、畏じゃなかったらバカバカしいくらいにあからさまなんだけど」

考え込む雪杜。

一つ一つの情報を、状況を精査し、この状況を整理しているのだ。「なんというか、この『仕立て上げられた』状況からして、そこに<権天使級>等と同等に『核』がある、というのは、物語としてはありじゃないかと思う」

「同感だ。この状況を仕組んだヤツは相当性格が歪んでるんだろうな」

吐き出されたため息は深く。

無理に押し隠した苦痛が見え隠れして、灯駈の胸を絞めつけた。

「もう一度、俺が突っ込む。お前らは後から周りに注意しながら追ってきてくれ。」

何かあるのかを確かめて　それが『ご都合主義』なものであるのなら、一点集中で火力を叩き込む。それでこの空洞が崩れる可能性は？」

「そこは僕らの　　というか、僕の調整次第だろうけど。まあ、気をつけるよ」

「いや、気を付けなくていい。これ以上面倒な手を打たれるよりは、さっさと片付けて脱出に神経を使った方がまだ。」

このやり方なら最悪、いきなり全体が崩落するってこともないだろうし、多少は生き埋めになるにせよ調整は聞くだろ。

生き埋めになったとして問題なく脱出できるな？」

「結界でみを守ってれば、あとは術式で上に乗っかってきた土砂をどけるだけでしょ？」

きついけど、それに最初から集中できるならやってみせるわ」

「つつことだ。四条式、お前はそいつを守ることに全神経を使え。俺達じゃあ最低限の防御しかしてやれない。」

このふたりと一緒に結界の中に入れば滅多なことはないだろうが、それでもどんな変則手が出てくるか分かったもんじゃないからな。

最悪、このふたりと俺を盾に使ってでも生き残れ」

「そんな事できるわけ……!!」

「やるんだよ。お前がやらなけりゃ、誰も湊を守れない。だから、お前がやるんだ。覚悟を決める。生きて帰る覚悟を」

「覚悟……」

意地汚く、往生際悪く。

何でもやってみせると。そう言っている。

それはきつと必要な覚悟。ここから智晴と生きて帰り、またいつもの日常に戻るための必須条件。

しかし。

「嫌だ」

「……お前」

「誰かに覚悟を強要されたくない。誰かに生き方を定められたくない。覚悟は決める。でもそれは、あなたの言うような覚悟じゃない。それじゃあだめ！」

あたしは、湊智晴の親友なんだから。

湊智晴の親友に必要な覚悟は、そんな覚悟じゃないわ」

必死だった。

絶対イヤだと思った。

ただ守られるだけの女であることは我慢ならなかった。

戦えないのは仕方ない。

しかし。

抗うことまで奪われるいわれはない。

「智晴は絶対に守るわ。あたしも自分を守る。だけど、そのためにあなた達を差し出すようなマネは絶対にイヤ。」

自分にできないことを、あたしに強要しないで」

明確な拒絶の言葉に龍夜は何か反論しようとして口を開きかけたが、雪杜がそれを遮った。

「はいはい。言い合いはここまでだよ。またさっきみたいに不意を突かれたら怖いからね。」

東雲、君の負けだ。いや、時間をかければ説得はできないとは思わないけれど、そうしているうちに僕らの生存率は下がっていく可能性があるんだ。

今、僕らは動かなければならない。

彼女が自分の命に責任を持つと自分から言ったんだ。ここは、僕らも妥協しよう」

「それでこいつに何かあったらどうするんだ」

「それこそ『覚悟を決める』ってことさ」

自分の言葉を返され、口ごもる龍夜。

結局何も言い返せなかった。

それに、灯駆はほっと息をついた。

そうして、運命のその時がやってくる。

龍夜はゆっくりと、月影に照らされてできた己の影に刀を突き立てた。

こっそり、後ろを振り返る。

心配そうに、灯駈が見ていた。

「……やり辛え」

「あきらめろ。そういうヤツなんだろうさ。ははは、いやあ、素直なイイコじゃねえか。出会った頃のためえを思い出させるぜ。」

……あん？ ってことは、あの嬢ちゃんもこんなふうになるのか？  
おいおい時間ってのは残酷だなあ」

「超絶うるせえよ」

サマエルの軽口に軽口で答え。

「神浄四相流・一伎型 髑髏墮し」

刀を深く突き入れた、次の瞬間。

その姿は大きく空中へと飛んでいた。

髑髏墮し。術式を使うことを前提とした、一伎型の中でも異色の技。

術式を併用することで破壊力を増す籠轍とは違い、そもそも術式がなければ技として成立しないのだ。使用する術式はふたつで、共に補助術式。

まず、今使用した短距離転移術式。  
そして。

「髑髏墮し 皮」

きし、と錆びた音を立てて、龍夜の姿がブレる。  
踏み出した先の空中が黒く蜘蛛の巣のようなひび割れを生む。  
まるで壊れたビデオテープを再生するように出現と消失を繰り返しながら、空を渡り、レギオン大樹の頂点、その付近に一瞬で迫る。  
髑體墮しに必要なもうひとつの術式、空間歪曲術式。

転移術式により、障害物のない短距離を瞬時に移動し。  
空間歪曲術式により、障害物を無視した中距離を渡る。

強襲暗殺不意打ち騙し。兎にも角にも一も二もなく四の五の言わず、相手の裏をかき、こちらの動きを悟らせず、一方的に対象を効率的に抹殺するためだけに作られた技。  
故に。

「おおおおおっ！！」

裂帛の気合。刀には最低限の気しか載せず、精霊の一切は纏わな  
い。

純然たる斬撃。咆哮と共に繰り出される刃は滑るように鮮やかに、  
天井に繋がるレギオン大樹の幹を断ち切った。

「ぎ、し。せれざ　　！！」

大樹がざわめく。

その時には既に、龍夜の姿は今度は根本にあった。

「髑體墮し　　臓」

連続で転移を繰り返しながら無数に刀を突き入れる。  
「ぎぜべがれげげがぜ！！」

無数の枝が、根が、大地から、空間から湧き出る。黒い壁となつて迫り来るそれを、龍夜は正面から回避せずただ通り過ぎる。その体に無数の傷が走り赤い筋が走るも、ひとつとして致命となるようなものはない。

歪曲術式で相手の進行をねじ曲げたのだ。

「髑髏墮し 骨」

刀を鞘に収める。

拳を幹に触れるか触れないかの距離にぴたりと止めた。そして一瞬の静寂の後 バチン、とゴムが切れるような音と共に、弾けるようにその拳が引かれる。

ごん、とトラック同士が衝突したかのような音が破裂し、大樹が震えた。

無数の突きにより細かく断ち切られていた側とはちょうど反対側から加えられた圧力に、断面が広がり、ぶちぶちと繊維が千切れ、大樹が傾ぐ。それで倒れるほどではないが、確かにバランスを崩した。

そして。

短距離転移。

雪杜の示した凝縮された悪意。大樹の中央のその場所へ飛ぶ。ふわり、と重力が消え、一瞬の後に体がその重さを取り戻す。

眼前には激しく脈動する黒い幹。明らかに他の箇所とは違う冷たい熱量が凝縮されたその場所に向けて。

「髑髏墮し 頸」

鞘に収めた刀を腰に添え、安定しないはずの自由落下であるにも

関わらず、神速の居合。

体のひねりと腕の力。それだけで放たれた完成形には程遠い、荒い斬撃。故に。

「ぎひ、えいしぜー！」

無駄な破壊の余波が広がり、幹に大穴を開ける。

短距離転移で、開いた穴へと降り立った。

ざわりと、全身を悪意が舐める。

「けほ、けほ……………ここ、か？」

髑髏墮しの発動中は最低限の強化術式しか使えない。そのため、他のどの技よりも使用した反作用が肉体に強く返ってくる。

龍夜の肉体は限界以上の酷使で全身が悲鳴を上げていた。

「だろおな。は、なるほど、こいつは驚きだよ。」

このレギオンは確かに、実体化している部分で言えば大天使級が正しいところだ。

だが支配している負の精霊の量で言えば、立派なく権天使級。

くくく、まったく、悪趣味なトリックを生み出したもんだぜ」

「なるほど。この息苦しさはそのせいか。」

…………レギオン内部に空洞を作り、他のレギオンが発生しない状況を作り、それを自らの力として取り込まず、失った力の補填として使用する。

理屈はわかるが、判るだけに意味がわからん。なぜそんな事をする。なぜそんなモノを作った。

本当に、アレックス・キングの仕業なのかこいつは。これが人間にできることなのか？」

「こほ、こほ、と咳を繰り返しながら、広がる空洞の奥へ進む。

とはいえ、さすがにそれほどの広さがあるわけではない。

すぐに、それは見えてきた。

それは。

醜悪なオブジェだった。

腐れ切った枝が絡み合い、血管のような管を浮かべ、脈打つ。たまに噴き出す粘りのつよい液体が、ゆっくりと床の上に滑り落ちてゆく。

薄ぼんやりと発光する膜には、嫌悪を誘う突起がうごめいていた。形は、地面から生えた無花果の実。その表面は先にも示したとおり、薄い光を透かす膜になっている。

その中には、おそらく、この奇妙なレギオンが大量の精霊をを統括するための、核が存在した。

やはりただの<大天使級>などではなかったのだ。核が存在するなど、それほど精霊の密度など、理論上ありえないのだから。

それを可能にしたのは、その核の特殊性だろう。つまりところ。

レギオンの保有する精霊の密度は低く保ったまま、高密度の精霊を集積しなくては存在し得ない核を持つ方法。

それは。

「……………クソが」

龍夜が吐き捨て。

「生きた人間を、そのまま核に転用したわけか。はあん、おいおい、考えたヤツ、人間やってねえな」

サマエルが冷たく揶揄する。

皮膚の中、黒く濁った羊水に浮かぶ、龍夜の半分程の大きさの、人間。

子どもではない。成人した男性だ。顔つきを見ればよくわかる。おそらく、三十から四十といったところだろう。



四肢が欠損している。具体的には右足と左手。溶けていた。

どろりと。骨まで溶けている。

今この瞬間も、肉体が先端から、ゆっくりと融けている。

頭蓋は半分ほど割れ、中身が見えていた。

そんな状態にあつてなお、呼吸はある。ぎよろりと落ち窪んだ目がこちらを見ていた。

恐怖に染まった瞳。

絶望に眩んだ目。

羊水が、わずかに黒ずむ。彼の感情に反応して、精霊が活性化する。

そして、萎む。

男の輪郭が、僅かに萎む。

そして絶望はより深くなる。

「これが……核か」

「ああ。これが核だ。お前の斬るべきものだ」

倒すべきは。

救われるべき、哀れな犠牲者だった。

「あ……あ、ああ……」

羊水の中の男が口を開き、ごぼり、と、泡が立つ。

不思議と声が聞こえたが、そういうものなのだろう。

かすれた声に力はない。今にも消えてしまいそうな声。もはや最後の輝きを放つ力もないろうそくの炎。

「た、す……け……」

龍夜は眼を閉じる。

男は完全にレギオンとどうかはしていない。むしろ、完全に分離している。

しかし。

既に男を生かしているのも、このレギオン大樹になってしまっている。

おそらく、この実から引きずり出せば、その瞬間に男の運命は決する。いや、おそらくではない。間違いなく。

「……助けることは、できない」

だから告げた。事実をありのまま。

男の瞳が見開かれる。諦めに濁る。

羊水がうごめき、深く黒ずんでゆく。男の絶望を。感情を。喰らい、貪りつくそうと。

「だが終わらせることはできる」

腰を落とし、刀を構える。

「そして、そこにあなたの希望も願いも感情も関係はない。俺はただ、それをしに来ただけだから」

龍夜の目的はただひとつ。

このレギオン大樹の討伐。

そして、外にいる灯駈と智晴を守ること。

そのために。

己の目的のために。

「同情はする。容赦はしない。」

存分に怨み、存分に呪ってくれ」

「……あ、あ……………ああ……………」

刀を抜き、くるりと手の中で遊ぶように回して。

「神淨四相流・一伎型　髑體墮し」

ぴたりと止まった刃を皮膜に当てる。

わずかに沈む感触に、腐肉を突くようなおぞましい感触に顔色ひとつ変えず。

「　魂　」

するりと、刃が黒い実に潜り込んだ。

まるで鍵穴に鍵を差し込むように。

パズルのピースをはめ込むように。

そうあるのが当然、というように。

抵抗なく突き入れられた刃が、男の心臓を貫いた。

「　　ああ　」

恐怖が。

絶望が。

揺らぎ。

消える。

決定的で確定的な死に。

「　　ありがとう　」

それが幻聴だったのか、確かに聞こえたものだったのか。

音もなく刀を引き、僅かの水滴さえ付いていない刀を鞘に収めた龍夜。その目の前の実の中には、人がいたという痕跡は何一つ残っていないかった。

やがて中からドロリとした液体を吐き出し、萎んでゆく。それを静かに見下して。

「……………、……………うぜえ」

俯いて、何かに耐えるように呟いた。

沈黙が場を埋める。

そして。

「浸ってるトコ悪いんだがな龍夜。どうも、良くない状況だぜ」

「なに？」

「核を潰せばレギオンは倒せる。まあそりゃあそうなんだが、こいつは所謂イレギュラーってやつだ。

核を持ったく大天使級> すなわち、大量の精霊を制御する術をこの核に頼っていたってことになる。

「で、今そいつが失われたわけだが……………」

「っ!!」

走り出す。

「サマエル、ぶち抜け」

「任せなあっ!!」

応答と同時に、集結した精霊が槍のような鋭さで壁に巨大な穴をあける。

衝撃も収まらないまま、龍夜はその穴から外に出た。

着地し、ちらりとレギオン大樹を見上げると、その輪郭がわずかに揺らいでいた。

揺らいで、傾いでいた。

輪郭が今にも形を失おうとしているのが判る。

ざっと、レギオン樹の森に視線を走らせる。

こちらにも、揺らぎが始まっている。

そこかしこの空間から、黒いものが滲み出すように溢れ出すように、ぐずり、と音を立てて這い出してきた。

「……<天使級>でさえない、レギオンの成り損ないか」

「所謂<細胞>状態だな。はははあ、レア度としちゃあく熾天使級>と同レベルじゃねえか。」

よかつたなあ龍夜、最悪じゃん」

「まったくもってその通りだよなっ！」

身体強化の符を起動。一気に四人の元へと走る。

途中、半分溶けたような、人から外れたというより外れた上で崩れた造形をしたレギオンを数体斬り捨てる。

手心えの無さに顔をしかめた。まるで、泥を斬っているような手応え。

やはり、組成が荒い。

視界に映る範囲にはもはや四肢を形として持っているものさえなく、アメーバ状のものに突起が無数に生えた物や蛭に口と鋭い牙が備わっただけのものなど、造形の荒いレギオンの成り損ないが発生している。

四人の元へ戻る頃には、すでにその場の全員が、状況の変容を認識していた。せざるを得ない状況だった。

「東雲！ この状況は一体？」

「核は潰した。こいつらはもはや統制の取れていない負の精霊と同じだ。ある程度ダメージを与えて放っておけば勝手に消えて行く。」

ひとまず全力で逃げ

ぞくり、と。

全身をナメクジが這い回るような悪寒が走る。

「四条式！ 動くな！！」

智晴と共に龍夜のコートにくるまったまま、反射的に守りの構えに入ろうとした灯駈を言葉で止め。

滑るような動きで灯駈と智晴、ふたりの前に飛び出す。

ぷちぷち、と気泡が弾けるような音が四人を囲んで溢れ出し、天井から緞帳を下ろすように、分厚い黒い帯状のものが降り注ぐ。

もはや余裕はない。猶予もない。

龍夜は。

偽ることを、隠すことを放棄する。選択する。決断する。

「神浄四相流・一伎型

「え？」

己の正面から聞こえた言葉に、灯駈が疑問の声を漏らした。

「蛮王禍！」

ずん、と足を開いて腰を落とし、地に足を縫いつけるように立つ。全身の気を右腕一本に集約し、荒々しく渦を巻くそれを刀に巻きつけ。

ぶっん、と。

洗練されていない、ただ大きく振りかぶり、振り抜く。それだけ。それだけで。

落下してきた黒い緞帳を正面から、叩き潰した。

ひしゃげ、歪み、砕け、割れ、千切れ、弾ける。

凶悪。凶暴。乱暴。乱雑。粗雑。粗野。

そう言った言葉をひとまとめにして放ったかのようなただ力任せの一撃。それは野蛮ながら絶対の王者。その制裁さながらに全てをなぎ払う。

王者はさらに、二度、三度と刃を振るう。

それと共に、天井の、そして、空間からにじみだしていたレギオンたちを尽く消し去った。

「……………う、わ、あ」

灯駈の口から感心とも呆れとも取れる声が漏れる。

怪獣映画さながらの光景に開いた口がふさがらないといった様子だ。

「て、いつか今、四相流って……………」

覚えの有り過ぎる単語がなぜ龍夜の口から聞こえたのか。その疑問を投げかける間もなく、灯駈はその場を大きく飛び、龍夜の傍に着地した。

同時に龍夜が振るった刀から放たれた気弾が虚空から滲み出していた<細胞>を撃ち落とす。

「な、なんかさつきまでとは全然気配が違うわよ?!」

「敵の状態が特殊すぎるんだ……………! 葛籠、佐々森、さつさと逃げるぞ!」

「了……………解つと! 佐々森、下を」

「わかってるわよ!」

形を崩し、アメーバのようになって迫り来るレギオン樹を片付け、駆け寄ってくるふたり。

それを確認した龍夜は、灯駈が背負う智晴に視線を向けた。

「……………まだ目が覚めない、か。呪いの効果だけじゃないのか? この段になっても目が覚めないのは逆に命の危険になるはずだが……………」

いや、それとも」

「どうしたの？ 何かあるの？」

「……いや、わからん。とにかく、今はこの状況を脱するのが最優先だ」

やりとりをしながらも、灯駈は龍夜が戦いやすい位置取りを選んで細かく場所を入れ替え、龍夜は灯駈に降りかかる火の粉を払うように細胞を斬り捨てる。

駆け寄るふたりに視線を投げつつ、手近な敵を次々に斬る。斬る斬る斬る。

斬っても斬っても溢れる細胞に終わりは見えない。

「……っ、こいつら！」

灯駈が荒い呼吸で吐き捨てた。さすがに人ひとりを背負って逃げ続けるのは酷い負担になっている。

しかし龍夜も、それ以上のフォーローは出来ない。無造作無作為無尽蔵に出てくる細胞は、本能のまま襲ってくる天使級とは違った手強さがある。

ただこちらに向かってきているだけの黒の群れは、その大半が無意味な攻撃なのだ。しかし、だからと言って無視しては、周囲にどんどん細胞が溜まっていく。広域殲滅の手段を持たない龍夜と、守りに徹しなくてはならない灯駈。効率よく素早く、先の手を読み続けて敵を倒していかねばならない。でなくては、逃げ場さえなくなってしまう。

ガリガリと音を立てて神経が削られていくのを自覚しながら表情には微塵も出さず、機械的かつ有機的に跳びかかるアメーバのような塊を片付ける。

その時。

「……う、うん……？」

幽かな呻き声。



しかしそれは四人の耳にしっかりと聞き取れた。

鈴の音に合わせて舞い踊る精霊の中心で、芳鈴はその声を聞いた。

迫り来る<細胞>群を炎の壁で焼き払いながら、雪杜はその声を聞いた。

無数の斬撃で跳びかかる<細胞群>を蹴散らしながら、龍夜はその声を聞いた。

得体の知れない男の背を見つめながら、親友を背負いながら、灯駈はその声を聞いた。

薄っすら意識が浮かび上がるのを感じ、小さな背中のぬくもりの中、智晴は己の声を聞いた。

まるで運命のように、全員の意識がその一点に集中する。

「しま……っ!!」

己の未熟迂闊を内心で罵る。すぐさま周囲の警戒に意識を戻すが、まるでその隙を始めから待っていたかのように知っていたかのように灯駈と智晴に殺到する<細胞>群。

「四じよ　ちっ!!」

眼前の敵を一振りで薙ぎ、勢いのままに反転。

敵は八ヶ所から同時にふたりを狙っている。問題はその距離と速

度。バラつきが激しい。

雪杜たちもこの距離、タイミングでは間に合わない上、迂闊な術式ではふたりを巻き込むことになる。コートの防御術式に全幅の信頼を置くことはできない。

戦況予測。パターンの算出。

距離、速度、手順、反応。

( 間に合わない )

一伎型の全技、補助術式のストックを加味する。全ての敵を排除するには、タイミングが合わない。最善でも一方向の敵が攻撃の合間に灯駈を狙う。

「ならば」

灯駈に跳びかかる<細胞>を斬り捨て、凄惨に晒す。

「呑み込まれるなよ四条式イ！」

一気呵成。思考と躊躇を吐き捨てて斬撃が乱舞する。

灯駈はその姿にぞくりと背筋を震わせた。

呑み込まれるな。

ああ、確かに。この光景には呑み込まれる。

迂闊にみていいものではない。

純粹な狂気の暴風に冷や汗を流しながら、灯駈は自分を落ち着かせた。

もはや剣速は灯駈の知覚を超えていたが、僅かな仕草や予備動作からその動きを予測し、龍夜の動きを阻害しない位置を

( あれ？ )

違和感。

己を囲む悪意の群れ。龍夜の位置。可能な動き。そして灯駈の動ける場所。

そこに。

「あ」

間に合わない。

このままでは回避も迎撃も間に合わない。

それに気づいたとき。

「智晴、ごめん！」

「え、あっちゃ……ってあいたっ?!」

智晴をコートに包んだまま、安全域に投げ出した。

「っ?!」

龍夜が目を剥く。

気づかれたことに対しての衝撃、驚愕。灯駆はちろりと、舌を出してやった。

ざまあ見ろ。

誰がお前の思い通りになんてなってやるもんか。

そして。

それは五分の一秒以下の光景。

天穿牙が銀色の光を残し、黒い蛭のような物を無数に斬り裂く。

横手から飛び掛ってきたアメーバ状のものに右足で蹴りを入れながら、宙へ飛び足元の芋虫になった<細胞>を斬り捨てた。

着地する事なく大地に突き立てた刀を足場に、後方の<細胞>群に気を込めた右拳をたたき入れ、反動のまま退き左の肘で後方の敵をぶち撒ける。

ここで、どうしても間に合わない。右手は突き出し、左は下がったまま。この状態では、さらに右後方から迫っている攻撃には対処できない。最初からわかっていた。だから。

「神浄四相流・四条式 散葉柳！」

灯駈は、飛び込む。

その一撃が必殺であるなら、この一撃もまた必殺。飛び込んできた相手のエネルギーを殺し、弾き返す。そして。

「おおおおお！」

灯駈の背後から迫っていた<細胞>。その牙が彼女に届く前に、龍夜は己の右腕を生贄に差し出した。

その、予定調和の末に。

「、智晴を助けてよ。絶対。お願いだから」

こちらを見る黒い瞳には一切の曇もなく。

まるで幼い子供のような、純粹な信頼があった。

嫌味なくらいに澄んだ笑顔は、夜空に浮かぶ月のようで。

次の瞬間。その脇腹に<細胞>の鋭い牙が突き立つ事を知っているなんて、とても思えなくて。

ぶしゃあ、と。

赤黒い液体がぶち撒かれ、大地を濡らした。

少し遅れてぶにぶにしたものが赤い水たまりの上にくっつきも落ちて、それからまた、同じ赤黒い液体が吹き出していた。

黒いコートに付着した液体から、独特の臭気が感じられる。

そして。

その池の真ん中に。

音を立てて小さな体が倒れて。

綺麗な、憧れていた、あの長い流れるような髪が広がり。

その汚らしい液体に沈んでしまつてのを見て。

「あ、ああ、あああああ」

嫌だと。

信じたくない。

認めたくない。そう思っても。

情報。状況。五感。直感。推測。推論。現実。仮説。過程。憶測。

類推。推理。

自分の能力をよく知っている。それがいついかなる時も止められないことを。

だから。

「あっちゃ……………ん……………?」

知った。

理解した。この場の誰よりも早く。



## 呪・顕る（後書き）

やっと状況が動きました。

やっと投稿できました。

本当、好き放題書いていたら収集が付かなくなってしまいました。  
読み返す気力もないので誤字脱字は後ほど修正します……。





声を、聞いた。

途切れる。落ちる。ほんの手前。

今意識を閉じれば『自分』はもう帰って来れない。

それでも抗えない。そんな微睡みから引き上げる。その声は。確かにいつか聞いた、雷鳴のようなあの声だった。

そして。

記憶が弾ける。

血の海に倒れる灯駈に駆け寄り腰をおろし、己の影に刃を突き立てる。

「龍影影装 刃牙！」

ぐばり、と影の龍がふたりを飲み込み、周囲の<細胞>までをも蹴散らす。

そして、黒い嵐が消え去るとそこには騎士・刃牙と、こそげ落ちた脇腹に黒い刺々しい鎧の一部を覆われた灯駈の姿が現れる。

「あ……あっちゃん……！」

ふらつきながら駆け寄った智晴は、灯駈を強く抱きしめた。その冷たい体に息を飲む。

「う、あ、そん、これ、どう……ああ……！！！」

「取り乱すな……！」

肩を強く掴み、体を揺さぶる。

「奇跡的だが、まだ息がある……くそ！」

確かにまだ死んではいない。だが、だが、それだけだ。鎧で傷口

を覆ったのは応急処置だったが、いくらなんでも失った血と臓器が多すぎる。ショック死していないのが不思議なくらいだ。

これではもうあと何秒も持たない。故に。己の力で足りぬのならばと。

「サマエル！」

「あいよ、と。しっかしまあ無茶をする嬢ちゃんだぜ」

黒い塊がぶかり、と刃牙からわき出した。

それを呆然と見やる智晴。

駆け寄ってきた雪杜と芳鈴も、その謎の物体に驚いた様子だ。

「無駄口はいい。なにか手はないのか」

「ふうむ……さすがにほぼ死んだこの状況じゃ無理、つてところなんだが。」

条件を満たせるか、刃牙？

「無論」

条件の中身さえ聞かず、刃牙は即座に応じた。

「ようし、わかった」

だからだろうか。サマエルの言葉には満足気な響きがあった。

ふわり、とサマエルが智晴の前に滑る。

「なあ眼鏡の嬢ちゃん」

「え、あ、う、ん？ えと、何？」

「お前ブレスレッドもってたる。あれ出せ、あれ」

「そ、それであっちゃんはお助かるの?!」

「さてな。だがベッドしなけりやゲームには参加できねえぜ？」

そう言われて、智晴は急いでポケットからブレスレッドを取り出した。

黒い、何の変哲もないそれを、サマエルに言われるまま灯駈の腕に付ける。

「さて、刃牙」

「ああ」

「これから俺は、今までお前にやっていたことを、この嬢ちゃんにやる」

「俺に……って、まさか」

「そう。この嬢ちゃんを宿主にするってことだ」

「……………平気なのか？」

「そのためのブレスレッドだよ」

「そういう事か！」

「……………いやあの東雲、悪いけど、僕らにも状況を教えてくれないかい？」

その黒いのは一体どんなモノで、これから何が起きるのかを」

「そう、だな。時間がないから手短かに説明するぞ。」

まずこいつはサマエル。精霊だ。ああ、質問は後にしる時間がねえ」

精霊、という部分に驚き、口を挟もうとした雪杜の機先を潰す。

「こいつは普段、俺の中にいて、体内の精霊の絶対量の何割かを専有しているんだ。こうすることで俺が扱える精霊の量は激減するが、まあその分、こいつが精霊術を使って俺をサポートしていた。」

葛籠はいくらか心当たりがあるだろ。俺がやけに術式を連発できているとかな。あれは俺とこいつで交互に術式を使ってたってわけだ。

こいつはふらふらその辺に浮かんでいるだけで力を消費して消滅しかねないんでな。俺の中に入れて保護してたわけだ。

で、今からこいつを四条式の中に入れる。当然体内の精霊がこいつに占有されたら普通の人間なら病弱つつつか棒に当たれば死ぬレベルの耐久性になるんだが、それを回避するのがこのブレスレッドだ。

こいつは、どうも精霊が空っぽなんだ。契素だけで出来ている物

質だな。本来的には在り得ないものなんだが、まああるんだから仕方ねえ。

ともかく、空っぽってことはこいつには精霊が詰め放題だったことになる。当然、このサマエルもな。つまりサマエルがブレスレツドに入り、こいつの肉体にも一部を入れ、そして精霊で肉体を補完する。これからやるのは、そういう事だ」

「……精霊で肉体の補完……可能なのか、それは？」

まったく話題についていけなくなっているふたりを放置し、肝心の部分を尋ねる雪杜。

それに刃牙はやや口ごもり。

「可能だ」

と答える。

「ただし、大量の精霊が必要になる上、術式をかけ続けなければならぬ。サマエル。この傷だとどのくらいの期間になる」

「そうだなあ、早くて三ヶ月はかかるだろうな」

「三ヶ月毎日、儀式術式をかけ続けなければならぬ。これがどれだけ非実用的な術式か、わかるだろ」

「……確かにね。非実用的というより非現実的。いや、いつそ妄言のレベルだ」

お手上げ、というように、両手を上に上げた。

「……しかしサマエル。まず術式をかける精霊が足りていないだろ。もうずっと俺の中にいたせいでお前自身を構成する最低限の精霊しか残っていないはずだ」

龍夜の中にいる、ということは、逆に言えば龍夜の肉体が許容する量以上の精霊は抱え込めないということにもなる。

サマエルと龍夜の潜在体内精霊量は、およそ同値。しかしサマエルは存在のためにどうしても大量の精霊が必要な存在であるため、占有率はおよそ七対三。

それでも、これから行う術式には到底足りない。

つまり。

「だからよ、これからテメエが稼ぐんだよ。その精霊を」

「いや、だからだな、一体どうやって」

「おいおいおいおい！ 馬鹿だなあ相変わらずテメエはよあ！

見るよよく見てみるよ！ 周りには精霊の塊が大量に沸いてんだろうが！」

周り。

周囲。

<細胞>群。

「こいつらを殲滅して精霊に還元すりゃあ、なあに、ギリギリ術式には足りるだろうよ」

「殲滅って……ちょっと、こいつらを？！ いくらなんでもそれは

無理が……！！」

「……………それで足りるんだな」

「あんた、やる気なの？！」

芳鈴の声を無視して、刃牙は立ち上がる。

「やるよ。お前はここの守りを頼む」

「……………ひとりで行れるのかい？」

鎧の奥で、龍夜が笑う。

「はっ。さっき言っただろ。全力さえ出せば、なんとかなるってな」

「そうか。じゃあ敵は任せた」

雪杜が下がる。

そして。

「あ、あの！ 東雲さん、ですよな。

よくわからないし、理解もできてないけど……あっちゃんを助けて下さい！！」

親友を抱きしめて、必死で懇願する姿に。

「当然だ」

それだけを答えた。

着装限界まで残り五百二十四秒。

しかし灯駈の命を救いたければ、三百秒でカタをつける。それがサマエルの指示だった。

三百秒。

五分間。

はっ。

黒い、醜悪なく細胞>群を見やり、鼻で笑う。

随分と無茶を言ってくれる。

だが。

「無理じゃねえ　ああ、不可能なんて在り得ねえ」

己が己の信ずる騎士であるために。

四条灯駈を生かすために。

無理などここで斬り捨てる。

「さあ、始めようぜ。笑えるくらいに同じ色だが、なに。すぐに教えてやるよ。

俺とお前らと、どちらがこの色に相應しいのか。格の違いを、存在の違いを」

すらりと刀を抜く。

星震天穿牙。

刃牙を中心に押し潰すような威圧感が広がる。

「刻み込め」

踏み出し。

肩にかついだ刀を、体ごと振り下ろす。

虐殺の始まりを告げる花火が咲いた。

暴虐の限りを尽くす獣のような刃牙の姿に智晴は息を飲んだ。  
そんな中。

「さ、て。それじゃあ始める前に、まず巫女娘。ええと何つつたっけ名前？」

「……もしかしてあたしの事？ 佐々森よ。佐々森芳鈴」

「ああそうだそれだそれ。じゃあ巫女娘てめえにまずは指示だ」

「や、だから佐々森……ああもういいわよ！ で、何よ」

「テメエは結界を張って細胞共をここから逃がすな。なに、そんなに強固なやつじゃなくていい。触れたらせいぜい、数秒動きが止まってしまう程度の網でな。」

そうしてりゃあ、あの馬鹿がかってに処理してくだろ」

相性の問題から、龍夜はそこまで手を回せない。というか刃牙は補助術式しか使えないから回しようがない。

「はあ……まあいいけど。だったら雪杜にさせればよかったんじゃないの、あれの相手」

と、指さした先で。

刃牙が振り抜いた拳によって五メートルほどの広さで壁がべこんとへこんだ。ぐしゃり、と潰れた細胞が黒い霧となって消える。

「……………うわあ」

ギャグのような光景に乾いた声を漏らした。  
何しろ。

今の拳の一撃は、混じりっ気なしのただの拳打だったのだから。  
鎧は身体能力を強化する。

術式は身体機能を補強する。

しかしそれでは、ただ『勢いのあるパンチ』にしかならず、拳が壁に埋まったり、多少の余波で破壊することはあっても、拳圧で壁をめり込ませるなど出来はしない。

「……武術、かな。拳で眼前に展開した薄い精霊の膜を打って大気を震わせた。どう、正解？」

「はっはっは。見所あるな坊主」といいてえ所だが、ひとつ間違いだ。精霊の膜はあいつが展開したんじゃないやなくて、あいつが潰した<細胞>が帰化したモノだよ。

あいつがああやって<細胞>をつぶすと、大気中の精霊に粗密が生まれるだろう？ その密度の薄い部分をうまく狙い撃ってるってわけだ」

な、簡単だろ。

サマエルの言葉にはそんなニュアンスが込められていたが。

ふたりは何むちゃくちゃ言ってたんだこの黒いのはそして何むちゃくちゃやってんだあの騎士は。という感想しか出てこなかった。

それっぽく言っているが内容は『水の上を走るためには右足が沈む前に左足を前に出せばいいんですよ』と言っているのと同レベルだったからだ。

要は、実現できるわけがない。のだが、なぜか実現できている辺り、あの騎士鎧　というより、あの騎士そのものがちょっと頭のおかしい存在である。

しかし。

「効率わるいわね」

攻撃範囲はやはり狭い。術式であれば倍どころではない範囲の<



細胞>を一度に攻撃できる。

時間がない、という割に悠長にやっつけていて良いのかという不安を覚える芳鈴。

しかし雪杜はそうではなかった。

「そうだね。とはいえ僕らが手を貸すわけにもいかない理由は、なんとなくわかってきたよ。」

なるほど、彼の戦い方だと周囲の精霊をほとんど消費せずに済むわけだ。僕らが戦うとどうしても精霊術を使う　つまり、儀式に必要なエネルギーを消費しながら、になるからね。

少しでも儀式の成功率を上げるために、可能な限り精霊を消費せず、しかし敵を倒して莫大な量の精霊は確保したい、となると、どうしても彼が戦わざるをえないわけだ」

『はっはあ。いいねえ、利口なガキは。てことでその利口なガキに相談だ。てめえ、俺らの事を黙ってる。』

無論ただでなんて都合のいいことあ言わねえよ。ああ、そう。取引しようぜ。どちらにとっても良いことのない、そんな取引さ」雪杜が瞳を鋭く細めた。

黒い球体と雪杜の間の空気が凍りつく。

しかしそれも僅かだった。ちらり、と顔を土気色にした少女をみおろし、息をつく。

「いいよ、乗った。君のことは誰にも言わないし、誰かが誰かに報告しないようにもする。それで問題ないね」

「え、ちよ、雪」

「ああ、了解だ。もし何かあったら……ああ、可哀想になあ、そいつのせいで、イタイケな少女は儂く散る、と。なあ、巫女娘？」

「あ、あんたら……っ!!」脅迫だった。

それ以上も以下もない。完膚無きまで完全な。

相手が少女の命など簡単に見捨てられるような人間であれば通じないだろうが、少なくとも芳鈴を相手にした場合この手の脅迫は十

分以上に効果的なものだった。

雪杜はそれを重々承知していたし、サマエルも僅かな時間でそれを見ぬくだけの長い経験があった。端的に言って、どちらも割と悪質な性格をしていた。

そして同時に、サマエルは既に雪杜が何かしら特殊な環境下にあり、芳鈴がその監視の役割を持つていても予想がついていた。異端を排除し、しかしその力を利用したいとする人間のとりうる手段としてはわかりやすく納得のいくものだ。このような例などいくらでも見てきた。

故に、口を閉ざすべきは芳鈴。しかし直接芳鈴にそれを求めてもおそらく効果は薄い。そこで雪杜に先に約束を取り付けた。

排他を受けるものとその監視者という立場でありながら、二人の間に目立った軋轢が見られないのは、雪杜の精神性の異常さよりも、監視者である芳鈴が心情的に雪杜寄りであるからと踏んだのだ。

故に、ここで話を雪杜が受ければ、芳鈴もそれを受けざるを得ない。

なぜならば、彼女がサマエルの存在を上を報告した場合、自動的に取引に乗った雪杜の立場を追い詰めることになるのだから。

一般人を見捨てる。その上、雪杜の立場を追いやることになる。

その選択をできるほど、ドライに己の任務に忠実であるような芳鈴ではない。

故に。

「?????つ！ わかったわよ！ 黙ってればいいんでしょ！！」  
こうなる。

無論、このことが露見すればふたりともただでは済まないだろう。それに罪悪感を覚えるようなサマエルではないが。

「さて。じゃ、始めるか」

話がまとまったところで黒い球体からほのかに精霊が青い輝きと

なつて零れ落ちる。

それはゆつくりと灯駈を囲むように幾何学的な文様を形成する。

「これから周囲の精霊を強制的に集め、精霊回路を形成する。巫女娘は結界の維持、小僧は回路の安定とそつちの眼鏡が潰れないように適度に見といてやれ」

文様が絡みあい、三次元的に交差し、光がその中を循環し始める。ゆつくりと巡り始めた光の粒子はその速度をだんだんと早め、それに従い周囲の空間から次々に青い光が浮かんで回路へと流れこんでゆく。

輝きが強くなつてゆく。

少女の命を呼び覚ますように。

儀式の始まりを肌で感じた。この圧迫感に一般人がどれだけ耐えられるかは賭けだが、今は灯駈の強さを信じるよりない。

「……は、何だ。結局最初から最後まであいつについては何もできてないのか、俺」

鎧の奥で己を嘲笑う。

結局。

漆黒騎士・刃牙。騎士鎧・刃牙。

その防御力は物理面、術式面からみて相当な強度を誇る。単純なぶつかり合いであれば大抵の敵は蹴散らすことができる自負もあるが、およそレギオン相手にそんな事になりえない。まるで意味が無い。

何よりもそれは刃牙を纏う龍夜にしか恩恵がない。自分を守ることはできない鎧。それが、龍夜の刃牙に対する評価である。

無論戦場において己を守ることは最優先である。そうでなくては他の何を守れるというのか。

だが、力のほぼすべてがそれにしか使えないのであるならば。それで何が守れるのか。

故に磨き上げた技術に全てを託す。それしかできないから。それでも。

やはり。

「届かねえ、よなあ！！」

怒り。憤懣。

八つ当たり。

薙ぎ払う勢いで風が巻きごう、と悲鳴を上げる。斬り裂いた大気が空気の断層を生み烈風が<細胞>を吹き飛ばした。

動きは止まらない。流れるように足を踏み出し壁面を蹴り砕く。衝撃と共に散弾銃のように岩石が飛び散る。

動作のひとつひとつ、全てが破壊を生み出す。単純かつ効率的な殲滅戦。虐殺とさえ表現できる余りに一方的な蹂躪。しかしそれでも刃牙に僅かの余裕もない。

「……っ！ 消費が早いんだよ、てめえっ！！」

兜の奥から漏れる声には焦りが滲む。

刃牙が<細胞>を倒し、精霊へと霧散させる早さよりを随分上回る勢いでサマエルの儀式術式が精霊を回収していくのだ。

これでは三百を数える前に周囲の精霊が枯渇する。

この儀式では常に一定量以上の精霊を供給し続けなければならぬため、龍夜がサマエルの回収よりも早く精霊を供給しなければならぬのだ。

それが。

「……っ、やるしかねえんだろっが」

視界に収まる<細胞>は山とあるが、既に当初の半分以上は消し

去った。

ただ己の身とその刃によって。宣言された制限時間は残り百五十秒を切っている。しかし体感ではそれより六十秒は早く殲滅しなければ供給が途切れる。

ふ、と。

刃牙の中で、龍夜は笑う。

ああ。ああ。

理解する。

やれと、そういう事なのだろう。

既に自分の力は届かなかったこの場に於いて。

もはや出し惜しむ理由などありはしないと。

そういう事なのだ。

ならば。

「のってやるよ、保護者様！」

サマエル。

刃牙と龍夜を試し続けるもの。

そうとあらば、応えるより他にない。

「神浄四相流・一伎型      奥義参式・催涙雨」

その瞬間。

刃牙の周囲の空気が一斉に爆裂した。

光も音もなく、歪み、唐突な圧力となって空洞内を荒れ狂う。とつさに雪杜の展開した結界がぎしりとときしみを上げ、その肝を冷えさせる。

「ぐ……」

その中心　発生源となった刃牙は、その場で両足を強く踏みしめ、苦しい声を漏らした。

星震天穿牙を腰ために構え、やや前傾の姿勢のまま、ゆっくりと刀を滑らせながら正面に構え直す。

しん、と空気が凍る。

先の爆発を生き延びたく細胞>群は、当初のおよそ三割程。

いけるだろうか。

おそらく。

頼りない確信。

止めていた呼吸を僅かに吐き。

『それ』を、放つ。

たった一度の、素振り。

合わせて。

豪、と、視界の一切を歪みが埋め尽くした。

爆裂により天井に突き刺した気の針を、一斉に、降り注がせる。

広大な空間全てを覆う程の気を研ぎ澄まし、維持し、操る精神力。振り絞られたそれは月光を弾きながら輝く雨のように降り注ぎ、天地をつなぎ間にある総てを貫き穿つ。

対超大型種用奥義・催涙雨。

およそ一対一で相対すべきでない、逸脱したサイズの存在を相手にするための技である。

最大攻撃半径は龍夜においては半径百メートル弱。普通に考えて広範囲殲滅用の技であるように思えるが、一伎型の定義ではあくまでこれは一対一のための技である。

十秒にも満たない局地的集中豪雨は、あれほどまでに埋め尽くしていた<細胞>群を瞬く間に飲み込み、押し流した。

戦闘時間、百七十二秒。

これに於いて、無数の命を飲み込んだ大量のレギオンとの戦いは、決着を迎えた。

着装を解いた龍夜が息荒くどころか顔色まで悪くして治療のその場所へとやってくる。

基本的に奥義は体力精神力精霊力気力総ての消耗が激しく、使いどころを間違えれば自分を死に追いやる技である。

使われないことを前提にされている規格外の技を奥義と呼んでいるのだから当然といえば当然だが、それだけに使いどころを見極めることが出来れば絶大な効果を発揮する。今回のように。

とはいえ、連日連夜の戦いで消耗した身にはさすがに堪えたようで、表情からは余裕がすっかり消えていた。

それでも弱音を吐かないのはもはや意地か。

「……で、結果は。上手くいったんだろうな」

「ああ、順調だよ。むしろ君の最後のトンデモ技が一番危なかったよ。少し防御が遅れたら僕らまとめてミンチだよ？」

「サマエルの精霊を集める速度が早すぎんだよ。こっちの気力との釣り合いを考えたらあの場でああでもないタイムオーバーだったんだ。」

「……つつか、当のサマエルはどうした」

地面に寝かされた灯駈と、それを抱きしめる智晴。その二人を挟んで雪杜と芳鈴が座り込んでいた。

誰もが疲労困憊といった様子だが、同時にひとつ山を乗り越えたような穏やかな達成感が漂っていた。

「あの謎の球体なら、今は彼女の中に入ってるよ」

「なんだ、もうそんなに進んでるのか……いや、早すぎんだよだから」

『はっはっは。まあいいじゃねえか。早いほうがこの嬢ちゃんの負担は少なくて済むんだしよ』

それはその通りなので反論はできない。ギリギリのところを狙って失敗しましたで済ませられる問題でもないのだから。

おかげで精根尽き果てる羽目になったが、成功したというのなら十分元はとれたと言えた。

「安定してんのか？」

『ああ、お陰様でな。くくく……それにしても、こいつは凄まじいな。精霊との親和性が肉体の隅々にまで感じられる。いい戦士になるぜ、こいつは』

「おい」

龍夜が軽く発した殺気に智晴がびくりと反応する。それを見て、気が立っているのを自覚した。

深い溜息をついて、龍夜も他の面々に習い腰を下ろす。

「……………終わった、のか」

言葉にして、ようやくそれを実感した。肩にずしりと重い疲労がのしかかる。

今にも目をとじて眠ってしまいたいところだが、どうにか耐える。天井を見上げ、降り注ぐ月光を浴びる。

ぱらりと、視界の中に黒い点が浮かんだ。

疑問を覚えるよりも早く、それが顔にパラパラと降ってきた砂礫だと、顔に当たる感触で理解して。

「……………いや、待て」





その日。

山の中腹が謎の陥没を起こしたことが、地方ニュースでささやかに流れた。

## 悪夢・覚めた後

02 - 16：悪夢・覚めた後

やけに暑いな、と思って目を覚ますと、智晴が添い寝をしていた。「待ちなさい」

さすがにこれはここ数年最大の衝撃だったので一瞬で目が覚めた。爽快な目覚めとは程遠いものがあったが。

智晴はまるで子どものように灯駄の胸に顔を埋めていた。身長差が逆転しているためやや体勢に無理がある。

「何で智晴がわたしの布団に……って、あら？」  
体を起こすとそこは知らない場所だった。

おそらく、どこかのホテルだと予想をつける。しかも、それなりに値段はしそうな。

部屋にふたつあるベッドの片方には灯駄と智晴。もう片方には誰かが頭まで布団をかぶっていた。ソファに視線を向けてみると、ソファの背もたれで隠れているけれど足だけが辛うじてはみ出して見えた。形や大きさからして男だと判断をつける。

状況がわからない。頭の中でクエスチョンマークがくるくる回る。  
え。

何、この状況。  
その時。

「ったく、骨までいってなかったのが奇跡だな、これ」

そんな言葉を言いながら、部屋の扉の一つが開いた。

どうやらバスルームに通じているらしく、もわっと奥から湯気が

溢れてきた。そして同時に、これまた男が出てきた。

「あ」

「あん？」

思わず声が漏れて、互いの視線がぶつかる。

相変わらず目付きが悪い。視線だけで人を斬りつけられそうな、そんな目をしている。

東雲龍夜。どうにも忘れられない名前になりそうな気がしてならないと思っていたその男がいた。

ありつたけの精霊符によりどうにか生き埋めを回避した龍夜と、安全に地上に出た雪杜たちは、ひとまずそのままホテルを借りた。色々と面倒事を受け入れてくれる有り難いホテルというものが世の中には存在するのだ。若干割高だが、設備はいい。

ひとまずそこに部屋をひとつ借り、灯駈の様子をみることとなったのだ。

「その様子だと体の方は安定しているみたいだな」

「体……安定？」

「ふむ……お前、昨日のこと覚えてないか。まあ、あんなことになったわけだしな」

「きの、う……………、あっ！！」

ぱつと、上着をまくる。<細胞>の牙により深くえぐられたはずのその場所には既に凄惨な傷を思わせる跡さえ存在していない。

「え……あれ……?」  
「……………、まあ、ひと通りの流れは話しておいたほうがいいだろうな」

龍夜は開けた冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出し、喉に流し込みながら空いていたソファに腰掛ける。

ひととおり、昨晚起きたことを語った。確認の為に、灯駈が知ること知らないこと含め、全てを。

龍夜たちがレギオン討伐のためにあの場所へいた事。

智晴を探しに来た灯駈と合流したこと。

巨大なレギオン樹から智晴を助けだしたこと。

そして。

戦いの最中、灯駈はく細胞>の牙を受け、致命傷を負ったこと。

しかしサマエルの儀式術式により一命を取り留めたこと。

それらを語った龍夜は、頭を深く下げた。

「悪かった。そして助かった。お前がいなければこの場にいる誰かがあの場所で命を落としていたかも知れない。そしてそんなお前を俺は守りきれなかった。本当に済まない」

「え、あ、いや、そんなの。だって、あの場所に行くと決めたのも戦うと決めたのも、結局わたしなんだから、そんなの、あなたのためじゃない」

「けど、少なくとも守る力はあつたはずなんだ。きつとどこかで甘く見ていた、軽く見ていた。あるいは、重さを測り違えていた。お前ができることを尽くしたが俺はそれをためらった。それが俺の責任であるにもかかわらずな」

「あ、ううう……い、いいからもうやめて。ただあの時はとにかく必死で、そう、負けたくなかったから……」

「負けたくない? 一体何に?」

「何って、それは……」

灯駈はそこではつとして自分の胸に手を当てた。  
まるで自分の鼓動に耳をすますように、深く呼吸を二三度繰り返して、それから目を開いた。

「……怖かった、の」

「ん？」

「あの、黒いの。レギオン、っていつの？ とにかく怖くて、どうしようもなく逃げたくて仕方がなくて。

でも怖いだけなんて嫌。怯えているだけなんて性に合わないもの。立たなきゃ、進まなきゃって、ずっと思ってた。思ってたのよ。そう」

まっすぐに、龍夜を見る。

「あなたに助けられた、あの時から」

龍夜は。

それがいつの日を指すのか直感で理解した。

あの燃えるような夕焼けの日。黄昏の空。森の中の社。

<大天使級>の一撃を凌いだ彼女を守るために、とっさに割って入ったあの時。

「……覚えていた……いや、思い出したのか」

「お陰さまでね。」

だから、うん。本当はお礼を言わないといけないのは、やっぱりわたしの方なのよ。

負けたくないと思ったの。他でもない、あなたに。

あの声を聞いて、そう思った」

あの、雷鳴のような声。

「だから戦えたの。覚えていなくても、戦えた。戦えるようになった。わたしは、ようやく自分を取り戻せたの。だから、ありがとう」

灯駆が何を感謝しているのか、よくわからなかった。単に命を救ったことではないだろう。

ただ、それが彼女の中で何か重要な意味を持っていることぐらいは推察できた。だから龍夜は何も言わず、ただひと口、水を飲み込んだ。

死を経験したとは思えないほどの穏やかな笑顔を見せられて何も言えなかった。

「……まあ、お互い昨日は世話になったってところか」

「そう、ね、そういう事になるのかも」

ささやかに笑いあう。

しかし龍夜はすぐにその笑みを消した。

「で、だ。お前の体について、ちいと厳しい話をしなきゃならん」

「わたしの、体？」

「ああ。お前の致命傷だが、実は完全に治っているわけじゃない。つつかむしろ全然なおってない」

「え」

「その部分を精霊で補完してるにすぎないんだ。今、ゆっくりと時間をかけて肉体の再生をしているが、最速でもおおよそ三ヶ月はかかる。その間に注意してもらいたいことがあってな」

「う、うん。それは？」

「そんなに構えるな。まず俺の訓練を受けてもらう。四条式であればある程度問題ないと思うが、体を精霊に効率的に慣れさせていく必要があるからな。ま、これはそんなに重く捉えなくてもいい。次、これが絶対なんだが……お前の右手に腕輪があるだろ」

言われて灯駈は初めてその存在に気づいた。黒い、光を反射しないせいかのつペリとした印象を受ける腕輪がはまっていた。

「それを外すな。何があっても、と思ってくれて問題ない。少なくとも一ヶ月はいつときも手放すな。仮に今それを外したら……たぶん、すんげえ痛いぞ」

「そ……そんなに痛い？」

「ああ。そのリングにはサマエルって馬鹿が入っていてな。そいつが肉体の補完やら痛覚の制御やらをやってるんだ。で、お前とサマエルが繋がるためにはそのリングをお前が身につけるしかない。仮にそれを落としたりなんかしたら、すぐさま術式が不安定になって傷口が開き始めるぞ」

「それは……ぞつとしないわね。わかった、気をつける」

「ひとまず言いたいことはその位か。あとはまあ、家への言い訳は自分で考える。むちゃくちゃなつてたぞ、携帯」

ひよい、と投げられた携帯電話を受け取り開いた灯駈はその瞬間硬直した。

着信履歴が完全に家からの電話で埋まっていたのだ。

現在時刻を見る。

昼の二時。

朝帰りどころの話ではない。

どんだん顔色が悪くなるのは当然だが腹の傷が開いたとかではない。

「……………ど、どうしようっ……！」

「いや、そんな縊るような目をされてもな……目的とかは言っていないのか」

「急いでだし、それでもこんなに着信が来て出てないんだから大事よ……！」

「そういつもんか」

特殊な環境で育った龍夜はいまいち危機感を共有できずに困惑す



る。

とりあえず。

「横で狸寝入りしてる親友にでも聞いたらどうだ」

「え？」

「……………にひひひひ、やっぱりバレてましたか」

がば、と灯駈のとなりで布団が爆発した。

「おつはよーん、あつちゃん！ 無事でよかったよー！！」

布団から飛び出した智晴が灯駈を胸に抱きしめる。

「わぷっ！ ちょ、智晴、落ち着きなさいよ！！ ていうかいつから起きてたの？！」

「それはねえ、」

「俺がシャワーを浴びる前からずっとだよ」

「って東雲さん気づいてたんだ……………」

「どんだけしがみついていたのよ……………ていうか、あなたも気づいてたんなら教えてくれてもいいのに」

「いや湊がやけにスムーズに抱きついてるもんだからてつきり普段からそういうものなのかと」

「いや普段から一緒に寝てないから。変な勘違いしないで。ていうか智晴、そもそもわたしはあなたを心配して探してたのよ！ 大丈夫なの、体に怪我とか調子が悪かったりはしない？」

「へーきへーき、大丈夫だよ。ぐっすり寝てむしろ昨日より調子がいいくらいだから！」

「……………とはいえ、あれだけのレギオンに囲まれたんだ。多少の変調が今後無いとも限らないしな。あとで四条式の家にもいったほうがいいぞ」

その言葉にふたりはきよとん、と顔を見合わせた。

代表して灯駈が口を開く。

「えと……なんで、うち？」

「うん？　もしかして四条式は体の気を調える治療とかはやってないのか？」

「いやうちただの道場なんだけどなんでそんな発想が……あれ、それ以前にうちの話、したっけ……？」

あー、と龍夜が頭を抱える。余計なことと言って藪蛇になったらしい。

どうしたものかと考える。戦いは終わったがいつも通りにそれだけで終わりに出来る状況ではないようだ。

下手に人と関わるところとして面倒事が増えていく。だから世間との関わりを避けていた部分もあるのだが、今回はもうそう言っていられる場合でもないようだ。それでも関わりが四条式だった点はまだ救いがあるというべきか。ただの一般人よりは、まだ理解があるだろう。しかし四条式が裏の世界との関係を切ったという事は知っていたが道場のみを続けていたとは。なんとというか中途半端な感じではあった。

さて、と考える。

ひとまずこのふたりに関しては自分が顔を出してある程度の事情を説明すべきだろう。

目の前でニヤニヤとこちらを見ている雪杜と布団の中で知らぬ存ぜぬを通している芳鈴は放っておいて問題ない。勝手にココを出ていくだろう。

「……面倒な話だが、しかたない。今回の事情の説明は俺がついていこう」

「女の子が夜に帰って来なかった事情を説明するのに男の子が着いてくる気?!」

なぜか灯駄が顔を赤くした。龍夜はなぜ驚くのかと首をかしげる。雪杜のニヤニヤとしたイヤな笑顔が妙に深くなってなぜか怒りを覚えた。

「なんか問題なのか？」

「なにかっていうか、問題しかないような気が……」

「あっはっはは、そりゃあさすがに修羅場っちゃいますよ、東雲さん」

やはり理由がわからず首を傾げる龍夜。その辺りの感覚は正常に育っていないらしい。最終学歴が中学校卒業でその中学も友人と叫べる存在もないまま、まともに通わず海外放浪と武者修行となればそれも当然だろうが。

『くつくつく、まあ赦してやってくれお嬢ちゃんたち。そいつ、馬鹿なんだよ』

「おいこら誰が馬鹿だ」

「え、何今の声。そしてなんであなたはわたしを睨んでるの」

「にひひ、あっちゃん違う違う。東雲さんが睨んでるのはあっちゃんじゃなくてその腕輪の方だよ」

智晴に言われて腕を視線の高さにまで持つてくる。一体どういった素材でできているのか、光を反射しないし熱も感じない。不思議な腕輪だった。

それをまじまじ見ていると、唐突にそこから声が響いた。

『よう、はじめまして、と言っておこうかね四糸式』

「きゃっ?! え、なに今の本当に喋った!!!」

『おー、いいねえそう言ったりアクション。新鮮っつうかやっぱこ

ういうりアクションがあつてしかるべきなんだよな、俺みたいな存在はさ。

さてお嬢ちゃん、俺の名前を言っておこうか。俺はサマエル。龍夜の保護者だ』

「サマエル……あ、わたしに儀式をしてくれたっていう」

『そうそう、そういう事。なんだ龍夜、もう事情は話してあるのか？』

「ひと通り、理解に問題がないくらいには。というかお前も、もう話していいのか？ 再生術式の安定には時間がかかるんじゃないのか」

『おー、それなんだがよ、この腕輪がまるであつらえたみたいに馴染んでな。おかげで術式の安定も早かつたんだよ』

そういうものか、と納得する。サマエルの術式は自身の存在が安定しているほど、その精度も上がる。存在自体が精霊であり術式である以上、メンタルがその結果にダイレクトに反映されるからだ。

慣れていない腕輪と灯駈の肉体に憑依することで普段より時間がかかると思つたのだが、腕輪のおかげが普段よりも早く術式を安定させられたらしい。

ともあれ、これでひとつ区切りはついたことになる。サマエルと腕輪と共にある以上、灯駈が日常生活を送る上での障害はほぼないと考えていい。

心配事はいくつかあるが、騎士として自分がこの街にいる以上、それらの問題にも対処はできると目論んでいる。

なのでまずは当面の問題を解決せねばならないわけだが。

『で、だ嬢ちゃんたち。龍夜はなんつつか、その辺配慮ができないんだよ。何しろ生まれて以来友達ができたことのないさみしいやつなんだ。いやマジでこいつんちに踏み入った同級生なんざいねえからなガチで』

「サマエル、お前そんなどうでもいい話を今　なんかめちやくち  
やすんげえものを見る目をされてるぞおい」

「あ、ううん。えと、その……ごめんなさい」

「にははははー……辛いこと思い出させちゃったねー……」  
なぜか慰められて龍夜は目を白黒させた。

結局、大爆笑をはじめた雪杜と芳鈴を放って三人はホテルを出た。  
ホテルの外装がひとめでそれと判るような作りになっておらず、  
廃屋一步手前のような姿をしていることに灯駈も智晴も驚くといっ  
た一幕もあったが、それ以外はレギオンは精霊術についての話が主  
となった。

とはいえ、龍夜もそこまで深い話をするつもりもなく、所々を濁  
しながらとなったが。

若干汚れた制服姿の智晴と、血で汚れた上着は捨てておろしたて  
のシャツ一枚の灯駈と、ズタボロになったコートを羽織った龍夜の  
組み合わせはどう控え目に見ても異様だった。当人たちはまるで気  
にしていないが。

その会話の最中。

「でな、四条式の場合は……」

「ちよつと。ちよつと待つてお願い」

灯駈が足を止める。その眉間には何かに耐え、しかしそれに限界  
を迎えたような深いしわが刻まれていた。

じろり、と龍夜を見上げ睨みつける。その姿は三十センチ近い身  
長差を感じさせない威圧感を放っていた。ごくり、と生唾を飲み込  
む龍夜。サマエルはこんな自分を腕輪の中で笑っているのだろうと  
思うと腹は立つもののその思考が現実逃避であることに気づく。

「あのさ、昨日からずっと気になってたんだけど何その『四条式』」

って呼び方」

「え？ いやだってお前四条式だろ」

「そうよ。わたしは四条式を使うわ。だけど苗字は四条。四条式って言うならうちの門下も両親も全員そうなるじゃない。なんでそんな不自然な呼び方なわけ？」

「ああうん、まあ」

たつやは口ごもる。どうしよう、と智晴を見るがなぜ自分を見るのかと見返されてうつむいた。

「普通にさ、四条って呼べばいいじゃない。あなたの方が歳上なんでしょう？」

「えーっと、はい。今年十八になります。ええ」

なぜか敬語だった。

「じゃあもつとしゃきつとしなさいよ」

年下の女の子。それも見た目はより幼く見える少女相手に叱られて小さくなる龍夜。なかなか奇妙な光景だった。

「ああ、じゃあまあ……四条………さん」

「今なんで『さん』を小さくつけた」

灯駄の眼光が更に鋭くなる。

「い、いいじゃねえか別に『さん』くらいついたって!!」

「智晴にはつけてないじゃない！ なによわたしの事が怖いとかそういう事?!」

「今現在すげえ視線してるだろうがっ!!」

そりゃあ怖いんじゃないかなあと思っても口に出さない智晴だが龍夜は口に出す。その辺に人付き合いの未熟さが出ていた。

「あら、重心が後ろに向いたわ。心なしか姿勢も臨戦態勢に入っているし。そのくせ力の入り方が全力で逃げを打ってるのはどういうことかしら。昨日の戦いを見る限りあなたは前に進み続けるタイプだと思ったのだけれど。何、わたしはレギオンよりも怖いわけ」

「その冷靜的確な分析が怖くない奴がいたらあってみてえよ逆に…」

…」

ほぼ無意識の逃げの姿勢を一瞬で的確に見破られて内心の汗がどばつと噴き出す。何この女超怖い。三奈も超怖いがこっちも超怖い。結論、女がだいたい超怖い。現在進行形で女性に対してのトラウマがガリガリと音を立てて刻み込まれていく。

『けけけけ、まあしゃあねえよ四条の嬢ちゃん。そいつ、四条式には苦手意識をこれでもかかってくらいに刷り込まれてるからな』

「苦手意識……？ 四条式を知ってるの？」

『ああ、あるいみで嬢ちゃん以上には知ってるんじゃないのか？

例えば、四条式の全力を正面で受け止めた場合に、内臓がどんな位置変動を起こして地獄の苦しみを生み出すのか、とかな』

瞬間。

龍夜が口元と腹を抑えてうずくまる。両肩がカタカタふるえる。

踏んではいけないスイツチを踏み潰したらしい。

「手加減するっていったんだよ、あの野郎……ちくしょう、信じた俺が馬鹿だった………！！」

「あ………」

灯駆も四条式の威力はだいたい理解している。しかしその全力をぶつけ合えば死人が出かねないため、完璧な一撃を受けたことはない。なにしろ構造的に人間よりも遥かに頑健なはずのレギオンさえもまとめて粉碎できる攻撃だ。そんなもの受ければ普通は死ぬ。

という事は龍夜はそれに耐え切ったわけで脱人類を果たしている気がしたが、いちいち茶化すことでもないので黙っておく。

「まあ……でもわたしはそんな事してないじゃない。四条式ってだけで一緒にされたらたまらないわよ」

「お前の言うことはわかる。もっともだと思う。けど四条式って意識したらどうしても、な………」

立ち上がり冷や汗を拭う龍夜の表情は真剣そのものだった。どうやら相当に深い傷を心に負わされたらしい。

「ふうん……ん？ それじゃあ四条式って意識しなければいいんでしょう？」

「あ？ ああ、まあそんな理屈にはなる……のか？」  
首を捻る龍夜。

「じゃあ名前で呼べばいいじゃない」  
名案だと言わんばかりの灯駈であったが。

「……はあ？」

龍夜の全身を嫌な気配が舐めた。殺気とは違う。もっと粘度が高く、怖気を誘う気配だった。発生源はすぐそば、灯駈の背後、つまりは智晴から出ていた。その異様な気配に灯駈は気づいていない。完全に龍夜にのみ向けられていた。

「……やめようぜ、そいつは俺には少々荷が重いようだ」

智晴を見ながら龍夜は首を横に振る。何この理不尽な包囲網。嫌がらせか。

「じゃあどうしようっていうのよ。話がまとまらないじゃない」  
ぶくつと頬をふくらませる灯駈。可愛らしい姿だが威圧感が野生の虎を思わせる。そしてその背後には飢えた狼のような異様な気配を放つ智晴。

「名前を呼ぶのが恥ずかしい、なんて性格でもないでしょうどうせ」  
「どうせって何だよ。まあ確かにそりゃあそうだが」

呼称は距離感や感覚で使い分けているが、名前で呼ぶ事に特に臆したりはしない。ただしこの状況は別である。

「じゃあいいじゃない」

「……ええと」

ちらり、と視線で訴える。勘弁して下さい。

「……ちっ」

軽く舌打ちした智晴を見て胸を撫で下ろす。不満はあるようだがどうにか許可されたらしい。

「わかったよ。じゃあ名前で呼ぶ」

「ええ、それをお願い。改めて、私の名前は四条灯駈よ。よろしく



ね、東雲さん」

「よろしく頼むよ、灯駈」

そこでようやく、彼らの視界に灯駈の家の 四糸式の門が見えた。

灯駈は玄関の前に立つ。

玄関は道場の門をさらに少し先に行った場所に、隠れるようにあった。指先はしばらく宙を彷徨い、やがて意を決してボタンを押す。リイン、という涼やかな音が屋内から響いてきた。

待つこと数秒。

『はい、どちら様ですか？』

インターホンから聞こえてきたのは若い女性の声。おっとりとした印象をうけるものだった。

「あの、葉鉄姉っ、わたし、です、その心配かけてごめんなさい、と言おうとした所で。」

両開きのはずの玄関の扉がぱんと外れて吹き飛んで庭の木々に突き刺さった。同時に飛びでた影が十メートル以上の距離を飛んで。

「あかりちゃああああああんっ！！！！！」

飛び出して来たのは女性だった。どう考えても慣性を無視した急制動で灯駈を抱きしめた。力強く抱きしめられた灯駈は声も出せずにじたばたする。身長差のせいで足も地面から離れてしまっていた。

「ああもうよかった心配したんですよ、本当に一晩中どこにいてたんですか何かあったんじゃないかって心配で心配でもうわたしどうしたらいいのかあ、ああよかった本当にもうあんまり心配かけちゃだめですよ師匠なんて可哀想なくらいにうるたえていてあん

あまりに鬱陶しいから絞め落としちゃいまいし、ああんもっ本当に良かったあそしてテメエは何者だア!!」

「っ?!」

甘ったるい声で灯駈をなで繰り回していた女性の拳が唐突に突き出され、龍夜の鼻先でピタリと止まる。

突然の動作に後ろで見ていた智晴は目を向いた。龍夜も少なからず衝撃を受けた。そして。

「あらまあ、これは珍しい」

女性もまた驚いていた。

「あなた、別口の同門ですね?」

「……知ってるのか、あんた」

「ええ。これでも一応、師範代ですから」

ふにやり、と笑う女性は緋金葉鉄と自己紹介をした。

「師範代……」

龍夜は何か難しい顔をしていたが、かぶりをふって思考に沈みそうになる自分を振り払った。

そんなやり取りを訝しげに見ていた灯駈だが、はっと気づいて葉鉄に声をかける。

「そ、そうだ! お父さんはどうしたの?」

「師範? それがねえ、余りにもうるたえていたものだから」

「くいと。」

腕を交差させて絞め落とすジェスチャー。

「寝かせました」

花が咲いたような笑顔に、三人は凍りついた。それは寝かせたとは言わない、とは誰もが思ったが、龍夜でさえ口には出来なかった。

さあどうぞ、と案内をする葉鉄の後を、灯駈と智晴は続いて入っていく。

龍夜はまだしばらく難しい表情をしていたが、やがてため息をひとつ漏らしてその後へと続いた。

「……………腹いてえ」

眩く言葉は誰にも届かない。  
が。

今回の一連の事件、彼にとっての本当の試練はむしろここからだ  
った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0480p/>

---

夜の刃、月の牙 -ZINGA-

2011年9月26日12時08分発行